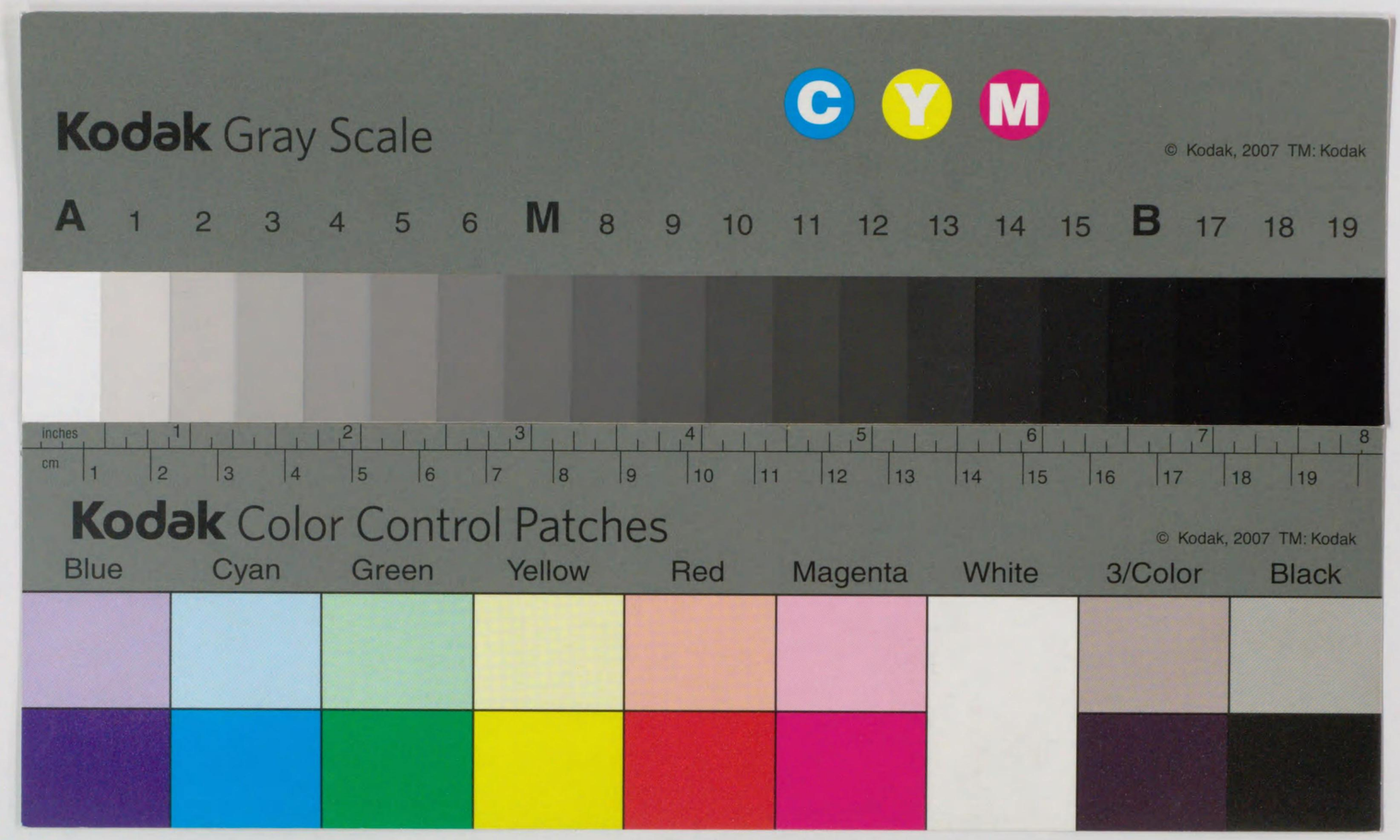
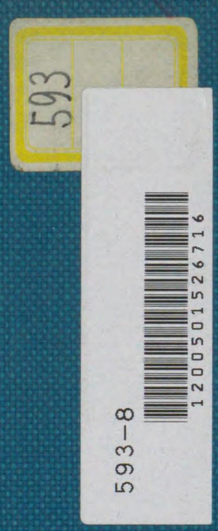

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black


593
593-8
12005015267716

3A124

帝國圖書館

雄山閣編輯局編

大日本地誌大系

第三十六卷

新編相模國風土記稿壹

昭和七・九・三〇

雄山閣版

5-93-8

大日本地誌大系 新編相模國風土記稿例言

一　本書は新編武藏風土記稿と同じやうに、德川幕府の儒臣林大學頭衡(述齋)が建議して許可を得、自ら之が總裁となり、屬僚數名に命じて編纂したものであるが、前後九年間其事に關係した者は總て二十七人である。

一　全編は百二十五卷に分ち、明治二十一年の刊行活字本には之を五冊に收めてある。體裁は大略武藏風土記稿に倣つて事項を立てゝ記述したものであるが、小範圍に於て多少の相違は認められる。併し大體彼書よりは勝れた出來榮で、引用してある古文書なども誤讀は稀であり、村名には一々稱呼を附してある。

一　各郡の記事中、鎌倉郡は特に舒述に力を用ひ、建長・圓覺等の巨刹に至つては精緻の筆を揮はれ、漏るゝ所なきを期せられたが如くである。今日鎌倉の故蹟を知るには、先づ第一にある。

一　本書を推さゞるを得ない程の傑作である。今回本書を刊行するに臨み、在來の活字本を底本とし、誤植の明瞭なるものゝ外は濫に之を改めず、地理の疑はしきは之を其地に就いて正し、又は文書に參照して之を訂した。

昭和七年九月

堀田璋左右識

大日本地誌大系 新編相模國風土記稿第一册略目次

例言
凡例
總目錄
卷之一……圖說……一
卷之二……建置沿革……五
卷之三……山川……一八
卷之四……藝文部卷之一……二九
卷之五……藝文部卷之二……四三
卷之六……藝文部卷之三……五八
卷之七……藝文部卷之四……六八
卷之八……藝文部卷之五……八六
卷之九……藝文部卷之六……九四
卷之十……藝文部卷之七……一〇〇
卷之十一……藝文部卷之八……一一四

卷之十二　足柄上郡卷之一圖說……一三一
卷之十三　足柄上郡卷之二大井庄……一四九
卷之十四　足柄上郡卷之三大井庄……一六八
卷之十五　足柄上郡卷之四大井庄……一七九
卷之十六　足柄上郡卷之五大井庄……一九五
卷之十七　足柄上郡卷之六大井庄……二一八
卷之十八　足柄上郡卷之七苅野庄……二三七
卷之十九　足柄上郡卷之八苅野庄……二三八
卷之二十　足柄上郡卷之九苅野庄……二五三
卷之二十一　足柄上郡卷之十苅野庄……二六六
卷之二十二　足柄下郡卷之一圖說……二八三
卷之二十三　足柄下郡卷之二早川庄……二〇二
要目……二三九
跋

大日本地誌大系　新編相模國風土記稿第一册略目次　終

新編相模國風土記稿凡例

一我邦制、國を列する六十六、國圖は正保元祿の兩度改定ありて、官庫に藏せり、地誌に至ては、未一定の書あらず、上古風土記の撰、和銅の勅に因て、既に諸國獻呈の徵あれども、蚤く亡失して傳はらず、延長の昔、再諸國に符を下され、其散失せしものを搜求せらる、今に至て殘篇と稱するもの、纔に世に傳ふれども、或は信ずべく、或は信ずべからざるものあり、就中本州の古風土記は、全く當時の舊編とは見えず、茲に文化七年、地誌編修の命ありて、天保元年に至り、武藏國風土記稿大成し、繕寫上進す、繼て相模國地誌編纂の命ありて、再局を開き、稿を起す、今茲天保十二年辛丑に至て、其稿成る、總計百二十六卷、淨寫呈進功を竣す、

一本編體裁、武州の撰に從へども、彼此異同なき事能はず、因て起稿の旨意を左に載す、

一武藏國風土記稿は、卷首に總國圖說を述べ、建置沿革の事、本州に限れるもの少なし、故に武藏稿に出るは、彼に讓てふべきを、建置沿革是に次ぐ、此編も亦其例に從

茲に省く、國郡、疆域、國造、國司、府廳、國衙、田租、調役、官路、郵驛等の事は今假に部類を分て輯錄す、但文獻の徵するに足ざるに因て、研究し難き事多し、

一郡の序次は、倭名鈔に從ひ、一郡を一套とし、各卷首に、正保元祿の國圖を縮寫し、更に今考定圖を合載して、照覽に便す、

一郡中、鄉庄領保の唱あり、此編は、郡を以て部を建て、庄をもて屬を聚め、其原村たるべきを、初に擧げ、庄に關係する事は、其條に併記す、鄉領の唱あるも、此例たり、又別に里名を唱るは、庄の後に次つ、

一鎌倉郡の內、雪下村、谷合四箇村（淨妙寺、二階堂、十二所、西御門の四村を、圖稱してかく唱ふ、）小町村、亂橋材木座村、長谷村、坂下村、極樂寺村、扇谷村、山之內村を、域內と稱し、鎌倉十箇村と唱ふ、鶴岡は其地域にありて屬する所なく、別に一區をなせり、故に是を郡の首卷圖說の次に出し、其事歷を採錄し、諸村に及ぶ、江島、又此郡中に在て所屬なし、故に末卷とす、

一村域區別して、土地の沿革、檢地の年代、領主の遷替等、檢閱に任せて記載す、其他寺社の文書、其地に就て證すべきは節錄して、原文は寺社の條下に載す、

一村名の稱呼は、悉其唱を分註す、其他、神社、山川、屬里等、方言の唱も、僉此例に從ふ、

一驛路は、村の總說に記し、本郡より他郡に達する行程は、郡の圖說に載す、

一山川は、一村の內、其地に就て唱を載すれど、他村に亘れるものは、其故由を辨して其郡の圖說に附す、

一式社は論なし、其他は勸請の年紀、社傳等を記す、其傳なきは考究せず、其傳あるも後世の僞造に出るは取らず、

一寺院は、開山開基等、寺傳に從て記す、寺僧の事實は、元亨釋書、其他傳記に著るゝものは錄す、又緣起と稱するもの、浮屠の妄誕に出るは取らず、

一領主、地頭の姓名は、其地搜索の年時に從て記す、其後の變革は追改せず、

一舊蹟、其傳あるは記す、其名存して、其迹亡ぶるは、其地に就て搜究し、證左あるは記す、

一勝概の地、佳絕なるは、其景狀を模し、古迹、名區、神祠、梵刹の輪奐なるは、其概略を圖し、又古器物の類も、其形容を模寫して、條下に出す、

一古文書の事實採錄すべきは、原文を縮寫して、卷末に附す、文中、官銜、名諱、華押等、考究を得るは其姓氏を傍記す、

一高座郡は、天保三年、三浦郡は、同五年に稿成る、此二編は、事の始にして、體例未定らず、故に十一年、再刪定を加ふ、足柄下郡は、七年に成り、足柄上郡、愛甲郡は、十年、大住郡、淘綾郡は、十一年に稿成る、鎌倉郡は、其前、武州稿編の時、捜索の事ありて、重て其擧に及ばざるが故、他郡に比すれば、甚踈なり、抑鎌倉は、古人撰述の書もあれば、煩蕪を省て、簡易に従ふのみ、

一三浦郡中、池子村は、圖村、鎌倉英勝寺領にして、水府の吏是を管す、捜索を盡し難し、因て闕如す、

一津久井縣は、愛甲、高座の二郡より、分割して此唱あり、其地は千人頭、原半左衛門胤廣、別に承はりて撰定し、天保七年呈進す、故に其體例異同あり、

一古人の紀行、詩文の類其地、昔時の幽趣を想像すべきは、諸集中より抄出し、又寺社に藏する詞翰も採摭して、藝文部に載す、

一金石の文考證となすべきものは採錄す、

一引用の諸書は、句を摘み章を斷て、其精要を載す、

一本州編纂開局より竣功まで、前後事に預りしもの、年次に隨ひ、其姓名を左に擧ぐ、

間宮庄五郎士信　松崎善右衛門純庸　三島六郎政行
神谷藤左衛門信順　榊原小三郎信美　龜里權左衛門章
小林七三郎政灼　岸本幾之助忠貞　小笠原太左衛門忠善
小野太郎左衛門正隣　井上彦右衛門常明　朝岡傳右衛門泰任
猪飼次郎太郎久榮　古山勝五郎克綏　水野梁左衛門勝弼
山本新助思明　小笠原藤右衛門重信　渡瀬龍之助宣靜
岡田泰助清愼　清水定一兼珍　內山孝之助溫恭
岩崎助次郎愼成　村井專之助量令　櫻井久之助壽胤
松本次郎太永孝　押田左兵衛敎民　內藤鍋次郎忠侃

新編相模國風土記稿總目錄

卷之一　圖說
卷之二　建置沿革
卷之三　山川　名所國產附
卷之四　藝文部之一
卷之五　藝文部之二
卷之六　藝文部之三
卷之七　藝文部之四
卷之八　藝文部之五
卷之九　藝文部之六
卷之十　藝文部之七
卷之十一　藝文部之八
卷之十二　足柄上郡之一
卷之十三　足柄上郡之二
卷之十四　足柄上郡之三
卷之十五　足柄上郡之四
卷之十六　足柄上郡之五
卷之十七　足柄上郡之六
卷之十八　足柄上郡之七
卷之十九　足柄上郡之八
卷之二十　足柄上郡之九
卷之二十一　足柄上郡之十
卷之二十二　足柄下郡之一
卷之二十三　足柄下郡之二
卷之二十四　足柄下郡之三
卷之二十五　足柄下郡之四
卷之二十六　足柄下郡之五
卷之二十七　足柄下郡之六
卷之二十八　足柄下郡之七
卷之二十九　足柄下郡之八
卷之三十　足柄下郡之九
卷之三十一　足柄下郡之十
卷之三十二　足柄下郡之十一
卷之三十三　足柄下郡之十二
卷之三十四　足柄下郡之十三
卷之三十五　足柄下郡之十四
卷之三十六　足柄下郡之十五
卷之三十七　足柄下郡之十六
卷之三十八　足柄下郡之十七
卷之三十九　淘綾郡之一
卷之四十　淘綾郡之二
卷之四十一　淘綾郡之三

卷之四十二　大住郡之一
卷之四十三　大住郡之二
卷之四十四　大住郡之三
卷之四十五　大住郡之四
卷之四十六　大住郡之五
卷之四十七　大住郡之六
卷之四十八　大住郡之七
卷之四十九　大住郡之八
卷之五十　大住郡之九
卷之五十一　大住郡之十
卷之五十二　大住郡之十一
卷之五十三　大住郡之十二
卷之五十四　愛甲郡之一
卷之五十五　愛甲郡之二
卷之五十六　愛甲郡之三
卷之五十七　愛甲郡之四
卷之五十八　愛甲郡之五
卷之五十九　高座郡之一
卷之六十　高座郡之二
卷之六十一　高座郡之三
卷之六十二　高座郡之四
卷之六十三　高座郡之五
卷之六十四　高座郡之六
卷之六十五　高座郡之七
卷之六十六　高座郡之八
卷之六十七　高座郡之九
卷之六十八　高座郡之十
卷之六十九　鎌倉郡之一
卷之七十　鎌倉郡之二
卷之七十一　鎌倉郡之三
卷之七十二　鎌倉郡之四
卷之七十三　鎌倉郡之五
卷之七十四　鎌倉郡之六
卷之七十五　鎌倉郡之七
卷之七十六　鎌倉郡之八
卷之七十七　鎌倉郡之九
卷之七十八　鎌倉郡之十
卷之七十九　鎌倉郡之十一
卷之八十　鎌倉郡之十二
卷之八十一　鎌倉郡之十三
卷之八十二　鎌倉郡之十四
卷之八十三　鎌倉郡之十五
卷之八十四　鎌倉郡之十六
卷之八十五　鎌倉郡之十七
卷之八十六　鎌倉郡之十八
卷之八十七　鎌倉郡之十九
卷之八十八　鎌倉郡之二十
卷之八十九　鎌倉郡之二十一
卷之九十　鎌倉郡之二十二
卷之九十一　鎌倉郡之二十三
卷之九十二　鎌倉郡之二十四
卷之九十三　鎌倉郡之二十五
卷之九十四　鎌倉郡之二十六
卷之九十五　鎌倉郡之二十七
卷之九十六　鎌倉郡之二十八
卷之九十七　鎌倉郡之二十九
卷之九十八　鎌倉郡之三十
卷之九十九　鎌倉郡之三十一
卷之百　鎌倉郡之三十二
卷之百一　鎌倉郡之三十三
卷之百二　鎌倉郡之三十四
卷之百三　鎌倉郡之三十五
卷之百四　鎌倉郡之三十六
卷之百五　鎌倉郡之三十七
卷之百六　鎌倉郡之三十八
卷之百七　三浦郡之一
卷之百八　三浦郡之二
卷之百九　三浦郡之三
卷之百十　三浦郡之四
卷之百十一　三浦郡之五
卷之百十二　三浦郡之六
卷之百十三　三浦郡之七
卷之百十四　三浦郡之八
卷之百十五　三浦郡之九
卷之百十六　津久井縣之一
卷之百十七　津久井縣之二
卷之百十八　津久井縣之三
卷之百十九　津久井縣之四
卷之百二十　津久井縣之五
卷之百二十一　津久井縣之六
卷之百二十二　津久井縣之七
卷之百二十三　津久井縣之八
卷之百二十四　津久井縣之九
卷之百二十五　津久井縣之十

新編相模國風土記稿總目錄　終

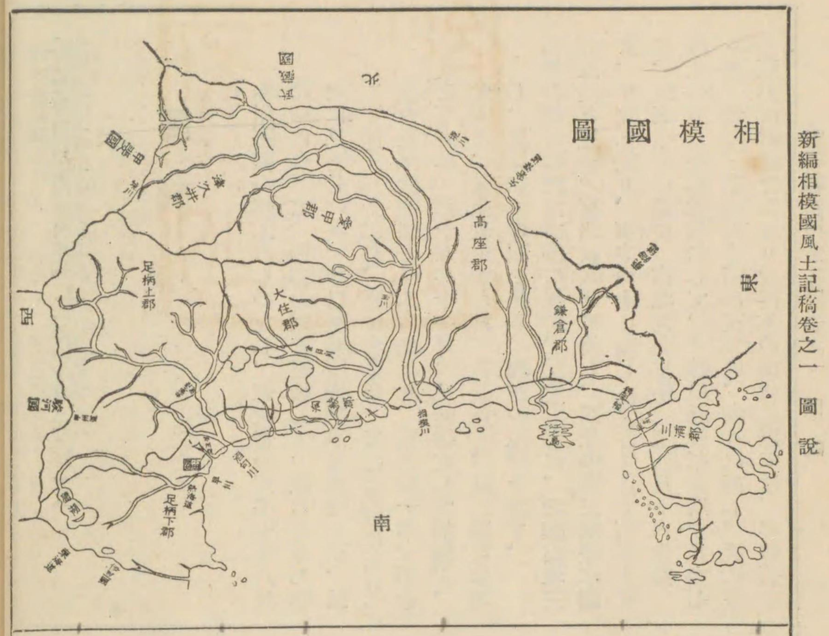
新編相模國風土記稿卷之一

圖說

本州舊圖の傳ふるものなし、聖武帝の天平十年八月諸國に令して、國郡の圖を製造して、獻らしめし事史に見えしのみ、其已後又國圖調進の事聞えず、玆に正保元年十二月、更に台命ありて、國圖調進あり、編中正保改定圖と唱ふる是なり、又元祿十年、再命を下され、同十五年十二月、重修撰定して獻備す、此編に、元祿改定圖と稱する是なり、此二圖を參考し、更に新定の圖を造り、現在の地形を示す、

本州の地は山野及び海に屬す、【水土考】に、北極出地三十五度と見ゆ、東北は武州に接し、西北の際三國嶽に躔き、甲州に隣り、南方は海に面し、西南は足柄・箱根を攀て、駿豆二州に界す、南北凡九里餘、東西凡十六里餘、西北の方、疊嶂複嶺にして、人跡の通ぜざる所、凡方七八里、地形、東は低く西に至ては、漸々に高し、故に多く東方に村落をなせり、西方の山村に至ては、專採薪を業として、農業に疎し、もとより、國の中央より西に至ては、山野にして、水田を開く所少なし、本州の事、闔國に關係するもの、國史に見えしは、文武帝の大寶元年八月、蝗あり、大風民屋を壞り、秋稼を損ず、【續日本記】曰、八月辛酉、參河・遠江・相模・近江云々、十七國蝗、大風壞百姓廬舍、損秋稼、同三年五月、疫癘により藥を給て賑救せらる、【續日本記】曰、五月丙午、相模國疫、給藥給之、元明帝の和銅六年五月、今より以後絁布を並進し、又石硫黃・白礬石・黃礬石を獻らしむ【續日本記】曰、相模・常陸・上野・武藏・下野五國、輸調、元來是布也、自今以後、絁布竝進、又令大倭參河、竝獻雲母・伊勢水銀・相模石硫黃・白礬石・黃礬石・近江慈石云々、靈龜元年五月、富民を陸奥國に配せらる、【續日本記】曰、五月庚戌、移相模・上總・常陸・上野・武藏・下野六國、富民千戶、配陸奥焉、元正帝即位の後同二年五月、本州に置れし高麗人を武藏國に遷さる、【續日本記】曰、五月辛卯、以駿河・甲斐・相模・上總・下總・常陸・下野七國高麗人、千七百九十九人、遷于武藏國、置高麗郡焉、養老元年九月、美濃國に行幸あり、本州の司等、行在所に詣て、土風の雜伎を奏す、【續日本記】曰、九月甲寅、至美濃國、東海道相模以來、東山道信濃以來、北陸道越中以來、諸國司等詣行在所、奏風俗之雜伎、同三年七月、始て按察使を置れし時、武藏國守、正四位下多治比眞人縣守をして本州を管せしむ、【續日本記】曰、七月庚子、始置按察使、武藏國守正四位下多治比眞人縣守、管相模・上野・下野三國、其所管國司、若有非違及侵淫百姓、則按察使親自巡省、量狀黜陟、其徒罪以下斷決、流罪以上錄狀奏上、若有靡敎條脩、

相模國圖



部内肅清、具記善最、言上、廢帝の天平寶字三年、出羽國雄勝・陸奥國桃生の二城を築かれ、九月、本州及び諸國の浮浪人を、雄勝に遷して、柵戸とせらる、【類聚國史】曰、九月戊寅、遷坂東八國、并越前・能登・越後等四國、浮浪人二千人、以爲雄勝柵戸、十一月、坂東の諸國に、若し急速の事あらば、速に援兵を發し、相救援すべきの勅あり、【日本紀略】曰、十一月辛未、勅坂東八國陸奥國、若有急速、索援軍者、國別差發二千已下兵、擇國司精幹者一人、押領速相救援、稱德帝の天平神護元年、國中饑饉により、二月、令を下して、賑恤せらる、【續日本紀】曰、二月丙子、相模・下野・伊豫・隱岐等國飢、賑給之、光仁帝の寶龜六年十月本州に命ありて、兵士を出雲國に發遣し、蝦夷の不虞に備へらる、【日本紀略】曰、十月癸酉、出雲國言、蝦夷餘燼、猶未平殄、三年之間、請鎭兵九百九十六人、且鎭要害、且遷國府、勅差相模・武藏・上野・下野四國兵士發遣、同八年五月、本州より、甲二百領を、出羽國の鎭戍に送る、【類聚國史】曰、五月乙亥、仰相模・武藏・下總・下野・越後國、送甲二百領于出羽國鎭戍、天應元年二月、軍糧を陸奥國の軍所に送る、是年十月、國人私力を以て、粮米を送りし者に、位階を授らる、【日本紀略】曰、二月己未、穀一萬斛、仰相模・武藏・安房・上總・下總・常陸等國、令漕送軍所、又曰、十月辛丑、尾張・相模・越後・甲斐・常陸等國人、惣十二人、以私力運輸軍粮於陸奥、隨其所運多少加授位階、桓武帝の延曆十五年十一月、本州及武藏等の人民を、陸奥國伊治城に遷し置かる、

日本後紀殘本曰、十一月戊申、發相模・武藏・上總・常陸・上野・下野・出羽・越後等國民九千人、遷置陸奥國伊治城、同十七年六月、歸降の夷俘、本州に在る者、撫恤を加ふべきの令あり、【類聚國史】曰、六月己亥、勅相模國・武藏・常陸・上野・下野・出雲等國、歸降夷俘、德澤是憑、宜每加撫恤、令無歸望、時服祿物、每年給之、其資糧醬絕事、須優恤、及時節饗賜等類宜命國司、且行且申、自餘所須、先申後行、同二十一年正月、駿河國富士山焚燒して、砂礫霰に似たり、勅ありて、禳祭を行はる、【日本紀略】曰、正月乙丑、勅、駿河・相模國言、駿河國富士山、晝夜恒燎、砂礫如霰、者求之下筥主、曰、干疫、宜令兩國、加鎭謝、及讀經以禳災殃、五月、足柄路を廢し、筥荷路を開く、事は、足柄上下二郡の條に詳なり、八月、損田の負稅を免さる、【類聚國史】曰、八月丁亥、免相模・播磨・美作・備中・備後・安藝・紀伊・淡路・阿波・讃岐等十國、損田百姓負稅、同二十二年五月、筥荷路を廢し、足柄の舊路に復す、事は足柄上下二郡の條に詳なり、嵯峨帝の弘仁九年七月、地震す、壓死の者多し、【類聚國史】曰、七月、相模・武藏・下總・常陸・上野・下野等國、地震、山崩谷埋、數里、壓死百姓、不可勝計、同十一年二月、駿遠二州に配謫せし新羅人、亂を起し、人民を殺略す、本州及武藏等、七國の兵を發して、追伐せしむ、【日本紀略】曰、二月丙戌、配遠江駿河兩國、新羅人七百人、反叛、殺人民、燒屋舍、二國發兵擊之不能勝、盜伊豆國穀、乘船入海、發相模・武藏等七國軍、戮力追討、戚伏其辜、仁明帝の天長十年五月、齊力の人を貢進すべきの勅あり、【續日本後紀】曰、五月丁酉、勅、朕撲之節、非音娛遊、簡陣武力、最在此中、宜令越前・加賀・能登・佐渡・上野・下野・甲斐・相模・武藏・上總・下總・安房等國、搜求脅力人、貢進、承和元年五月、本州以下、五國に仰せて、上野國綠野寺に藏する、一切經を分ちて寫さしむ、【續日本後紀】曰、五月乙丑、勅、令相模・上總・下總・常陸・上野・下野等國司、戮力寫取一切經一部、來年九月以前奉進、其經本在上野綠野郡綠野寺、同六年三月、又卷數を分て、一切經一部を寫し獻らしむ、【續日本後紀】曰、三月乙酉、勅令相模・武藏・上總・下總・常陸・上野七國、相分卷數、寫進一切經一部、其經修飾通同色、九月、又三史を寫して、獻るべき令あり、【續日本後紀】曰、九月丙申、勅令相模・武藏・常陸・上野・下野等國、寫進三史、同十二年九月、青苗簿帳、請に依て勘會の改定あり、【續日本後紀】曰、九月甲寅、相模國言、依承和九年六月九日格、勘造青苗簿帳、每年進上、今商量、有損之年、有用勘會、無損之年、未見其用、望請、當有損年勘造進上、自此之外、將從停止者、嘉祥元年二月、上總國より、俘囚依請、自餘諸國亦准此者、丸子等叛逆の狀を奏するにより、本州及び五國に勅符を下され、相共に對議せしむ、【文德實錄】曰、二月庚子、上總國、馳傳奏俘囚丸子廻毛等叛逆之狀、登時勅符二通發遣、一通賜上總國、一通賜相模・上總・下總等五國、令相共對議、文德帝の仁壽三年五月、一切經を淨寫すべきの令あり、【文德實錄】曰、五月癸巳詔相模・上總・下總・常陸・上野・陸奥等六國、寫一切經、六國各分部帙、寫得上之、齊衡二年閏四月本州饑ゆ、使を發して賑救せらる、【日本紀略】曰、閏四月丁酉、遣使賑給相模國飢民、清和帝の貞觀八

年五月、身長六尺有餘の人を選進せしむ、【三代實錄】曰、五月十九日壬戌、下知相模・武藏・上總・下總・常陸等國、選造長人六尺三寸者、陽成帝の元慶二年六月、諸國に勅して、勇敢輕銳の者を擇ばしむ、本州より二十人共擧に應ず、

曰、六月廿一日乙酉、勅、令東海東山兩道諸國、簡擇勇敢輕銳者、須待出羽國奏請、應機奔赴、相模二十人云々、

又本州より綿一千屯を、出羽國に送るべき命あり、

曰、六月廿一日乙酉、令相模國、送九月本州及び武藏國綿一千屯於出羽國、爲宛造櫓料也、

地震殊に甚しく、壓死のもの多し、

曰、九月廿九日辛酉、關東諸國、地大震裂、相模武藏、特爲尤甚、其後五六日、震動未止、公私屋舍、一無全舍、或地窪陷、往還不通、百姓壓死、不可勝計、

此餘、撰史の擧なければ、文獻の徵とすべきなし、

其建置沿革等は、別に錄せり、

往古、本州中官社十三座あり、【延喜式神名帳】に載する所、

卽足上郡、寒田神社、今松田惣領にある、神田明神社是なり、餘綾郡、今淘綾郡、山西村にある、大住郡、前鳥神社、今二ノ宮明神社是なり、四ノ宮村、四ノ宮明神社是なり、高部屋神社、今下糟屋村、八比々多神社、今上幡宮是なり、

糟屋村にある、子易明神社是なり、阿夫利神社、今大山石尊、愛甲郡、小野神社今小野村、閑香郡、高座郡、寒川神社、大社に列し、名神の例に預る、今猶、宮山村に正しくす、大庭神社、今大庭村にある、鎭座、深見神社、今深見村にある、天神社是なり、

宇津母知神社、今打戻村に有鹿神社、今河原口村に現存せり、石楯尾神社、今座間入谷村、諏訪社是なりと云ふ、又下鶴間・大島二村、津久井縣、名倉村にも、舊社の傳あり、是否詳ならず、

等なり、今に至て、各官社の古傳あり、各村其條に就て見るべし、今は本州海陸の便利よく、殊に海路便宜の地にして、諸產の品物に富み、諸國の士民輻湊するが故、自然都下の習俗に移れり、

新編相模國風土記稿卷之一　終

新編相模國風土記稿卷之二

建置沿革

武藏國風土記稿の撰は、六變を建て、建置沿革を示す、曰國造、曰國司、曰將軍、曰管領、曰戰國、曰當代是なり、此編も亦、是に因循して記すべきを、既に彼稿に採錄する處、多く諸國に關係して、自然當國の事に及べば、彼に讓て玆には其要を摘む、今此編專、國郡・疆域・國造・國司・府廳・國衙・田租・調役官路・郵驛等に拘はるものを撰出す、然れども、上古已降の沿革、舊記の詳なるを傳へざれば、今に於て審察し難き事多し、偶古風土記の殘編と稱するあれど、夫はた信用し難き事あり、然は云へど、亦中古以前の古書たれば、姑く採て考據に備ふ、其他正史は更なり、野史雜鈔と云へども、聊後勘に便すべきは、私に取捨をなさず、所見に隨て摘擧し、纔に今古の沿革を辨ず、

國郡　疆域

抑當國の號、正史に見えしは、【古事記】【日本紀】共に景行帝の條に出るもの、是を始と云ふべし、【古事記】倭建命東征の條、曰、平山河荒神及不伏人等、故廻到相模國之時云々、【景行紀】曰、四十年十月、壬子朔癸丑、日本武尊發路之云々、亦進相模欲往上總云々、

さて當國の名義、いまだ詳に辨ぜしものを見ず、古風土記殘本には、神武帝東夷を征する時、山上より當國を瞻望ありて、嵯峨身なる哉と、詔ありしより起れりと云ふ、

曰、凡號相模者、神倭磐余彥天皇、欲平東夷之時、當大山而有一國、其國之夷背天皇、而有欲放矢之志勢、既天皇察之、而壅毒箭而自御射、東夷當箭死人以萬數之云々、自大山之中津峯、遙叡覽之而勅、嵯峨身哉、此軍之諸人依之有嵯峨身之名云々、按ずるに、神武帝東征の事記に見えたれど、日向國より起りて、其國より東方を云へるにて、やゝ中國を經て、畿內に及べるのみ、東夷を征せし事所見なし、恐らくは、倭建命の東征を訛り傳へしにやあらん、

或は足柄坂に基づきて、坂上の省呼ならんとも云へり、【國號考】○同書又一說を擧て、舊は牟邪なるを、上下に分割し、相模は牟邪上、武藏は牟邪下の省呼ならんと云ふ、古來より未一定の說を聞ず、されど、佐加三と唱ふるは、後の稱呼にして、舊は佐加牟とこそ云けれ、卽【古事記】景行帝の條、橘姬の歌に、佐賀牟と見え、

曰、佐泥佐泥斯、佐賀牟能遠怒遲、毛由流肥能、

本那迦邇多知弖、斗比斯岐美波母、

文字を填るに及び、牟に模の音を假借せしをもて識るべし、按ずるに模を美に借字せしは、今古例なし、【倭名鈔】相模に佐加三の唱を附せしは、全く當時の常呼に據れるなり、又古風土記殘本に、嵯峨身とあるも、文字に義なく、全く借字にて、是も左加牟と訓ずべ

し、身を牟の假字とせしは、古に例多し、身狹、身刺等の類なり、さて、左加牟は峻しの轉用にて、痛ていたむいたしと活用するが如し、されば、本州地形、山岳阪路多く、他國に對べては、甚險しき地なるが故、斯は名づけしならん、今臆說な茲に擧て、聊後勘に備ふ、日本武尊、東征の歸路、再當國に入り、東南を望み、吾嬬はやと嘆稱ありしより、當國以東の地を、概して吾嬬の國となづく、【景行紀】曰、日本武尊、每顧弟橘媛之情、故登碓日嶺、而東南望之、三歎曰、吾嬬者耶、故因號山東諸國、曰吾嬬國也云々、【又古事記】にも、此事見えたれど、小異あり、曰、倭建命、平和山河荒神等而還上幸時、到足柄之坂本云々、登立其坂、三歎詔云、阿豆麻波夜、故號其國謂阿豆麻也、即自其國越出甲斐云々、【常陸國古風土記】にも此事見えて、本州足柄坂以東の國々、往古は各國の分稱なく、總て我姫の國阿都末乃久爾、と稱せしと云へり、曰、古者、自相模國足柄岳坂以東諸縣、總稱我姫國云々、成務帝の五年九月、勅して、大小の國界を定め、縣邑を分つ、【成務紀】曰、五年九月、隔山河而分國縣、隨阡陌以定邑里云々、按ずるに、爰に國縣の界域を定らるると云へども、未だ今の如くには有ざりしなり、當時の疆域、上古の事にして今より測り識難し、【國造本紀】に據れば、此朝、意富鷲意彌命をもて、師長國造とせらる、曰、師長國造、志賀高穴穗朝御世、茨城國造祖、建許呂命兒、意富鷲意彌命、定賜國造、師長は卽【倭名鈔】當國餘綾郡の鄕名に、磯長とある是なり、今是に據て、上古は全く相模・師長二國たりしとも云ふべきなれど、猥には然定難きなり、されど、北方山間嶮岨の地は、左加牟と唱へ、南方磯邊の地は、磯長と稱し、自然區別せし事は、識るべからず、按ずるに、上古國造を置るゝもの、區別の地には必置れしなり【常陸國古風土記】に、東國八州を、坂已東の諸縣と云ひ、各遣造別令檢校とあるが如し、師長國造の如きは、【古事記】に、近江安國造、常道仲國造など有と同じ類なるべし、斯て、孝德帝の朝に至り、本州足柄坂已東の地を分割して、始て八國と定らる、【常陸國古風土記】曰、至難波長柄豐前大宮臨軒天皇之世、遣高向臣・中臣幡・織田連等、惣領自坂已東之國、于時我姫之道、分爲八國云々、故に、任ずる處の司も八員なり、【孝德紀】曰、大化二年三月、癸亥朔甲子、詔曰、前以良家大夫、使治東方八道、既而國司之任、六人奉法、二人違令毀譽各聞、朕便美厥奉法、疾所違令云々、又茲に肇て諸郡を建らる、【類聚國史】曰、延曆十七年三月丙申、詔曰、昔難波朝庭、始置諸郡云々、其後、天武帝の白鳳十三年、再國界改定あり、【天武紀】曰、白鳳十三年十月辛巳、遣伊勢王等、定諸國界、當時の界域、今詳ならず、古風土記殘本に、東は玉川、西は湯之瀨山、北は海老名川、南は小田原浦、行程は南北三日、西北四日强半と記す、玉川は今大住郡にあり、是を云ふか、湯之瀨山は、足柄下郡箱根湯本村の邊なり、村內、城山の一名を今湯の背山と呼べり、正しく是なるべし、海老名川、今斥すべき所なけれど、果して、相模川の古名なるべし、今高座郡に、海老名鄕ありて、此河邊の村落六村是に屬す、是上古の遺名と覺ゆ、

小田原浦は、足柄下郡の海濱にて、今猶現存せり、さて今の地形を以て測るに、こは全く、國界の限を盡せるにはあらず、四圍の山岳重疊たる、人跡絕せし地は措て云はず、只聚落をなせる、地域の際を云へるなり、是をもて、上古の形狀、推て識るべし、さて、和銅六年五月、諸國郡鄕の名、各嘉字に改め定らる、【元明紀】曰、和銅六年五月甲子、畿內七道、諸國郡鄕名、著好字云々、本州の郡名も茲に撰定せられしなれど、延喜以前の物に、未列書せしを見ず、今推考して爰に擧ぐ、【延喜式】【倭名鈔】に載する所、【古事記】已下、國史、【萬葉集】等を、參考して記す、即其數八、曰足上、足辛乃加美、○【元明紀】に出づ、曰足下、准上○【萬葉集】に出づ、曰餘綾、與呂岐、○【萬葉集】に此地名見ゆ、郡名舊史に所見なし、曰大住、於保須美、○【仁明紀】に出づ、曰愛甲、阿由加波、○【平城紀】に出づ、曰高座、太加久良、○【天武紀】に出づ、曰鎌倉、加末久良、○【古事記】に此地名見ゆ、郡名は【萬葉集】に出づ、曰御浦、美宇良、○【持統紀】に出づ、等なり、每郡鄕里あり、總て各郡の總說に辨じたれば、茲に贅せず、但し、足上・足下の二郡は、是より先、孝德帝の朝、初て郡里を分たれし時は、未上下に分割せず、足柄郡と唱へしと覺ゆ、其分割せし年代詳ならざれど、【元明紀】に蚤く足上郡と見えたれば、和銅已前既に區別せしなり、延曆十六年三月、甲斐國と國界の爭ありて、其疆域を改られ、砥澤の地を、國界と定られし事あり、殘本日本後紀曰、延曆十六年三月戊子、先是甲斐・相模二國相爭國堺、遣使、定甲斐國都留郡□留村東邊砥澤爲兩國堺、以西爲甲斐國地、以東爲相模國地、其地今詳にし難し、後紀の文に據て按ずれば、今彼國都留郡鹿留村の東方に、戶澤村あり、此地を國界として、其已東の地を、當國の分內とする時は、今彼國の屬地道志秋山等數村、即當時本州の分內たりしなり、さては後又變遷して今の如く彼分內となりしなるべし、其年紀詳ならねど、今試に推考するに、【倭名鈔】に甲斐國都留郡中相模鄕の名あり、是砥澤已東の地の古名にして、其先本州より分れて、隷入せし地なるが故、頓て相模鄕の名は負はせしなるべし、然る時は、彼地に分隷せしも、承平已前の事と云ふべし、或說に【倭名鈔】に見えし、甲斐國相模鄕は、もと本州中の鄕名にて、是國名の起れる地なり、彼國に分隷せしならんと云へるは非なり、此已後、當國地理の事採錄すべきなし、平相國淸盛、威權並なかりし頃より、諸國莊園の地多くなり、【源平盛衰記】曰、日本は僅に六十六箇國、平家知行の國三十餘箇國、既に半國に及べり、其上莊園五百箇所、田畠いくらと云ふ數を知らず、云々、本州中も、多くは武臣の私有となり、莊園按ずるに、往古、莊園、御莊など唱ふるは、別業菜園の類なり、當時、莊園と呼ぶものは是と異にて、全く今の采邑采地なり、と稱する地、居多にして、古昔の鄕名を廢し、或は私の鄕名を唱へ、或は莊名を唱ふる地多くあり、即鄕名には、足柄上郡に、河村鄕、今鄕名は唱へざれど、遺名猶存せり、河村三郎義秀傳領の地にて、【東鑑】治承四年十月の條に、河村三郎義秀、被收

公河村郷云々と見えたり、松田郷、今郡中、松田惣領、同庶子二村に、此郷名遺れり、當時、波多野右馬允義常、松田次郎有常傳領の地にて、【東鑑】治承四年の條に、同下郡に桑原郷、今郷名を唱へず、郡中桑原村其舊趾なり、是も【東鑑】治承四年の條に、爲武衞御願、於鶴岡若宮被始長日勤行云々、以相模國桑原郷、爲御供料と見えたり、土肥郷、是も【東鑑】治承四年の條に、出伊豆國、令赴相模國土肥郷給云々とあり、今尚郡中に此郷名現存せり、田島郷、鶴岡藏、壽永二年の文書に見ゆ、今尚此郷名を唱ふ、高田郷、同じ文書に見えたり、今は稱せず、【倭名鈔】にも出て舊き唱なり、高田村其遺名なり、大住郡に、波多野郷、當時、波多野右馬允義常傳領の地なり、【東鑑】治承四年の條に、義常姨母者云々、去保元三年春之比、俄辭洛陽、居住波多野郷云々と見えたり、今此郷名を唱へず、高部屋郷、大山寺藏、元暦元年の文書に見ゆ、今郷名を廢す、糟屋坂間郷、鶴岡社人、金子氏藏、元暦元年の文書村其遺趾なり、今は唱へず、坂間村其遺稱なり、高座郡に、俣野郷、【東鑑】建久六年の條に、相模國大庭御厨俣野郷内、有大日堂云々とあり、當時、今此郷名を唱へず、小林郷、【東鑑】治承四年の條に點小林郷之北山、構宮廟云々とあり、大倉郷、【東鑑】治承四年の條に、前武衞將軍、新造御亭有御移徙之儀、爲景義奉行、去十月有事始、營于大倉郷とみゆ、今此郷名を唱へず、郡中雪下村、谷合四ヶ村の邊、舊趾なり、由比郷、【東鑑】治承四年の條に、伊豫守頼義、有丹祈之旨、康平六年秋八月、潜勸請石清水、建瑞籬於由比郷と見ゆ、今此郷名を唱へざれど、由比ヶ濱邊の邑里を云へるなり、村岡郷、鶴岡、香象院藏、建久二年の文書に見ゆ、今此郷名を存す、岩瀬郷、上ノ村、證菩提寺藏、仁治元年の文書に出づ、今郷名を失す、岩瀬村其遺名なり、倉田郷、是も、同じ文書中に見えたり、今郷名を唱へず、上下倉田二村、其遺稱なり、矢部郷、鶴岡寶治元年の文書に見ゆ、此郷名今尚存す、長尾郷、鶴岡、相承院藏、正元元年の文書に見ゆ、此郷名も今尚存せり、三浦郡に、矢部郷、【東鑑】建久五年の條に、三浦矢部郷とあり、今此郷名を唱へず、郡中大矢部・小矢部の二村、其遺蹤なり、庄名は、足柄上郡に、大井庄、【東鑑】文治四年の條、右中辨定長が奉書に、相模國大井庄事、延勝寺領也云々とみゆ今尚此庄名現存せり、同下郡に、早河庄、【東鑑】治承四年の條に、奉寄相模國早河庄、於箱根權現云々と見えたり、今尚此庄名現存す、又此二郡に跨がりて、中村庄、【東鑑】文治元年の條に、千葉介常胤、在後陣今參止宿中村庄とみゆ、今は郷名に呼べり、曾我庄、【東鑑】建久元年の條に、曾我十郎祐成、又相從繼父祐信、在曾我庄と見えたり、是も今は庄名を唱へず、里と稱呼せり、大住郡に、豊田庄、【東鑑】文治四年の條に、景宗墳墓有相模國豊田庄云々と見え、今尚此庄名を現存せり、糟屋庄、【系圖纂】に、閑院冬嗣の男良方、相州在國の際、男元方糟屋庄に出生すと見えし其男、盛方、糟屋、波多野庄、【東鑑】文治四年の條に、相模國波多野本庄北方者、義景累代相承所領也云々とみゆ、當時、郷庄二名あり、一所二名を帶るもの歟、但しおのづから別所なるにや詳ならず、今尚庄名を存す、愛甲郡に、毛利庄、【東鑑】養和元年の條に、相模國毛利庄住人、印景云々とあり、今當郡と、津久井縣とに此庄名あり、高座郡に、澁谷庄、【東鑑】建保元年の條に、相模國澁谷庄とあり、今尚此庄名を存す、

大庭庄、【保元物語】に大庭庄司景房が子、相模國住人、大場平太景義、同三郎義親とは、我事にて候と云て控たる云々とあれば、當時、庄名を唱へしなり、今尚現存す、鎌倉郡に、山内庄、【東鑑】治承四年の條に、瀧口三郎經俊、被召放山内庄云々と見ゆ、今尚此庄名現存せり、吉田庄、【東鑑】建久三年の條に、以彼等所領、相模國吉田庄地頭被申請、領家圓滿院爲請所云々と見えたり、今此庄名を唱へず、郡中吉田町此遺名なるべし、按ずるに、此他尚舊唱有べきなれど、僅に所見に隨て採錄し、强て搜求せず、今斯て、賴朝平家追討有て、鎌倉に府を開き、建久三年、征夷將軍となるに及び、海内の諸士靡き從ひ、來たりて府下に仕ふる者、各便宜に就て、邸宅を經營す、就中、府下に屬する所は、更に山林を闢て、昵近の諸士居宅を構へ、市廛周匝して頗繁榮の地となり、國地の風俗玆に一變せり、元弘已來又戰爭の地となりしかば、漸古制廢無して定規を失ふ、玆に至て、郡郷邑里も紛紜し、疆域稱呼も定かならざりし事識るべし、故に此際の事狀、今より測り得べきに有ざれば、措て辨ぜず、又此際郡界變遷し、餘綾郡の地、大住郡に入るものあり、或は大住郡より高座郡に隷入し、鎌倉郡より、三浦郡に分隷するものあり、其年紀古傳なければ詳ならず、事は、各郡の條に辨ず、此他村里に至ても、或は荒蕪し、或は新開の地あり、是等は村里部に干係すれば玆に贅せず、足利管領九代の際、又治亂定まらずして、

地理の事記載すべきなし、明應に至り、北條新九郎長氏伊豆國に起り、尋で當國に移りし後、稍治平して九十餘年、本州全く北條氏の有となる、當時各郡の唱を廢し、三浦郡の外は、闔稱して、東郡、鎌倉・高座二郡、西郡、足柄上・下二郡、中郡、愛甲・大住・淘綾三郡、と呼び、今の津久井縣の地は、元來、愛甲・高座二郡の所屬たれども、自然區別をなし、當時分て奥三保と唱へ、或は津久井領と呼べり、天正十八年、豐臣太閤の爲に、北條氏滅亡し、東國總て御分國となりし後は、各郡舊稱に復せり、但し、足上・足下を、足柄上・足柄下、餘綾を、淘綾と書改しも、此頃よりの事か、今詳にし難し、按ずるに、治承の昔、賴朝鎌府を、開きしより後、郡名を唱ふる事稀にして、多くは、郷庄の唱をもて呼べり、さるが故、郡名は全く廢せし如し、されば、其文字も唱も、當時定かならざりし事識るべし、此他、多加久良を、多加左、阿由加波を、安以加不、與呂岐を、由留岐と唱る事も、其權輿詳ならず、各郡の總説、併せ見て考ふべし、　其後正保中の改定に、彼津久井領別區の地全く分ちて津久井郡とす、即高座郡の所屬十村、上下川尻・中澤・三井・千木良・與瀬・吉野・澤井・小淵・佐野川等な、愛甲郡の所屬十九村なり、葉山島・小倉・根古屋・大井・荒川・中野・又野・三ヶ木・青山・關・鳥屋・寸澤嵐・若柳・青野原・日連・名倉・牧野・青根・長竹等なり、されど、正しく定られたるには有ざりけん、夫より已後の御朱印に、猶所屬の郡名

を係て記されたり、斯て元祿四年に至り、山川金右衛門奉はり、更に分割して、津久井縣と稱す、今に至て然り、尙委しくは、高座・愛甲二郡、津久井縣の總說、併せ見て識るべし、又豆相の國界、正保の改定には、足柄下郡西方、峰通りを國界とす、然るに、元祿十一年爭論ありしかば、同十三年糺決ありて、峰通より此方、門川の中流を限て、國界と定らる、事は、足柄下郡、土肥・宮上村條、併せ見て識るべし、又駿相の國界も、玆年改定あり、舊は、足柄上郡西方、足柄峠峰通り、國界たりしが、此時、峰より此方、十町餘を下りて、二州の界とす、今に至て然り、今時の疆域は、今考定圖、及び圖說に就て見るべし、

國造　國司

上古、景行帝の朝、許多の王子を、諸方に分ち下され、始て、國造、縣主とせらる、此時、本州の地にも置れしなるべし、【古事記】景行帝の條に、八十王之中、若帶日子命、與倭武命、亦五百木之入日子命、此三王、負太子之名、其餘、七十七王者、悉別賜國々之國造、亦和氣及稻置、縣主也云々、又日本武尊、東征の條に、當國の國造、謀て尊を矯討んとせし事見えたり、是は、此帝の王子とは見えず、されば是より先、既に國造ありしなり、其時世、文獻の徵なければ、今議得難し、斯て又、成務帝の五年九月、更に悉國造縣主を置る、【古事記】成務帝の條曰、定賜大國小國之國造、亦定賜國々之堺、及大縣小縣之縣主也、【成務紀】曰、五年九月、令諸國、以國郡立造長縣邑置稻置云々、【國造本紀】を閱すれば、此御世、茅武彦命を、當國の國造と定られしなり、曰、相武國造、志賀高穴穗朝、武刺國造祖、神伊勢者彦命、三世孫、茅武彦命、定賜國造、按ずるに、是に據れば此朝、始て本州に國造を置れし如くなれど、然にあらず、是より先、既に國造ありしこと、前に記せし如し、夫より數世の後、孝德帝の大化元年八月、始て東國に國司を置る、【孝德紀】曰、大化元年八月丙申朔庚子、拜東國等々、宣詔曰、今汝等所將之官人、隨其才用、或爲大夫、或爲小智、或爲小信、或爲大仁、或爲小仁、或爲大禮、或爲小禮、或爲大義、或爲小義、或爲大智、或爲小智、或爲大信

さて、當時國政、專ら鎌倉執權の任たり、北條遠江守時政より、相模守高時迄九代、國守は執權の兼任となり、連綿して國政を執行せしが、高時自恣の情多く、公武共に怨を懷きしかば、遂に後醍醐帝、勅して是を追伐し給ふ、元弘三年五月、高時が族、悉滅亡す、是より、足利尊氏威權を得、成良親王を申下して、將軍とし、弟左馬頭直義を、執權たらしむ、斯て相模次郎時行、蜂起して鎌倉を襲ひしかば、直義、潛に將軍の宮を俱して、京師に遁る、尊氏申し請て、關東八ケ國の管領となり、鎌府に下りて、彼凶徒等を誅伐し、躬づから將軍と稱して、專兵馬の權を執る、茲に至りて、別に國司の任なし、是建武二年の事なり、然るに是年冬、新田義貞の爲に、讒せられて朝敵となり、屢官兵と所々に戰ふ、此際、幼子義詮、東國の管領として、鎌府にあり、貞和五年、義詮上洛するに及び、其弟基氏關東の管領として、下向す、幼沖たる故、上杉民部大輔憲顯、高播磨守師冬、執事として國政を執る、去ぬる元弘已來、戰爭の地となりしも、茲に至て治平し、鎌府稍舊に復して、國中穩なり、基氏より四代の管領、持氏が時、執事上杉憲實と確執起り、永享十一年、持氏終に自殺して、鎌倉管領茲に廢絶す、是より上杉兵庫頭清方、獨國政を專にし、押て管領と稱すれども、鎌倉主なきが故、國中穩ならず、此際凡九年、永安四年、持氏の末子永壽王、父の遺趾を襲て、鎌倉に還住し、左馬頭成氏と稱して、關東を管領せしが、幾程なく、享德三年、執事上杉右京亮憲忠を討に及び、又擾亂起て、遂に成氏下總國古河に遁る、是より合戰止時なし、已上【東鑑】に起て、【太平記】【鎌倉大草紙】【鎌倉九代記】【同後記】に至り、見に隨て、其要を摘み、節略して、其大綱を錄す、

治承の昔、賴朝鎌府を闢しより、茲に至て二百餘年、此際、治亂變革ありて、民の敎化調はず、國政も亦一ならず、故に、年を逐て、領家地頭の制度も亂れ、或は相傳の莊園を掠奪せられ、或は他の所領を押領し、或は守護使猥に、神田佛餉の地を巡行して、屢譴責を加ふ、是等の事、往々聞えたり、寺社所藏、當時の文書に證あり、斯て後、明應中北條新九郎長氏、豆州に起りて、本州に大森藤賴を亡し小田原城を掠奪す、永正十六年、長氏入道早雲卒して、男左京大夫氏綱、遺跡を襲ぎ、天文十年、其男左京大夫氏康、父に襲ぐに至り、東國八州を併呑して、武威を近國に振ふ、是に於て本州の國事、一に北條氏の政化に歸せり、其後左京大夫氏直が時、天正十八年、豐臣太閤の爲に追伐せられ、遂に、承襲五代にして滅亡せり、事は小田原城の件に詳なり、是より東國、御當家御分國となりしかば、御

料に縣令を置れ、小田原城は、大久保七郎右衛門忠世、賜はりて在城し、各所屬の邑里を治む、其他、各郡の村里、分裂して麾下の士已上、足柄上郡の屬、矢倉澤・下郡の屬、の采地に賜ふ、各郡の條々、併せ見るべし、後、箱根・根府川・

仙石原・川村・谷ケ村、以上、足柄上郡の屬、鼠坂・青野原以上、津久井縣の屬、等の八所に、關塞を居ゑられ、守衛の吏を置て、往還を監察せしむ、關門の事各村の條に詳なり、又、三浦郡、西浦賀の湊に、番營を建て、奉行を置れ、海岸の防禦に備へらる、享保五年豆州下田湊より移されしなり、事は三浦郡の條併せ見るべし、是に於て、本州全く治平の地となり、國俗永く昇平の德化に浴す、

府廳　國衙

往古、國造、伴造等を置れし地、詳ならず、今淘綾郡に、國府本郷、同新宿の二村ありて、新宿の地に、本州の總社と稱する、六所明神社勸請あるに據れば、社傳に、崇神帝の朝、勸請すとあれば、最舊社たる事識るべし、此二村の地、府廳の遺蹤たる論なけれど、淘綾郡總說、並に國府本鄕村條、併せ見るべし、上古、相模、磯長の區別ありしとする時は、今の淘綾郡の地は、所謂【國造本紀】に見えし、師長國造所在の遺蹤にして、相模國造、所在の地とは云ひ難き歟、然れども、當時區別の疆界を詳にせざれば、如何にとも辨じ難し、是等最上古の事にして、後世に於て、容易く推考すべきにあらず、又伴造を置れし地は、足柄上郡中にありしなり、古風土記殘本に、彼郡中、伴部鄕の名を擧ぐ、【倭名鈔】是を伴郡に作るは、全く部を郡に訛れる、後世傳寫の過失なり、是伴造を置れし遺蹤と云ふべきなり、今は絶て、其傳だになし、足柄上郡總說、併せ見るべし、抑、孝德帝の朝、司を任ぜられしより、府廳に守已下の官吏、及び國博士・醫師等を置れ、各郡に郡家ありて、大領・少領・主政・主帳の官吏を置る、當國國司の府、及び各郡、郡家所在の地、ふつに其傳を失ふ、【倭名鈔】には、國府大住郡にありと見えたれど、今、彼郡中其遺蹤と思しき地、考ふる所なし、前條に辨せし如く、淘綾郡、國府本鄕・同新宿の地、府廳の遺蹤たるは論なけれど、是は、上古已來、國造の府跡にして、司の遺蹤には有ざるにや、又高座郡に國分村ありて、今尙國分寺舊刹遺れり、彼寺多くは、國府に建らる、是に據れば、天平の昔は、國府、高座郡に在しとも云ふべし、とかくは、往古此彼府を移されしなれど、其遺名だに、後世に傳へざるならん、今に於ては、正しく辨別し難し、斯て治承已來、賴朝鎌倉に在住し、國守は執權の兼任となるに及て、別に司の府廳あるべからず、又國中の邑里、過半昵近の諸士等が私有となり、且、當時諸國に國衙を建て守

護使を置き、庄園に地頭職を定むるに及て、司の府廳は更なり、郡家も必、玆に廢せしなるべし、さて、本州は將軍府下の地なれば、他と異にして、別に國衙を建て、守護使を置るゝ事は有ざりけん、抑、鎌倉將軍四世の際は、大倉の舘を幕府と唱へ、今雪ノ下村に遺趾あり、政所・公文所・問註所等ありて、國務を執行ふ、嘉祿元年、賴經此舘を破却して、宇津宮辻に移す、小町村條、併せ見るべし、又嘉禎二年、若宮大路に移せり、雪ノ下村條、併せ見るべし、賴經より、守邦親王迄六代、相承して居住ありしが、元弘の戰爭に、兵燹に罹りて廢燼す、足利尊氏東國を管領するに及び、鎌倉大藏ケ谷の邸宅にあり、今淨妙寺村に遺趾あり、按ずるに【梅松論】には、尊氏此時雪ノ下村若宮大路、前將軍の舊舘を營造して住せし由、定かに記したれど、其實詳ならず、猶二村の條、併せ見て考ふべし、其子孫關東管領たる數世、衾同所に在住して國政を執る、成氏が時、享德三年沒落して、下總國古河に遁れし後、此第も交廢燼せり、明應中、北條新九郎長氏起て、東國悉北條氏の有となるに及ては、小田原城に在て國事を監す、故に彼城邊、偏に古書の國府に等し、其後、天正庚寅、北條氏滅亡已後の事は、足柄下郡、小田原城の篇に就て、其委しきを見るべし、

田租　調役

上古は當國の人民も、東夷と稱せられ、敎化こゝらには及ばざりしを、崇神帝の十年九月、驛て四道將軍を命じ四方に巡行せしめらる、東國には、武渟川別下り向て、異俗王化に歸せし事、【崇神紀】に見えたり、此時より當國の人民も、始て調役を課せられしなるべし、曰、十年九月、丙戌朔甲午、以大彦命遣北陸、武渟川別遣東海、吉備津彦遣西道、丹波道主命遣丹波、因以詔之曰、若有不受敎者、乃擧兵伐之、既而共授印綬、爲將軍云々、十一年四月己卯、四道將軍、以平戎夷之狀奏焉、是歲異俗多歸、國內安寧、十二年九月、始校人民、更科調役、此謂男之弭調、女之手末之調云々、往古は船材として多く當國足柄の山木を伐出して、貢進せし事ありしにや、【萬葉集】中の詠歌に其事見ゆ、曰、鳥總立、足柄山爾船木伐云々、母毛豆鳥、安之我良乎夫禰云々、阿之加里乃、安伎奈乃夜麻爾、比古布禰乃云々等なり、尙考ふべし、養老二年、古令を刪定ありて、新令を定め、諸國に施行し、永世の規とす、【元正紀】養老二年の條所見なし、【孝謙紀】天平寶字元年十二月の條に載する、官奏曰、從五位下陽胡史眞身、並養老二年、修正五位上大和宿禰長岡、律令と見ゆ、又弘仁格式序に、養老、復同大臣不比等、奉勅更撰律令各爲十卷、今行於世律令是也とあり、按ずるに、是より先、天智元年、令廿二卷を撰定あり、大寶元年損益ありて、律六卷令十一卷を撰せらる、玆に又、筆削改刪ありて、此令を撰定あり、其中戶令あり、田令あり、賦役令あり、是衾民を治る法制なり、自餘の令條も、亦諸民に及べるものあり、

令條の文、總て諸國に亘れるものなるが故、玆に詳にせず、今世にある、【令義解】の本文、卽養老令なり、本書に就て見るべし、其後延喜の朝に至り、諸の式を定らる、其餘祿物の價法、主稅式曰、絹、一匹、直稻六十束、絲一絢十束、綿一屯、六束、調布一端、卅束、庸布一段、廿束、鍬一口、二束、鍉一廷、七束、驛馬の直法、上馬、四百束、中馬三百五十束、下馬、三百束、運漕の功賃、獸別、七束、等を定む、又夏調として、麤絲を貢進し、主計式に出づ、毎年諸國番次を定め、蘇を製造して貢す、卽本州已下八國伊勢・尾張・參河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模、は、己未を順年とす、民部式曰、相模國、十六壺、己未年、又器仗五種、兵部式曰、甲、四領、橫刀、九口、弓、十張、征箭、其數を定て、國司の府に備ふ、此他、田圃・養倉・地子・馬牛牧、及び、仕丁・匠丁・女丁、總て諸國一圓の制度は、煩を省て贅せず、式の本文に就て見るべし、等の式法、若干撰定あり、玆に至て、制度大に備れり、【倭名鈔】に、當時田數一萬千二百卅六町一段九十一歩と見ゆ、位田、職田、口分田等の數は、町歩をもて唱へ、田穀の員數は、皆束數をもて算す、其後天慶の始より、數百載の際は、既に國司の條に辨せし如く、治亂相交て、國政一ならず、田圃は私の有となるが故、田穀の數、民の課役等、測り識るべきなし、【太平記】に、貞應に、武藏前司入道、日本國の大田文を造て、庄鄕を分つと云ふ事見えたれど、詳なる

事傳はらず、夫より遙の後、北條氏の時、天文五年、始て檢地あり、繼て、十一年・十二年・弘治元年・永祿二年の四度檢地あり、當時、穀數永何貫文と唱て、其數を定む此頃の田數、一萬千四百八十六町なり、【拾芥鈔】に見えたり　天正十八年、北條氏滅亡の後、豐臣太閤、國中の田圃を檢して、貢數を定む、其高、十九萬四千二百四石なり、【天正記】に載する、太閤檢地帳目錄に據る、玆に始て石高に改定あり、されど、神祠、佛刹の所務は、尙舊のまゝなりけん、今に至て永高なり、頃て、東國御當家御分國となりし後、慶長中、彦坂小刑部元正檢地あり、其後の檢地、各村の條に詳載すれば、爰に省く、正保の改に、國高二十二萬六百十七石七斗餘、元祿の改に、二十五萬八千二百十六石五斗餘、前に比すれば、增加すること三萬七千五百九十八石八斗餘、近世開墾の地多きが故なり、今又增加して、凡高、二十七萬四千四百十三石四斗餘に及ぶ、田租の外、山林の住民は、薪を採り炭を燒き、海濱の住民は、魚介を獲て或は貢進し、或は其代永を收む、又宿驛に附て、夫馬の課役を奉はるものあり、渡口に就て、川越の夫を役するものあり、僉各村、其所に就て分載したれば、玆には贅せず、

官路　郵驛

官路は、上古已來、足柄坂を超て、東國に通ぜしを延曆

中、筥荷路を開れしより、便宜に就て、互に兩路を通ぜしなり、兩路の事は、足柄上下二郡の總說に詳なり、照し見るべし、國中を經歷する所の舊路、今詳ならず、各郡、古道の傳あるもの其所に就て辨あり、併せ見るべし、是を推考するに、國府大住郡に在し頃、足柄路は、駿州駿河郡今駿東郡より、本州足上郡に入り、大住郡の府に達し、高座郡を歷て、武州都筑郡に通ぜしなり、又筥荷道は、豆州田方郡今は、此地分割し、より、足下郡に入り、餘綾郡と唱ふ、君澤郡【倭名鈔】郡名の部に、郡中驛家の目なし、されど、古國府の蹤跡にて、往古より、官路通ぜり、且、延喜兵部式傳馬の條に、足上・餘綾・高座各五匹と見えて、傳馬を出せし證あり、又往古、東海道郡中に通ぜし由、古老の傳も殘り、今も古道と唱る跡あり、を經て、大住郡の府に達し、夫より武州に到れる事、前路の如し、此際、驛家四、延喜兵部式、驛馬の條に、坂本廿二匹、小總・箕輪・濱田各十二匹と見え又【倭名鈔】郡名の部に足柄上下・大住・高座四郡、各驛家を附せり、即是なり、一は、足上郡、坂本驛今郡中、關本村の邊是なり、一は、同下郡、小總驛今郡中、遺名を傳へず、按ずるに、【大和物語】業平の次子滋春が、東國下向の事を云へる條に、人の國の憐に、心細き所々にては、歌よみて書つけなどなんしける、小總の驛と云ふ所は、海邊になん有ける、夫によみて、書つけたりける云々、此物語は、天德・應和の頃、作り出し物にて、全く作り物語なれば、引用すべき物ならねど、他に證を得ざれば、姑く擧て考據に備ふ、其事狀に於ては、信を取べからざれど、地理等の事は、物語作れる頃の形狀を、さながら記せし物と覺ゆれば

强ひて弄べきにあらず、かくて又、其次序に、玆に海邊になん有ける、と有をもて測るに、是郡中の驛家たる事、論ずべからず、さては、今の酒匂村の邊、遺蹤と云ん歟、彼村の條、併せ見て尙考ふべし、一は、大住郡、箕輪驛、今郡中、驛家の遺蹤詳かならず、されど串橋村、往古足柄官路の海道たりし事、今も土人の口碑に殘り、且、其分村、笠窪村小名に、箕輪の唱あり、是古名の存するにて、此所、驛家たる事論ずべからず、前條引用せし、【大和物語】小總驛の詠を舉し次に、又箕輪里と云ふ驛にて、いづくとは、分ねと絕て秋の夜ぞ、身の侘しさは、知り增りける、云々、と見えたり、其次序、一は、高座郡、濱田驛なり、今郡中も又順路と云ふべきなり、遺名を失せり、【光仁紀】に當國夷參驛、賓龜二年十月の官奏曰、今東海道者、從相模國夷參驛、達下總國、其間四驛、往還便近云々、と見えたるも、恐らくは同所なるべし、【倭名鈔】郡中の鄕名に、伊參とある是なり、古訓、伊左末と唱へ、今座間宿已下、八村、座間鄕を唱るもの、即夷參の轉訛と云ふ、因て按ずるに、濱田は、其鄕中に在て驛家の稱呼なるべし、夫より武州都筑郡店屋驛に達せしなり、其後猶官路、郵驛、變遷ありしなるべきか傳なくして詳にし難し、されど、偶古道の傳あるもの、又古昔宿驛たりし事、里老の口碑に殘れるあり、各村其所に就て辨あれば、玆に採錄せず、今、東海道の官路、武州、橘樹郡より、鎌倉郡に入り、高座・大住・淘綾・足柄下四郡を歷て、豆州、君澤郡に達す、國中を經歷する道程、凡十六里餘なり、此際、宿驛六所あり、一は戶塚宿、鎌倉郡の屬、一は、藤澤宿、鎌倉・高座二郡に跨れり、一は平塚宿、大住郡の屬、一は大磯宿、淘綾郡の屬、一は小田原宿、一は箱根宿、已上、足柄下郡の屬、なり、夫より豆州に入て、三島宿に達す、又矢倉澤往來と唱ふるあり、武州多磨郡より、高座郡に入り、愛甲・大住二郡を經、又愛甲郡に入り、再大住郡を通じて、足柄上郡より、駿州、駿東郡に達す、此道程凡十五里許なり、此間人馬次を役する村里十村あり、高座郡下鶴間・國分二村、愛甲郡厚木・愛甲二村、大住郡伊勢原・曾屋・千村三村、足柄上郡松田總領・關本・矢倉澤三村なり、此餘小往還數條あり、各郡の總說に詳載すれば是に略す、慶長九年二月、始て大久保石見守長安奉はり、江戶よりの行程を計り、往還の左右に、里堠を築き、各榎樹を栽う、【慶長見聞書】○同書に云、大久保石見守、一里塚の上に、何にても木を植候而は如何と、被相侍候へば、可然との仰に付、何木を植可申と被伺候處、よい木を植させ候樣にと、仰有しを、石見守は、榎を植よとの仰と聞違へ、精を出して、榎木を植させ候となり、云々、國中に築く所數所、今現存するもの二十一、中古廢するもの、其遺蹤存亡一ならず、委しくは、各其地に就て記載すれば玆に贅せず、

新編相模國風土記稿卷之二　終

新編相模國風土記稿卷之三

山川　名所國產附

相模嶺佐賀美嶺【八雲御抄】に載らる、歌は【萬葉集】に見えたり、按ずるに當國は西北の方總て連山なれば、此山山を斥て云しならん、一所の名にはあらず、

東歌　相模嶺乃（サカミネノ）、乎美嶺見所久思（ヲミネミソクシ）、和須禮久流（ワスレクル）、伊毛我名欲奴氏（イモカナコヒナ）、吾乎嶺之奈久奈（ワヲネシナクナ）　相模國歌の一なり、作者詳ならず、

朝倉山阿左久良夜滿　所在を知ず、澄月が【歌枕名寄】に當國の部に入て證歌を擧、且朝倉木丸殿は筑前國なり、泊瀨朝倉宮は大和國なり、神樂歌に云ふ、あさくらやおめの湊にあひきせは玉のめさしにあひにけり云々、是何の所なるにやと記し、又筑前國朝倉山の條に同じ證歌を出せり、按ずるに、宗祇が【名所千句】に八松の句に、朝倉山を附たり、八松は當國の名所にして今高座郡にあれば、此連歌の朝倉山は當國たる事知べし、

八松の木の間むら〳〵行雲に、朝倉山の名こそ高けれ　名所千句

【歌枕名寄】に載せし證歌は、當國の詠とも定めがたければ爰に省けり、

百津島母毛豆思麻【八雲御抄】に當國と註せらる、緣海多くの島々を斥て云しなるべし、但本國に屬する島嶼は少く多くは豆州の屬なり、【萬葉集】【夫木集】等に歌あり、

母毛豆思麻（モモツシマ）、安之我良乎夫禰（アシカラヲフネ）、安流吉於保美（アルキオホミ）、目許曾可流良米（メコソカルラメ）、己許呂波毛倍杼（ココロハモヘト）　相模國歌、作者詳ならず、

相模潟夕日の末に百津島、けぢめ見えたる波のさやけさ、夫木集　爲廣

唐ケ原毛呂古之可波良　大住・淘綾二郡に係れり、淘綾郡圖說に詳載す、

海　國の巽方武藏國境より未方伊豆國境迄は海瀨なり、其間三浦・鎌倉・高座・大住・淘綾・足柄下等の六郡にして海岸の長凡二十九里、此海岸浦濱の稱呼及び古事等は各郡の圖說に辨じたれば爰に贅せず、又海中に產する魚類數十品あり、是を漁して生產の資となす、村里も少からず、其得る所の品物及び船數等は各所に詳なれば是又省けり、

相模潟左加美可多　【八雲御抄】に載らる、緣海を泛く稱せしなるべし、歌は【夫木集】に見え、百津島の條に載す、

須賀湊須奈止可三　大住・高座兩郡に屬す、大住郡須賀村條に詳なり、此外【能因歌枕】に、あはれ島・はしの森・いはせ川・人見浦、【相模集】に中川等、當國の名苑として載たれども、詳ならざれば爰に省く、

相模川佐賀美加波　源は甲斐國都留郡富嶽の麓より湧出し、上野原村より當國津久井縣、名倉村に入、高座・愛甲・大住三郡の界を東流して、末は高座・大住兩郡の界にて海に入る、水路凡十六里半（國中を流るゝ里數なり、下皆同じ、）濶七十間より百間餘に及べり、東海道の係る所に渡津あり、其邊にては馬入川と呼ぶ、渡頭の村名を馬入と稱する故なり、此川は國中の大河なれば國名を以てかく唱ふるならん、文治四年正月賴朝伊豆箱根三島參詣の時、爰に浮橋を設く、【東鑑】其文大住郡馬入村條に載す、建久元年八月洪水あり、川邊の民屋一宇漂流す、然れども宅內の男女棟上に居て皆命を全せり、【東鑑】曰、八月十七日甚雨、入夜暴風穿人屋、洪水瀕河岸、相模河邊民屋一宇流寄河尻、宅內男女八人、皆以存命、各居棟上奇怪、九年冬橋供養あり、賴朝來臨せらる、保曆間記に本也、其文馬入村條に註す、正治二年七月賴家鵜船を見んが爲、此邊に逗留あり、【東鑑】曰、七月一日羽林爲觀鵜船、令赴相模川邊之給、畠山次郎、葛西兵衞尉以下、愛鵜之輩依別仰令供奉、八日羽林自相模河令歸給、建仁元年六月、賴家江島明神參詣の次川邊に逍遙して狩獵射的等あり、【東鑑】六月一日、左金吾御參江島明神、以此次、令逍遙相模河邊給、當國之御家人等鄙參、有建曆二年二月實狩獵射的之勝遊、今夜到大磯、令止宿給、二月廿八日、相模河橋數箇間朽損、可被加修理之由義村申之、如相州廣元朝臣善信有詳議、去建久九年、重成法師新造之、遂供養之日、爲結緣之故將軍家渡御、及還路有御落馬、不經幾程薨給畢、重成法師又逢殃、旁非吉事、今更强雖不有再興、何事之有哉之趣、一同之旨申御前之處、仰云、故將軍薨御者、執武家權柄二十年、令極官位給後御事也、重成法師者、依己之不義蒙天絕歟、全非橋建立之過、此上一切不可稱不吉、有彼橋爲二所御參詣要路、無民庶往返之煩、其利非一、不顚倒以前、早可加修理之旨、被仰出、建保四年七月、小河忠快爰にて六字阿臨法を修す、實朝來らる、七月廿九日、小河法印忠快、於相模河、修六字阿臨法、仍將軍家御出云々　又實朝此川を渡る時、月を見て歌を詠ぜし事、【金槐集】に見えたり、

朝の命に依て當所の橋を修理す

曰、相模川と云ふ川あり、月さし出後、舟に乘て渡るとて、夕月夜さすや川瀨のみなれ竿、なれてもうとむ波の音哉、

寶治二年六月、川水紅色に變す、【東鑑】曰、寶治二年六月九日、相模河水、其流如血、觀者怪之、試浸白布移其色、殆如紅梅、十六日相模河水赤色漸薄、建武二年八月中、前代の亂に源氏の諸將川を渡て合戰す、【太平記】其文馬入村の條に載、應永二十四年正月、上杉禪秀川の東岸に於て、上方勢と戰ふ、【鎌倉大草紙】其文上に同じ、文明中宗祇が【名所方角抄】とて大川あり、南へ海中へ流出たり云々、天文中の宗牧が【東國紀行】相模川の舟大なる原あり、砥上が原と云、等に此川を記せり、永祿十二年八月、武田晴信入道信玄、小田原亂入の時川を渡る、【甲陽軍鑑】曰、八月、信

玄公甲府を御立あり、小田原表へおもむき給ふ云々、さて相模川を越え、先衆は當麻、二の手は磯邊、御旗本は新道、跡備は座間、小荷駄奉行甘利殿衆、米倉丹後守、島加賀守、雨人下知に付新道を越て、諸手へ小荷駄を配る、川越てより小田原までは山縣、小幡、眞田兄弟四人は、跡を纔づかひなさるゝ爲、總人數の跡を押、相模川を左に當て、金田・厚木・岡田・戸田に陣取給ひ、其次には田村・大上・八幡・平塚に陣どる、按ずるに、金田以下の村々皆川邊にあり、

小田原北條氏の家人福島伊賀守、川中に入て大鱸を殺せし事、【北條五代記】に見えたり、福島伊賀守は數度の合戰に先をかけ勇士の譽を得、其上軍法をしれる故實の者也、或時伊賀守相模馬入河へ鵜をつかふ、在所の者云、此川に何ものやらんくせ者有て、近手人を多く取よしを申、伊賀守聞て、此川にいかなる癖者あり共、伊賀には手をさゝじとあざ笑ひ、鵜をつかひけるに、中間を一人、水底に引こみ見えず、伊賀是を見、すは癖者よ、のがすまじと、脇指を抜持、水底に入て、是を見れば、眼光る物有て、中間を喰、伊賀は大力、かれをいだきて弓手の脇にしめつけ、續けて五刀さし、水の上へあがる、其跡に中間も死て浮出、長一間程の鱸、死で浮たり、福島伊賀守は希代の氣なけもの、鬼の生れかはりとぞ、人沙汰しける、寛永元年四月、林道春【甲子紀行】曰、昔絶長橋今有舟、舊名不改、二十是相州立看渡子剌篙處、河水雖深非急流、

年九月、林春齋等當所を過りし時の詩あり、【癸未紀行】曰、鞍馬肩輿來往舟、相模河在相模州、馮夷不禦重成志　橋絶人亡水自流、此川津久井縣の内は兩岸高くして田間の用水に沃ぎ難く、高座・愛甲・大住等の郡中に至りては、漸土地平坦なれば田間に引き、耕植する所少からず、されど屢水溢の患あれば所々に堤防を設けて其害を防ぐ、又洪水の時水流の變遷度々ありて今古相模川蹟と唱へ、川の兩邊に池の如水を湛へし所若干あり、按ずるに、古風土記殘本に、北限海老名川とあり、今此川名聞えず、高座郡海老名郷は相模川に邊したれば、若くは此川の一名なりしも知べからず、

酒匂川佐加和可波　源は駿河國富士峯の麓より湧出し　御厩川と稱す駿東郡御厨領、生土・小山二村の堺より當國足柄上郡谷ケ川・西二村の堺に入、此郡中にて河内川合す、夫より下流を酒匂川と呼ぶ、東流して足柄下郡に入、末は酒匂村にて海に注ぐ、此川名は酒匂村より起りて上流に及しなり、【海道記】には汐のさす時、上さまに流るゝ故さかはと云ふとあり、曰、道は順なれども、宿を逆川と云所に泊る、汐のさす時、水の上さまに流るれば　さかはと云　水路六里許、幅、上流六十間許、下流に至ては、二百間より五町に及べり、此川、古は丸子川と呼べり、治承四年八月三浦の輩頼朝の陣に參向せんが爲、川の邊に宿陣せし時大沼三郎西岸に來り、和田義盛に馬を乞て川を渡り、石橋山軍の事を語る、【東鑑】曰、八月廿三日、三浦輩者依及曉天宿丸子河邊、遣郎從等、燒失景親之黨類家屋、其煙聳半天

廿四日、三浦輩、出城來于丸子河邊、自去夜、相待曉天欲參向之處、合戰已敗北之間、慮外馳歸、【源平盛衰記】曰、八月二十

五日、和田義盛、三百餘騎にて、鎌倉通を腰越・稻村・八松原・大磯・小磯打過て、二日路を一日に、酒匂の宿に着けるが、丸子川の洪水いまだ減ざれば、渡すこと不叶して、宿の西の外れ、八木下と云ふ所に陣をとる、洪水のへるを待、曉渡さんとて引へたり、和田小太郎は源遠の流深し、いつを限と待べきぞ、日數遙に延ぬ、事の樣見て渡んとて、高所に打上り、雲透に水の面を見渡せば、河の西の耳に馬を引へて武者一人在て、東を守てたゝずみたり、漲り下る洪水の習にて、流はげしくて水音高し、小太郎大音揚げて、西の川耳におはするは誰人ぞと問ふ、音に附て三浦黨に大沼三郎也、佐殿の御方に參たりき、軍は既に散じぬ參りて申さん、河の淵瀨を不知、健ならん馬を給はらん、三浦の人々奉見は、僻事歟と喚、三浦はあな心苦、急ぎ馬をやれとて、高く强き馬を渡たり、大沼是に乘て河を渡り陣に下りければ云々、

承元元年三月三位中將重衡、鎌倉下向の時此川を渡れり、【平家物語】海道下段曰、足柄の山打越て、小餘綾の森、鞠子川、小磯、大磯の浦々、やつまと、砥上が原、御輿が崎をも打過て云々、

建久元年十月、賴朝上京の時梶原平三景時、川中にて發句ありしに、賴朝脇句を附らる、【源平盛衰記】曰、梶原右大將家京上の御伴に相模國圓子川を渡り給へりけるに、梶原小要ありて片方に下居たりけるが、御伴にさがりぬと一鞭あてゝ打程に、此川の川中にて馳付奉たりけるに、沛艾の馬にて鎌倉殿に水をさゝと蹴懸奉、御氣色惡くてきと睨返り給たりけるに、梶原、圓子川ければぞ波はあがりける、と仕て手綱をゆりすゑければ、御氣色なをり給て、打うつぶき、ければぞ浪はあがりけると二三返詠じ給て、向の岸に打上り、馬の頭を梶原に引向て、かゝりあしくも人やみるらん、と附給、いかに發向脇句、いづれ增りとぞ仰せける、

四年五月、曾我十郎祐成兄弟富士野狩場へ赴く時、當所を渡りて歌を詠ず、【曾我物語】曰、丸子川を渡りけるが、手綱かひくり申けるは、和殿三、祐成五の歳より、廿餘の今まで、此川を一月に四五度づゝも渉りつらん、いかなる日なれば、今渡り果さん事の悲しさよとて十郎、五月雨に淺瀨もしらぬ丸子川、波にあらそふ我涙かな、五郎渡より深くぞたのむ丸子川、親の敵にあふ瀨と思へば、かやうにおもひつらねてとをる所はあみだのねんしゆかさま寺、ゆもとの宿を打過、ゆさかの峠に駒をひかへて云々、

承元四年六月、土肥早川の輩、松田河村の一族等と此所にて喧嘩の事あり、和田義盛・三浦義村等、命を奉て和平をなさしむ　【東鑑】曰、六月三日、昨日於相模國丸子河、土肥早河之輩、與松田河村一族有喧嘩事、兩方郎從被疵、其後相互籠城之由依令風聞、爲相鎭之、義盛・義村奉命行向畢、今日入夜歸參、件輩納涼遊遨之間、頗及雜談、就論先祖武功之勝劣、雖此鬪諍、應御使早成和平、與力衆徒退散、

建保元年正月、實朝二所參詣の歸路、此川を渡る時歌を詠ぜらる、【金槐集】曰、二邊の宿の前に前川といふ川あり、雨降て水增りにしかば日暮て渡り侍し時よめる、濱邊なる前の川瀨を逝水の、早くも今日の暮にける哉、按ずるに濱邊の宿は、酒匂村に在しなり、今同村の小名にはんべと唱ふるは、其遺名なり、されば前川と詠ぜられたるは此川なる事知べし、

阿佛が【十六夜日記】に此川を涉りし事見ゆ、曰、丸子川といふ川を、いと暗くて躡踵涉る、今宵は酒匂と云所に止る、

又【梅花無盡藏】に毬子河の詩あり、曰、出關本、宿精屋、是日渡毬子川、最乘寺畔出民家、鳥促晨炊、

小雨斜、毬子長河輕蹴渡、水烟如柳浪如花、聖護院准后道興、鎌倉往返の二度爰を渡れり、【廻國雜記】曰、丸子川にて誹諧、鈴懸の括を揚て鞠子川、おひつちかいつ今日は暮さん、云々、先の度渡りける鞠子川を又とをるとて、誹諧、まりこ川又渡る瀨やかへり足、永祿四年三月、上杉彈正少弼輝虎、此川を渡て小田原に發向す、【北越家書】曰、三月上旬、公松山城を出馬あり、太田美濃入道三樂齋、武相の案内として、魁首の命を蒙り云々、斯て太田三樂齋酒匂川に望んで、人馬を以て筏として、漫々と打入て隊の者共を涉しければ、坂東の將士是を見て、前後を爭ひ渡りける、【豆相記】曰、永祿三年、越軍伐於相小田原云々、太田三樂先進而以人馬爲筏、渡酒匂川、關八州勇卒、每見爭進、而入河瞬息濟、按ずるに【北越家書】に、此事永祿三年　十二年八月、武田信玄小田原亂に係たり、蓋誤なり、入の時、初鹿野傳右衛門昌次、川の瀨踏をなして總軍を渡せり、【甲陽軍鑑】曰、八月廿四日巳刻に、信玄公甲府を御立あり、小田原へ赴給ふ云々、國津前川酒匂まで、よせ、次の日は小田原へ押詰給に、加藤駿河、末の子他名になり、初鹿野傳右衛門、指物に香車と云字を書たるに、信玄公御無興なされ候、其時、酒匂川水出たるに付、傳右衛門に瀨ふみを仰付られ候、傳右衛門其年二十五歲なれども、走廻りオ覺有て、此人時代には小山田八左衛門、初鹿野傳右衛門とて、信玄公御旗本に若手の者なれば、酒匂の瀨ふみよく仕り候、夫より武田勢總越に酒匂を越、小田原へ亂入、【古戰錄】曰、信玄酒匂驛まで着陣の處に、酒匂川水出て、先陣猶豫の體なりしに、晴信の使番初鹿野傳右衛門昌次を招て、此川の瀨踏を仕れと申ければ其て候とて、白き四半に、蜈蚣を書たる捺物を閃かし、矢庭に馬を乘入て、浪を切て打越けるにぞ、總軍難なく渡てけり、北條氏の家人、松田孫太郎・佐藤四郎兵衛以下の輩、曾我劒澤の藤花見物の時爰を渡れり、【小田原記】曰、松田孫太郎・佐藤四郎兵衛以下若侍共、曾我故郷の劒澤の藤を見んとて、鞠川を打渡り、成田飯泉を過て云々、天正十八年、豐臣秀吉小田原歸陣の時川を渡て奧州に赴く、【古戰錄】曰、秀吉公相模國酒匂川を押渡り給ふ云々、寬永元年四月、林道春、【甲子紀行】曰、酒匂川「一名菊川世所云遠江國菊川者非是」地有酒泉天酒星永令世俗惹虛名、酒匂菊水一河上、未有一盃浮落英、按ずるに一名菊川とあれど、菊川は此北岸にある小流の名にて、此川の一名にはあらず、二十年九月、林春齋等當所の詩あり、【癸未紀行】曰、驛程行盡幾郡縣、酒匂河流水濺々、柳營信宿建久年、緬懷此邊廻粗練、此川所々の山水の合する所なれば、霖雨などには必水溢あり、足柄上下二郡にては此水を灌漑して、許多の水田を耕植すれど、又洪水の時は田圃の害となる事甚し、依て兩岸に堤防を設けて其害を防げり、

境川佐加比可波　甲相二州の境を、流るゝ故に名とす、源は甲州都留郡樺原村と、當國津久井縣佐野川村より出る二流、合して國界を南流し、縣内小淵村にて相模川に合す、水路一里餘、幅二三間

境川佐加比可波　源は津久井縣川尻村、龍居山の麓より出て高座郡に至る迄は武相の國界を東流す、故に此川名あり、夫より全當國に入、高座・鎌倉二郡の界を南流して鵠沼高座郡、片瀨鎌倉郡　兩村の堺にて海に沃ぐ、高座郡中にては田倉川と呼び、按ずるに、田倉は多可久良の略語なるべし、猶高座郡の圖說に辨ず、又片瀨村邊にては片瀨川と呼べり、事は片瀨村に詳なり、水路凡十里、幅四間より七間に及ぶ、　高座・鎌倉二郡にて、此水を田間の用水となす、

金目川加奈爲可波　源は大住郡春嶽山麓、養毛村より湧出す、故に上流を春嶽川と呼ぶ、東田原村に至りて始て此川名を唱ふ、下流金目村を通ず、依て起りし川名にて、其唱上流に及びしなり、下流平塚宿より淘綾郡山下村に沃ぎ、夫より花水川と稱す、古事の如きは淘綾郡の圖說、古花水川の條に出せり、流末大磯宿にて海に入、水路七里餘、幅三間より二十五間に至る、　此水を以、田間の用水となす所數村あり、又水際堤所々にあり、

玉川太滿可波　源は大住郡日向村の山中より湧出し、直に愛甲郡七澤村に入、郡の南端を東流して、再大住郡石田・上落合兩村の堺に沃ぎ、南原村にて鈴川に合す、是より下流を新川と唱ふ、末は金目川に合せり、水路五里餘、幅四間より八間に及ぶ、　此水を引て田間に沃ぐ村々、大住・愛甲二郡に若干あり、川傍に水除の堤あり、按ずるに【倭名鈔】愛甲郡の鄕名に玉川あり、此川に依て起りし鄕名なるべし、古風土記殘本に、東は玉川を限りと記したるも此川の事ならん、

齋藤川佐伊登宇加波　源は大住郡堀齋藤村邊より出、直に足柄上郡菖蒲村境に沃ぎ、菖蒲川と唱へ郡界を西流す、此邊を里俗、四十八瀨と呼べり、末は川音川に合せり、水路二里餘、幅七間より十間餘に至る、

中村川奈加武羅可波　源は大住郡澁澤村より出、市見川と唱へ直に足柄上郡篠窪村に沃ぎ、柳村に至りて棚田川と呼び、高尾村にて中村川の名起れり、是は中村鄕中を流るゝ故なり、遠藤村より足柄下郡小竹村に入て、押切川と稱し、同郡の東界を流れ、中村原より淘綾郡山西村に沃ぎ、其南方にて海に入、幅四間より八間に至る、堤防あり、

藤澤川婦知佐八可波　源は大住郡平澤村より出、直に足柄上郡境別所村に入、藤澤村に至りて此川名を得、遠藤・久所二村の境にて中村川に合す、水路一里餘、幅九尺より五間に至る、

一美川伊知三可波　源は足柄上郡上曾我村より出、山岸川と唱へ直に足柄下郡東大友村に沃ぎ、初て此川名を呼び夫より南流す、其經る所の村々により或は多屋川・川

窪川・闢口川等の稱呼あり、末は高田・田島二村の界にて森戸川に合す、水路凡一里、幅五尺より二間に至、足柄下郡屬、

菊川幾久可波　源は足柄上郡山田村より出、芭蕉川と呼べり、曾我大澤に至りて此川名を呼び、上下大井村の界にて、酒匂堰に合し、夫より足柄下郡永塚村に至りて再び別派となり、又此川名あり、南流して酒匂村にて海に沃ぐ水路凡二里、幅四尺より四五間に至る、

堂ヶ谷津川太宇賀都可波也　源は足柄上郡井ノ口村より出、直に此川名あり、大住郡五分一村に入、淘綾郡一色村に沃ぎて井ノ口川と呼び、下流にては鹽海川・宇田川・南川等の唱あり、國府本郷村にて國府本郷川に合す、水路二里、幅七尺より三間に至る、淘綾郡村々にて、田間の用水に沃げり、

狩川加利可波　源は足柄上郡猪ノ鼻ヶ嶽矢倉澤・仙石原二村の屬、より出、南流して沼田村より足柄下郡飯田岡村に沃ぎ、多古村にて酒匂川に合す、水路四里半餘、上流幅八間下流四十間　足柄上郡にて此水を引て田間に沃げり、兩岸に堤防を設く、

分澤川部牟佐波可波　足柄上郡三竹山村より出る小流、足柄下郡府川村より出る一流と合し、上下二郡の界を流る、故に分澤の名起ると云ふ、末は上郡沼田村にて狩川に合す、幅六尺

用定川伊與宇佐駄加波　足柄上郡班目村にて酒匂川を堰入、是を武永田堰と唱へ、牛島村に至り權兵衛川と呼び、栢山村より足柄下郡小臺村に沃ぎて此川名を唱へ、直に狩川に合す、幅三間より六間に至る、

仙了川勢牟禮加波　源は足柄上郡吉田島村より出て南流し、栢山村より足柄下郡柳新田・堀ノ内二村の境に入、清水新田にて狩川に合す、水路凡一里、幅三間より十五間に至る、堤を設けし所あり、

早川波也可波　源は足柄下郡箱根蘆湖の餘流にして、足柄上郡仙石原村に沃ぎ三度川と呼び、宮城野村より又下郡底倉村に入、早川村にて海に入る、川名の起り、古事の如きは下郡圖説に辨じたれば爰に贅せず、水路凡五里、幅上流三間、下流二十五間、堤石を以て築けり、あり、

恩蘇川於無曾加波　源は愛甲郡上古澤村に出、所々の水田に沃ぎ、船子村より大住郡上下岡田村、犬牙の地に沃ぎ、田間の用水となり、水流爰にて渇す、水路凡二里　幅二間より四間に至る、

櫻井川左久良爲可波　古風土記殘本に見えたり、曰、櫻井川、貢諸鮮諸苦、經四五月、洪水爲國害、以國造之豊、曾之避其害　遺跡詳かならず、按ずるに【倭名鈔】

足柄上郡郷名に櫻井あり、今此遺名なし、但同郡嶺村に、櫻位櫃現社あれば、其地なるべきか、境村の條に辨あり、此郷中を流れし川なるべし、

色川伊呂加波　所在詳ならず、【歌枕名寄】に當國の名とし、證歌、下に載を載たり、宗祇が【名所千句】に暮るゝかとす、鶴の岡邊に又下りて驚やまきれぬ色の川波、とあり、此によれば鶴岡の邊なるべきか、又【鎌倉根元記】に梅澤郷淘綾郡の屬、の内に河三所あり、何れも橋かゝれり、色川は此宿の内の河を云りとあり、按ずるに淘綾郡花水川は、古へ川の邊りに櫻樹ありて、其花河水に散浮べる故、名とすと云ふ、若くは此川の一名などにや、流れてはよる瀬になるといふならば、幾世をへてか色かはるらん、【歌枕名寄】作者詳ならず、

酒匂堰佐加和世岐　足柄上郡金手村にて、酒匂川を堰上げ下大井村より足柄下郡東大友村に沃ぎ、末は國府津村の西方にて森戸川に合す、水路凡二里半、幅四間、是は慶長年間疏通せられしと云ふ、

和田堰和多世岐　足柄上郡下大井村にて酒匂堰を分派し、直に下郡東大友村に沃ぎ又分派し、一流は永塚村の水田に沃ぎ、一流は伏越樋を設けて一美川を越、曾我四村其外三村の用水となし、末は田島・國府津兩村の境に

て森戸川に合す、幅三尺より二間に及ぶ、

鬼柳堰於邇也岐世岐奈　足柄上郡西大井村にて、酒匂川を堰分、下大井村より下郡西大友村に入り、字亥ノ駒にて東西に分派す、東の一流はかつぱ堰と云ふ、幅二間、中新田村にて酒匂川に沃ぐ、西の一流は中堀堰と云ふ、幅九尺、飯泉村にて黒壜堰に合す、

大用水　愛甲郡厚木村にて小鮎川を堰入、郡中の田間に沃ぎ、此邊田村用水と呼、船子村と大住郡岡田村の堺にて、恩蘇川を伏越樋にて越、大住郡六ヶ村の用水となし、末は相模川に入る、水路凡三里、幅六尺より四間に至る、

五ヶ村用水二　足柄上郡栢山村にて酒匂川を堰入、直に足柄下郡に沃ぎ、五ヶ村の用水となす、幅二三尺　一は大住郡にて金目川を堰入、郡中四ヶ村、淘綾郡一村の田間に沃げり、

三ヶ村用水　足柄上郡岩原村にて狩川を引入、沼田村及び下郡飯田岡・府川二村の水田に沃ぐ、

渡津　馬入渡・田村渡・岡田渡等は大住・高座二郡に屬し、厚木渡・當麻渡は高座・愛甲二郡に屬せり、所在の村々に詳載す、

物　産

又國中山海原野に産する物は、〇金銀永祿の始、足柄上郡三廻部村山中、

金澤と云地より產せしとぞ、其事蚤く廢せり、事は彼村觀音院の傳に詳なり、○石足柄下郡に出づ、中に就て根府川・米神二村に產するを根府川石と云ふ、岩村、小松田及土肥吉濱、同門川二村に產するを小松石と稱す、眞鶴村の產を眞鶴石と唱ふ、鋪石・礎石・甃石の料にあつ、根府川村荻野尾山より產するを荻野石と名づく、同村海岸に產するを磯朴石と呼び、江ノ浦村の產を玄蕃石と云へり、其餘小田原石と稱し、風祭村より產せしが今廢す、○礬石足柄下郡元箱根より出づ、○牡丹石津久井縣青根原村に產す、○貝石津久井縣道志川に產す、○蛤石足柄上郡矢倉澤村內蛤澤より出づ、○砥石大住郡戶川村の山中に產すれど他に鬻ぐ事なし、霖雨の頃同村中、水無川水勢强くして砥石流れ出ることありと云ふ、○燧石足柄上郡宮城野村の山より出、黑色なり、○細石俗砂利と唱ふ、淘綾郡大磯宿海濱の產、其種類五色、或は中栗・白斑・黑小砂利等あり、○石硫黃足柄下郡元箱根より出づ、○湯ノ花足柄下郡元箱根、蘆野湯より出づ、○白焰焇足柄上郡中川村より出づ、○食鹽三浦郡林村及浦鄕村にて製す、又足柄下郡土肥濱、小田原邊にても製せしが、中古廢せり、古風土記殘本に當國の產とす、○柴胡大住郡東西田原村、足柄上郡虫澤・矢倉澤・三竹山三村、同下郡久野・底倉二村高座郡龜井野村等に產せり、是を鎌倉柴胡と云ふ、又三浦郡城ヶ島村にも產せし事ありしとなり、古風土記殘本にも當國の土貢とす、○獨活足柄上郡宮城野村の產、○紫根足柄上郡矢倉澤村同下郡底倉村等に產す、○石長生足柄下郡箱根宿の邊に產す、元祿の頃紅毛人江戶に來れる時、當所にて此草をとり、婦人產前後に用て殊に効ある由いへり、是より箱根草と呼べり、○狗背足柄上郡仙石原村邊に多し、○水仙三浦郡城ヶ嶋村に生ずるもの、重瓣にして莖長く、尋常の種に異なり、○煙草大住郡波多野庄村々の產を波多野煙草と稱して佳品なり、足柄上郡八澤・菖蒲・柳川・虫澤・境・境別所・朽窪・松田總領・同庶子等の九村に產するをも、波多野煙草の佳稱を負せり、其內松田二所の產は松田煙草とも云ふ、○蘿蔔大住郡波多野庄中に產するを波多野大根と唱へ佳品なれど、今は絕て播殖せず、同郡西田原村香雲寺藏、天文中の文書に當所萊菔の事見えたり、又三浦郡中に多く播殖す、高圓坊村より出るを殊に上品とす、俗に鼠大根と云ふ、其根の形鼠尾に似たり、【本朝土產略】にも當國の產物とす、○西瓜大住郡平塚宿、上下大槻村に產す、○越瓜和名、志呂宇里、○大住郡小稻葉・平塚・上下大槻四村より出づ、○青芋足柄下郡石橋村の產佳品なり、每年領主より公に獻ず、足柄上郡三竹山・猿山兩村にも產す、○甘藷俗にさつまいもと稱す、大住郡八幡・平塚・上下大槻・中原上宿・南原等の村々より產するを佳品とす、○葱大住郡小稻葉村に產す、○戮豇和名、佐々計、○大住郡南原村より出づ、○薯蕷足柄上郡宮城野村に產す、○蕨足柄上郡宮城野・三竹山兩村の邊より同下郡久野村、津久井縣內所々の山に多く產す、○紫菜和名、乃里、○高座郡茅崎村海中、乳母嶋邊に多し、○莫鳴菜三浦三崎町、海中に多く生ず、當所の名產なり、○鹿菜尾和名、比須紀毛、○三浦郡西浦賀分鄕の海中に生ず、就中寒中に得るを上品とす、又同郡橫須賀村の海にも產す、世には概して浦賀鹿菜尾と云ふ、此餘郡中海邊の村々にも產す、高座郡茅ヶ崎・小和田二村の海中乳母嶋邊にも多し、○裙帶菜和名、和可女、○三浦郡橫須賀・走水二村の邊に產す、○滑海藻和名、阿良女、○三浦郡西浦賀分鄕小名久比里及同郡所々の海中に產す、○未滑海藻和名、可自女、○同上○海薀和名、毛都久、○同上○香蕈和名、志比多計、○足柄上郡中川村及愛甲郡角田・田代・煤ヶ谷・宮ヶ瀨四村津久井縣青根村等の山より多く產す、○青頭菌和名、波都多介、○高座郡鵠沼・辻堂・茅ヶ崎三村の邊に多く生ず、又松露も此邊に多し、○桃足柄上郡狩野・猿山二村、津久井縣葉山島村の產を佳實とす、古風土記殘本にも、當國の產物に列す、○梨子足柄上郡神繩・世附二村、同下郡久野村の產、古風土記殘本にも、當國及足輕郡の產とす、○鹿梨和名、夜末奈之、○足柄下郡畑宿に產す、○柿足柄上郡中、金手・金子・松田惣領・町屋・神山・神繩・世附・八澤八村より出ず、中に就て金手村なるを金手丸と稱して殊に佳品なり、又同下郡久野村よりも產す、又干柿は足柄上郡皆瀨川・都夫良野二村にて製す、○梅實足柄下郡小田原宿、鎌倉郡玉繩領邊に產す、古風土記殘本にも、當國の產に列す、消梅實は足柄上郡上曾我村に產す、○密柑足柄上郡三竹山村・川岸村二村の產、同下郡前川村の產をも名品とす、其邊の村々最多し、又同郡石橋・米神・江ノ浦・土肥・宮上四村の邊にも產す、○樒足柄下郡土肥鍛冶屋、同宮上二村の山上に多し、○山椒大住郡日向村の產、最佳品にて、日向山椒と稱す、○老杉神代杉と稱す、足柄下郡仙石原村より出づ、○細竹足柄下郡元箱根邊より出づ、煙管に製す、○山茶和名、津婆幾、○鎌倉郡玉繩領邊の花を美とす、土俗鎌倉椿と稱す、○漆津久井縣中村村に產す、年年貢稅を收む、○栢皮津久井縣澤井・佐野川兩村邊の山に產す、漁夫魚網を染るに佳とす○透頂香足柄下郡小田原欄干橋町にて製劑す、○醋大住郡中原上宿の民、造釀せしを同所の縣令成瀨五左衞門、年々公に獻ず、故に成瀨醋と稱せしとなり、後年其事廢せり、當所より江戶青山に通ずる道に御醋街道の名今に存す、○水飴三浦郡東西浦賀にて製す、尤上品なり、○鱁鰒俗しほからと云ふ、小鰹魚・小烏賊魚等を以て製す、足柄下郡小田原宿の名產とす、○絹愛甲郡半原村より出ずを上品とす、俗に半原絹と稱す、津久井縣中野村內、川和里より出ずを世に川和縞と云ふ、是に倣て近隣の村にても多く織出して、共に其名を稱す、○綿布和名、毛女牟○大永の初、三浦郡に種を植しより郡中に多くして三浦木綿と稱美す、此名、文祿中の文書にも見ゆ、今尙播殖すれど郡名の稱は聞えず、○刀劒鎌倉郡扇谷村の住、彌右衞門綱廣は正宗より五代、廣正以來當所に住し、中興より綱廣を通稱とす、御分國以後も御野太刀御鑓御鏃等の製造を命ぜられ、今に其地を給ふ、○鑄器足柄下郡小田原宿古新宿町の住、次郎右衞門、往古より鑄物師職にて永祿・天正中、北條氏より鐵炮以下、諸品を造らしめし時の文書を藏し今に連綿す、又同町にて此職を業とする者あり、愛甲郡下荻野村にも平十郎と云ふ者、古より同じ業を相續す、其餘國中所々に同職ありしこと、次郎右衞門藏文書に載たり、今古新宿町、下荻野村の外は皆廢す、○盒器大住郡坂本村邊にて多く製す、又足柄下郡箱根山中にても製造す、是を俗に湯本細工と稱す、○提灯足柄下郡小田原宿にて製造す、小田原提灯と稱す、○炭足柄上郡東西山家及宮城野村、同下郡土肥山邊にて多く燒、是を眞鶴炭

と云、古愛甲郡中煤谷村より年々北條氏に炭を貢せし事、其頃の文書に見ゆ、御入國の頃より三增・角田・田代・中下荻野五村にて御茶事の料に充らるゝ炭を燒て貢せしに、元祿十一年より代永を收む、又近き頃丹澤山にて、燒せられしが今は廢せり、○鱸愛甲郡半原村邊及び津久井縣中野　○螢足柄下郡甲村邊高座郡長後村邊にて畜ふ、　○鮎愛甲郡中津川に漁す、古は同郡妻田・金田・三田多し、　三村より鹽藏して貢せしが、貞享五年より代永を收む、角田・棚澤・熊坂・半繩・八菅の五村にても漁するを以て是も毎年代永を收む、又津久井縣内相模川及び道志川・澤井川・早戸川・串川よりも產す、皆貢賦を納む、其內道志川の產は一種の佳品にて、形も少しく異にて腮曲れるが故、道志川の鼻曲りとて賞美し、毎年貢獻すと云ふ、　○鰍也麻女、○其餘、國中の川に產するもの多少あり、　○鱒魚足柄下郡元箱の川々に、多く產して住なりと云ふ、又足柄上郡河內川・彌勒寺川にも產す、　○鱒魚根蘆湖に產す安可波良魚同上、漢名詳ならず、　○杜父魚可自加、○足柄上郡河內川・彌勒寺川に產す、其餘山間の谷水にもあり、　○鯢魚足柄下郡箱根、深山の澤中に產す、其地にては山生魚の字を用ふ、小兒の疳を治すと云　○鯛三浦郡三崎町內城村・久里濱村邊・洲綾・大住・足柄下郡海中にて漁す、北條氏より出せし文書に鯛魚の事見ゆ、大住郡須賀村、足柄下郡小八幡村三浦郡久里濱・公鄕二村の民所藏文書にあり、　○方頭魚和名安未多以、洲綾郡大磯宿にて漁獵す、　○比目魚洲綾・大住・足柄下郡等の海にて漁獲す、　○鰹魚三浦郡中多く漁す、就中三崎及び城ヶ島邊にて得るを上品とす、三崎町よりは每年公に獻ず、鎌倉・高座・大住・洲綾・足柄下の五郡の海にても漁す、鎌倉の海鰹魚の事、兼好が【徒然草】に見えたり、又足柄下・洲綾・大住三郡にて宇豆和と稱し鰹魚の小なるを漁す、　○撥尾魚須波志利、○三浦郡東浦賀及び久里濱にて多く漁す、其稅錢を貢す、　○鯵高座郡鵠沼・辻堂・茅ヶ崎三村にて多く漁す、又大住・洲綾・足柄下三郡の海にても漁す、北條氏、大住郡須賀村へ出せし文書に鯵の事見えたり、　○鯖高座郡茅ヶ崎村及び足柄下・大住・洲綾の三郡にて多く漁す、　○保宇保宇魚漢名詳かならず、俗、魴鮄魚と書す、足柄下郡來神村邊にて漁す、　○鰯高座郡茅ヶ崎・鵠沼・辻堂三村三浦郡長澤村邊にて多く漁す、又大住郡須賀村にても漁す、　○鯷魚三浦郡長澤村にて、多く漁す、　○滿久呂魚鮪の種類なり、足柄下郡の海中にて多く漁す、其內前川村最多し、洲綾・三浦二郡の海中にても漁す、又土人可自幾と唱ふる同種のものを漁せり、　○鮫足柄下・洲綾・大住三郡の邊にて漁獲す、　○華臍魚安武可宇○洲綾郡　○鰕鎌倉鰕の名あり、三浦郡所々にて海邊にて漁す

改二今名一、其額今猶在云、非也、明宋濂日東曲、所レ謂國有二楊貴妃祠一、蓋承二此訛一也、過二鳴海斥一、遶二池鯉鮒一、越二參州之鷲坂一、而息二於岡崎一、戊辰、歷二藤川一、躡二赤坂一、出二小境一、及二吉田一、經二大巖一、而至二于遠州之白洲下一、以歇、此所南海之濱也、邑中夜驚恐、大波蕩二溺人家一、馬鳴犬吠、舍主告レ我曰、去歲地震、水漲湯々、溺二人家一、殺二牛馬一、急走登レ山者、得レ不レ死而已、故今夜恐懼如レ此、我亦不レ眠、而杞國天墜之事、可二以笑一乎、浯州達舍之言、宜二以思一矣、頃之人定、水亦果不レ至、已巳渡二今切一、到二前坂一、過二濱松一、越二天龍河一、河深而急峻、往來人多爭乘レ船、舟中之人馬如レ盛、見二池田一、望二湯谷之塔一、湯谷倡女也、平宗盛嬖レ之、竟至二於身爲一天下傺一、古今色之於二國家一、危哉、是日也、及二于見附一、而暮矣、庚午過二山石庄一、經二懸河一、上二佐夜之中山一、又下而自二金谷一、涉二大井河一、河深廣、且多レ石而無レ橋、幷二舟暨筏一、於レ是募二雇知レ瀨者一、令二其執一レ我馬之轡一、既已而曰、淺則揭、深則厲、行二于駿州之島田一、而至二藤枝一、以憩、辛未出二於岡部一、超二宇都山一、山中蔦楓、古有今無、在五者、古之歌人也、而今安在哉、懷舊之感慨、於レ物於レ人、不レ能レ不レ起、亦人之常情耳、過二丸子及藥科一、度二阿部川一、日之禺中、至二于府中一、甲戌、青油幕入レ府、夏四月癸巳朔、越甲辰、入二田中一、距レ府五里、越若翌日乙巳、我發レ府到二江尻一、見二三保之松一、越二清見之關一、過二由比一、則見下人運レ潮掃レ鹵、又算二之釜中一、而搬レ柴燃レ火、而後以爲レ鹽、其艱難可レ知、宜乎其爲二食肴之將一也、知二其味一者、亦不レ可レ不レ知二其艱一、經二蒲原一、絕二富士河一、河流急二於天龍一、人馬涉者、俱若二辟易一、僉曰、不二膚撓一、不二目逃一者鮮矣、州名二駿河一者、蓋因二此河一得二其名一乎、今日所二經歷一、乃所謂多子之浦也、富士山之陰也、古今志二倭歌一者、吟詠不レ少、就レ中山部明人、獨拔二其尤一者歟、對二此境一諷二此歌一、則景致風味、不レ可二勝言一也、玆夕次二于吉原一、丙午、過二浮島原一、歷二沼津一、此所謂車返也、乍思會郾國之不レ入二於勝母一、我父母在二京師一、而我奚其遠遊哉、嗚呼官事毋レ鹽、勉哉、然忠孝豈二也哉、古云、求二忠臣一、必於二孝子之門一、濟二黃瀨河一、跨二豆州之三島一、以升二箱根山一、山上有レ湖、方二三里許、唐人詩、山頭水色薄籠レ烟、遠客新愁長慶年、我今似レ之、周易有レ之、山上有レ水蹇、君子以反レ身修レ德、我今思レ之、箱根山東麓、有下稱二塔澤一之地上有レ僧不レ食二五穀一、夏冬唯一葛一衣、不レ沐不レ浴、不レ翦不レ爪、年三十七、常杖二鐵杖一、著二鐵屐一、行二嶮岨一、如レ走二平地一、書二無量壽佛號一而有レ光、人多下上二塔澤一者上宿者信者、往來絡繹如レ綖、我所二傳聞一、蓋如レ此云、或曰、狐狸妖魅之爲也、人之愚而迷者、至下於祈二病乎石人一、請中事乎鮑祠上、悲哉、夫江淮淫祠、壞二

于狄公一、石佛光明、滅二於程子一、今塔澤不レ遇二如レ此之人一、其幸乎、亦不幸乎、此日寓二于相州之小田原一、丁未過二小磯大磯一、大磯有レ石、俗名二都維石一、曾我祐成有レ妾、名二都羅一、此其遺蹤也、祐成血氣勇士耳、況又其淫乎、傳曰、宴安酖毒也、不レ可レ懷也、歷二平塚一、亂二相模川一、自二藤澤一、而往二鎌倉一、鎌倉有二七道一焉、我之馬奚醉、而失二道問一田父一、田父指曰、左、左乃得レ道、未時入二鎌倉一、望二寺院一、則悲二浮屠之賊レ君惑レ民、見二大佛一、而嘆二泉布之不一レ能流行一、六朝之時、有二墾レ錢以鑄レ佛者一、資治通鑑綱目、書二鑄二大像一、不レ免二朱子之筆誅一、其餘古蹟甚多、谷々不レ可レ勝計一也、雖レ累レ日、而不レ可二盡見一矣、以我觀二鎌倉一、則四塞之地、而天府之所也、自二平高時一、遡二于時政一、執二通國兵馬之權一、歷二一百五六十年所一、勢力如レ彼其大也、城郭如レ彼其堅也、行二乎國政一、如レ彼其專也、年歲如レ彼其久也、而源義貞一旦率二輕黠烏合之衆一、轉而攻レ之、戰則克、當則破、竟鎌倉焦土高時亦族、然則在レ德不レ在レ險、爲二人之上一者、其可レ不レ監乎、戊申出二鎌倉一、自レ谷至レ谷、而見下農父入レ泥牽レ水、手指二牛馬一、足踏二蛭蟥一、除レ草芟レ秀、以治二田易一畝、而養中其苗上、於是乎稼穡之艱難、亦可二以見一焉、堯典、敬授二民時一、良有レ以哉、我於二治レ田煮レ鹽之二一事一、最有レ感矣、谷行五里許、出二于武州之谷度一、過二神奈川一、歷二品川一、以入二于江戶一、己酉、拜二幕下一、侍二十有五日一、侍二讀黃石兵法書一、及漢書張良列傳一、與二高祖所レ興項籍所レ亡者一、六日又將レ讀二大學一、未レ果、越閏四月癸亥朔、步レ自二江戶一、則至二于藤澤一、越四日丙寅、歸二于駿府一、

湘中紀行

太宰純字德夫號春臺

相之鎌倉、東南之勝、未レ有下立二其右一者上也、余少好レ遊、而多病、及レ得二小愈一也、登二富嶽一、已而適二平安一、至二浪華一、過二諸樂一、然後還二東都一、於二關西山川一、稍々寓レ目焉、獨於二湘中之遊一、如二無レ意者一、易二於近一耳、今玆丁酉秋、根伯脩將レ省二其親一、伯脩者、武弘明里人也、弘明去二鎌倉一、一舍而近、一日諸士集二牛門一、伯脩曰、諸君好レ遊乎、盍レ遊二鎌倉一、遊則吾且爲二東道主一、言未レ既、純也神先飛、藤東壁、秋子帥、平子和、晁蔚宗、山君彝、皆曰、固所レ願也、不二敢後一、既議定、約以二九月十九日一、治二行於牛門塾一、二十日發、會霖雨一、越十八日、伯脩先行、十九日雨甚、不レ可二以出一、二十日、未レ止、余徒仰レ天悵然而已、廿一日始晴、余乃往二牛門一、意謂今日諸子必會、會則可二以更訂一レ期、及レ至レ叩レ塾、塾中寂寥、晁生方病レ足在レ牀、山生讀レ書自若、問レ之、山生曰、前日藤生來、諸君不レ至、實雨故也、因與二藤生一議、止二今秋之行一矣、余不レ悅曰、甚矣、諸君之怯二於遊一也、人生朝不レ謀レ夕、時不レ可レ失、豈可二猶豫一乎、且子於二吾輩一最少、何用二

縮朒ニ爲、如得ニ一人ニ偕行、余則以ニ明日ニ發、山生曰、善、吾其偕行、不レ有ニ藤生者ニ乎、吾請就謀、子勿レ遽、走之ニ東壁氏ニ、既反、曰、藤生許諾、尋藤生至、曰、壯哉德夫、吾雖レ病能裹レ足耶、子弟緩ニ一日ニ、吾將レ辨レ嚴、余曰、可也、因改レ約、以ニ廿三日黎明ニ、會ニ牛門ニ、及レ期、藤生先至、與ニ山生ニ已發、待ニ余於橋上ニ、藤生曰、與レ人期後何也、余曰、豈獨子視レ我邪、共笑、遂行抵ニ芝浦ニ、過ニ茶肆ニ、坐レ榻而望、滄海渺々、與レ天一色、耀靈方拂ニ扶桑ニ、水光涌レ金、我三人者、束裝各殊、而皆戴ニ笠笠ニ、著ニ草鞾ニ、意氣揚々、蓋有下不レ遠ニ千里ニ之心上、豈不ニ愉快ニ哉、於レ是相謂樂レ之、行經ニ品川驛ニ、抵ニ大森村ニ、入ニ酒肆ニ、與ニ藤生ニ飲、山生探ニ其懷ニ、出下岡仲錫送ニ吾曹ニ詩上、以下レ酒、而已則唱ニ糍耙ニ、勸ニ之飲ニ、弗レ聽、實不レ能レ飲也、余醉神旺甚、同ニ藤生ニ和ニ岡詩ニ、行且吟哦、過ニ六合渡ニ、抵ニ河崎驛ニ、日近レ午、就レ舍而食焉、行過ニ金川驛ニ、抵ニ程谷驛ニ、去ニ東都ニ七十餘里、自レ是而南、路岐ニ於弘明ニ、即金澤之道也、時日景將レ晡、山生疲矣、余雖ニ獨健ニ、酒力已盡、因思レ飲、而村酒不レ可レ飲也、乃過ニ賣レ糕者ニ、而點心焉、甚可レ口、三人於ニ是乎若ニ神旺者ニ、遂南由ニ村路ニ、躡ニ行崎嶇ニ、以上ニ高陵ニ、下又行ニ田間ニ、去ニ程谷ニ可ニ十里所ニ、而得ニ弘明ニ、日高舂、詣ニ根本氏ニ、伯脩與ニ迺父ニ、迎ニ我三人ニ、以入、爲ニ薺麪ニ置レ酒、余與ニ藤生ニ、劇談無レ倦、山生則疲甚、兩足重繭、不レ能レ履レ地、委頓睡如ニ重病ニ、但以ニ其食レ麪過ニ人也ニ、爲レ無ニ慮耳、豈非ニ以レ不レ飲レ酒故ニ乎、强レ之則掉レ頭耳、滿坐笑レ之、藤生與レ余更酌盡レ醉、夜分乃寢、廿四日故當レ行、根翁留レ之曰、諸君胡爲ニ乎行色ニ、其懼レ雨歟、鄉也霖雨浹レ旬、既有レ虹藏レ雨、法當レ得ニ十日之晴ニ、弟優游以永日哉、則山君亦可ニ以息レ足焉、余與ニ藤生ニ未レ有ニ以答ニ、山生奮然曰、不ニ敢請ニ耳、於レ是乎留、以レ故晏起、朝饗畢、從ニ伯脩所レ導過ニ弘明寺ニ、上ニ觀音殿ニ、遂登ニ其山最高頂ニ、四面皆層巒ニ、而東南距ニ海濱ニ七八里ニ、寓目有ニ風致ニ、與ニ藤生ニ坐ニ松下ニ、吹レ笛、下而行、可ニ二里所ニ、得レ村名ニ井谷ニ、取レ徑入ニ竹林ニ、過ニ弘明寺ニ、上ニ觀音殿ニ、遂登ニ其山最高頂ニ、四面皆層巒ニ、而東南距ニ海濱ニ七八里ニ、寓目有ニ風致ニ、與ニ藤生ニ坐ニ松下ニ、吹レ笛、下而行、可ニ二里所ニ、得レ村名ニ井谷ニ、取レ徑入ニ竹林ニ、曰ニ乘蓮寺ニ、佛殿側有ニ小祠堂ニ、寘ニ鎌倉平太夫人像焉ニ、入而謁レ之、熟視似ニ古物ニ、問レ之、莫レ知ニ所以ニ、蓋像故當時廟中所レ奉ニ、而喪亂後、流傳止ニ于斯ニ耳、還過ニ弘明里社ニ、社在ニ山阿ニ、松杉森々、清幽可レ愛、時根翁與ニ醫生宜泉者ニ、携ニ行厨ニ、載ニ酒肉ニ以來、因席レ地而宴、余與ニ藤生ニ吹レ笛以佐レ酒、飲酣、宜泉出ニ菊及梅花ニ、泛ニ諸杯中ニ、尤有ニ佳致ニ、菊故節物、梅乃見催ニ於大風ニ而開也、藤生賦レ詩、初韓使泊ニ赤馬ニ、周南懸次公往謁、韓人泛ニ梅花於杯ニ、以飲レ之、因使レ作レ詩、以ニ梅開杯字ニ爲レ韻、藤生偶記レ之、用ニ其韻ニ、余就和レ之、已而滿坐咸醉、日亦西斜、廼起將レ還、東南望ニ見層巒疊巘ニ、陸離ニ、其差高處有ニ怪松ニ、問ニ於宜泉ニ、曰一根三幹、儼若ニ龍

蟠ニ、亦奇觀也、嘗自ニ松所ニ延望、亦頗有レ趣、山生前曰、請往觀レ之、可乎、宜泉道レ之、摳衣而行、我三人與ニ根主ニ隨レ之、披ニ榛莽ニ以上、蓋數里而到ニ松所ニ、信如ニ宜泉言ニ、磐桓久之、然後還、下舂反レ舍、根翁親修レ具烹ニ魚煖ニ酒、濁醪尤可レ口、痛飲竟夕、余賦ニ一絕ニ、寄ニ謝主人ニ、二子和レ之、是日山生足、治レ之旋瘳、步履罔レ難、狂態時發、所ニ以相與遊涉盡レ樂也、廿五日、日出發、臨レ發呼ニ濁醪ニ、飲累ニ數杯ニ、伯脩則以ニ是日ニ反ニ東都ニ云、自ニ弘明ニ西南、行ニ于田間ニ、小路迢遙、左右皆山、或遠或近、既又度レ嶺、通計ニ二十五里所ニ、得ニ擲筆松ニ、乃金澤西北山、相傳畵工巨勢氏、摹レ勝不レ成、絕倒擲レ筆處也、今爲ニ浮屠所居ニ、門揭ニ擲筆山字ニ、因レ松名也、有ニ草堂ニ、扁曰ニ能見堂ニ、並明僧心越篆也、書法可レ觀、惜乎名不ニ雅馴ニ耳、此蓋方俗語、絕倒之意也、堂寘ニ閻魔大像ニ、其餘地不レ能レ容ニ十人ニ、世之縮流、卑陋無ニ雅致ニ乃爾、上ニ是山ニ以望、金澤諸勝如レ畵、金澤者海曲之名也、南西北皆山、而東連ニ滄溟ニ、近浦多ニ島嶼ニ、神祠曰ニ迫門ニ、在ニ水西ニ、佛寺曰ニ稱名ニ、在ニ水北ニ、曰ニ大寧ニ、在ニ水南ニ、皆名區也、野人之業、漁農相半、亦有ニ鰪戸ニ、潮水盈虛、旦暮異レ景、況四時乎、凡此皆擲筆所ニ下見ニ、山僧指點示レ之也、若夫乎ニ臨之ニ、則海東總房諸山如レ黛、萬里征帆、縹ニ緲乎煙浪間ニ、美哉景也、我輩留連移レ時、猶未レ能ニ究其十一ニ、亘勢之畵而不レ成、豈不レ信哉、於是余與ニ藤生ニ、踞ニ松根ニ吹レ笛、山生存焉ニ、偶有ニ貴婦ニ、徒從甚衆、自ニ東都ニ來遊、餽ニ茶果ニ以犒ニ我三人者ニ、藤生戲賦ニ一絕ニ、余和レ之、下レ山東南行、去ニ擲筆ニ不レ能ニ二里ニ、得ニ稱名寺ニ、是文永中、平實時與ニ僧審海ニ、所ニ奉レ詔創レ之也、實時子顯時藏レ書焉、以招ニ學徒ニ、今也廢矣、山門立ニ金剛力士ニ像ニ、殿安ニ彌勒大像ニ、並佛工運慶刻、庭有ニ機樹ニ、乃藤爲相所ニ詠歌ニ、而今無レ足レ觀矣、西湖梅、相傳自ニ舶上ニ來、今亦枯矣、他不レ足レ道也、然園地風物、猶存ニ古意ニ、實不レ妨レ爲ニ名藍ニ也、我三人及レ階、遇ニ殿扉方開ニ、升レ階見レ僧、數人列ニ坐殿上ニ、乃主人與レ客、展ニ視本寺重器ニ也、我三人竊美レ之、而不ニ敢請ニ、主人知レ之、捧使レ前、因從レ旁觀レ之、大氏佛像及彼家卷軸衣鉢之類、其他朝廷文書尤多、又有ニ雜物ニ、珠簾一張、中土物也、凡此皆本寺所レ寶、貴則貴矣、然自ニ吾曹ニ觀レ之、孰ニ若所レ藏古書ニ、則殘缺略盡、其厘々存者、人尚不レ知ニ其名ニ、徒倚ニ疊暗室ニ、爲ニ蠹鼠ニ所レ害、可ニ勝惜ニ哉、已出南ニ行里中ニ、抵ニ海濱ニ、有ニ漁村ニ焉ニ、過レ是西折、其南乃海水循ニ山足ニ灣曲者、其北則曲之又曲成レ澤者、其口僅數十步、橋レ之以濟ニ往來ニ、如ニ魚梁ニ然、橋下可レ通レ舟、橋西爲ニ迫門ニ、迫門者、此方海口通稱、祠乃大山積廟也、華表南小嶼、有ニ天女祠ニ、亦橋以通レ之、在ニ祠側ニ、寓ニ目於山水ニ、無ニ見不レ佳、向自ニ擲筆ニ望レ之

如レ書者、悉密ニ邇左右一、且也嶼上所レ有松柏諸木、靡レ不ニ枝幹蜿屈一、老蒼可レ愛、亦奇觀也、大抵金澤佳致、極ニ於斯一矣、於レ是吹レ笛自娛、余思レ酒、而不レ可レ得、歎曰、悲哉薄遊之無ニ以爲レ樂也、遊ニ勝地一而不レ飲、猶ニ之不レ遊也、山生笑曰、子言謬哉、吾輩惟能薄遊、故得レ遊、若必壯遊邪、則不レ可レ得耳、物無ニ兼美一、天之道也、子言謬哉、之子屢以不レ飲見レ嬲、故爭口廼爾、遂行、迫門西南有レ村、曰ニ引越一、厥民業レ鹽、過レ村、塗稍々跻、道左有ニ禪院一、曰ニ金龍一、院後海岸上有ニ欹石一、大丈許、高過レ之、人呼曰ニ飛石一、俗說、昔者大山積靈、從ニ豆三島一飛來、駐ニ此石上一、鄉人遂祀レ之、迫門祠是也、已復得ニ坦塗一、西折經ニ六浦里一、行ニ山下田上一、去ニ金澤一可ニ十里所一、山足有ニ雕巖一爲ニ地藏菩薩像一者、記ニ武相州界一也、呼曰ニ界地藏一、像缺鼻、故亦曰ニ劓地藏一、襲時有ニ山閣齋先生者一、嘗作ニ愛宕詩一、中有下劓ニ天狗一黜ニ地藏一之語上、則劓ニ此像一者、其亦山氏之徒邪、黜倘慘矣、劓已甚哉、已西入ニ相境一、行可ニ二里所一、有下鑿ニ山爲ニ洞門一者上、俗呼曰ニ朝比奈洞門一、斷崖截然、高可ニ十仞一、其塗猶陂陀、此仁治中、賴經所下命ニ平泰時一開上之、以通ニ六浦道一也、疑義秀與レ焉、而有レ功且其人以ニ多力一聞、故後世獨稱ニ之爾一、亦猶ニ蜀道稱ニ五丁一也、或乃謂義秀一夜鑿レ之謬矣、道傍溪泉曰ニ梶原洗刀水一、未レ詳ニ其故一、洞門東數里、道傍有ニ草菴一、復安ニ地藏菩薩石像一、俗呼曰ニ嘗鹽地藏一、六浦人賣ニ鹽於鎌倉一、必過謁ニ是像一、因出ニ其所レ齎少許一、以供レ之、故有ニ此名一、或曰、初是像放レ光、有ニ一賣鹽人一、擊而踣レ之、昭以鹽、其怪遂止、故名、此其人亦程伯淳之徒歟、夫既擊而踣レ之、足ニ以止レ怪、昭以レ鹽抑何意也、齊東語令ニ人捧腹一、又里餘、道右有ニ蘭若一、曰ニ明王院一、一名ニ大行寺一、嘉禎間、賴經所レ造、眞言道場也、堂故安ニ五大明王像一、故呼曰ニ五大尊堂一、寬永中道場火、四大尊焚、不動明王獨存、明王院東、平蕪平眠者、故源基氏第也、初鎌倉盛時、足利氏世家ニ于此一、自ニ尊氏覇ニ天下于京師一、留ニ其長子義詮于此一、逮ニ乎義詮踐レ位而次子基氏鎭ニ守關東一、仍在焉、其後世至ニ持氏一、失ニ其職一、出ニ奔駿州一、託ニ其少子成氏於土岐持益一、在ニ信州一、既而越後州上杉房定、爲ニ持氏一謝ニ罪於義政一、而請レ納ニ成氏一、寶德元年、成氏來歸、修ニ舊宅一而居レ之、亡レ何遜ニ毛古河一、後復求レ入ニ鎌倉一、而不レ得矣、舊宅遂廢、然鎌倉人猶疑ニ其或來一也、不ニ敢鋤レ之、永爲ニ蓬蒿一、父老云、過ニ平蕪者一、得ニ淨妙寺一、亦在ニ道右一、此尊氏父貞氏所レ創、而爲ニ關東五山之一一、今雖ニ衰替一、實瀟洒禪刹也、淨妙寺前、道左有ニ水西流一、曰ニ滑川一、乃青砥藤綱落錢所、事見ニ傳記一、稍進至ニ杉本寺一、亦在ニ道右一、地名ニ大倉一、堂安ニ觀音木像一、卽東鑑所レ稱、大倉觀音堂也、東人巡禮三十三所觀音、此爲ニ最初一、入レ門登ニ

石階數十級、堂在ニ山腰一、庭除整齊、不下與ニ他野寺一同上、古木回巖、可ニ以悅レ目、亦淨刹也、庭又有ニ地藏菩薩石像一、長數尺、脇下腰上斜斷、如ニ刀砍レ之旋接而立焉者狀一、余戲ニ二子一曰、此亦山氏徒所レ爲也歟、鄉予以レ劓爲ニ已甚一、腰斬又甚焉、噫、當今之世、爲ニ地藏一亦難矣哉、二子笑、行抵ニ荏藁祠一、亦在ニ道右一、是菅右相廟、未レ詳ニ何世所レ祠、賴朝時已有レ之、亦古祠也、而今衰矣、荏藁東平田方一里餘者、故賴朝第、可ニ以賦ニ黍離一、北山足爲ニ法華堂一、是賴朝念佛誦經之所、初安ニ其少所レ奉觀音銀像長二寸者一、後造ニ木像一、藏ニ銀像於其頭中一、今在ニ雪下相承院一云、此乃安ニ彌陀像一、堂後歷ニ石磴一、至ニ山腰一、有ニ賴朝墓一焉、古塔無レ銘、不レ知ニ眞僞一、法華堂西爲ニ鶴岡一、至則日沒矣、鶴岡下曰ニ雪下里一、就ニ其逆旅者一而宿焉、三人既入而偃息、有レ頃余興倚レ柱吹レ笛、主人聞而異レ之、進而問レ之曰、客何爲者、從ニ何許一來、所レ奏實貧里未レ聞也、幸已得レ聞、敢請復レ之、余謝ニ不敏一、既又有ニ一老人一來謁曰、僕本祠伶工也、生長田畝、未レ聞ニ王國正聲一、惟以ニ世業一家ニ食于祠宇下一、聞ニ諸君好レ音、子弟咸聚ニ于戶外一、張レ耳、敢使ニ僕進請一、不レ知能爲ニ我小人一、重奏ニ一曲一乎、否禮甚恭、余許諾、因招ニ其子弟一、前レ人、皆不ニ敢前一、唯有ニ一少年一、拜而入、坐ニ席末一、於是余與ニ藤生一吹一闋、藤生或吹ニ簫篴一、聽者大悅、莫レ不ニ稱歎一、夫東都者、四方所レ歸、兆民所レ止、既庶且富、聲色之樂、何所レ不レ有、然好ニ鄭衛桑濮之音一者、非ニ惟小人一、卽士大夫、聞ニ雅樂一、猶ニ委居之於ニ韶濩一也、不ニ徒弗レ悅、將ニ起避レ之、鎌倉亦古之王國、今也鞠爲ニ茂草一、古祠名藍、大半荒廢、鶴岡雖ニ獨如レ無ニ恙者一、而比ニ當世全盛一、奚翅十一、矧乎雪下特一村落厥人農圃、而執ニ巫祝之事一、然能修ニ其業一、以共ニ祭祀之役一、奏ニ古樂一、以事ニ鬼神一、五百年如ニ一日一也、今一聞ニ吾曹操レ曲、悅且不レ已、蓋亦有レ以也、余於レ是乎、見ニ古者王國之遺風一矣、既而舍レ笛問ニ於老人一曰、翁何能、對曰、習ニ篳篥一、余請レ聽レ之、辭、固請、固辭、乃已、藤生問ニ二少年一、奚爲、其一人曰、習ニ笛其一人曰、習ニ篳篥一、藤生曰、二子試奏、辭、固請、對曰、小人固陋、實無ニ師承一、若逞レ所レ習、恐爲ニ大方笑一、是以敢辭、藤生曰、雖レ然二子弟學焉、吾將ニ以慰ニ旅況一、余亦強レ之、少年曰、敬聞レ命矣、且嘗試レ之、惟高明枉賜ニ是正一、幸甚、辭氣尤恭、藤生曰、吾儕雖ニ無似一、敢靳レ所レ聞、二子乃合奏一曲、請レ益、尋奏ニ三四曲一、間或差誤、我二人微正レ之、二子躍然喜曰、今夕何夕、邂ニ逅君子一、受レ賜多矣、小人未レ知レ所レ謝、但神庫所レ藏樂器、有ニ佛工運慶刻假面數枚一、亦祠中重器、實吾輩所レ司也、諸君若欲レ視レ之、旦日出而示レ之、此吾曹所ニ以報一諸君一也、我三人皆曰、然、素聞レ之、若果得レ見レ之、何報如レ之、二子曰、諾、因期ニ詰朝一而去、問レ夜

二皷矣、廼臥、少年吹レ笛者大石氏、吹二簫簫一者鴨氏、老人亦鴨氏、而館主松尾氏、亦本祠祝氏之屬云、廿六日、蚤起謁二鶴岡祠一、是應神帝廟、卽所レ謂八幡祠者、治承間、賴朝所レ建也、自二鎌倉衰廢一、唯此巍然、殿堂門廡、弘敞壯麗、樹林蓊欝、階除端肅、人人莫レ不二竦體一、觀二其結構一、華表南向、內鑿二放魚池一、有二小嶼七一焉、其一建二小祠一、安二運慶刻天女像一、像抱二琵琶一、相傳出二平重盛家一、池上當レ路有二石橋一、穹窿如レ虹、呼曰二赤橋一、其義未レ詳、石橋直北爲二山門一、立二金剛力士二像一、署曰二鶴岡山一、曼珠院法親王良恕書也、山門東、建二多寶塔一、塔東爲二鐘樓一、山門內爲二舞殿一、東爲二少宮一、是仁德帝廟也、舞殿北、石階丈餘、階西有二銀杏樹一、大連抱、傳道、僧公曉殺二實朝於此樹下一、未レ知レ然否、階上平地建二樓門一、署曰二八幡宮寺一、亦良恕書也、左右連二回廊一、門內直北爲二八幡祠一、俗說、昔者大臣藤鎌子、埋二所レ持之鎌一、此其所也、故北山名二大臣山一、祠後廊外、附二近山足一、左右則遠、西廊外建二賴朝廟一、實二大像一焉、號二白旗祠一、其西石階下、建二實朝廟一、號二柳營祠一、此祠宇大略也、外又有二佛殿經藏、小祠小堂一、不レ可二歷擧一、蓋不レ足レ錄耳、是日也、昨金澤所レ見婦人詣レ祠、獻以二巫舞一、我三人立二殿下一觀レ之、此乃東於巫祝、所レ以爨二鬼神一、固非二雅樂一、然聲容之美、比二之都鄙尋常巫祝所レ爲淫靡者一、不レ可レ同レ日而語二矣、蓋亦古之遺風也已、少焉伶工石生來、爲二我三人者一、出二庫中樂器一而示レ之、唯假面數枚皆精緻、世所レ希有一也、余不レ足レ觀、旣而西降二石階一、其下有二大門一南向、門內左右有二僧院一、凡十二所、祠中執事之僧所レ居、係二雪下里一、余所レ識隆眞師者、住二等覺院一、因訪レ之、語須而別、反レ舍、日過二三竿一、趣二朝食一而出、自二雪下西北一行二于巨福一、路稍蹐、過二圓應寺一、在二道左一、堂安二閻魔木像一、世傳、運慶慕死入二地獄一、見二閻魔一、蘇而造レ此、夫運慶之前、造二閻魔像一者衆矣、世之愚人、莫レ不二見而畏一レ之、何暇問二其肖否一乎、縱使二運慶所レ造果肖一邪、而不レ能レ使下賢智一見而畏上レ之、則此像之所二以貴一不レ在レ貌耳、居恒龕鎖、人不レ得二輒謁一、蓋寺僧需二錢耳、我三人亦不レ欲レ見レ之、長揖而出、下レ阪過二建長寺一、在二道右一、此建長中、平時賴所下爲二宋僧蘭溪一建上レ之、亦關東五山之一也、外門二所、東者南向、署曰二海東法窟一、西者西向、署曰二天下禪林一、並朝鮮人竹西書也、東門內少西、建二大門一、署曰二巨福山一、相傳、元僧一山書、或謂趙子昂書、俱未レ詳、大門北爲二樓門一、署曰二建長興國禪寺一、宋僧子曇書、額扁甚長闊、今門不レ能レ挂二諸重屋間一、覆而懸二之樓下一、仰而視レ之、若二屋宇一然、殆乎竟門、觀レ此乃知二門故高大一、他可二例知一、樓門北爲二佛殿一、立二地藏菩薩丈六木像一、佛殿西北爲二方丈一、有二時賴木像一焉、東爲二西來菴一、是大覺禪師祠堂也、他殿堂

不レ足レ道、蓋已衰矣、要レ之山木岑蔚蕭條、使二人起二懷古之念一、實名藍也、已出西北行、道左爲二長壽寺一、是源基氏所レ建、以爲二其父尊氏廟一也、今衰微不レ足レ觀、余與二藤生一、顧視而過、山生獨探レ之、建長寺西北、平田數頃、爲二故上杉憲顯宅一、子孫世居レ之、後徙二毛平井一云、平田西北爲二明月院一、上杉憲方所レ創也、入レ門左折得二禪興寺一、舊名最明寺一、亦時賴所レ建也、今廢、唯有二佛殿一、略探卽出、道左爲二淨智寺一、正對二明月院一、是平師時所レ建、亦爲二五山之一一、今甚衰、淨智寺西北曰二松岡一、有二東慶尼寺一焉、平時宗妻貞時母藤氏爲レ尼、號二覺山一、造レ此而居レ之、後多度二貴家女一、遂爲二女僧叢林一也、建二重門一、誰二何出入一、禁二男子一也、寺法、世之女子欲レ爲レ尼、而父兄不レ見レ許者、一入二是寺一、則父兄不レ得レ不レ棄、卒至レ有下婦人惡二其良人一、而不レ得レ去、及有二淫行一而懼二發覺一、有二貳心一而欲二改嫁一者、斷レ髮而入中是寺上則丈夫不レ得レ制レ之、居兩閱レ歲、養レ髮復レ故、則復出適レ人、官無二明法一、前夫亦無二如レ之何一、此其所二以嚴禁二男子一也、夫尼寺禁レ男、以防レ淫也、今乃禁レ男、以助二世之婦人淫行一、孰謂二松岡非二淫婦之叢林一乎、出則得二圓覺寺一、在二道右一、與二東慶寺一對、是弘安中、平時宗所下爲二宋僧子元一建上レ之、亦爲二五山之一一、外門今廢、大門署曰二瑞鹿山一、天皇彌仁書也、大門東有二小門一、以當二外門一、山門亦廢、余先尋二歸源菴一、在二小門內少東一、過訪下所二舊識一岱西堂者上、問二本寺故事一焉、師乃使二良藏主者導一、菴北山上有二鐘樓一、懸二大鐘一、是正安中所レ鑄、子曇作レ銘、鎌倉諸名刹、唯此鐘爲二最大一、鐘樓西北爲二方丈一、頹敗可レ慨、方丈西北里餘、抵二山足一、爲二正續院一、是佛光禪師祠堂也、寘二木像一焉、開レ龕謁レ之、儼然見二華僧容儀一、所レ藏圓硯、斑石徑尺餘、禪師行李中物也、方丈西南爲二佛殿一、署曰二大光明寶殿一、亦天皇彌仁書也、寘二釋迦木像一、及其餘諸像一焉、佛殿側爲二僧堂一、餘多二廢者一、大氏地域不レ及二建長一、山淺也、而衰廢過レ之、雖レ然歷二覽遺迹一、想二見當時宏麗一、關中梵宇、唯此與二建長一、可二以爲一稱首一矣、宜乎游子必探レ之、還就二故路一、從二長壽寺側一南折、踰二龜谷坡一、下二扇谷一、遇二一老僧一、從レ徒而行、山生問、此地亦有二名區一可レ探者一否、僧曰、四境之內、無二處不二名區一、生憮然、少焉爲二華語一以罵レ之、僧聞而不レ喻、我三人抵レ掌而笑、西至二牧坡下一、得二景清所レ囚地牢一、在二道左山足一、圮隳不レ全、未レ知二是否一、坡北曰二梅谷一、還抵二泉谷一、過二淨光明寺一、在二道左一、是建長間、平長時所レ創、今荒廢、佛殿獨存、寘二彌陀木像一焉、寺後山頂有二藤爲相墓一云、山生欲レ探レ之、余恐レ移レ晷尼レ之、乃止、還抵二龜谷一、經二英勝尼寺一、此故太田持資宅、持資玄孫女爲レ尼、名二清春一、變レ宅爲レ寺、廋二水府威公女一爲レ尼、號二玉峯一、以レ寺授レ之、

遂爲二尼寺一、寛敞非二東慶寺比一、亦禁二男子入一レ門、故不二得而探一レ之、寺西爲二源氏山一、舊名二武庫山一、亦名二龜谷山一、龜谷中央也、相傳、源義家征レ奥時過二是山一而樹レ旗焉、故曰二源氏山一、亦曰二樹旗山一、扇梅泉三谷、皆龜谷別名也、英勝寺北隣爲二壽福寺一、是故義朝宅、自二源賴義其子義家征レ奥時一、留二于此一、義朝亦家レ焉、及二賴朝時一、岡崎義實爲二義朝一建レ寺焉、其後平太夫人修レ之、實二僧榮西一焉、遂爲二五山之一一、而最古矣、殿堂皆廢、唯有二佛殿一、安二竹籠釋迦像一、佛殿西南山腰、爲二千光國師祠堂一、其後巖穴有二石塔一、傳道實朝墓　蓋非也、凡鎌倉所レ謂五山者、衰替已久、而尚可二以觀一當時規模一者、莫レ如二建長寺一、次則圓覺寺、壽福之衰又甚焉、淨妙又過レ之、至二於淨智一、幸其不レ亡而已、其序則建長爲レ上、圓覺次レ之、壽福又次レ之、淨智又次レ之、淨妙爲レ下、義滿之命也、已出南行、道左平田、爲二故上杉定政宅一、經レ是東折、又北折、反二于雪下旅次一、午飯已求レ酒、得二村醪如レ醴、飲之累二數杯一、而不レ能レ醉、新釀未レ熟也、復出取二道鶴岡東一、經二荏藥一而東北折、行二田間一、入二山村一、去二雪下一三里餘、得二覺園寺一、是永仁年、平貞時所レ創也、殿安二藥師佛木像一、又有二地藏殿一、余不レ足レ道、蓋亦衰矣、覺園寺南、里所、山下田畝者、故東光寺墟也、其東山足有二地牢一、是源直義因二兵部王護良一、尋殺レ之所也、披二荊棘一而視レ之、巖穴約深丈半、廣亦如レ之、口窄內寬、可レ坐二二十人一、穴口崩頹、不レ可二輒入一、稍々窺レ之、卽出、其東南爲二理智光寺一、山上有二王墓一云、未二之探一也、從レ是東行、可二二里所一、度レ嶺抵二瑞泉寺一、是貞治中、基氏所レ營、夢窓師之鬼褒也、殿宇荒廢、僅存二十一一、東北山椒爲二徧界一覽亭之墟一、石磴半腸甚峻、左右折者凡十八而抵二絕頂一、其平者可レ坐二數十人一、亭今廢、唯有二基址一、岡巒重疊、下臨二深谿一、西南望見滄海連レ天、遠レ之富嶽囪嶺、近レ之湘中諸山、悉來爲二吾阿堵中物一、使二人應接不一レ暇、實此都勝概、是寺之所二以以亭聞一也、余唯恨不レ得レ酒耳、踟躕久レ之、乃下、遇二寺僧一、鋪レ席命レ茶、勞二我曹一如二舊識一、余因問二亭所一以作焉、對曰、國師避二亂於平安一、而來二關東一、基氏爲建二此寺一、山號二錦屏一、多二紅樹一也、師遂老焉、廼捌二亭於山巓一、以爲二游觀之所一、後人繼而修レ之不レ止二一再一、輓近水府義公重修レ之、張二宴于中一焉、近復爲レ風所レ拔而廢、三三年于茲一矣、未二之有一再造也、不二亦痛一乎、我三人聞レ之、莫レ不二攀願一、僧又延二我曹一入二國師祠堂一、謁二師及基氏氏滿木像一、畢、將レ行、僧猶留レ之令二徐徐一、尤見二情素一、問レ之、則曰、與二岱西堂一善、向見二公等於歸源菴一、而悉二其所一レ因、故不二敢外一レ之爾、問二其名一、曰節首座、重謝而別、還遵二故路一、經二賴朝故宮一、過二斜橋一、抵二寶戒寺一、是故北條氏宅、僧圓觀、使レ祭二北條氏靈一焉、寺故在二葛西谷一、號二東勝寺一、乃北條氏丘墓、高時與二其人一自殺之所、尊氏遷二諸此一、後更爲二今名一、殿安二地藏及諸像一、有二高時廟一、號二德宗祠一、東南田畝爲二葛西谷一、卽東勝寺墟、今屬二寶戒寺一、既出南行、塗尤徑易、呼曰二小街一、故市鄽也、寶戒寺南、俗呼二塔衝一、道傍有二小石塔一、故也、蓋府中街衢、往々有二古石塔一、相傳藤鎌子玄孫大郎大夫名時忠者、有二三歲兒一、一日爲二鷙鳥一所レ擊不レ知二死所一、尋レ之見二道有二遺骨一、輒收而瘞レ之、因建二石塔一焉、未レ知レ然否一、小街盡、東折過二蛭子橋一、又南折道左爲二比企谷一、此故比企能員宅、蓋能員姑爲二賴家妾一、生二賴經夫人一、而與二能員一家一于此一、及二能員圖二北條氏一、反見レ殺焉、比企氏遂亡、能員少子三郎不レ能レ死、潛逃爲レ僧、事二順德帝一有レ寵、從二幸於佐島一、迨二乎賴經繼立一、歸二鎌倉一、變二故宅一爲レ寺、號二妙本寺一、而實二僧日蓮一焉、蓮之弘二其法一、自レ此始也、遂爲二日家名刹一、夫三郎幼不レ能レ死二父難一、長不レ知レ報二其讐一、遁二於浮屠一、而偷レ生、終二身於父死之所一焉、誠宇宙一罪人哉、賴經又不レ能レ正二三郎罪一、反縱レ之、令レ遂二其所レ欲一、名教又晦矣哉、自二妙本寺前一、直南曰二大街一、東折過二田代觀音一、是田代信綱之遺跡、今爲レ寺、號二普門寺一、行近二海濱一、漁村中道左得二補陀落寺一、是僧文覺之遺跡也、于時日薄二虞淵一、我行亦嚴、不レ可二以徒倚一、故及レ門而還、自二漁村南一、遵二海濱一東折、不二二百步一、抵二光明寺一、是乎經時所下爲二僧良忠一建上之、初在二佐介谷一、後遷二諸此一、去二雪下一數里、外門西向、其內爲二山門一、署曰二天照山一、天皇彥仁書也、結構略備、正殿爲二良忠祠堂一、署曰二記主禪師一、余先尋二瑞三師者一、不レ遇屬二碩上人所レ遺レ師書於寺僧一、因請レ探二寺中之勝一、僧乃導二我三人一、巡二視殿堂一、謁二禪師木像一、及二其餘諸像一、畢、登二寺後山一、時已黃昏、海天蒼茫、不レ辨二上下一、指二點山嶽一、而不レ可レ審二其形一、漁火與二星彩一相映、燦爛乎冥々之中一、設使下吾曹白晝登臨上、恐未レ有二是佳致一焉、則而何昏黑之懷乎哉、不レ圖斯寺而有二斯勝一、久之乃下、僧點レ茶而曰、今日暮矣、公等弟於レ我宿、不レ則明日復來、吾其出二本寺重器一而示レ之、余辭、問二其名一、曰鑑全、揖謝而還、經二大小街一、反二于雪下一、是日山生之健過二於我二人一、凡所レ經名區、莫レ不二推尋搜索一、最尋二古墓一、藤生以爲二古墓辭一、及レ反二旅次一、也疲矣、其足將二復腫起一、遽求二藥治一、我二人則自如、山生蓋坐二癖疾一爾、廿七日、辨色而出、主人與二其妻一、送二諸畿一、辭色用レ情、凡余之信二宿於此一也、始以二逆旅一視レ之、既而主人之待二吾輩一也如レ故、奴婢之使二令於前一也、偪僂應唯、甚謹、是豈鄉俗之使レ然也邪、將存二于其人一邪、抑吾輩聲樂之所レ感也、鶴岡直南、馳道達二海濱一、可二五里所一、如レ砥如レ矢、兩傍列松森々、其間華表

二所尤偉、從二馳道一西折、行二田間一、北過二蟹索祠一、渡二稻
湍河一、西抵二光則寺一、此故宿屋光則宅也、相傳時蓮弟子日
朗、以二其師之故一、官囚二諸宿屋氏地牢一、及二蓮之免一詠也、
朗亦見レ赦、光則因變二其宅一爲レ寺、而寘レ朗焉、朗所レ囚之
地牢猶存、視レ之土窟也、凡府中山必多二土窟一、皆鑿レ巖
爲レ之、其形或方正、或不也、蓋當時藏レ物囚レ人、皆於レ是
也、其餘率域而見レ發也已矣、俗通呼曰レ櫓、未レ詳二何義一、
或是屯兵覘候之所邪、所レ謂地牢者、亦何足レ怪乎、唯護
良所レ囚者、臨レ之令二人股栗一爾、於レ是乎見下尊氏兄弟之
畏レ王與レ忍二于王一之無上已矣、自二光則寺前一北折詣二大佛一、
比二建長時所レ鑄遮那佛銅像一、趺坐高四丈有奇、蓋半二南都
及平安一者、而尚東都者、殿廢、露坐中野一、不レ知二幾年一、瞻
仰久之、還過二長谷寺一、謁二觀音木像一、長三丈有奇、東面而
立、此摹二和長谷一者、故地亦因レ像名、下レ山西南、過二景政
祠一、經二星月里一、抵二極樂寺一、是平重時所レ搆、而今衰矣、出レ
門而南、鑿レ山爲レ道、俗呼爲二極樂寺洞門一者也、此去二雪
下一六里所、過レ此抵二海濱一、曰二稻瀨一、所レ謂源義貞伐二鎌倉一
時、禱二海神一而潮水退五六里者此也、自レ此而西至二腰越一、
爲二七里浦一、水涯沙深沒レ脛、玉貝雜レ沙、焜爛如二落花舖一レ
地、兒女喜掇レ之、又有二一種細沙一、黑如二炭末一、重如二鐵
粉一、而有レ光者呼曰二鐵沙一、用磨二鐵器一尤佳、行人皆釆レ之、

我三人亦釆二鐵沙一、掇二璣貝一、以充二行裝一、不レ覺移レ日、相警
而後行、涉二行逢川一、抵二腰越一、其左高巖枕レ海者、爲二小餘
綾一、右旋入二漁村一、過二滿福寺一、相傳源義經滅二平氏一、執二宗
盛一以歸、及レ至レ此賴朝禦レ之、之不レ得レ入二鎌倉一、乃貽二江
廣元書一、以訴二其冤一、使下辨慶二草レ之上、此其所也、蓋故驛舍
而後爲レ寺也、辨慶之草、今藏在二本寺一云、余素聞知二其贋一
矣、故不レ請レ覽レ之、庭傍石泉、傳道辨慶所レ取二硯滴一者
也、滿福寺西爲二龍口寺一、此日蓮見レ囚且臨レ刑之所、而後
爲レ寺也、亦有二地牢一焉云、吾曹既厭二地牢一、且嚴二於行一、
所二以弗一レ問也、腰越西亦有二漁村一、曰二徧滿一、其西平沙爲二
唐原一、又其西爲二砥上一、皆名區而在二一望中一焉、而腰越人
家、距二水涯一不レ滿二百步一、南望見二書島一、相去可二三里所一、
潮來則舟レ之、潮去則可レ涉、及二其涉一レ之也、厲揭隨レ宜、
又有下駄二壯夫肩一、以涉者上、以故壯夫之求レ見レ雇者、赤體
群二聚渡口一、務欺レ客以レ不レ易、以貪レ直、其言擾々聒レ耳、
余之及レ此也、潮方退、然余素不レ狎レ水、且不レ欲二裸裎一、乃
上二其肩一、二子亦爾、於レ是壯夫者、肩二我三人一、以涉、故就レ
深以見二其難一、既濟矣、壯夫又慶以レ無レ恙、別求レ賞、我
三人爲二不レ聞者一而行、誠鄙夫之貪冒無レ厭、可レ憎哉、渡
口左右、皆爲二漁家一、直上二山路一、店肆比屋如二魚鱗一、山腰
有二天女祠一、呼曰二下祠一、是應永間、僧長眞號二慈悲上人一者、

所下奉二實朝命一建レ之、安二弘法刻天女像一、祠側有二古碑一、相
傳良眞如レ宋、謁二慶仁禪師一、獲レ此以歸、高六尺强、廣三
尺有奇、厚五寸、額篆大日本國江島靈跡建寺之記一十二
字、字皆全存、書法絕妙、唯記字難レ識、匠以二雲龍一、亦
甚精工、碑腹楷記文、剝落已盡、間存者僅數字、亦見二其
小楷可レ悅、趺首既亡、碑身亦橫破矣、惜哉絕代奇物、而
敗壞不レ見二其全一也、尚幸近時有識者、彌縫而立レ之、余
嘗稔二聞此事一、及レ至先尋レ之、無レ論二父老不レ喻、卽視二篆
者一、亦莫レ知二其爲一何物一、百方探討、乃得レ見レ之矣、島人
逸二於福一、而不レ文乃爾、山巔又有二天女祠一、呼曰二上祠一、相傳
仁壽中、慈覺建レ之、而寘二其所レ刻天女像一焉、從レ是西南、
度レ嶺赴二龍穴一、道有二華表一、署曰二金龜山一、是養和間、賴朝
有レ事二于此島一、時所レ建也、過レ此漸下、道右又有二天女祠一、
是輓近所レ建、而結構不レ及二上下祠一、蓋此島舊以二龍穴一爲二
神所一レ棲止一、然上弦之後下弦之前、海潮或進多、則人不レ得レ
往焉、當二其時一寓二神於此一、以便二享祀一、因以レ此爲二天女正
祠一、實龍穴與二上下祠一、視二篆者一各殊也、經レ此左旋、由二石
磴一而下、瞻二峻崖一、瞰二深淵一、而所レ履又惡石、蓋是縮者數
矣、蹀躞抵二水涯一、得二巖穴一、乃所レ謂龍穴也、穴口正南向
廣丈餘、高亦如レ之、海水所レ匯、踐レ石可二以入一焉、穴中多
鴿、喜汚レ人、防レ之可矣、入レ之十餘步、穴漸窄、築レ壇

而建二小祠於其上一、所二以棲一天女神一也、有二一浮屠一、侍二香
火一、過レ此則穴益窄且暗、無レ火不レ可レ入、廼有二一僕夫一、
以レ炬導レ客、我三人貨レ之令レ導、惡石出、巖泉迸、妨二凝步
履一、踼踔以入、愈入愈窄、兩旁多寘二石佛一、纍々不レ可二指數一、
僕夫悉燭示レ之語二其來歷一、極可レ厭矣、蓋四十餘步、岐爲二
二穴一、右爲二胎藏界一、左爲二金剛界一、各入二十餘步一、皆安二大
日石像一、過レ此則穴愈益窄、蒲伏可二以入一焉、而未レ有二能
入者一、亦未レ知二其可一レ極云、我三人乃遵、抑此龍穴、傳道昔
者有レ龍出焉、而島故爲二天女所一レ棲止一、自二弘法祀一天女於
此一、後人遂以爲二天女窟宅一、鎌倉盛時、雩必於レ是、事見二東
鑑一、余嘗聞レ之、凡瀕海諸州山根、往々有レ穴、皆上世因レ剿二
金鐵一而成者也、則此穴亦焉知二其獨不一レ然哉、但人神レ之
而神、人異レ之而異、神異可二以已一矣、又以爲二石佛之肆一
何哉、既出、登二石磴一、復二故路一、流二諧茶肆一、經二上下祠一而
下、就二客舍一而午食焉、有二鮮魚一、可二以下一レ食、然舍甚蕪
穢、且多レ蠅、方レ食營二營乎器皿間一、食爲レ之不レ甘、初余
思レ酒、於レ是興敗而卒不レ飲、食已、趣レ裝卽出、甚矣書島
之難二行樂一也、夫余始來、竊謂此島周圍不レ過二十里一、高
稱レ之、然以二磊塊石山屹一立海中一、所レ有二佳致一、寧一日之
遊所二能盡一邪、逮乎歷二覽山中一、果然、惜乎其神司二福一、是
以使二山不一レ得レ擅二其勝一爾、嗚呼神以レ福妖、人以レ福鄙、

山其獨能强顏乎哉、則吾曹之敗興、亦豈爲蠅乎哉、及還潮方來、乘舟以渡、從偏湍北行田野、可十里所、抵藤澤驛、二子過清淨光寺、訪小栗墓、余辭以既矣、直行俟于茶肆、少焉二子至、於是山生乘馬、余與藤生先行、抵十塚驛、山生馬遲、二人俟諸茶肆、久之乃至、余曰遲矣哉、山生下馬曰、非馬不進也、二子健也、時已過晡、余曰、吾儕實疲、而猶可行、此驛去東都一日程、舍焉則舍矣、奈明日之勞何、不若進舍於程谷、二子皆曰、善、遂行、山生又乘馬、是道也高下崎嶇、藤生甚健、余且弗如、山生終不及、二人抵程谷則見星矣、就舍釋行裝、洗足緩帶而臥、然後山生至、余既失興於畫島、又疲於暮塗、加之以逆旅無聊、舍中凄凉、此行於是乎忽生客心、三人相謂、盛稱雪下主人有情、廿八日、蚤發程谷、三人皆興盡、各促歸、至品川方日昳矣、食于舍、飲于肆、於是余神復旺乃言曰、此行也所得三、所失三、二子曰、何謂也、余曰、遊勝地而覩古迹一得也、天晴氣和、不阻風雨二得也、我三人者、跋履無恚、三得也、日不寬假、游觀卒々、一失也、秋平食言、晁生病足、二失也、不携酒、三失也、藤生曰、然、遊自畫島始何如、曰、順矣、雖然有得有失、是事之常、其實係天、所謂物無兼美者、吾與山生因賦詩以下酒、三人各盡醉而後行、薄暮歸城北之居、是夜乃雨、余又增一得云、詩凡十九首、別錄

鎌倉賦

涉平蕪以游目兮、覽茲土之芒々、前余訪夫丘墟兮、道九緯之景行、黍離々以竟畝兮、珍穰々而芳香、仰鎌子之明智兮、瘞利器於山岡、監百世而宣威兮、嶽靈降其興王、度源氏之峻嶺兮、念乃祖而慨慷、仗鈇鉞以東征兮、載白旆之央々、雖後嗣之中微兮、迨三世其有光、若乃免誅斬於京畿、竄雄姿於海濱、忍詬辱於旦夕、保七尺之孤身、養爪牙而未試、紛和光而同塵、既而運當百六、昊天革命、烝哉公子、膺籙執競、提三尺於蛭島、率一旅而出令、肇復讎以雪恥、得多士之彥聖、殲寇賊於反掌、翕海內而有定、於是廼眷東顧、爰奠茲都、万騎案屯、四氏是居、函嶺固其西門兮、金澤浸其東隅、濬天地於滄溟兮、表錦屏以爲郛、鶴岡茂其松柏兮、阻龜谷之崎嶇、右巨福之長坂兮、開四達之通衢、據層巒之陸離兮、相沃野之膏腴、卑宮室以殿邦兮、躬恭儉而良圖、海濱貢其魚鹽兮、兼貨貝與明珠、既創業而垂統兮、偉大勳之可書、及其兇徒殄滅、海內咸寧、百姓按堵、四方來庭、廢懿親而弗畜、棄有功其如遺、範歸死乎都門、經走竄于蝦夷、矧群下之反側、心

鞅々以危疑、僅三主而二世、憯骨肉之携離、方平氏臨朝兮、寔牝雞之晨鳴、何外家而當國兮、議政事其詛盟、奉他人以爲主兮、擁虛器而居名、徒謙讓之垂裕兮、伻克家之守成、爰季世之驕奢兮、鼎折足其易傾、苟衆畔而親離兮、裘身命是天兵、信金湯之難恃兮、鞠茂草於故城、悲哉、秋日凄凄草木零落、鳥飛歸林、獸走于澤、登丘陵而徒倚兮、訪英雄於陳跡、欽叢祠之巋然兮、從九皐之鳴鶴、馳道直乎如矢兮、步逍遙其何適、觀海水以興感兮、諦盈虛於潮汐、亂曰、秋風披拂百草摧兮、宮闕爲墟山陵頹兮、繁華滅熄生蒿萊兮、衣冠粉黛成塵埃兮、遊子尋討而竭來兮、悲歌慷慨且徘徊兮、

新編相模國風土記稿卷之四 終

新編相模國風土記稿卷之五

藝文部卷之二

遊相紀事

安藤煥圖 字東壁 號東野

弘明第一

相之諸勝鷄助耳、接近輦轂、距都僅百里而近、無有名山大川標世者、亦無關門譏察、以故婦女孺子皆得游、而壯夫不屑也、然以其地古昔覇王所數都、而故墟舊蹤、累載國史也、不能恝焉、不介意矣、會伯脩之家、在金河陽、與相接壤、丁酉之秋、將歸省其父母、則誘太宰生、晁生山生從焉、波及不佞也、九月既望、會牛門謀行、時金華須溪適來、爲之色動、皆請偕、乃約以廿日發、其翌大雨、連數日不止、道路起波、十九日、余過牛門、則伯脩既行、晁生疾脚在舍、曰、霖雨妬人、假令强行亡探討如意、且籃輿行、不如亡行、況金華須溪、期而不會乎、且遲春日而遊未晚也、余固不屑之遊、則議寢而歸、廿一日、薄暮、山生衝泥過余曰、太宰遊趣勃々、不可以已、不佞年又最少、不忍使

太宰獨賈勇、約明日質明、襏襫而偕、偕來辭云、且譏切金華須溪怯於遊、意每在余也、余陽爲不達其意者、已生去矣、時雨少歇、東隅隮虹、問諸人、皆曰、且霽矣、余、乃投袂追生、屐及于商丘、登及于黃花陂、而不能及也、至則太宰方在堂、與生睥睨彈指、罵余輩不已、余曰、公等且徐々、百里之遊、豈汲々爲、然雨歇興來、請殿公之遊、乃大笑、更飛觴、徠翁爲擊筑太宰和之、操伏櫪爲別、廿三日雨果歇、五更取月會牛門、太宰襏襫、余則皮裘、虞雨也、山生別爲一行李肩之、亦雨備也、余二人嘆其少壯、傍廓門而左、抵級河驛、已近午矣、擇酒罏最陋者入焉、山生探懷中、出岡生餞詩、與余二人下酒、已自啖柿、談笑若無人、蓋生無酒觴故也、余把爵屬二生曰、此行也、實適莽蒼類耳、而爲此者、非試他日濟涉具耶、乃施々爲壯遊之顏、殆笑于大方之家、請與二君約法三章、曰、無曠日也、無以飢不探也、無以馬爲脚也、乃各歡一爵、山生强一爵而出、右曠原、左大海、取道、蓋西達大驛、列種松柏、銀濤射樹、濕漾漭沆、覺一洗鄙吝、右顧沃野千里、與海爭濶、而處々平林、落葉歎々有聲、其稍若培塿、少露浮圖標者、爲本門寺、渡六合河、抵金河驛、路頗□□右土山、山腰出泉、清冽可掬、程谷驛左有小巷、立碑刻曰弘明寺路、乃左折入巷、不數武得一小澗、沿澗至山足、山徑僅容人、左右松杉栝柏、參差蔽虧、馬蹄之滑、覺滑人足、仰視俯眺、峰巒疊出、如在鏡中而行也、遇一農夫牽馬、問弘明路、夫曰、諸君得無之根翁許耶、余爽然自失、質所以知之、曰、弘明蕞爾邑、與士人通者、獨根翁在耳、行且語風旱傷稼事、至頂路岐左右、指其右曰、降之則弘明、夫乃左焉、余三人班荆、憩者少時、左顧馬則如豆、緣山腹而行、已至一厓、兩山之抱也、厓不甚高、而峻甚、手攀樹根而下稍左轉、目境頗濶、禾黍覆隴、斜陽映發爲黃雲之狀、厓盡取步、其間則餅餌香拂々襲人、與太宰相後先行、廻顧則不見山生、以爲失路、乃嗒然興聲、少時似烟樹間哨聲微々而應也、踞樹而待、乃見山生解劍肩之、掛行李蒯緱上、蹩々降厓、問之、病邪、曰此飢也非病也、且弘明已邇、日猶下舂、公等胡爲忙乎、且何不行翫勝耶、又問路耦耕者、傍川而行可二里許、有榜、書曰二位禪尼木像在焉、太宰欲探、山生曰、未晚也、則取直路、得一村落、村落中褒然者根翁家也、伯脩迎至家、麪酒慰勞、山生不扶床不能起、而豪啖自若、爲可笑矣、燈下議明日路所繇、山生臥而不聽、余二人以爲憊而睡也、須臾根太翁出見、年可七十、鬚髮豐腴、矍鑠者也、謂吾輩曰、諸公不來已、已來不飲伯脩酒一日輒去耶、余兩人舌縮、不能答、山生忽奮曰、翁之言是矣、始知山生未睡也、適有醫宜泉者、舊識于鞍生所、新來住此、聞吾輩至、跫喜來見、各浮太白、酣噱、二更就寢、翌日謁二位尼木像、欲問寺所剏、住持僧不在矣、帳然久之、出行觀弘明寺觀音、其□如丘隴而高、堂其嶺、堂可三楹、蓋所謂順禮者、所香火也、張三李四、題名溢壁、簷牙椽梁、無餘白、可厭也、據山南眺、連山極天、乃席堂後、弄折楊柳而去、仰神明山無奇、乃不欲登則歸、逢宜泉使僕奴肩一瓦缾一莞席以來、曰、以龍笛振山木、知公等遊、欲一鰕苦澆磊塊持來矣、乃相伴逐登、山伯仲觀音、而廟僅四壁立、置一石像、茅茨土階、雖神所勅、而風雨所漂、假令不石其像、佹乎不免土偶人耶揄也、然樛木交加、蒼翠隱映、勝都下輪奐者、遠甚、拜畢、鋪席廟左、其衆巒邐迤、與觀音山顧無殊也、得宜泉生苦生色耳、乃傳爵如流、太宰吹笛不止、蓋生居恒言、笛聲得酒始暢、觀音山之哢、稍奪于天籟、蓋欲收之桑榆也、時宜泉探肘後、出梅花及菊花、併汎之酒、梅不時發、蓋大風之後、往々然云、太宰瞪目曰、夫唐帝之羯鼓、孰與乃公之笛、酒氣得花益冽、笛聲得酒益暢、愈益不止、顧山生有無聊之色、余哦一詩、兩生和之、而山生益有鞅々之色、俄山生下瞰、吟哦之聲頗高、視其鼻間栩々然、乃見根翁之奴、來將行厨也、尋根翁亦至、奴去林中、拾墜葉、然之煖酒、啖飲歡甚、日將奄茲、乃歸、至門左、顧見烟樹晻靄中、兩松昂軒、如恥與群木伍、問宜泉曰、去此一里奇、太宰欲往、則顧山生、故態發、亦欲往、乃經田畝間、直至山足、宜泉導上山、山皆樸樕、榛莽鉤衣、無復正路、擇樹間可躡躡之、一左一右、繞山腹而上、宜泉捷甚、不可接踵、三生者分爲三處、蓋路窮而返者數、先者在頭上、如一跳可及、而邪追之則違數十百步故也、余三人後先至巔、則宜泉踞樹、下窺者多時矣、松兩株雙擢、大數圍、圓蓋縱橫數丈、要非百年來物也、南有大谷、谷間田隴棊置、谷外重山層重、以及芙蓉函嶺、目境皆山、不見異物、近者綠綺間錯、稍遠蒼茫暗澹、最遠空青撐天、其瑩然白者、獨芙蓉爲爾、時又晴甚、夕日啣其肩、與雪相映、皚々然、其東北爲海、亦受夕陽、容裔濕漾、決漭粘天、唯有帆影如鴉、時出時沒、知其爲水耳、艮隅二洲與弘明、爲山字形者、爲本目、爲金河驛、遠不可辨、本目洲盡處、懸厓數十丈、如削成者、可半里所、其潔淨白堊不如也、余揖宜泉謝、非公幾乎失此山也、惟恨向所携不於此也、山生笑曰、其學衛夫人、空費歲月耳、蓋日影

無レ所二蔽翳一、光亮猶レ晡然、俯窺二其麓一、已昏黑矣、大驚下レ山至二根翁家一、既秉レ燭云、

歷二金澤一抵二鎌倉一第二

根生家不二復樊籬一、稍種二菊花一南天笠一爲レ限、使二後山在一几席間一、蒼翠之色、爭來獻レ勝、翁曰、山盡處、乃爲二金澤一、距レ此可二二十里所一、蓋鎌倉與二金澤畫島一鼎立、鎌倉居レ中、西則畫島、金澤則東最近、爲二翁庭中之物一也、故遊昉二于畫島一、則直抵二鎌倉正門一、路甚坦陀、出二鎌倉後門一、及二金澤險阨一、則如レ噉二甘蔗一、漸入二佳境一、是遊者之常也、然吾輩急二于嘗レ險、乃倒行逆施、蓋有二利器一者、常喜二蟠木根柢一、亦非常之常也、廿五日辨色而發、取二道霧中一、蒙朧滃々、目境止二于尋常許一、雖二其觀不レ大、而前路之勝隨レ步而現、知レ免二噉レ蔗之笑一矣夫、已入二山路一、左右溪澗無數、殆視二谷間一、如レ置二褫絮一、不レ得二其底一、霧漸垂レ晴、漸顧二其中一、隱々然如二青氈一者、如レ練如レ確者、如二牛屋一者、處處現レ前、而又如二果俌一者、如二蜣螂一者、在二碧紗中一、蠢々然微動、知二禾黍登場、農夫拮据一也、高低取レ步、亡レ有二峻阪陟絕一、然其爲レ谷者益深、左右爲レ山者益低、益現、則知二其所レ行益高一也、亭午霧盡卷、得下若二山背一者上、太宰先レ余可二十步一、藉艸而坐、右顧大叫二快哉一、余與二山生一、陸續相及皆坐縱觀、蓋所レ居絕高無レ阻、其觀二芙蓉函領一、如二視二掌上一、海色映發、燦然可レ掇、太宰曰、擲筆之勝、亦猶レ是耳、則起步二谷間一、宿雨不レ除、沮洳濕レ裝、左右隱蔽、無レ所レ見、降レ之五弓許、又陟、陟里餘、舊景現二于右一、左則傍レ山、山腰得二一門一、石階數十級、仰視篆榜曰二擲筆山一、心越師所レ題、體勢活動、與レ山爭レ勝、賞翫半時、入レ門、右搆二一亭一、置二閻羅木像一、榜曰二能見堂一、亦越師所レ篆、比二擲筆一覺倍佳、蓋能見者原二絕倒之意一、昔日畫師金岡、欲レ寫二其勝一、而不レ能、爲擲レ筆絕倒云、後人嫌二其俚一、代以二今字一、益加二其俚一、不レ如下娶偶躍二清池一爲上雅也、可レ惜矣、剝レ蘚讀二井上翁碑一、廣澤所レ書、楷正可レ愛焉、堂左一屠蘇欅二心超師八景詩一、其前嶺一大松、亦稱二擲筆松一、一僧導二余三人一、指二點所レ謂八景者一、且釋二其意一、余三人磬折而聽、已僧去、余據二松根一讀二其詩一、覺レ爲二二榜之累一、其勝比二山脊所一レ見益濶、大概右レ山左レ海、海中島嶼無數、大者爲二夏島一、爲二野島一、小而如二落帽一、爲二帽子島一、而海水入二山間一、縱橫爲レ港、橋通二迫門一、迫門前突二出海渚一、巍然者洲崎天女祠也、山皆如二蟻蛭一、樹如二薺莘一、宛然一幅輞川圖也、假令右承當二金岡世一、亦當レ擲二其筆一、否、雖レ然彼以二擲筆一不レ朽、其爲二不擲一也大矣哉、太宰縮額曰、擲筆實勝區、唯亭置二閻羅一、與二能見之稱一、使二人噦一耳、余笑曰、併與僧解レ詩、爲二三不懺一如何、遂笑、弄二腰間之笛一、時有二一貴女一、其從如レ雲、光輝來詣

見二余三人者一、擔レ登躡レ屩、乃命レ傔、茶果以勞、皆戲作二一絕一、下レ堂下レ之里許、入二村落一、値二童子一、問二稱名寺一、寺頗鉅、入二山門一、左右鑿レ池、童子敎曰、某西湖梅、某黑梅也、某々美女石老婆石也、樹皆枯死、今其孫枝、僅拱把耳、又有二六浦楓者一、曰、經レ霜不レ染、藤爲相所レ賦云、又已枯倒、今代以二他樹一、存二其名一耳、余笑曰、此殊過房之子、不レ知二孫枝爲一レ貴焉、入レ寺、觀二古書畫一、水晶簾古雅可レ愛、問二文庫一、乃在二後山一、今廢已久、僧曰、其所レ藏古書今猶存、而寺前土庫冐二文庫稱一云、亦過房之子、不レ足レ寓レ目、出レ寺行二村落中一、盡失二能見所一レ見、行可二五六里一、稍見二海水一、濱海軟沙、瑩然如二玉屑一、往々畫爲二井字一、旁埋二水桶一、鹽場也、迢遞取レ道、至二迫門一、有二兩橋一、駕レ海支レ港、過レ橋則鎌倉正路也、右有レ林、林中小丘、置二三島神祠一、可二三楹一、其傍枯樹顚倒、枝皮剝盡、堅硬如レ石、大足レ蔽レ牛、木理輪囷可レ愛、所レ謂蛇木者、以二其似一レ伏蚪一也、隔レ路正南入レ海五六十武、爲二天女祠一、祠縱橫可二二丈一、亦爲二題名者所一レ塗、自二迫門一至レ祠、一條路、坦平如レ砥、兩邊種二松杉槐柏一、其外則海潮平レ岸、樹皆十數圍、蒼鱗駁犖、爲二騰蟠一、爲二伏虎一、爲二貔々一、殆非二平生所一レ覩、蓋海風所レ使也、孤臣孽子、能成二其德一、豈翅人哉、據レ岸睥睨、擲筆之勝、殆爲二芥蒂一、出レ洲西行、看失二其勝一、爲レ之遲遲而行、又得二村巷一、巷窮復現レ海、然頗已遠矣、其間悉爲二井字鹽場一、場亦窮矣、路左一寺、窺二其門中一、見二一大石竪立倚レ樹、有二異焉一、問レ之、曰、飛石、入レ門觀レ之、大可レ丈、豐上而殺下、其狀如二蒙穀之士一、軒々然方迎レ風而舞一也、飛石之稱不レ誣焉、又入二山路一、山比二金澤一、加二藏嚴一、往々爲二峭壁一、且見二石骨一、右壁鐫二地藏薩陀一、大如二垂天之雲一、稱二缺鼻地藏一、以二其形一也、又稱二界地藏一、以二武相之交一也、入レ相山益嶂崔嵬、有二朝夷鑿一、蓋至レ此則阻絕、無二復路一、乃鑿爲二鎌倉後廊一也、土人謂朝郎膂力絕倫、一夜而開、蓋以二三郎一爲二五丁一也、今猶鑿痕歷々、知二壁開之說不一レ售也、意朝郎監レ役也、路濶可二二步一、崖高二三丈一、或五六丈、莫レ非二蝯眩之崖一也、鑿盡、郊野開、人烟密、爲二鎌城杜曲一、然其路益崎嶇、所レ履無二非レ石者一、余意鎌倉蓋一片大石、其擁腫爲レ山、缺處爲レ澗爲レ谷、而坦夷爲二城市郊野一也、左一小澗而行、連二澗底一、似二亦一片石一、石芳蒼滑、曰二滑川一、青砥某遺レ錢者也、川右有二荏梗天神祠一、石階幾二乎百級一、殿宇鉅麗、祠右延袤可二一里一、爲二賴朝故殿一、今禾黍迷レ人、且縱橫開レ徑、以便二往來一、人往々以二徑間一頃許地一、爲二殿趾一、訝二其最爾不一レ似二人君居一宜也、殿後山足、有二釋迦堂一、賴朝所二創履一、殿墟右至二鶴岡一、謁二八幡廟一、時日已薄二虞淵一、德甚、借二廟下一司祝家一而宿、會太宰吹レ笛、格二村伶十數一、慫二德之一不レ已、強

爲レ之三哢、四皷、伶去而寢、乃山生則爲二華胥之遊一已久矣、

鎌倉諸遊第三

廿七日、爲二牛門肆樂之期一、不レ曠レ日之約、亦爲レ此也、余三人相議、鶴岡東北、來路所レ經、西則至二畫島一、往路可二專探一者、獨南偏在耳、探二盡兩境一而宿二金河一、或得レ及二其期一焉、會護良王地牢、一覽亭趾、俱在二來路一而錯過、乃計二早發而遍一、廿六日秉レ燭而飯、再謁二八幡廟一、登二樓門一、俯眺一路如レ髮、直走二由比濱一、海色射レ欄、可レ想二浙江樓一也、夾レ路種レ松、距レ海三里、其間舊置二三華表一、其一今在二海中一、退潮之時、時見二其巓一云、陵谷變遷、理或然也、其廟後據レ山、稱二鎌倉山一、名以二藤鎌子藏二其寶鎌一而得、郡亦因以稱云、廟舊源賴義所レ剏、在二由比之地一、而至二賴朝一、移二今地一、且張二大規模一、所謂少宮也、少云者、以レ祠二仁德帝一也、而其應神廟、賴朝所二特建一、大可二十楹一、彫繢滿レ眼、廟廡四繚、其配食小祠、塡二溢廊內外一、樓門外石階數十級、廊左置二六角經藏一、窺二其中一、不三復設二輪藏一、空洞亡レ所レ有焉、穿二石甎中央一、圓孔如レ井然、蓋土窖而古之製邪、階右有二銀杏一株一、絜レ之十圍、長幾二乎十仞一、灌翳鬱茂、乃僧公曉所三隱以弑二實朝一者、四百年前既然、則至レ此其大也宜矣、櫟社之樹、終二其天年一、則槩以二不材一、稱レ寃也、會二曩者擲果之人來献一舞、巫八人不二復粉飾一、老稚相半、老者綠衫朱袴、稚者素衫、手持二金鈴一、蹲々然應レ鼓、一前一却耳、然其古趣藹然、比下都下靚粧袪服、爲二公孫大娘舞劍之狀一者上、覺レ爲二天淵一、廊中置二天女像一、像所レ抱琵琶、則平內相所レ彈云、其製實不レ凡、料非レ贋也、以三其托二天女一久存、亦以レ托二天女一閟二其音一、所レ謂人琴俱亡、雖レ存猶レ不レ存也、余不レ得レ所下以爲二琵琶一慶吊上焉、咨嗟頃刻而去、舞殿前鑿二大池一、左右環レ之、若レ玦、其東西合抱處、駕二石橋一、曰二丹橋一、意昔日攻レ木而丹レ之也、今石殊不レ丹焉、池中七洲、其東一洲、嘗置二天女祠一、乃琵琶所レ托者、今以二堂隳一、寄二置廊中一也、過二丹橋一可二一街一、左右立二木柱一、加二衡木其上一、高可レ容レ人、此爲二駐馬處一、鎌倉寺院神祠、係二官置一者皆爾、比二今樹下馬榜一雅甚、廟右坊舍塡塞、左出歷二扇谷一、抵二建長寺一、總門扁曰二巨福山一、傳二趙文敏公書一、吾未二之或一信也、入二山門一、仰視釘二一大扁一、曰二建長興國禪寺一、蓋兵燹之後、門殺二古昔一、不レ可三以掛二舊扁一、故且釘以羊存云、書頗古雅可レ觀矣、方丈前小池、置二一石礴一、出二水其口一、曰二金龍水一、寺亦鉅麗、爲二五山中首觀一、右關二二門一、扁曰二海東法窟一、曰二天下禪林一、皆麗奴所レ署、墨猪不レ足レ觀也、出二法窟門一、得二杉谷天女祠一、鑿レ巖爲レ門、祠後有二一石洞一、潴二其氐一、斎渟泓澄可レ濯焉、中置二石像一、出レ洞、歷二觀新井閣羅、淨智寺、東慶尼寺一、尼寺兩層門、榜二第二門一、曰二禁男子入寺一、乃出、土人曰、蓋無賴婦女、惡二其良人一者、若有三淫行懼二發覺一者、亡命歸レ寺、居レ寺兩閱レ歲、則法不レ得レ究レ之、重醮從レ所レ欲云、余聞二其語一、知下寺必女主所レ建、而錫二類婦女一者上矣、抵二圓覺寺一、山最爽磴、肩二差建長一、太宰舊識二其僧一、茶果慰勞甚至、命二一雛僧一、導謁二開山祖佛光禪師像一、師宋人、平時宗所二招以建一レ寺、其像精工殊絕、顏面如レ生、掛二金字榜一曰二慈照一、時宗手書、渾雅可レ愛、入レ山觀レ鐘、厚尺許、銘後書曰、正安年製、敲レ之聲最清越、僧曰、其所レ掛銕環、劍工正宗所レ鑄云、出レ寺左折、歷二官領衙門一、上杉氏所レ開府址也、今亦爲レ田、歷二英松寺一、觀二扇井一、谷所二爲名一也、一石井刻爲二扇形一耳、歷二觀壽福、花光、淨光明諸寺一、源氏山、一名二建旗山一、源義家東征時、駐二軍此山一、會二東諸侯兵一云、已得二一石骨小山一、山足石洞丈餘、中置二佛像一、其上蓋有二爲相墓一云、余憊不レ能レ上、意其洞乃墓穴、而所レ發者也、不レ然碑下枵空、亡レ所二以葬一焉、大槩鎌倉石骨饒レ山、而處々鑿爲レ崛、大者丈、若二三丈、小者二三尺、甚衆、不レ知二何故一也、意皆葬穴耳、然土人以レ櫓稱レ之、則其大者、或以爲二屯戍所一耶、史載レ幽二護良王土崛一、則或有下以爲二囹圄一者上焉、土人乃歷二數石崛一、曰、某以幽二某人一、某以拘二某人一、嗚呼人而造二囹圄一、是地不レ足也、否則如二四罪天下平一而後可矣、觀二景清土牢者一、亦石窟、其事無レ徵也、過二龜藤假粧諸谷一、觀二銕井銕觀音一、皈レ舘、日已昃矣、再歷二鶴岡一、取二步左林一、詣二法花堂一、堂後山中石磴縈紆、而下數武得二徂處一、有二賴朝墓一、置二一無字碑一、苔鮮蝕盡、不二復封域一、不レ似二人主墓一、亦僞耳、而山生則喜可レ知也、蓋生居有二三癖一、而古墓癖最入二膏肓一、路遇二一芻蕘一農圃一、必問下有二古墓一否上、而後敢行、好古之迂、雖二吾曹同病一、而余與二太宰一、將レ避二三舍一也、再經二荏梗祠一、問二護良王幽地一、乃在二一山足一、掘レ地爲レ之、有レ如二掘室一、其口圓徑仞許、其傍老樹交遮、荒草轇轕、其中瞑黑、無レ所レ見焉、左轉過二滑川一、抵二瑞泉寺一、寺又一大山刹、入レ山可二半里一、始得レ門、門二山腹一、其寺結構不二甚大一、僧乃以レ坐二觀芙蓉一誇詡焉、謁二源基氏及夢窻國師像一、後山盤石重甗、徧界一覽亭基趾在焉、其首徑刻類二陛階之狀一、稍登、則因二石角少鑿一以受レ履、屈曲而上、如二率然勢一者十八盤、始達レ頂、側有二三石崛一、亦葬レ人處耶、頂可レ坐二百人一、亭基宛然、西望二郡中一、山海一目則盡、畫島可レ喚、而芙蓉函嶺、蟠鬱對二峙其後一、山益出二亭後一、無三以見二東北之美一也、左則紅翠樛紛綺錯如レ繡可二愛賞一也、時日已晡、降レ磴右出、覽二葛西谷、寶戒寺、北條衙門一、其東爲二東勝寺墟一、高時氏敗也、北條之族殫レ焉、今鞠爲二荒草一、經二大小街者一、古康莊也、過二花谷、石井、松葉谷一、覽二田代觀音一、抵二名越邑一、有二鑿

道、曰二大小崆峒一、以畫二伊豆之地一、至二小壺邑一、其右乃爲二由比濱一、左折詣二光明寺一、謁二記主禪師像一、登二後山一、山腹架二小亭一、冀然臨レ海、此遊也、登レ高遠眺者、爲二擲筆一、爲二一覽亭一、併レ此凡三、皆觀レ海、而無下如二此山最切近一者上、海色染レ衣者、時日方浴二虞淵一、絳旗翠支、繽紛擁導、不レ可二名狀一、問二畫島一、乃西南海中如二拳石一者矣、計不レ可二一蹴而至一、則歸二鶴岡一、舊路瞑暗、失足數次、二更至レ館、余觀二鎌倉一、負レ山抱レ海、魚鹽饒豐、而其中沃衍可レ居、帶甲百萬、夷險之阻、名越之塞、以扼二東北之要一、而西南可二以下二兵四方一、實四塞天設之國也、代爲二王覇之業一者宜也、今乃嫌二其蔑爾一者何哉、此日憊甚、慮二村伶來惱一、不レ吹レ笛而寢、

畫島天女洞第四

鶴岡之右、邪登觀二廿繩神祠一、及彌陀大像一、像可レ丈二東睿者一、入二光則寺一、觀二日朗石牢一、稍厭二石牢之繁一、一覽輒去、漱二星月井一、抵二稻村崎一、鎌城廓門也、崎至二畫島一、沿レ海蹈レ沙而行十里許、其右則如二龍蟄一、然、白沙軟潔、晶熒玲瓏、曰二七里濱一、源義貞伐二鎌倉一也、海潮退者七里、故名レ之云、沙深沒レ脛、璣貝萬斛、與二旭日一相媚、余三人下レ海拾掇、兩袖皆滿、其一堆黑沙、受二日影一閃爍射レ眼者、爲二細銕沙一、可二以磨一刀物一、先レ是山生儁、欲レ棄二行李一者數次、緣二曏昔覽古、投二其所レ好也、此日豪甚、併二掇璣貝鉄沙一、半二其行李一、且掇且步、涉二行逢川一、水沒二其屬一、及二乎行縢一、而沙益深、水沙相粘、脚重如レ帶鈇、以二目飫一非常之觀一、忘二其勞一耳、濱窮又入二村巷一、漁農雜處、鶏氣襲レ人、掩レ鼻而過、地稱二腰越一、爲二鎌城都門一、入二滿福寺一、觀二硯泉一、石窌所レ滴一汐水也、謂辨慶造レ書、訴二義經之寃一也、實用二此泉一、今其書存云、誌稱二其實一也、不レ欲レ觀焉、長揖出レ門、步二漁村中一、以二其目境索然一也、足鈇如レ益レ之、而重顧二山生一、則棄二其所レ掇久矣、畫島入レ海、可二十里許一、退潮則可二厲揭而涉一、而土人倶而負二遊人一、余三人佇立縱觀、其人肚腹悉濡、故就二其深一、以網レ利也、以レ懲二行逢之涉一也、順二受其欺一、駄二其背一達レ島、島縱橫十里許、高稱レ之、人居寬整、有レ如二都會一、已入レ山、石階整齊、祠亦鉅麗、乃下宮也、左折更爲二石階一、有二大青石一、曰二福石一、過レ石、行レ如レ徑者一、其左、則海崖數丈壁立、鎌城在レ目、右則山樹扶踈、往々置レ廬、憩二息遊人一、可二一里一、而得二上宮樓門一、門如レ賽而入、有二雅趣一、祠宇瑰偉、恨欠二深幽之趣一、更左轉匝レ山、山漸垂窮、左壁最懸絶、其缺處瀦水紺碧、使二人懷然一者、爲二龍湫一、湫右得二一小磴一、攀緣而降、其下大石牀、縱可二二十歩一、衡殺レ半、潔淨堪二偃臥一焉、牀右碧水瀦淵、亂石齒々、爲二猛虎騰蟠一、挈攜爭忿之狀一者、爲二童子舍身崖一、崖上立二童子碑一、事見二于誌一也、牀之左、崖腹爲二洞天一、洞口二丈許、入レ洞十數武、置二天女像一、像後兩洞深黝、僧秉レ炬導人、右稱二金界一、左曰二胎界一、洞漸狹隘、奔泉滴レ頭、行百歩、崛斷、梯而通者可二二歩一、過レ梯以往、洞益窄、處處崖角觸レ額、跼蹐而入、至下洞不二復容一レ人處上置二大日木像一、而洞不レ知二其底止一云、而洞中置レ佛無レ算、左右皆爾、出レ洞坐二石牀一、而憩焉、見二一豎子坐釣一、點甚、爲語二洞中事一、頗悉、余輩歸、豎子亦罷レ釣而歸、行語至二一鑪邊一、乃曰、臣則當レ鑪、粥二茶及貝物一者、公等且息、則入レ鑪進レ茶、乃買二貝物一而出、其所二以罷レ釣也一、余三人盖在二術中一不レ知也、豎子實大漁哉、處々問二建寺之碑一、皆曰、無レ有矣、島之勝當レ盡焉、乃掛二視篆僧一、問レ諸、亦曰、無レ有矣、余乃曰、得レ亡レ有下如二墓表一、隧者上耶、僧乃啞然大笑曰、有矣、公等爲二蠻夷之語一、使二人不レ可レ解耳一、乃指示二其處一、碑盖僧良眞西來所レ齎、宋人之製也、篆額甚奇古、而左右鐫爲二雲龍一、精緻特至、碑文則剝落、僅見二一兩字一耳、降レ階借二一店一飯、海味鮮美、無レ奈二蒼蠅雨集一耳、潮已進、舟而出レ島、歷二片瀨一、至二藤澤驛一、今年大風、行路之間、倒樹相接、新街驛右、見二一老松顛倒在一レ地、其中悉燒、而外則枝皮自若、非二雷擊野燒所一レ爲、問二之土人一、曰、風折後方見レ之云、盖自焚也、噫此豈故紙上所レ得哉、使二人轉起二壯遊之懷一焉、宿二新街驛一、濁醪解レ勞、山生袖レ手仰レ屋、余與二太宰一引二一僧一、屬生曰、公既背レ約、請罰二一僧一、盖山生此日跨レ馬也、生笑曰、固也、然公等能及二肆樂之期一乎、其如二不レ曠レ日之約一何、乃大笑相罰、廿八日歸家、

商丘子曰、甚哉、福之俗物也、寧獨人乎哉、畫島實神女崛宅、當レ不レ在二三十六所之下一也、乃其地以二祀レ釐祈レ福顯也、結構多資二酒囊飯袋者力一焉、彼安知二幽邃宕渺之貴一、而守者亦務鉤二其好一、嚢麗是尚、益俗二其境一、至有二一碑刻一不レ能レ識二其名一、有二一洞天一粧爲二鬻佛舖一焉、天下孜々皆爲レ利來、何獨惡二蒼蠅慕一羶也、鎌倉古墓雖二甚居二其半一乎、我將二左袒一也、

鎌倉行記

山井鼎字君彝

往年余從二南海一來二于東都一、欲レ游二鎌倉一、且未レ能矣、今歲夏與二根伯脩一軒、伯脩弘明寺人也、其父來勸レ游二鎌倉一、取二道金澤一、過二其家一焉、伯脩亦云、於レ是乎、決レ策治レ行、發日有レ日矣、與二東壁德夫一、爲レ約曰、九月廿日、戌、其皆胥會牛門一、雖レ有二後至者一、請勿二敢先一也、及レ期雨甚、越廿三日、丑、質明、東壁來會若レ約、遲二德夫於牛門西厓一、相與俱自二牛門一、更二紫芝一、過二品川驛一、渡二六合一、午二飯川崎驛一、從二新町驛一、南道入レ山、行七八里、迫暮抵二弘明寺一、宿二伯脩家一、啖二喬麵一、予與二東壁德夫一爭レ强、主人强食、一子猶

謂避予三舍、大噱不已、是日予甚痛矣、不能起立、猶扶能行、二子戲曰、子是廉將軍之善飯耳、尙、無能遺失乎哉、詰朝欲行、主人懇留、駕言出遊、登大悲閣、行數百武、山有古祠、設席而坐、二子吹笛、眺望不啻百里觀也、既下、過主人門、東行里許、得一村落（曰井土谷村）有平禪尼祠、謁像、緇衣靑帽、與々如也、慨想其爲人哉、去復舊路而還、途遇宜泉者載酒來迎、復入灌木中、痛飲十行、宜泉懷出梅花、來浮盃中、同人奇之、東壁憶周南梅開盃之事、作詩、德夫和焉、亭午、主人齎搏黍來食、採薪煎茶、則山野草莽之實際也、晡時、徹席將歸、直其前山有松樹、陰翳可愛、村人不記何名、惟想其瀟洒與人境相遠也、欲逍遙乎此、與二子暨伯脩宜泉登焉、行且三里、果一佳境也、予益疲極、解劒輾轉久之、不知日入、始歸家、翌日昧旦、出弘明寺、抵金澤、伯脩欲行、不果往、遂別、此間道途幽邃、爲賦考槃詩、行可十里、至擲筆山、傳云、古者畫人欲寫此地景象、潮汐所輸、倏忽異觀、終不能濟、擲筆而慨、故名、天鍾之美、實不俾我之弱浦專美海濱者、獨有是耳、山有堂、揭曰能見堂、東皐心越字也、縱觀彷徨、寺僧尋至、偏指邑居洲渚、予也挾圓、各當其處、松下土坐吹笛一闋、□□□□倚樹笑語、皆若狂乎、會都人來遊、瞪目聚觀、乃大駭焉、少選投菓歸莢、東壁題詩曰、二毛却笑潘中郎、爲之軒渠而去、行二里半强、午抵稱名寺、値寺僧開藏、又令吾儕觀古器物、初寺藏圖書多矣、今猶山委、吾黨好古、不忍遽去、欲觀不可、乃去、世之所稱、有四石八木之類、無足觀焉者矣、未抵瀨戶、休於洲崎、有祠、樹松叢茂、蟠木根抵、輪囷離詭、非種樹人之所能致也、亦復一奇也、縱步洲渚之間、不知日薄、相戒趣行、從瀨戶至鎌倉、七里道之所經、勝槩不鮮、塹山堙谷、直通之險崖數仞者有之矣、自是始入鎌倉、先過淨妙寺、謁荏柄天神祠、瞻視賴朝故墟、登法華堂、謁賴朝墓、於是與予遽有感、謂二子曰、墳墓之間、未施哀於民、而民哀者、否乎、二子諾、出捷道、入鶴岡祠、祠迄今、血食不已、修垣墉、塗丹雘、輪奐美哉、蓋猷廟之時、再脩茸之、土人猶言、未復舊規也、旋觀久之、日既薄暝、宿祠下、逆旅之人解裝、二子輙呼酒吹笛、予亦徒歌、主人心醉、隣人往々來觀、祠有司樂、雖今之衰、有司存焉、第云、僻遠不與上國之人通、相傳爲信、節奏不備、各就二子、肄業、夜半而散、乃就寢、夜深太冷、主人裨袍戀々、有故人之意、即寐、翌日爽旦、復謁鶴岡祠、伶人出古樂器、視之、恍然當時之盛、於今可念、謝出反歸舊舘、而朝食、道小袋阪、入山內、過建長寺、謁崇公像、入圓覺寺、過歸源菴、請而令開祖堂、寺有大鐘、周圍博大、甚古物也、去復舊途、自扇谷、經景淸所囚之處、過淨光明寺、寺有爲相墓、出掬銕井、顧反午食於主人、沽濁醪劇飲、又東南出過覺苑寺、歸途閱幽大塔王之窖、行二里、臻于瑞泉寺、寺後有一覽亭、蓋山行二里、盤桓曲折、石磴萬仞、端末終不可覩矣、未至山椒、有亭、梅里君再修云、乙未秋、爲風所覆、故址猶存、眺望太富、最此境之勝槩也、業下、寺僧綣繾如舊相識、寺有基氏氏滿木主、執謁、自是又反出滑川、行三里、抵光明寺、日既暝矣、寺僧秉燭延堂、上山里許、弟見連山之蒼翠、出沒於烟靄之中耳、奇亦不可言也、入夜反歸于主人、主人懇々善道異代之事、頗悉、于今則不勝其蕭條荒落之狀也、詰旦辭于主人、問訊道之所出、行且採奇弔古、揖毘盧遮那佛於華嚴會、上自極樂寺穿道、入極樂寺、行一里抵稻村崎、想義貞氏之事、歎曰、天授非人力也、汰銕沙、充行裝、過七里瀨、抵腰越村、循海而泝里許、有渡、艤江島、山行四五里、有巖穴、土人束燎而前、水滴濡首、穴有岐、深不可究、種々有石佛像、太恠人意、二子謂、益古抇金之穴也、又復舊途、途有權店小憩、賣貝及海蔬、縱步童淵上、就舖舍午飲、山有古碑石、中華之物也、字漫滅不可讀也、額曰大日本國江島靈迹建寺之記、古雅可愛、予欲寫之、東壁曰、圖見于鎌倉志、乃已矣、既而濟舊渡、行八里、出于藤澤驛、則東海五十三驛、予曾所嘗經也、過戶塚驛、宿新町驛、翌日辛巳歸、

畫島鎌倉諸游記

澤元愷（字弟侯　號旭山）

靈龜負蓬萊而浮耶、望之維石瑰瑋、琪樹錯綜、樓臺雜比、恍然爲不可至也爾、日將虞淵、不風而浪、騰涌澎湃、礁上濺擊、不可舟也、舟人肩我以厲揭焉、驚濤人立而席卷、將沒者數、作氣狂呼、氣更豁然、相與稱快、其津凡二里許、既上岸、則民屋鱗次、雜沓喧嘩、嚮所望何在、此夕遂宿島中、海鮮之膳特美、翌早起謁天女祠、祠前沒字之碑、古則古矣、眞無星秤哉、唯篆額可讀、左右龍雲精工可玩、踞磐以眺、萬頃一碧、三浦鎌倉、又爲瀛洲、爲方壺、維海百靈之會萃、萬水朝宗焉、其可觀哉、上方之祠、地益淸靜、此日浪高、不得入龍窟、土人更艷說其奇、令人悵然、雖然三山不可至、爲仙境爾、畫島亦惟望之仙境已、自七里濱、（古昔東方六町爲里、如壺碑記里程是也、七里濱亦其遺云、今記亦皆用此法、）徑極樂寺、而憩于星井寺、作詩弔古戰場、行登長谷寺、和之長谷、舊游可想、暑熱之焦沙、海之濱爲甚、余疲甚、乃謂鎌倉之勝、不可一旦探盡、探之亦

不必適意、獨詣八幡、訪建長而足矣、不復問古蹟也、八幡之祠、規制廣大、廡宇楹柱、彫畫髹絲、頗極壯麗、男山亦難兄耶、祠傍銀杏蓊蔚、昔者僧公曉、刺三世公於此樹下矣、使人慨嘆耳、虎兒出押、覇業之不振、亦誰之咎、其建祠造寺、達磨氏所謂無功德者是耶、建長之寺、號稱海內禪林、相傳巨福山區、逍松雲書、筆致頗不凡、其宅扁額鐘銘多佳、西來菴、其境禪寂、所藏有相鏡、事詳于鎌倉志、唯是龍象法窟、莫有看破來自照者哉、過此圓覺寺可遊、而其可記者、已備于志矣、日已平西、乃驅馬而抵金澤、宿里正之家、家在六浦、厥明訪稱名寺、叩寺僧、問文庫所在、僧延余二人升堂、眎以古書古曆、渾雅古韻、足娛目矣、能見堂、在小山之顚、以海灣爲庭池、池中烏帽子島、夏島、猿島、裸島無名小島、磊落布置、如初起碁勢、昨之所宿、今之所經、一覽瞭然、恰似假山水、其遠則房總諸山、環列作長堤、金岡者古之善畫者也、執筆而不能彷彿萬一、而投、堂側之松、名曰擲筆、要亦溢美之誕耳、比之攝之摩耶山、多趣而狹耳、寺僧進麥飯、美甚、余意暢甚、有客眠于隅、余亦伴南柯之遊焉、既覺、晡時、溽暑如燬、乃僦肩輿、而至金川驛而宿、此遊之可記者、止于此、若夫石尊之峯、最勝之寺、則不與也、然自最勝、至塚原之路、得一勝境矣、出寺門、右轉而里餘有村、曰狩野、村中有池、廣輪可百步、有小堂、引水而匝若玦焉、架石梁、弓長而幅稱、蘚苔可坐、池之中心、遽不可測、水之涌、伏流突出于此歟、遠望之、沸然如釜中湯、隱々氣升爲霧、近之清洲澄徹、水底之石可數、小魚數頭、洋洋自得、大如針者、娓々不能隱形、堂後之山作壁、草樹下垂、幽翠襲衣、日暮寂乎無人、豈地之過清耶、徘徊多時、余心甚樂、問之旱澇不變、以漑萬頃之田、遠近香稻是以美矣、余竊憾不能廬此地焉、昔人有言、地雖勝得人焉而居之、則山如增而高、水若闢而廣、堂不飾而已奐矣、其誰奐之者、人莫能知歟、遂幷記、

湘中紀行

川榮壽字萬年

夫有名山水、而陳跡存焉、令人應接無暇者、無如山和二洲、蓋其地之隔也、千里而遠、人或欲探其勝者、不備三月糧、則不能已、余嘗一經之、猶彷彿乎夢中遊矣、夫湘之地、無有名山水、然昔時王覇之所居、令人感其荒廢、泫然涕承睫焉、且其距都也、僅百里而近、以故都人士、遊者絡繹不絕、余嘗遊焉、不啻一再、自謂猶勝少文臥遊于一室中耳、一日平禎文來、語次及此、禎文年尙弱冠、生未嘗爲莽蒼行、遊湘之心勃々乎動、

因謂余曰、廼者盛稱杉田梅花、足下欲觀之、願與俱耳、苟我二人遊乎、則令其山水爲琳琅珠玉、湘之神亦不以爲榮哉、余亦爲神飛、即約同遊、正月廿三日、黎明廼發、奴一人肩行囊以從、直抵芝巷、經牛巷、左人家間隱見海水、行抵輪臺、過茶店、踞床眺望、滄海溟漭、密雲欲雨、抵品川驛、入酒肆、余飲數杯、神氣已旺、禎文則唯啗殽、腹便々以稱快、素不嗜酒也、雨稍至、余無油衣以備雨、乃倩轎而行、右則漭瀁之野、左則渺漫之海也、經大森村、渡六鄕河、是玉河下流也、淸可以鑒、抵河崎驛、午飯、過金川驛、道右山腹有洞、相傳鎌倉氏之時、仁田四郎者、奉命入嶽麓洞中、終出于此、未知然否、禎文欲探之、相俱攀緣百躋雨裡泥濘、不能支趾、一脚據樹根、一脚蹈石角、捫蘿而升、遂達洞口、窺之深黝、不可入也、下經程谷驛、漸入山間、忽見一大野猪、伏山麓叢莽中、耽々虎視、余爲之愕然、轎夫曰、猪性雖猛、非怒不觸人、我心則夷矣、抵權太阪、日云莫矣、衝雨蹈泥而登、余在轎中、搖々俯仰、但覺時々陟降已、初更抵戶塚驛、就逆旅而宿、廿四日、雨來歇、晏發、路上高陵、左右老杉駢植爲列、遙望之、則如三軍之衆、行伍整齊也、下又行松樹間、聞海濤聲與松籟相和、抵影取村、過茶店、踞牀而憩、傍見林樹森々、有祠曰影取神、抵藤澤驛、雨歇、下轎過淸淨光寺、堂後之山、別搆小堂、寘小栗某者像、側有其墓、從者十人就葬焉、皆有碑渡控名橋、左有一小碣、刻曰江島路、右則西上驛道也、乃左折入小巷、並河而行、雨又至、雷小動、猶以爲海濤、其聲漸大、然後始知雷也、抵石龜津、河水湯々、會航在于南岸、禎文一呼、航卽來、乃顧余曰、苟能如此、足以爲公孫龍之客耳、共笑、遂杭至片瀨村、泥沙沒脛、南望江島入海三里許、會潮退、土人裸裎肩人而渡焉、余卽馱其肩、禎文頗壯、獨揭而涉、有頃大風怒號、洪波驚沸、豐隆益劇、電光射眼、禎文曰、有意哉造化兒、作壯觀、以助我輩豪興也、意氣益壯、遂抵江島、就客舍而飯、食鮭盡美、窻中望鎌山、則黑雲一帶耳、少焉雷止天霽、漸見山形、乃出客舍、下海濱、水淺濡草鞋、稍覺脚重、乃徒跣沿崖、右轉則怪巖無數、峙立海中、奇石磊砢、晶熒玉光、忽令我二人生米氏癖焉、乃拾其花紋者數顆袖之、島東有一巘、曰鸕鷀嶼、相傳江島始開、鸕鷀來集于此、因名焉、側安歡喜天、更取路崖上、至舍、夜已二更、將寢、鬻璣貝者來集、謹聒可厭也、去則臥矣、廿五日、平旦步入山、有天女祠、乃下宮也、宮側有古碑、相傳宋人所書也、碑高可五尺、篆額全存、曰大日本國江島靈跡建寺之記、兩邊鐫雲龍、工亦妙矣、記文漫漶、僅見數

字、實是五百年來之物、而石已半截可惜夫、適憶前遊之日、就山僧乞紙墨、而塌碑文、彼僧不識爲何字也、旁觀余讀之、以爲叔孫通、殊爲可笑乃與之約日、所塌篆額摹刻以贈、冀足與好古者哉、僧大悅、後終果其言、今也所與神符併鬻者是也、志曰、篆額中記字言扁獨存、太宰翁紀行亦曰、唯記字難識、而余之所塌、記字全存、余謂志之鹵莽、而翁亦未就碑詳觀、但據志以言之耳、更登石磴數十級、有樓門、入則祠屋儼然、亦安天女像、名曰上宮、左折漸下里許、又有天女祠、名曰本宮、左下磴踞石而憩、近之鎌山獻勝、遠之大島如埵垛、隱然乎波濤間、臨崖俯窺之、壁立千仞、亂石立于其下、風波奔激如殷雷然、忽爾眩發、不覺逡巡、更左旋擇石角可躡而躡之、稍々下抵水崖、窺濤之退而步、濤來將及、顧望則懸崖數十丈、不可躋也、窘迫無計、乃登巖、丈餘濤激越之力不能支、而身與沫落流者數步、會禎文猝然還來、捽余髮以脫焉、乃延而陟崖、匍匐攀緣、不覺傷足指也、是日微禎文、吾其魚乎、上身脛繳盡濕、郎去之、禎文解袒衣、余乃鋪所齎五花簟、飲酒良久、禎文猶欲相共探龍穴、余曰、既已如此、將無歸、因相共從故路反舍、主人視余之服怪之、得無似楊家狗邪、燎衣于爐、頃之潮退、乃出島、又涉如初、過腰越村、皆漁家也、左鎌山、右滄海、踏沙而行、曰七里濱、每移一步、沙引踉却步、忽覺脚酸、前途璣貝粲目、奴在于前、禎文在于後、相隔百步許、且步且拾、忘憊焉、禎文語奴曰、古者以貝爲貨、今猶然則如何、奴曰、果然、豈有遺貝乎、禎文曰、奴頗有意向矣、有童子數人、被髮赤體曰、試投錢海中、吾能拾之、奴散數錢、則童子競入、出沒乎波浪間、各得之而還、彼其蹈水豈有術乎、習與性成也、濱盡抵稻叢村、過茶坊、有老嫗、客至、輙說源義貞伐北條氏時、大舘次郎者、戰死于此事、因欲以售鎌城地圖、極可厭矣、左轉入山間、則嶄鑿爲路、兩崖牆立數丈、蹈崎嶇行數里、經極樂寺、觀星月井、有寺門側榻書、曰明星石在、相傳、明星隕於井爲石者也、因欲觀之、入門叩戶、寂無人矣、唯見一匠登極而修悵然出行、經景政祠、過長谷寺、堂東面鎖、令人不得縱謁、左有寶、乃傴入、安觀音像、長三丈餘、龕中太闇、有僧以轆轤長絙、引上燭籠、照其面、蓋緣燭之上下、彷彿見全身而已、更東行取路田畔、雨又至、牛蹄之涔沒轎夫脛、行可四里、抵雪下村、過旅店、借傘及屐、步上鶴岡、謁應神祠、殿宇鉅麗、治承間、源賴朝所建也、雨甚、還宿客舍、禎文歎曰、嗚呼、雨師何不使我探討如意乎、仰天悵然久之、余則唯念杉田梅花爲雨殘耳、廿六日、

雨猶未歇、辭逆旅、左鶴岡、東行十里許、得一村落、轎夫息肩於人家側、見村人有顧指相謀之狀、余從轎中窺之、有雉集于山足樹間、一人持銃射之、不中、雉翾々飛、隱林越中、但聞咿喔聲耳、涉滑河、並河而行、或路窮涉湍瀨、岩巒倚疊、截赤壁以通路、曰朝夷奈、嶄鑿、陟降崎嶇、無躡而非巖也、連雨之後、途猶沮洳、崖腹有泉、清冷可漱、適見澗水之曲、多生欵冬花、禎文行且摘之、滿把則投之余轎中、以余性嗜之也、鑿盡路稍平坦、山樹之間、海水隱見、行數里抵川村、過酒店、茄欵冬花以下酒、因憶昔人甘芹萍之事、前汀平沙中、往々置壚埋桶、是所煮海水爲鹽也、過金龍院、後山臨海、有一大石、懸崖上、名曰飛石、蓋金澤中四奇石之一云、北行東折、謁三島明神祠、海水環匝、宛然如池、有橋曰瀨戶橋、蓋方言以海口爲瀨戶、故名橋、南瞻則島嶼無數、林樹蓊鬱、與海水相映發、有一嶼、亦橋而通之、行百步許、有天女祠、據岸眺望久之、又復故路、渡橋東行、過洲崎村、北折抵金澤村、轎夫稱里正居爽塏、乃投其家、蓋其家、要多引旅客、至轎夫賃卒、每往來皆加霑接、故稱揚之爾、古人有言、一餐之恩不忘、里正可謂有術矣、雨已霽、見青天、時日猶未晡、於是乎命舟、攜酒泛海、且倩村人以漁、忽得鱸魚數頭、輙爲鱠以下酒、余獨傾數觥、醉則高哦、不覺下過瀨戶橋、禎文憊山路嶮、枕舷而臥、咍噎大鼾、適擧網得蓼螺、乃擊碎之、置少許鱠中、而呼禎文、禎文應而不起、因牽其耳、乃起、猶呻吟不休也、强勸洒而食鱠、則辛氣瘠喉、困懷徹鼻、而睡全覺、余爲之棚々然、因共大笑、舟過小嶼、岸上草樹鬱茂、有一松樹、偃蓋枕水、禎文乃攪其枝、一躍上岸、唯有天神祠、乃題名華表、所謂天神嶼也、舟稍南、有夏島、野鳥、裸島、猿島、帽子島、鬱翠盡處、正南豁然、見積水漉瀁、回顧則物象含餘清、頗倍其勝、因吟日落江湖白、湖來天地青之句、觀眺久之、日薄虞淵、乃急促歸、宿里正家、廿七日、左海北行、稍々陟阪、抵能見堂、所謂八景者、宛如圖畫、實奇觀也、余舊識住持僧、會其之東都、故不訪焉、傍山腰而行、路益阻隘、榛莽摩轎勾衣、經馬脊、左右爲谷、俯瞰則瞑黑不測其底也、眩將發、過此則路岐左右、乃取路右行、余渴甚、謀之轎夫、轎夫曰、此際無人家也、杉田梅林中有茶店、姑能忍之、余爲口濡、渴少已、因戲轎夫曰、汝欲爲曹孟德耶、轎夫不曉、余獨笑耳、一條路陟降十里許、忽見滿山皚々然如白雪者、下轎而眺、梅樹數千株、相望不絕、花極淸麗、芳香襲人、想羅浮春色、亦未勝之已、過妙觀寺、梅樹最多、出門過酒店、主人曰、無下物、

輒走入二後園一、拔レ韭以進、余曰、何謂レ無二下物一也、郎有レ九焉、因笑飲二數杯一、村醪不レ足レ稱レ口、聊復取二微醺一已、轎夫曰、自レ此抵二金川一、路踰二層巒一三十餘里矣、舟廻二山足一、利路甚便、乃命レ舟、碧水岌漫、唯見二風帆搖曳乎綠波間一、舟沿レ山而廻二本目之山一、斗入二海一、遠之金川如レ黛、舟行可二十里一、更取二路田間一、下春宿二金川驛一、人居寬整、如二都下一、然俗頗有二淫靡風一、鄭衛聲間聞焉、妨二我輩熟寐一、可レ憎、廿八日、臨レ發先飲レ酒數杯、神旺、乃出抵二大森村一、午飯、薄暮歸レ家、人或謂江島之神、祈レ福必有レ驗矣、蓋余唯以レ紀二此行一爲レ福、詩數首、構思未レ就亦祈レ福耳、

新編相模國風土記稿卷之五 終

新編相模國風土記稿卷之六

藝文部卷之三

鎌倉

滿目鎌倉城郭亡、雲烟漠々樹蒼々、逍遙昔聽遊二龜谷一、報賽今無レ詣鶴岡一、草偃匣中三尺水、苔深幕上五更霜、君公不レ識二包桑計一、千載英雄淚濕レ裳、○林　忠

肩摒遊歷來、春晩興悠哉、城郭蕩然盡、山陵徒爾廻、大家蹤寂寞、五刹勢崔嵬、林外梵鐘響、匣中空鑑開、鳥禽時往復、農圃日徘徊、蔭々鎌倉裏、一望誰不歎、○山崎嘉字敬義號闇齋

朝登二瑞鹿一暮由濱、往々荒墟不レ見レ人、賓戚飲レ牛歌復激、晉靈用レ犬謗何新、府中壯士盡歸レ死、海底老龍空自神、亦是興亡當二一姓一、躊躇幽徑淚沾レ巾、○石川正恒字伯卿號麟洲

鎌倉伊昔擬二王畿一、往事回レ頭空是非、扇谷蹤荒生二綠草一、鶴陵樹古肅二彤扉一、雲低殘壘寒鴉集、日落亂山行客稀、唯有二關河長不レ改一、天風蕭颯卷二征衣一、○山梨治憲字玄度號稻川

曾開二東府一護二皇畿一、覇業千秋事已非、三浦風濤驚二晩響一、七鄉烟樹帶二斜暉一、適逢二沙上漁翁度一、且見二山中樵者歸一、富貴功名何足レ羨、幽棲欲レ結二蓑蘿衣一、○田　寧字子靜服元喬字子遷號南郭

鎌倉懷古七首

維昔奔鯨曝二海崖一、君王高レ枕付二戎衣一、中原寶鼎無二輕重一、御府彤弓有二是非一、一自黎民歸二將略一、遂令二赤子弄二兵機一、鎌倉不二必山河固一、試上二丘墟一對二落暉一、

相中弔レ古此盤旋、覇主樓臺建久年、雄略不レ終三世幕、遠圖唯有八州船、馬空窟裡留二寒影一、鶴去二岡頭一入二晩烟一、行到二琵琶橋上一望、依然海嶽媚二春天一、

高豪昔日散二黃金一、入レ幕賓僚滑水潯、朽骨人傳豺虎亂、舊丘僧守歲時心、群山草木隨二榮悴一、大海波濤變二古今一、漁父樵童歌未レ輟、泫然不二啻雍門琴一、

源氏山邊落日頭、當年形勝龍二巍峩一、月溪無二復持一弓矢一、星井何須辨二斗牛一、多少旌門烏鳥晩、南東濃畝麥華秋、野翁猶自迎レ人說、指點徒敎二客子愁一、

園國相山碧海通、披圖感慨古今同、蕭牆兩闕人爲レ虎、雞夜三司牝作レ雄、社稷頻移盟主地、壇場無レ恙應神宮、營丘元自稱二矣伯一、誰料終歸二田氏功一、

百年挾レ主據二鎌臺一、大盜幷存仁義才、後苑宴酣天狗舞、前庭鬬罷族奚來、一朝霄血沾二青草一、九世城池委二赤灰一、寶戒寺邊松栢裡、風含二鐘磬一至レ今哀、

元弘天子勤二龍顏一、相地攬檝墜二此間一、玉几終歸レ憑二北極一、翠華忽聽狩二南山一、莫レ言海外夷無レ守、應レ爲二京師朔不レ頗、誰識文王今日政、農桑四布闢二郊關一、

同

天墜會朝地、慨然唱二黍離一、計謀追二漢祖一、强勇肖二曹丕一、奈懵二雌雞禍一、胡忘二野鳥闕一、後人共可レ鑑、古跡淚空垂、○大高季明字清介號芝山

穿レ山涉レ水苦相尋、盡日扶レ笻行且吟、露下鶴岡華表舊、雲歸龜谷樹陰深、地形磊落英雄略、兵氣摧殘億萬心、父老幸能談二故事一、幾人回レ首又披レ襟、○大宰純

骨肉三朝盡、司晨有二牝鷄一、荒涼荊棘裏、空見舊時棲、○高惟馨字子式號蘭亭

源氏山邊落日頭、當年形勝龍二巍峩一、月溪無二復持一弓矢一、星井何須辨二斗牛一、多少旌門烏鳥晩、南東濃畝麥華秋、野翁猶自迎レ人說、指點徒敎二客子愁一、

同二首

登二此鎌倉上一、風光歲月移、欲レ尋二城闕跡一、未レ有二野翁知一、

將略空三世一、雄圖彼一時、寥々今若レ此、唯見應神祠、

一路深二青岬一、可レ憐今古情、山河千里固、溪谷七鄉名、冠蓋沒二丘土一、絃歌餘二水聲一、徘徊腸欲レ斷、況復暮鐘鳴、

同

鎌倉弔レ古覇圖空、往事苦談村舍翁、蝴蝶夢寒荒草露、杜鵑

悲動落花風、旌門車馬人行絶、松塢園陵兎徑通、唯有幽岡棲野鶴、千秋不改應神宮、○石作貞字士幹

美哉函谷固、山色鬱嶙峋、杳渺千年鶴、蕭條七里濱、戰場荆棘老、覇跡麥苗新、不改花紅白、空餘昔日春、○伊藤一元字吉甫號冠峯

幕府初開草昧中、軍麾萬里震關東、彤弓遠掛能防寇、白旆長垂常稱雄、覇績一朝權忽滅、威名五世澤終空、遊觀此日探陳迹、數處禪林只鬱葱、○冢田虎號大峯

名區游覽客、曳杖至相陽、海水何杳渺、郊原一荒凉、樵夫爲我說、鎌倉古戰場、草間妖狐吼、殘壘鬼火蒼、雲如旌旗靡、山含暮影黃、兵馬皆塵土、偏使客心傷、黍離悲變改、麥秀嘆存亡、三代與九世、懷古弔國殤、○岸鳳質字文卿號嶰谷

山東將種起伊州、功就鎌都據上游、一自兵權歸狡猾、終令海內苦貅貅、宿龍池晚沈雲黑、飲馬泉寒落月愁、誰識金湯天府地、離々禾黍滿三秋、○近藤篤字子業

同二首　樺島公禮字世儀號石梁

源氏中興有賴朝、鵬圖昔日搏扶搖、風雲三世山河壯、社稷千秋歲月遙、陰鬼暮依城壘哭、白楊秋傍墓田凋、人間衰盛知何物、一夢茫々鄭國蕉、

萬邦賓貢共稱藩、顧命誰忘先主恩、無那同根相煮急、遂令三馬一槽餐、連綿宗社終黃土、繚繞山川半緇門、仰見鶴岡神廟壯、威靈滿眼至今存、

同

覇府初開人望新、回天轉日策如神、當時寧識千年後、月館花城化作塵　○山梨治憲

鎌都憶昔戰爭功、政令新歸玉帳中、幾閱蕭牆疎骨肉、遂教社稷屬姦雄、海方朝貢舟何在、臺上會同人已空、唯有鶴陵遺廟肅、千秋佳氣鬱葱々、○山處和字士諧號芝岡

同二首　田憲章

陰風萬里動沙場、日色蕭々海霧黃、飲馬窟寒狐菟宿、鬪鷄原晚草萊荒、千秋戰氣空城雨、九世兵威古壘霜、一望凄然過不得、停車獨自嘆興亡、

億昔姦臣弄國威、翠華南狩遁京畿、六軍喋血衣冠散、諸將輿尸計略違、傳纛誰乘黃屋出、蒙塵偏似白登圍、安知皇運終廻轉、重使神州揚帝輝、

鎌倉覽古

湘水煙橫返照明、關河空鎖覇王城、海邊驅石人先老、山上塡溟鳥自鳴、百里停雲總殺氣、一林高樹皆秋聲、可憐孤鶴歸華表、猶傍北岡飛晚晴、○山縣孝孺字次公號周南

浮雲餘覇國、列嶂半祇林、草木疎風雨、烟波渺古今、蕭條朝會地、杳渺戰爭心、似助遷流觀、鐘聲落日陰、○釋萬庵

節臺駐馬夕陽驚、輦路春風疎雨晴、古木玉階啼鳥靜、空林金殿寒鴟聲、水田斜繞朱門曲、草色全侵官舍平、此地蕭條何所有、碧山桃李露華清、○齊必簡字大禮號靜齋

覇業誰爭盟主才、登壇此地闢蒿萊、帳前猛士分弓出、幕裡賓賢仗策來、東海風濤驅石渡、西山觀獵戴星廻、墜車猶恨河橋夕、陸上徒令放鶴哀、○高道昂字伯起

同五首　江忠囿字子園號南溟

鎌府名區勞訪尋、悠々往事感浮沈、覇圖跡斷山河在、鬼哭聲空日月深、扇谷暗風催雨落、鶴陵斜照入潮陰、依然天地餘刑勝、長使人間鑑古今、

東關割據一彈丸、英主經營宇宙寬、極樂寺前空洞跡、稻叢崎畔退潮看、地形依阻分名谷、郡會留蹤餘古壇、肯無白鶴歸華表、唯有濤聲渚日寒、

一築雄都振大名、業傳三葉覇圖傾、陪臣蠶食誇冠帶、義士鷹揚屯旆旌、柱石當年餘第宅、桑滄異代鎖柴荆、波瀾不洗千秋恨、日夜海潮成鼓聲、

濃淡烟分多少村、名山近遠染潮痕、幽囚巖穴生王氣、古壘丘墟消客魂、朝擁遊囊收采石、暝歸旅食飽寒飡、隔雲蹊路通腰越、啼鳥臨風似訴寃、

億昔石橋酣戰年、七龍逃去避烏鳶、風雲乘勢雄都闢、王覇分憂大器傳、斷續群山迷舊國、陰晴亂水畫新田、堪嘆湖海干戈跡、還作曠談千古憐、

同二首　松延年字子長號梅岡

探勝相山路、躋攀覽舊都、謁祠隨野老、奉祀付僧徒、維昔輕神器、于時定廟謨、威靈天北極、割據海東隅、關象三秦固、城開九達衢、大夫勞跋涉、壯士鑿崎嶇、讒慝生艫艫、功名沒屬鏤、歌將傳粟布、才豈賦豆箕、虛谷餘蕭寺、中原迷覇圖、樓臺盡荆棘、陵墓半荒蕪、幽徑人煙遠、平林落日孤、誰知懷古客、倚杖獨蜘蹰、

鎌倉闢天府、四塞地形雄、鶴影留陵上、鯨波動海東、古林籠白日、高刹倚蒼穹、鐘磬三乘集、城墟萬雉空、王庭無尙父、覇業重桓公、匡合安中上、謳歌播大風、老臣移寶鼎、稚子領元戎、豈料諸田氏、終成數世功、氛銷盟主跡、星拱應神宮、偃艸荒村暗、行松馳道通、魚鹽因沃衍、畎畝見饒豐、坐識今時化、車書萬國同、

同　源定賢字國器號雲臺

想像三朝壯、雄圖悵矣哉、煙蘿縈葛谷、嶺樹繞鎌臺、闇草荒都靜、濃花舊苑開、墳連山寺上、浪響海雲隈、蜃氣迎人出、鯨鐘使客哀、城墟多古意、嘆息暫徘徊、

同二首　滕　褧字公錦

曾開覇業據青丘、幕府高臨東海流、縱是專征分二陝、

何如追捕總諸州、一朝龜谷白旄轉、千古鴿原萋草稠、惟有山河舊時固、茫々隴畝麥華秋、

彊臣威武昔回天、采芑曾歌承久年、齊國誰救公室亂、桐宮還見帝居遷、八州戎略風雲動、九世雄圖日月懸、陳跡卽今盡喬木、崇祠獨駐鶴陵邊、

同

散步蕪城下、蕭條思不窮、覇圖千載盡、雄略一時空、古寺餘文物、荒村變國風、已無麟閣跡、誰識漢年功、○釋耆山古城空銷覇王闕、百二山河落日間、雲氣偏兼兵氣起、潮聲忽擁馬聲還、護巢孤鶴歸華表、援羣猿哭曲灣、回首英雄何處是、宛然丘隴翳林間、○五味國鼎字伯耳號釜川

烟簑兩笠上鎌城、丘壑高低禾黍生、覇迹寥々三代業、禪林鼓々五山名、街衢變作耕牛路、苑囿翻存戰將塋、父老不知豪氣盡、逢人猶說昔時英、○天爵字履仁號恒老

同二首　　来著字子隱

相中尋遺跡、跡荒何所見、陰雲起鶴陵、慘澹海南面、覇主臺樹空田疇、日暮寒艸臥黃牛、于今猛軍何處在、七里灘前水自流、

鎌倉弔古二首　　龍公美字君玉號草廬

昔日繁華蹤帝州、萬方玉帛會諸侯、源家猶有勤王舉、平氏數爲震主憂、古廟成墟狐兎窟、空城委棄帷牧樵遊、鶴宮惟有丹青爛、千樹蕭々不耐秋、

將業百年三易姓、牝鷄還使國家安、獨夫舞處妖星現、萬馬來時滄海乾、陳迹祇看蕉鹿夢、行人幾起黍離嘆、餘功猶有禪宮在、五岳樓臺烟雨寒、

鎌倉咏懷　　古賀樸字淳風號精里

將家吹噓覇圖開、建府鎌倉執壯哉、一自酋豪示闔泉、長無官吏領兵財、親兄狼噬心何忍、阿舅虎狂人所哀、城郭如今亦非是、祠頭空有鶴飛回、古語、雖有親兄、安知不爲狼、

遊鎌倉舊跡有感　　釋智好

覇王曾領故城跡、人去境殘感慨多、曳杖偶懷箕子恨、水鳴風咽舊山河、

鎌倉府

奇觀溢目海之東、夫遣古風示舊容、一掬富齡龜谷水、萬春添翠鶴岡松、舍那影現蓮臺秀、神女降臨花界濃、吟步有餘詩尙未、堪怨圓覺募堂鐘、

鎌倉墟　　繹敬雄

百年覇業倚鎌臺、挾主指揮文武才、君公試看歌舞地、只今唯有荣花開、

遙同友人鎌倉遊覽　　鶏孟一字子寧

舊都懷草昧、古道入蒼茫、基兆餘鷄野、祠墟存鶴岡、衣冠三世盡、榛莽七鄉荒、山合覇王地、風悲戎馬場、星門窺廢井、空壘對斜陽、雲白紛旗影、霜華亂劍光、滄桑驚俯仰、陵谷悵興亡、綺錯分田界、黍離夾路傍、丘墳累自出、梵刹鬱相望、碑字苺苔沒、林聲鐘磬長、雄圖終寂寞、客思坐凄凉、知汝無窮感、吟行淚濕裳、

道中望鎌倉　　林　忠

南從藤澤一望、二里是鎌倉、一片雲蜺隔、千年跡不忘、草深大佛殿、茅縛小林鄉、武衛遊龜谷、靈神降鶴岡、稻村潮汐到、榎島窟岩藏、無學建圓覺、道隆開建長、菅臣飛荏柄、陳氏渡薄桑、金澤有文庫、一邦稱序庠、鎌倉最佳境、八景似瀟湘、竹下與松下、南方又北方、猶思三浦宅、且到二階堂、路隘十間坂、豪傾長谷坊、尋隣通武野、泛海入安房、三代將軍在、一朝平族亡、忽招藤氏子、立置柳營床、兵柄歸元舅、綴旒視親王、北條三々世、百五十餘霜、懷古非吾事、嘯風欲主張、途中俄遇雨、旅店夜浪々、

藤澤望鎌倉　　林　恕字之道號鷺峯

地從藤澤小蹊連、莽蒼望中二里前、江島鶴岡如在祭、福山鹿阜這般禪、源家三代將軍府、平氏一流專政年、若使陳農遊此土、猶來金澤問遺編、

二十二日藤澤望鎌倉

藤澤相鄰咫尺天、鎌倉陳迹草芊々、源家早秉甲兵事、王子難持元帥權、東鑑文書五十卷、北條政務百餘年、公程到處不由徑、蒼莽晴望滿目前、

曉發鎌倉　　服元喬

偏愛鎌倉曉、荒烟遠市朝、山星留露氣、海月送殘宵、西路心還折、東關身未遙、儻從禽尙侶、重更問漁樵、

自鎌倉歸途中口號　　太宰純

結髮慕前修、平生事薄遊、扁舟多蹈海、短褐屢登樓、腸斷湘山月、神飛函谷秋、後期殊未卜、聊此得忘憂、

歸路自金澤到鎌倉　　合　離字麗王

一時全盛地、關險固相中、鎌府城墟古、鶴岡神廟雄、山封金澤庫、海現畫洲宮、七里曾戎馬、滄桑問釣翁、

鎌倉道　　石作貞

憶昔全盛日、大道如髮通、今日田間路、幾處迷西東、

行憩野店主翁披圖苦談往事

因賦　　安　脩字文仲號清河

千年覇跡艸蒼茫、處々行吟迷夕陽、適有村翁傳故事、披圖指點說興亡、

鎌倉雜詠二十首　　高惟馨字子式號蘭亭

憶昔鎌臺壯、山河覽勝初、祇今銷王氣、猶似六朝餘、

鶴陵千載古、華表臨海嶠、請看赤欄橋、依然應神廟、

覇業空三世、城墟異昔時、秋風吹不斷、禾黍使人悲、

骨肉三朝盡、司晨有牝鷄、荒凉荊棘裡、空見舊時棲、

試問舊歌臺、美人安在哉、猶疑風樹裡、笙鼓送餘哀、
草暗無人境、名藍跡已非、只餘金色相、大佛照斜暉、
古寺空山裡、祇林阻海陰、欲知觀世處、日夜轉潮音、
古井寒無底、井底見星燦、不借天上槎、低頭窺銀漢、
七里灘聲轉、漁村抱沙磧、海風吹常棣、蕭牆似相鬩、
稻磯潮忽落、戎馬踰斥鹵、今無魚麗軍、殘月低海浦、
兵火焚臺殿、移軍葛谷道、豈意千餘人、酣戰沒青草、
鬱々荒原草、無人訪古遊、鬪鷄何處在、好狗幾時休、
夜渡青錢沒、焉知滑水深、自從傳炬索、長照古人心、
山中一片水、誰洗寶刀回、自斬英雄首、餘流腥石苔、
蒼厓樹自東、赤壁天接北、須知嶮路通、不獨五丁力、
天高武庫山、上留旌竿跡、但見白雲屯、不見白旄色、
老臣傾社稷、九代稱盟主、今日長蓬蒿、不見黃金塢、
帝子魂安在、血痕濕空谷、于今舊獄中、風雨聽鬼哭、
殺氣動西京、山東大出兵、將威新狹帝、復據古關城、
處々五山分、禪宮鎖白雲、入門尋幻跡、多見古碑文、

相中覽古四首　服元喬

古城蹊路暗三春、落盡桃花溪水濱、山犬相迎村酒熟、時々
似侍武陵人、
處々龍宮繞鶴陵、菩提樹下夜光燈、歌臺百尺今何地、試
入山門問老僧、
鳥合原頭黃鳥飛、荒山春老草初肥、穆公一去奏良盡、無限
丘墳知者稀、
靈山之北傍黃昏、古道蕭條舊血痕、漁火只餘星月色、江天
夜々照荒村、

同二十首　滕聚

咫尺滄洲路、褰裳踏巨鼇、金銀列宮觀、璣貝亂風濤、
碑見餘秦篆、祠傳自漢曹、于今神女瑟、或聽妙音高、
躕躇南片上、島多斂斜陽、靈窟龍珠暗、清池蟾影涼、江島有蟾蜍石、臨小池所謂無熱池也　仙臺連蜃氣、漁火雜星光、煙裡回頭望、前
途一渺茫、
七里平沙遠、荒圖傍海隈、怒潮沈璧退、戍道倒戈開、一
將功初就、千軍骨已灰、孤村逢父老、話古暫徘徊、
路轉靈山外、行探陳跡過、井窺日中沫、靈山北有星井、相傳古時窺此井日中見星　溪弔月邊娥、靈山西南、有月溪、即藤爲相之母、阿佛所棲也、險隘孤橋在、靈山有石梁、名磨鉞橋、即湘中十橋之一也、荒涼古寺多、猶餘疇昔色、只有舊關河、
海上毘盧閣、飛甍委劫塵、星霜空寶坐、丈六露金身、螺
髻含苔古、毫光映日新、舊藍誰得復、荒苑鎖松筠、
湘中昔全盛、新廟照雄都、世運滄桑變、城墟日月徂、松陵
人閱寂、鶴陵一作松陵　華表鶴號呼、猶駐靈光似、巋然鎮海隅、
巨福知名寺、祇陀興國園、建長興國禪寺、山曰巨福、祈年窺浩劫、觀

世對空門、寶殿扁祈禱二字、殿東有圓通閣、兜率諸天近、嵩高中嶽尊、兜率巓嵩山、並巨福最高頂名、元僧俊明極題嵩山詩曰、五嶽標中岳、蓋比巨福爲湘中五山之最耳、將尋古遊去、
幽梵響黃昏、
思昔建長世、西天轉梵輪、建長開祖蘭溪師宋人、其自宋所攜圓鏡、今現存焉、事詳寧一山圓鑑贊序、珠林懸舍利、昭堂前有混柏樹、名舍利樹、事詳【元亨釋書】寶利照金銀、喩法
供開士、傳燈託重臣、織文餘舊彩、翼瓦款龍鱗、建長寺門牆、
以龍鱗爲瓦文、即德崇氏之旗章也、當時所用、至今不改、蓋遺愛所致也
東海封鯨日、覇圖思俊豪、民謳歸將種、雄略握兵韜、原
廟龜山古、遺蹤獅殿高、眞容端冕肅、長壽寺、山名寶龜蓋足利氏舊館之地、後建寺比原廟、詳見【鎌倉志】殿名獅王、置尊氏像、看似醉醇醪、
高僧圓覺地、嶺樹擁招提、池有降龍宿、園令瑞鹿棲、
圓覺寺、山名瑞鹿、其上有宿龍池、佛牙浮海至、寶庫藏佛牙、事見【正續院舍利記】仙牓自天
題、寺門、揭後光嚴帝御書榜、寶殿今零落、蒼苔跡半迷、
濟勝許玄度、曾隨支遁遊、結廬謝吾土、埋玉樂斯丘、
花井無人灌、蕉園入夢愁、碑陰傳絕妙、名節紀千秋、
山園開梵刹、平師昔參禪、當時謂德崇氏爲平師、見【元亨釋書】入境尋遺
跡、披圖感往年、禪興寺、即最明寺遺址也、古時堂宇及地理圖、今藏明月院、寶林生綠
草、玉澗咽清泉、寺前小溪名玉澗、只有當時月、依稀深院邊、寺東有明月院、
漢將東征曰、旌旗此地屯、虎韜傳奕世、龜谷起清門、
壽福寺、山名龜谷、一名源氏山、昔者源鎭府義家征奧賊、駐旌于此山、遂置館於山下、傳至其孫源野州、後源亞槐氏、都于鎌倉也、徒居鶴陵、而建佛宇於舊館之地、即今壽福寺也、事見【東鑑】舊花今爲寺、荒墟纔有村、
晚雲歸洞壑、山有歸雲洞、猶似白旄翻、
陳翁逢右相、西土說前生、宋室修朝貢、王山尋法盟、
宋人陳和卿見源右相曰、公即宋都育王山寺、南山師后身也、右相乃修聘于宋、以請禮育王山所藏佛牙、事見【東鑑】及【正續院舍利記】英風餘汗簡、畫窟鬱佳城、壽福寺後山有石窟、方丈餘、窟中以粉畫蔓草、土人謂之畫窟、有古碑焉、相傳此蓋石相之冢也、更感歌高調、長傳大雅聲、
葛西溪畔野、傳是德崇墟、當時謂北條氏本宗爲德崇、見【太平記】及【若州守護職記】赤旆
符曾解、黃龍識已虛、德崇氏之先、嘗禱江島之神、受海龍之讖、亦見【太平記】層宮委兵
火、遺廟傍精廬、寶戒寺有高時祠、試入山門望、荒茫焦土餘、
白帝誘天衷、王孫冠世雄、齊都脩霸業、晉策答戎功、一
日蕭牆鬩、三朝棣蕚空、即今宮觀地、禾黍起悲風、
眼中傷往事、回首舊東都、近古或謂平安爲西都、謂鎌倉爲東都、見【一覽亭集】帶甲
空天府、兵陵駐壯圖、鬪雞荒野古、飲馬冷泉枯、只見西門
道、孤墳傍嵩嵎、
隋帝廢儲皇、幽囚付晉王、隋文拘太子勇、付其弟晉王、頗類大塔王事、故比、同憂
生貝錦、異代惜蘭芳、雲蔽長安日、天飛五月霜、行人臨

舊獄ニ哀痛仰ニ穹蒼ニ、

王孫憐ニ舞妓ニ、唱和弄ニ胡琴ニ、自似ニ南冠客ニ、猶操ニ中土音ニ、歌臺何處是、野寺謾相尋、舊宴存ニ遺篋ニ、梅花杯裡沈、

教恩寺藏　敎圓寺藏　平中郎圖

平中郎圖

金海光明刹、恆沙遍照レ鄉、蓮華移ニ舊院ニ、

光明寺、古在花谷、稱蓮華寺、後徙今地、山名天照、

果證福ニ今王ニ、覺道盧溪遠、空門白旆揚、

盧溪法然弟子、有聖光者、其弟子良忠、實爲光明開祖、良忠弟子寂惠、爲第二祖、今關東檀刹、皆祖寂惠、以寂惠相白旆人、故謂其法、皆爲白旆派、

法盟推ニ上首ニ、久許主ニ壇場ニ、

同　釋敬雄

源氏山頭滑水涛、夕陽疎冷栢森々、試求ニ覇主塋墳跡ニ、草徑秋深不レ可レ尋、

覽ニ相中舊跡ニ五首　湯元禎號字子祥常山

金湯設レ險地形偏、億昔雄圖□□年、百萬貔貅歸ニ掌握ニ、中原鞭弭一周旋、鶴來華表懸ニ孤月ニ、駿散高臺銷ニ晩烟ニ、總爲ニ謗書能滿レ篋、常棣賦罷轉悽然、

覇王經世舊關城、□□浮雲睥睨平、廟堂奏レ捷黃金璽、第土卿レ寃白馬盟、客館朱絃餘ニ夜雨ニ、歌臺白雪自悲聲、不ニ獨姑蘇屬鏤恨ニ、復看麋鹿正縱橫、

山河千載覇圖空、文物蕭條感慨中、猶說齊公誇ニ賜履ニ、能令周使載ニ形弓ニ、天寒白日沈ニ殘壘ニ、木落玄陰滿ニ閟宮ニ、深識雍門□□哭、墳塋□□□通、

承久君王經略新、輝兵閫外事ニ推輪ニ、日銷鷁首迷ニ西海ニ、天裂龍旗暗ニ北辰ニ、萬國風雲朝ニ幕府ニ、陪臣羽檄創ニ經綸ニ、豪華九世空丘隴、回レ首中原涕淚頻、

相山極目倚ニ高臺ニ、七里濱邊潮色開、大海天吳驚ニ叱咤ニ、將軍鼓角鼓ニ風雷ニ、蕪城□□埋ニ黃土ニ、魏闕香雞委ニ綠苔ニ、我醉欲レ裁懷古賦、停レ車命レ酒且徘徊、

相中懷古十三首　安　脩字文仲號清河

鎌臺千載覇圖空、祠廟蕭森松柏中、唯有ニ歸來華表鶴ニ、岡頭向レ夕唳ニ淒風ニ、鶴岡應神廟

將軍馮怒討ニ天驕ニ、飛檄群雄此見レ招、十萬旌旗何處在、唯看山上白雲飄、旗山、

源公馳騁見ニ雄才ニ、曾逐ニ飇風ニ天馬來、窟裡苔深寒水色、人言此處洗ニ龍媒ニ、洗馬窟、

三世繁華彼一時、秋來禾黍自離々、徘徊白露衣裳溼、舊苑無レ人麋鹿悲、源大將墟、

聞說將軍遼海年、波瀾驚沸小壺邊、有レ人殊勝ニ澹臺勇ニ、直擊ニ三鮫ニ供ニ酒前ニ、小壺、

酣戰歸來洗ニ寶刀ニ、飛泉湧出斷崖高、英風颯爽傳ニ今古ニ、回望偏教ニ氣象豪ニ、洗刀水、

一片行雲楚色迷、歌臺人去雨凄々、香魂化作ニ紅襟燕ニ、斜

受ニ春風ニ高復低、靜姬舞殿、

公子春遊白鼻騧、鳴鞭爭過美人家、紅顏翠黛終黃土、愁見東風飄ニ落花ニ、假粧阪、

九世遺蹤誰復尋、葛西幽谷樹陰々、可レ憐苔蘚封ニ枯骨ニ、薄暮風傳鬼哭音、葛西谷、

靈山中斷海門開、漢將當年鳴レ皷來、忽訝沙汀驅ニ萬馬ニ、風濤落日蹴レ天回、靈山崎、

君王幽繫碧山隈、千載寃魂安在哉、何限獄中如晦恨、驚風驟雨送ニ鳴雷ニ、大塔王幽窖、

雨餘春草綠萋々、原上彷徨路欲レ迷、野老空傳全盛事、杏花開處鬪ニ雄雞ニ、鳥合原、

六浦波連三浦涛、雲遊禪客此清吟、興來回レ棹輕風曉、尚見前灣孤月沈、六浦、〇昔釋絕海來遊作詩、有興來回棹窮佳處、月落前灣猶未眠句、

同八首　熊阪邦

天子西巡哭ニ海雲ニ、源公奉レ詔統ニ東軍ニ、敵亡已僭三驅禮、身沒空傳九錫文、無ニ奈牝雞移ニ社稷ニ、遂令ニ姦賊弒ニ儲君ニ、千秋彼此成ニ枯骨ニ、回レ首相山白日曛、

莫レ怪兵權歸ニ外姻ニ、廼公創業藉ニ夫人ニ、忌レ能已殺韓彭輩、掩レ惡還封產祿親、女主臨レ朝司ニ黼陟ニ、將軍總レ己聽ニ陪臣ニ、誰憐帝室中興日、九世衣冠化作レ塵、

源氏山頭秋色空、東南亘海與レ天通、井中長見星臨レ鏡、溪上仍看月似レ弓、幾處樓臺來ニ野鶴ニ、何人祠廟走ニ村翁ニ、相逢試問ニ文治事ニ、猶說將軍戰伐功、

相山一望夕陽前、寥落孤村接ニ海天ニ、龜入ニ谷中ニ猶五色、鶴歸ニ華表ニ已千年、荒臺客過丹楓外、古墓僧還綠篠邊、獨有ニ應神舊時廟ニ、併將ニ蕭寺ニ共巍然、

源公麾レ簽據ニ鎌臺ニ、四塞山河天府開、矐レ目漸離攜レ筑去、漆レ身豫讓擊レ衣回、已看骨肉仇讐似、終遣ニ儲君羽翼摧ニ、曆數一朝歸ニ外戚ニ、遺蹤千古使ニ人哀ニ、

東國名臣竹素傳、遺蹤尚想愛ニ囊錢ニ、方知異代投ニ沈醸ニ、不レ及ニ當時搜ニ滑川ニ、寶戒寺南秋雨過、琵琶橋北夕陽偏、愁來更問ニ嗔レ牛處ニ、惟見荒村生ニ暮烟ニ、

相陵形勝壯ニ關東ニ、覇主樓臺感慨中、海抱ニ八洲ニ吞ニ楚澤ニ、山橫ニ九野ニ擁ニ秦宮ニ、將軍沈レ璧奔潮退、士卒揮レ戈王氣空、共說廢興唯在レ德、更知天意與ニ人同、

鯨鯢就レ戮起ニ波濤ニ、四海橫流豺虎睜、覇主入レ京爭ニ節鉞ニ、儲君監レ國建ニ旌旄ニ、遂留ニ愛弟ニ分ニ龍劍ニ、終見宗臣握ニ豹韜ニ、今日題レ詩故墟上、還悲南狩聖躬勞、

賴朝故宮　太宰純

獨騎鷹揚定ニ大東ニ、千秋覇業壯ニ關中ニ、繁華銷盡青山下、禾黍離々戰ニ晩風ニ、

故東光寺墟有ニ地牢ニ、兵部王護良囚且死所也、

有レ感而作、

葺々蘿薜掩二巖扉一、俠骨銷亡何處歸、松下踟躕腸欲レ斷、不レ知霜露濕二人衣一、

大塔皇子古跡二首　釋萬庵

親王遺跡見二殘塋一、土窟陰々春草生、堪レ憶貔豺三十萬、將軍躍レ馬入二咸京一、

一從二鈴閣脫二簪纓一、宮闕飛レ塵烽火餘、四十年間嗟二板蕩一、君王不レ見獄中書、

奉レ謁二兵部王護良墓一　熊阪邦

勤王諸將復二神州一、日月雙懸照二冕旒一、鶴駕無レ心二靈武擧一、鸞輿何事錦城遊、一朝枉被二驪姬譖一、半夜誰憐箕子囚、臨レ弑嚼レ鋒千古恨、長教二志士一涕横流上、

彈琴松在葛谷山上　安脩

山上喬松樹、千秋尙鬱葱、彈琴人不レ見、餘韻寄二高風一、

遊二鎌倉一、觀下平中將幽囚、與二美人一對酌之杯上、慨然有二懷古之感一、率爾爲賦、　高惟馨

莫レ將二古人杯一、能想二古時宴一、縱壯英雄心、淚濺美人面、

新編相模國風土記稿卷之六終

新編相模國風土記稿卷之七

藝文部卷之四

箱根　林忠

長坂脩途不レ可レ攀、惟天設レ險甲二東關一、回頭本末待二吾僕一、信レ足湖邊濯二客顏一、鯨背浪高伊豆島、馬蹄雲起筥根山、相逢盡道歸耕事、歲々年々幾往還、

箱根山

欝屈筥根路、海東初日邊、豆相經界拆、甲信地圖連、八里步難レ進、萬重峰可レ綿、攀レ天侵二薄霧一、臨レ谷瞰二奔泉一、險阻起二長坂一、巉岩登二絕巔一、行人無二並往一、駄馬殆驚顚、豈著二謝公屐一、欲レ纏二鄧艾氈一、丘隅岑蔚處、料識有二神仙一、○林　恕

坂行八里苦二攀援一、東去西來欲二斷魂一、名與二山靈一堅且从、白雲鎖レ筥石爲レ根、

本是東關險、箱根深且幽、雲高天闕逼、湖霽水煙收、一道鳥張レ翅、千巖猿掉レ頭、　王陽今若在、　九折定歎愁、　○林靖字彥復號讀耕

過來布士野、攀上箱根崤、湖面水皮皺、坂頭地骨高、往還呈二掌節一、要害帶二腰刀一、關戍不二曾懈一、鷄鳴誰得レ逃、○山崎嘉

屈曲盤紆八里餘、虯龍虎豹相紛拏、欲レ躋幾度仰レ天歎、更比二人情一平地如、○菊地東勻

崔嵬八里程、天險國中横、神占峯頭社、龍蟠山上泓、犬牙岩石出、羊角澗溪生、君看淸時政、關門譏不レ征、　○木下貞幹字直夫號錦里

山勢嶄巖仰レ面看、攀二緣峭壁一上二雲端一、岈松倒掛谷千仞、朝霧新晴日一竿、阪蹈二羊腸一尤凸凹、石高馬足正辛酸、更將二何地一論二茲險一、蔑視青蓮蜀道難一、蒙台命、游學洛陽、紀行五十首內

○太田林菴

箱根行不レ窮、入レ箐漸攀レ空、氣壓乾坤外、人行凸凹中、望レ雲懷二狄氏一、蹈レ石異二徐公一、上有二太湖在一、漁樵終二此躬一、

○安東守約號省菴

日東襟帶秀二函谷一、維石巖々幾斷魂、釼閣高劇行路殆、鏡湖均研望眸媛、白雲出沒夏疑レ雪、陰霧去來晝覺レ昏、旁礴山川掌中物、此征髣髴上二崑崙一、○釋智好

八里函根路、石高泥二僕僮一、千巖常帶レ雨、萬壑自生レ風、湖水泛二蓉嶺一、關門撑二紫宮一、豆相疆界接、輿馬往來通、昔聽英雄戰、今觀民庶豐、澗泉流不レ盡、滔々感何窮、○寺田革字鳳翼號臨川

關門地勢倚レ天通、氣色蒼茫望不レ窮、更憶靑牛傳二道德一、誰持二白馬一試二英雄一、千尋藤葛懸二僊窟一、百里江湖繞二梵宮一、劍閣遺風猶在レ眼、褰衣欲レ度碧雲中、　○平賀置憲定文成號鳳臺

同二首　安東守經

山到二箱根一雖二至險一、芒鞋竹杖一身安、仰攀直下幾峯過、不レ識人間行路難、

半看二湖水一半私雨、此山中常有微雨、土俗呼曰私雨、凸凹途中景象濃、又爲二山靈成一妙境一、箱根嶺上總無レ松、

同二首　伊藤縉字君夏號錦里

雪晴澗動レ山、聲影亂二初日一、秀研二子峰、總角燦雙出、便欲二與レ之近一、烟石踐二虛實一、紆曲既移レ時、彼峯忽相失、不二是峰趨避一、旁嶂峙不レ一、風勁樹盡樛、谷寒草未レ茁、雖レ春有二冬情一、寒氣股慄々、石梯骨奇峭、與レ雪半埋沒、目行足不レ從、雪蹴上二吾膝一、突兀猶壓レ人、峰危雲例逸、乃覺所レ歷高、翠白挿二尖筆一、磬折腰纔伸、湖光涵二象汨一、初恐天柱傾、銀潢漭蕩潏、窈冥魂深沈、嵐氣濕レ衣密、蒼黑奇杉中、聲乾風瑟々、出レ關路稍夷、郵亭烟外積、是峰之所レ窮、曉攀午初越、筥根本一山、中外峰歷々、

群山萬壑擁二高巔一、紫翠陰々撲レ面連、鳥道杳冥雲外路、神工剗鑿洞中天、關門樹合通二眞氣一、湖海峰廻倒二玉蓮一、十歲重經函谷險、白頭誰記棄繻年、

拜二筥根神祠一

列嶂湖心落、取レ塗聲影間、杉青人似レ鬼、雪白石如レ鵰、幽幻紗燈靜、惟靈壁畫斑、徘徊逢二祝史一、神昨爲レ吾頒、

函　嶺　古鼎字公錬

蒼翠十餘里、綿連一徑通、仙家在二何處一、犬吠白雲中、

同二首　熊阪邦

湖寺行逢レ雨、出レ門天忽開、神山壺裏見、仙嶠鏡中來、王笥丹楓映、函關紫氣催、却疑遊二園苑一、欲レ去重徘徊、

湖天雨又至、四望忽冥濛、孤島浮雲外、千峰薄霧中、已收銀世界、更奪玉函宮、悵恨辭レ關去、還看掛二彩虹一、

四月二日越二箱根一作二長歌一　林　忠

君不レ見、華山千萬里、仙客削成玉芙蓉、又不レ見、蜀道鉾閣開、欲レ昇如二天不一レ可レ階、帝令下二巨靈五丁力一、擘破移道中日本國上、玉笥掘得雲根下、呼曰二箱根一名非レ假、竹竿坡面蛇倒退、莓苔路頭羊腸廻、雲霧遮レ眼鳥難レ投、磐石嚙レ足猿掉レ頭、昔日曾有二役處士一、修錬偃臥白雲裏、靈神永留二駒形名一、樵子猶尋二兎跡遷一、一旦俄爲二浮屠院一、到レ今野僧開二寒殿一、東關道中最消レ魂、昔通二竹下一今箱根、就中絶頂湖更奇、晴看雪岳影倒垂、大唐鵝湖山、飛來濯二翠鬢一、濯了對二屠顏一、一鏡自潺湲、半日登躋半日降、循レ澗飛泉響淙々、山中名花與二奇卉一、桐君藥錄不レ能レ記、人間禽獸不レ足レ見、天上鳴雞雲中犬、今幸生逢二唐虞世一、何羨喬松延二千歲一、岩邊店裏餅餌焦、一串豆盧加二鼓椒一、筍輿暫歇先自背、僮僕食レ餘甘似レ薺、晨發三鳥驛一、過レ嶺日未レ夕、山氣日夕佳、飛鳥與レ我偕、嗚呼華山不レ可レ見、鉾閣去レ此遠、吾愛吾邦箱根山、千萬古常自閑、我輿我馬不レ摧不レ斃、徑入二小田原一買レ魚膾炙供二晩餐一、

九日越二箱根山一十首　山崎嘉

雞聲催出小田原、蹈二破曉雲一登二筥根一、四望蕭條天地窄、翠微條見揭二晨暾一、

箱根山裡路嵯峨、黃落秋風感慨多、湖底松兮嶺頭栢、歲寒心事不二相訛一、

阪頭風冷氣尤清、山腹瀑流眼益明、唯有二雨師聯一水箔一、更無二雲客濯二塵纓一、

行到箱根最上層、一天雲霽氣澄々、剛風吹去富山雪、瓊影入レ雲碎復凝、

陰晴屢變箱根山、當午天開風亦閑、富嶽倒涵湖水底、白雲吐レ雪玉團々、

聊吟二盧海一憩二茶亭一、山色水光人眼青、富嶽忽看群嶺外、白雲堆上雪瓏玲、

雲山千轉湛二湖光一、宜レ有二神龍泓潛藏一、萬卷上人誣二了俗一、國分木繫二九頭玉一、

崢壁攢峰神所レ刪、重々圍做筥根山、上知レ阻矣下知レ險、

不盡乾坤在二此間一、

竹笠芒鞋葛布幞、自掌二險阻一慰二僮僕一、艱難只在二人情間一、

山路莫レ言石嚙レ足、

踊レ雲蒙レ霧又乘レ風、行盡箱根八里中、無レ限客愁何日散、

驛程此去更重々、

踰二函嶺一有レ作　釋萬菴

歸レ自二京華一十七年、相陽峻坂復攀緣、交羅草木分二征錫一、

陸續峰巒映二客韉一、落々長松皆蔽レ日、淙々幽峽總鳴レ泉、

雲飛素女廻翔後、石裂靈神最負前、鬼魅逢レ人藏二洞壑一、關

關欲レ雨嚥二風烟一、春寒農嶂疑レ稀レ雲、路斷回梯却上レ天、擊

柝關深函谷固、翻車嶺側劒門懸、徑迷二劉阮一蹤何在、村

秘二朱陳一世不レ傳、舊信魚山流二梵奏一、還懷酉穴鎖二眞筌一、

轆轤可レ汲修丹井、襪襭堪レ耕種玉田、枸杞老根應二夜吠一、芙

蕖秋實好晨零、奥皐喜レ覽千家邑、層巘驚臨百丈淵、三島

午開如レ望レ鴈、六龍四逝不レ停レ鞭、積蘇累塊鹿寰渺、採レ藥

吾將レ隨二偓佺一、

從レ鴈歸レ濼過二箱根一　赤松鴻字國鸞號滄洲

關山行不レ盡、風雨愼二陪從一、一徑松杉濕、千峰烟霧重、巉巖

驚二臥虎一、澗水聽二吟龍一、何日辭レ官去、優游任二短笻一、

過二函嶺一二首　千村諸成字伯就號峨湖

爲レ逢二奇絶境一、不レ倦レ度二崎嶇一、霜葉渾裁レ錦、澗泉巧碎レ

珠、中峯疎雨散、半嶺斷雲孤、勝具吾猶在、非レ關二藜杖扶一、

關門憑二地險一、千載鎖二東京一、山樹高低秀、溪雲黯淡生、風聲

松杪響、湖水鏡中晴、何處煙蘿裡、蕭條一鳥鳴、

踰二函嶺一　滕維翰

西征何處險、函嶺轉千盤、多少經過客、齊歌行路難、

過二筥根山一二首　竺顯常

筥根六十里、一似二蜀山難一、石路崎嶇轉、谷風蕭瑟寒、平湖

開二絶頂一、長坂下二哀湍一、爲道關門吏、莫レ勞二紫氣看一、

山椒十里湛二蘆湖一、五月風寒欲レ透レ膚、四擁千峯蒼翠合、時

聞雲裡杜鵑呼、

自二小田原一入二筥根一

眉輿續二殘夢一、忽覺聽二飛湍一、四面峰影攢、雨杉嵐氣寒、攀レ

巖拄二行李一、蹉レ嶮澁二征鞍一、丹錦霜餘樹、殷勤與レ我看、

踰二玉笥山一五首　伊藤一元

絶壁鎖二關門一、嵐邊開二邑里一、雪女贈二楊枝一、雲僮煮二螺子一、

泥阪石如レ齒、咫尺烟嵐迷、擧レ頭不レ見レ馬、但聞雲中嘶、

霜威砭二肌骨一、雞鳴出二函關一、轎夫指二點我一、此是雙子山、

雲抱雙子嶺、湖寒五郎祠、雄心猶未レ滅、無二溪不レ怒時一、

急雨傾二雲根一、斜嵐捲二空翠一、變幻我所レ甘、山靈勿二相試一、

憑レ轎踰二函嶺一　安　脩

仰見羊腸阪、行々幾回轉、醉乃凭二籃輿一、不レ羨二許詢便一、

初夏過箱根　江忠囿

危岩如疣贅、攣峯同拇駢、鐔形高嶺聳、鏡影大湖穿、雲去雲猶返、氛消氛且纏、阪思驅御客、關問弃繻賢、縱有雞鳴技、何欺魚鑰堅、陰晴人出霧、明滅鳥棲烟、回首石垣隔、凝眸駒嶽懸、追涼休午飯、洗暑漱寒泉、束馬徒行久、倚節臨眺憐、神祠古樹欝、佛室常燈鮮、誰識鑿空始、遙占戰勝先、豐王叱咤日、名將自裁年、守豈山河固、須令在德傳、

經箱根　山梨治憲

盤々征路入箱根、旭日彤霞晴復昏、莎笠響時松子落、竹筇支處土花繁、驛樓茅結仙人市、湖水雲開玉女盆、初信神仙非妄作、瑤池此處即崑崙、

過筥根山　鈴木恭（字遠耻號小蓮）

函嶺蒼茫曉未分、羊腸路轉入重雲、湖邊歇馬秋嵐暗、關外聽雞朝日曛、叱馭縱然同大守、棄孺豈復似終軍、壯遊會擬窮千里、更見巉巖勝所聞、

筥根關　菊地東勻

筥根關聳白雲中、鑿破層巖鳥道通、鷄客不逃譏察下、咽喉控斷限西東、

函關

關門百里倚巃嵸、十二東秦車轍通、天色幾餘黃霧外、人家半住白雲中、湖分銀漢星辰湛、峰並芙蓉氷雪同、一自終軍棄繻入、于今士氣此間雄、○山縣孝孺

羊腸險路捫蘿攀、東出函關萬仞山、試觸岩根雲氣起、散爲風雨滿人間、○釋敬雄

鳥道征驂蹴巖仆、羊腸行客鑿空攀、湖山爲是隣仙嶽、紫氣常流函谷關、○香山彰（字吉甫號適園）

豈謂長纓繫越才、童心忌意棄繻來、龍鍾衰朽君休咲、亦此主恩賜傳回、○柴邦彥（字彥輔號栗山）

磐石山河瑞氣流、關門百二欝相州、四夷欵塞歸清政、群客窺鷄待曉籌、千鳥橋邊寒水漲、落猿巖下白雲幽、樹間一路懸車去、無復林泉慰旅愁、○近藤篤（字子業）

百二眞天嶮、登攀一日程、斷雲埋馬足、落月照雞聲、氣紫關門近、浪青湖水平、神靈幽遠地、取道復行々、○釋東適

關門朝過畏途間、雲霧憑凌叱馭還、九折攀來仰頭望、青天擎出玉函山、○京高明（字君柔）

百二重關勢自雄、誰何虎豹碧巖中、人家天上鷄聲起、驛路星邊使者通、半嶺晴看三島雨、絕峯吹落八州風、好無令尹知眞氣、形勝千秋壯海東、○岳融（字子陽號東海）

玉函山色鬱天涯、行過關門紫氣斜、湖浸芙蓉千古雪、峰分閶闔萬尋霞、猶龍無復眞人度、叱馭空看壯士誇、未擬灞陵裘褐隱、五噫高唱却還車、○菊池禎（字叔成）

百二重關烟霧開、玉函宮畔夕陽催、明湖水浸三峯動、碧海雲連半嶺回、忽憶青牛過洞壑、猶看紫氣照崔嵬、孤生此日繻難棄、千古空慚漢代才、○熊阪邦

西踰函關　服元喬

神州開大略、靈嶽道西關、峯頂郊雲外、天門驛樹間、湖分銀漢水、崖浸玉函山、征馬蹴巖裂、行人鑿空攀、誰何嚴詰盜、罔兩避知姦、日閱棄繻入、時看稠載還、王侯因設險、客子不爲艱、既過長轡盡、回頭破旅顏、

踰函關

傳道僊翁住此峯、玉函擎出綵雲重、路通海驛三千里、地險山河百二封、懸雨斜陽多變態、開湖絕頂見靈蹤、矯頭紫氣關門近、追得青牛何處從、○石正猗（字仲綠）

玉函襟帶擁東京、攀上關門幾里程、雪滿遙峯分信越、雲奔空谷辨崢嶸、名山何處藏書去、險路誰人叱馭行、羞殺年々來往客、已非前日棄繻生、○平賀周藏（字子英）

雲深猿鳥驚、關發吏人迎、山聳巖松古、林疎湖水明、已違題柱意、豈有棄繻名、騶馭行將痡、何邊東武城、○三野無逸（字仲壽）

過函關　奧田士元

玉笥驚天險、崔嵬雨色哀、高雲嶺下度、大水山頭開、鄉國三千里、東西十五回、芙蓉現半面、更倚太平臺、

度函關　馬潤

一過函嶺似攀天、欝々林端萬嶂連、將道行々仙路近、白々長傍湖水懸、

函關道中

玉笥開天極、函關鎭海東、峯分雙掌峻、地控八州雄、霧暗征衫濕、山深驛馬通、巖巒晴値雨、公檜曉驚風、月抱蘆湖冷、雲藏駒嶽空、溫泉流碧澗、神木鬱瑤宮、門闢鳴雞外、人過紫氣中、虛懷投筆志、更憶棄繻功、跋陟踪難定、崎嶇路欲窮、五噫今日事、誰復擬梁鴻、○高惟馨

白雲新樹玉函山、書劍年々往又還、今日山靈應笑我、空將傲骨老人間、○秋儀（字子羽號玉山）

匹馬將西渡、路廻函谷陰、千峰績雪色、萬里行人心、氷合澗泉斷、烟孤山驛深、關門應咫尺、紫氣暮沈々、○服元雄（字仲英）

匹馬揚鞭碧嶂寒、關門險路擁雲端、男兒聊報懸弧志、初日芙蓉指掌看、○湯元禎

函關嶮路鎖巖扉、獨往躋攀躡翠微、雙嶺春光多積雪、大湖波色灑征衣、山嵐不辨青牛跡、客夢偏消白馬非、長嘯層巒回首望、孤雲片雨傍人飛、○釋耆山

崎嶇函谷險、百二勝金湯、雲抱雙生湧、烟籠九折長、連屏敧驛路、群石辨仙羊、叱馭從公事、分符向帝鄉、

峯晴疎雨外、鳥過夕陽傍、積翠松杉古、層陰薜荔涼、境深村落出、亭敞酒杯香、近遠聊延眺、勤勞暫可忘、液泉穿窟處、遊憩養痾場、湖浸瑤宮影、林擎華表光、關門餘紫氣、戈戟列清霜、猶有誰何者、明時愼豫防、○川義豹

玉笥曉發　藤忠恕字子璋號壺山

路入邛郲九折回、行看夜火照崔嵬、飛泉觸石聲愈咽、老樹埋雲望未開、可是王尊驅馬地、遙思張載勒銘才、西山月落藤蘿外、忽聽晨鐘處々催、

曉踰函關

函谷關門紫氣旁、鷄鳴絕頂曉蒼々、蘆湖春水憐鷗鳥、蛭島風烟弔霸王、九折縱然堪叱馭、千金豈不憶垂堂、生平自撫雙龍劍、何用區々戀故鄉、○秋　儀

碧山悵望青天賒、單騎遠辭綠水涯、函關翻入寒空繞、御路遙侵細雨斜、雙峰曉雁城邊月、積水晴雲樹裡花、即今此地堪乘興、幾歲歸鞍催物華、○齊必簡

早發函關　山根道晋

關門殘月影、向曙送雞聲、人迓青牛過、天浮紫氣明、棄繻憐往事、揚策競前程、看取山河險、堪思吳起情、

函關晨度　岳融

蒼々函嶺曉、匹馬步霜蹄、山雜晴雲出、月穿烟靄低、關譏無乳虎、客到有晨雞、聞說齊公子、曾催半夜啼、

曉度函關

函關重鎭鎖嵐烟、空裡岧嶢踏曉天、殘月隨時巖尙暝、窮途哭處棧堪懸、雞啼不叱晨光外、馬去無停眞氣邊、漸看眼前開富嶽、東方日出照峰蓮、

函根關早行　沖廷仲字子和號高陽

駕行關路曉、遠色望嵯峨、魚鑰聞鷄啓、羊腸叱馬過、海烟明樹抄、湖水滿丘阿、欲逐終軍志、空耻雙鬢皤、

曉踰函關　陰山凞字文熙

函關殘月曉鷄聞、紫氣沈々望漸分、雪壓蓮花懸岳影、天開蘆水冷湖雲、千盤路轉征驂苦、萬疊峰連哀狖群、西向漢京多少客、功名誰復擬終軍、

曉踰箱根關　山梨治憲

千折凌空澗道長、山顚湖色靜洸洋、波連天漢三州裂、雲抱芙蓉八葉藏、馬蹟苔深春磴暗、雞聲月落曙炬蒼、即今自笑眞人似、關門凝紫曉霞揚、

曉發函嶺　菊池禎

晨裝發嶺上、十里踰崢嶸、日出靑霞起、高樹碧鷄鳴、漸度函關去、尙循蘆湖行、松杉含宿靄、澄景浸空明、靈鎖神如在、巋然麗丹楹、訪問前代遺、援筆且題名、題罷下曲磴、澗壑變陰晴、裊々雲生岫、祈々送雨聲、襏襫休山店、躊躇諮去程、陟阤遙瞻望、天未指江城、雖耽

海岳勝、未離魏闕情、況無魚雁信、鄉淚潛沾纓、

遊玉笥山六首　服元喬

玉笥山東溪谷分、仙羊化石路成群、迷蹤漸寤黃初起、壯志聊酬宗少文、停屐雷轟巖下電、拂衣烟亂嶺頭雲、已驚投宿多村落、且喜尋源洗世氛、

傳言此地勝驪山、靈液殊開大嶽間、一自始分神女澤、至今長駐里人顏、注來不盡疑香濆、浴罷何妨共玉環、肌骨幷除塵垢事、便應輕擧踏雲還、

人家鳥道極罷嵬、處々躋攀試步回、九折溪流東澤水、千尋樹抄太平臺、海天龍氣蒸遙起、嶽裏雲根雨忽來、歸舍解衣堪避暑、山中更有濁醪杯、

峭壁攢峰陟近隣、摧林蹴石道愈新、捫蘿自怪驅山鬼、叩牝誰知養谷神、但恐始寧門下客、復驚臨海郡中人、謝家已是多狂態、曲蓋相携遺此身、

宮下堂洲草木鮮、樓臺幾處擁溫泉、丘中已遇鳴琴客、溪上何來采藥仙、隱霧斑毛窺豹穴、投珠明月墜龍淵、翔遊總是人間外、不怪名山有洞天、

西風昨夜復驚秋、地限關門不可留、非有眞人揚紫氣、何嫌我輩跨青牛、雙生色夾峯雲送、孤照天懸嶽日收、回首慇懃烟靄裏、山靈亦似待重遊、

同　源賴順

層峯東走俯仙寰、瑞靄遙連海氣間、洞口犬鷄留塔澤、天邊驛路掛函關、猨猴爲侶元宜性、沆瀣供餐好駐顏、幸有遊方彩毫在、藏書猶欲寄名山、

重遊玉笥山二首　服元喬

濟勝愜情輕此身、分雲始覺步虛新、五丁鑿道誰開蜀、幾世留家似避秦、傳響歌呼幽谷鳥、遊方共遇武陵人、山中雞犬看相熱、重到無勞迷問津、

再試深山一日情、溫泉東澤自分明、當年聒聽鳴流響、半夜仍疑驟雨聲、玉笥峯懸仙路近、白雲天傍嶽根生、垢氛洗盡唯高枕、夢裡還應昇上淸、

携家重遊函谷三首　服元雄

十年猶記舊山川、回首重窺函谷天、擧室相携巖壑下、投居高倚岫雲邊、長安幾日過關去、蜀道十盤擁樹懸、裘褐未酬俱隱志、五噫深愧伯鸞賢、

玉笥峰陰東澤隈、烟霞無恙再徘徊、唯憐痼疾終爲性、更喜溫泉堪洗埃、灌木連雲山勢合、懸流穿石雨聲來、應須晚膳供薇蕨、僮僕時隨樵者回、

懸厓百尺此登樓、滿眼山光入昔遊、幽壑響傳仙嘯落、連屏翠傍客顏浮、林深白日松杉冷、窟暗玄雲虎豹愁、耕織我曹生事足、他時將著鹿皮裘、

遊函嶺五首　松延年

玉笥山高入二太清一、一丘一壑異二陰晴一、峰分二翠黛一雲爲レ髮、湖吐二澄光一瀑作レ聲、訝化二仙羊一將レ叱レ石、攀二緣丹壁一數題レ名、此行不下出二關門一去空望青天紫氣明、

欲下尋二函谷一蹈中仙蹤上、向望西關眞氣重、靈液瀉流靈鷲澗、白雲圍繞白駒峰、坐看壁嶂環二天際一、何處兒孫拱二岱宗一、下轉山間湖水現、滄波濯出玉芙蓉、

幽谷遙窺千仞底、嵐烟深處有二人家一、俯臨飛瀑簷前玉、步蹈懸崖樹抄花、壺裡蒼天殊二日月一、石間芳艸臥二麝麑一、行々若及二群仙會一、饌脯山羊醉二紫霞一、

山疊二青螺一更幾重、幽龍奇艸路蒙茸、地飄二麥浪一太平谷、天落二松濤一多武峰、轉レ石急溪奔似レ馬、縈レ轟枯木勢如レ龍、窮民僅有レ爲二生計一、水碓和レ雪日夜舂、

百二重關峻阪分、盤回蹈盡幾層雲、涉レ旬漸入神仙境、避レ世聊從麋鹿群、問レ道無レ由レ尋二尹喜一、棄レ繻誰復識二終軍一、留レ詩定有二山靈護一、長使二聲名異代聞一、

宿二玉笥山上精舍一

藤忠統字大乾號猗園

一行攀二玉笥一、九折峻二關東一、驛路臨二湖水一、人家迎二谷風一、王陽能憶レ孝、子贛復思レ忠、跼レ危非二枕席一、遂レ志是英雄、戰死曾多レ此、我功且不レ空、絲苔殘二豢碣一、明燭照二龍宮一、僧爲說二三藏一、我將游二六通一、幽坐諸天靜、二更宿舍中、

箕根山夜泊 霸鏡言箕根湖　峨眉言富士峯

大高季明

逖隔二人間一異景多、風情直起箕根阿、鹿鳴紅葉壁二林樾一、月出翠雲岩二洞窩一、霜鏡瑩熒懸二絕嶺一、裘眉縹緲倚二銀河一、叨思脫レ屣從二仙侶一、竟棄二綱常一如レ罪何、

宿箱根　　合　離

界レ天函嶺險、行李立踟躕、投宿候二眞氣一、出關知二棄繻一、陰陽山勢變、雲雨樹梢驅、愧比二田文客一、雞鳴淩レ旦徂、

宿二箕根山一　　竺顯常

一路峰巒欲二夕陽一、長松荒樹入二穹蒼一、關頭不レ辨誰人紫、坂上無レ端我馬黃、四壁風生雲臥冷、千巖月出旅魂長、雞鳴却恨過レ門早、與在二蘆湖十里傍一、

宿二玉函山一

獨宿秦關下、讒何意不レ平、漸看山月落、孱食待二鷄鳴一、〇僧禪軾

雲擁二崔嵬一鳥道盤、山中春半雪猶殘、人間此夜應二晴月一、板屋三更風雨寒、〇山梨治憲

宿二函谷山中一　　西孝字子文

函山投宿夜、不レ寐向二殘更一、傍レ枕溪流響、隔レ林麋鹿鳴、孌垂燈下淚、獨慘客中情、況復西窻曉、蕭々風雨聲、

宿二函嶺二首　　菊池禎

函山幾里程、一夜憑レ雲宿、床下暗二孤燈一、擁レ爐然二苦竹一、關樹懸二秋月一、湖村帶二夜烟一、忽驚二山氣冷一、旅服欲レ裝レ綿、

夜踰二函嶺一遇レ雨　　高道昻

已愁二山驛險一、烟雨客心迷、抱レ樹窺二猿嘯一、穿レ林驚二鳥棲一、雙生迎作レ嶂、三島合爲レ溪、吾鄉應レ不レ遠、何事更攲々、

玉函山喜レ晴　　守屋元泰字伯亨號東陽

玉函山秀路盤桓、異草花香奇樹寒、艱險直凌雲霧外、青天白日近相看、

玉笥客舍作　　川榮壽

玉笥名山仙液新、浴來清爽振二衣巾一、更憐窻下凉風落、自謂羲皇以上人、

同三首　　釋耆山

茅山今日臥二茅茨一、老去飛仙不レ可レ期、咫尺唯看白雲起、新詩裁得腹貽レ誰、

嶽裡烟霞擁二一村一、疑從二溪水一此尋レ源、淹留日作二新知樂一、無下復人言上憶二故園一、

嵐烟幾度變二陰晴一、忽見窻前月色明、疑是吾身仙境住、山家夜靜聽二棋聲一、

函關阻レ雪　　片岡正英字子蘭

秦嶺巍々百二重、關門彷彿鎖二群峰一、雪吹二烏帽一雙眼一、路蹉二白雪千丈松一、湖色侵レ波思二笠澤一、鷄鳴開レ戸點二芙蓉一、雪宮定識建二東國一、北面堪レ扉翳二暮鐘一、

過二箕根一逢レ雪、宿二山上驛一、至レ夕天晴寒薄、雪亦半消、驛亭面二蘆湖一、萬頃瀲灩、岡巒抱レ之、而富士出二其背一、峻嶒玉立、正爾與二寒月一爭レ輝、殆非二人境一、蓋東來一勝狀也、乃賦二三律一、　笠顯常

重巒蒼山道、征車入二半空一、登々逾二積雪一、步々更寒風、群玉衆山合、蓮珠千樹同、蘆湖多二勝槩一、喜在二一亭中一、絕頂初晴處、開レ軒不二太塞一、雪殘岡勢靜、月滿水容寬、銀漢低相接、瑤池宛可レ觀、更憐栖宿鳥、深夜叫二雲端一、

芙蓉萬尋色、到レ此取堪レ憐、倒レ雪出二山後一、跨レ湖來二檻前一、居然塵表物、恰爾月華天、明發關門度、休下將二紫氣一傳上

宿二箕根一翌早發値レ雪

層巒片雪夕霏微、曉見凝華來逼レ扉、雲擁二關門一紫初度、風廻二巖岫一白猶飛、蒼杉陰合單車路、叢篠令侵孤客衣、惆悵蘆湖千頃色、不レ同二乘レ興子猷歸一、

函關道中値レ雪　　安　脩

孤客西征歲欲レ闌、函山登陟轉二千盤一、應レ同二愜阨泰關固一、何似二崎嶇蜀道難一、積石凝レ冰疲馬苦、回風吹レ雪敝貂寒、誰人更與歌二黃竹一、萬古空思周穆嘆、

廿三日、登二箱根山一、宿二絕頂旅店一、湖水有二庭前一、士峰聳二其上一、其美景不レ易レ言也、因賦二一律一、　林　恕

無レ奈箕根行路艱、半塗一宿慰二跻攀一、平湖傍レ屋是池沼、士

嶺吹レ晴便假山、杜老岱宗凌ニ絶頂一、韓公衡岳仰ニ雲顏一、豆相界地東西隔、欲下顧ニ武城一望中帝寰上、

筥根關折ニ楓枝一　那波方字道圓號活所

百般霜葉似レ要レ詩、馬上臨眺到處奇、丞相梅關非ニ我事一、倦遊時折一横枝、

四月七日筥根憫ニ駕輿丁一

路入ニ筥根一奴隷勞、太行劔閣讓ニ其高一、仙方尚得レ在ニ今世一、願使下ニ此身一輕似ヒ毛、

筥根溪畔掃レ石酌レ酒　菊地東勻

四面青山遶ニ翠屏一、溪泉觸レ石響泠々、無レ端一洗風塵思、掃レ蘚臨レ流開ニ酒瓶一、

自ニ筥根一望ニ富士一　木下貞幹

自レ上ニ筥根大一、更知富士尊、重憂摧ニ地軸一、高恠突ニ天門一、嵐氣青猊奮、雪容白鳳騫、衆山回レ首見、碌々等ニ雞豚一、

函根絶頂望ニ士峯一　寺田革

攀レ嶮遠登函嶺上、仰看富嶽寔彌高、孱顏咫尺湖中影、疑是蓬萊駕ニ六鼇一、

箱根望ニ富士一　竺顯常

行登ニ箱嶺一三十里、更向ニ雲間一望ニ富士一、影落蘆湖萬頃中、併ニ將孤月一在ニ寒水一、

箱根湖水中見ニ不二山影一　安藤守經

日々逢レ君幾驛程、箱根嶺上暫留レ行、湖中倒見孱顏映、不二却如レ有ニ二名一、

宿ニ玉笥山一曉望ニ富士峯一　伊藤一元

玉峯臨ニ碧湖一、峯影動ニ波上一、水晶與ニ琉璃一、不ニ曾勞ニ俯仰一、

筥根山中作　竺顯常

洛下黄花不レ及レ看、驛中紅樹暫盤桓、千林彩翠都如畫、一道溪泉噴レ雪寒、

憩ニ山亭一境致可レ愛

天風吹レ霧曉冥々、巖路崎嶇既飽經、好是山中停レ客處、懸泉鳴レ玉下ニ階庭一、

函關聞ニ子規一　釋敬雄

關門高倚玉笥岑、古木長藤青靄深、遠客從來爭ニ日月一、子規何用促ニ歸心一、

蘆湖朝望　高道昂

關戍鷄鳴興不レ孤、群峰霧繞玉函湖、波間古廟秋蕭瑟、渚上僊翁跡有無、濯ニ足滄浪一窺ニ藻景一、沾ニ衣華露一俯ニ氷壺一、相忘誰拾ニ金光艸一、更向ニ巑岏一倦ニ路途一、

湖水　柴邦彥

十里青山頂、平湖在ニ半空一、晴光接ニ河漢一、倒影涵ニ芙蓉一、常看双飛鶴、恐藏獨角龍、幾回來ニ旅館一、俯レ檻照ニ心胸一、

蘆湖　柳里恭

雲散蘆湖夕、風煙忘ニ旅愁一、誰知高嶽上、更望ニ洞庭秋一、

筥根山中雜詠六首　林恕

權現社壇高、平湖浪不レ淘、行囊無ニ幣帛一、明信薦ニ溪毛一、望見走湯連ニ筥根一、溫泉湧處欲レ尋レ源、鎌倉都帥奉崇久、神意何無レ護ニ子孫一、

源軍失レ利石橋坂、武衛窮困僅得レ遁、行實馱レ餉忘レ餓時、恰似ニ滹沱進ニ麥飯一、

兩將相爭直義奔、古來戰國欲ニ幷吞一、羽林雖レ有ニ亞夫勇一、竹下官軍是棘門、

巫峽猿啼客濕レ衣、掉レ頭愁處憶ニ摩圍一、有レ人飜說夾ニ山境一、青嶂不レ看ニ抱レ子婦一、

山上奇哉見ニ此湖一、依稀中國有ニ鵝湖一、巨靈擘レ土投ニ何地一、一撮穿來數頃湖、

雜詠五首　山崎嘉

暫枉ニ籃輿一拜ニ忍尊一、壝前杉木卷ニ千幡一、想應ニ神護昇平象一、山鳥不レ驚春意溫、

豈以ニ形肥一爲レ不レ思、人間七出要須レ欽、暴ニ揚妻罪一賤夫事、斯識明神用レ意深、

天公設レ險筥根山、山上更憐湖水閑、往蹇來連占得者、他時當位莫レ忘レ艱、

巖路馬難レ進、坂泥猿亦淘、馱夫歌不レ得、箐裡但號咷、

下來橿木坂、屢問近耶遠、翻想世途難、嶮巉轉覺レ穩、

玉笥山偶作五首　菊池禎

何處淹留好、秋光玉笥東、臨レ流魚發々、遶レ舍樹葱々、巖室分ニ丹溜一、溪橋架ニ彩虹一、久爲ニ丘壑客一、披髮沐ニ山風一、

雲壑回レ村合、人家傍レ岸連、階看ニ靈液瀉一、杯泛ニ濁醪一傳、浴罷移ニ蒲席一、醒來漱ニ石泉一、悠然催ニ假寐一、白日夢相牽、

幾處相延過、家々似レ避レ秦、心閑垂釣客、身擬挂冠人、衣帶知ニ交緩一、禽魚任ニ性馴一、莫レ言期ニ重到一、溪上恐迷レ津、

輕屐乘ニ新霽一、秋山曠覽回、雲深阿育塔、蜂出大平臺、蕭寺尋ニ松徑一、空林掃ニ石苔一、欲レ窮ニ幽邃境一、又上碧崔嵬、

蛇河明ニ午景一、駒岳秀ニ秋陰一、應接偏無レ暇、堪レ酬ニ我賞心一、哀猿驚ニ靜嘯一、啼鳥和ニ行吟一、猶問ニ巖耕者一、前山更幾深、

玉笥吟

余有ニ郤疾一、携レ內以浴ニ玉笥溫泉一、遊賞之間、得ニ詩若干首一、　紀德民字世馨號平洲

夫婦同携去、遙看玉笥秋、休レ疑隱居服、不ニ是灞陵遊一、

山農梲本輕、戶々安ニ生計一、何有ニ狗兒鳴一、柴門夜不レ閉、

爺年四五十、孃年三四旬、提携小女子、問訊東都人、

白雲生ニ四壁一、萬象坐來無、唯疑輕擧去、縹緲在ニ仙衢一、

小蹊斜一轉、寂寞梵王宮、昨夜鐘聲近、知從ニ此處一通、

孤燈山館靜、曉夜猶吟哦、颯沓前溪雨、漸聞水響多、

嶺樹懸二初月一、藤蘿白露清、隔レ溪猿嘯落、援レ筆難レ爲レ情、夕陽連二雨足一、暗與二古人一符、絕叫玉摩詰、陰晴衆壑殊、蕭々山館雨、愁夢幾回驚、曉聽鳥語喜、先知山光晴、蹈盡萬重雲、驚看千頃水、已覺出二人間一、仙居何處是、天路凌二雲霧一、遙登玉笥宮、夕陽嵐氣淨、嶽影倒二湖中一、雲樹連二山驛一、看迷函谷關、揚レ鞭細指點、此去張州還、半溪秋日午、顧望白雲陲、爲レ別二山中勝一、彷徨步自遲、寺古餘二禪窟一、弧雲起二石牀一、徘徊人不レ見、唯聞木犀香、誰道白雲色、不レ堪二持去贈一、欲レ知二林壑趣一、見二我遊山詩一、

相峽紀行節錄一篇　　目黑忠宇恕公

大山第一

余弱冠好レ遊、每レ望二富嶽一、有二登陟之志一、嚮慨然未二嘗有レ忘二于懷一、丙申七月、與二井上純卿一、本間段衛二訂一共遊一焉、越十四日月午將レ發、純卿有レ故不レ果レ行、余及二段衛一、意揚不レ能レ禁、擔レ簦躡レ屩、出二郭門一循二東海一、抵二大森一、買二舊艋一、是夜海上往々有レ火、詢レ之廼知耀レ蝦也、到二金川一、舍レ舟而陸、歷二稈谷驛一、得二栢尾村一、右有二一徑一、是走二大山一之路也、歷二長護用田門澤橋一、濟二戸田川一、過二糟谷石倉一、薄暮抵二子安一、是爲二大山麓一矣、大山之形、一峰十五里、孤立傑出、兩嶺翼二峙東西一、其中自爲二大谷一、人民宅二於此一、溯水繞レ之、谷口曰二子安里一、里右有二子安神祠一、又左折數百步、有二子安觀音一、庶下一柱、倒弱將レ仆、刮以作二達生符一也、里名亦藉レ祠以稱矣、峰之下者曰二大瀧里一、蓋藉二水名一矣、東嶺曰二雷山一、震雷所二窟宅一也、其西則溯水懸崖、爲二瀑布一者四、最下曰二愛宕瀑布一、其上曰二良辨瀑布一、開山良辨者、屢浴二於斯一、故受レ名焉、最上曰二二重瀑布一、水爲二二層一流故也、瀑布與二明王殿一相對、其上有下走二日向山一路上、此亦有二小瀑一、其傍有二古樹一、大可二十圍一、中心空豁、土人云、有二巨蟒蟄焉一、前レ此五年、有レ火發、自二大山巔一、飛著二彼樹一、炎燄掩レ天、樹中發レ聲、振二山撼一レ谷、火滅觀レ之、有二巨蟒焚死一、長丈餘、髑髏大可二一圍許一者、是神慮二其爲一レ良之害一、焚レ之云、其西者曰二山人岡一、人家與レ岡之間、近二峰下一有二瀑布一、曰二大瀧一、是最鉅者、故得二此稱一焉、大瀧里乃其東也、大瀧里上有二明王殿一、謂二之前不動一、自二子安谷口一至二于此一十有餘里、足皆仰二歷石階橋梁等一、得レ抵二于此一有二岐路一、左曰二女人坂一、不二甚嶮一、右曰二男子坂一、惟石巖々、鑿レ石容レ趾、如レ履二大人武一、然足探二山骨一、手扳二葛蔓一、匍匐躋レ壁、每二一町一立レ碑爲レ記、十三町而有レ門、扁曰二安部利山一、十四町而道右僧房連レ薨有二八大坊十二坊者一、宅焉曰十五町而又有レ門、扁曰二大山寺一、明王殿宏麗、明王像者、東大寺良辨所レ刻、殿亦辨師草創云、近世大猷廟、再興、廢繼レ絕、制造倍二舊矣一、明王殿西有二石華表一、過レ之登二絕頂一、其路比二男子坂一、不二甚峻一、亦少二岩石一、往々赤埴、故雨日泥濘、不レ便二登陟一、不レ至二于祠二里一、有二石華表一、其西有二懸崖一、深可二千仞一、窺之目眩、名曰二來迎谷一、過レ之復有二木華表一、扁曰二雨降山一、凡經二二十有八町一、神祠在焉、北曰二大天狗一、西曰二小天狗一、中央曰二石尊一、祠各三楹、有レ墻繞レ之、神前並設二一鏡一、不レ知二所レ祭何神一也、古老云、往昔富士小嶽太郎、東行天遊、至レ此踞二石上一、後奉爲レ神、稱二石尊一、是日雨甚、霧合雲集、不レ辨二咫尺一、搔レ首而下、抵二十八町一、有レ榜題曰二蓑毛路一、是登二富嶽一者所レ由也、二人由而右折下レ阪、

發二大山下一　　石作貞

下レ嶺投二村舍一、白雲夢亦閑、今朝試回レ首、不レ辨二昨登山一、

大山道中

數日離レ城爲二勝遊一、江山到處一凄幽、都門絲管常如レ涌、孰二與村歌打麥秋一、

武庫山　　釋義堂

憶昔神人瘞二甲兵一、至レ今武庫有二山名一、峰如レ鋤也嶺如レ戟、好與二君王一鎭二不平一、

大山是源公征伐之時、立二旗于此一、故名二源氏山一、又名二旗立山一云、

山崎嘉

北斗谷東源氏山、山頭松栢勢蟠蜿、東夷方レ命永平日、元帥旌旗安帝寰、

江島二首　　林　忠

江島從來神女居、鳳簫霧鬢駕二雲輿一、遊人若有二登仙意一、水府應レ傳柳毅書、

借問島中人、不レ知此孰神、蜿々遺蹤在、君其問二水濱一、

同

金龜山裏一乾坤、松徑杉間竹筧蜿、但訝靈場有二天女一、欲下拋二南海一與中鯨鯢上、

○山崎嘉

宇賀神存江島窟、石磐凹凸向二溟渤一、潮瀲路漣黑漫々、時倩二松明一爲二拜謁一、

○山崎嘉

渡レ水陟二崔嵬一、雲煙渺壯哉、數峰秋樹合、萬里暮潮來、境近二登山理一、人非二作賦才一、風塵如可レ脫、何必憶二蓬萊一、

○太宰純

玉山屹立入二蒼溟一、初到飄然忘二世情一、明暗影隨二林厚薄一、斷連岸在二汐虛盈一、白頭翁語二神仙蹟一、黔首民爲二釣綱營一、不レ識蓬萊何處覓、逍遙靈地日西傾、

○大高季明

仙姬宮下帶二餘暉一、白鷺磯頭行路微、千巖樹色寒花落、萬壑水聲疎雨飛、江邊鴻雁夕陽盡、城上雲霞古木稀、卽今惟有二山中客一、薄暮空林匹馬歸、

○齊必簡

神靈何歲降、孤島海中搖、碑斷苔痕破、巖高濤勢驕、兩宮紆曲逕、深洞去來潮、老少披レ襟處、怡然滌二世囂一、

○天　爵

一望東溟勝、晴光柱杖前、畫中孤島出、鏡裡片帆懸、翻浪鯨

身際、落霞曇氣邊、可レ知塵世隔、巖洞現二天仙一、○香山彰
海心孤島聳岑崟、碧樹玲瓏貝闕深、月底欲下探二龍穴一去上、洪
濤卷レ雪撼二鰲簪一、○山梨治憲

湘南尋二聖蹟一、遙入彩雲中、石磴凌レ空邃、玉樓向レ海崇、傍レ
溪瑤草馥、繞レ徑琪花紅、風皷琵琶韻、境鄰娑羽宮、濤高交二
梵唄一、洞窈入二圓通一、靈窟禮二天女一、登臨豈有レ窮、○岸鳳質

同三首　釋墨莽

金龜何歲載レ山來、海氣接レ空送二激雷一、作賦縱堪二枚叔思一、
獨將二杖錫一卓二崔鬼一、
吾徒分衙事二風游一、象外盡來天女洲、白足行耽二煙水美一、裁
餘九月廣陵秋、
人間不レ識湘中道、褰レ榻曳レ笻伴二倩老一、雨霽平明何所レ似、
瑠璃盤上擎二蓬島一、

遊江島

妙音孤島對二天居一、危木懸崖萬丈餘、臨海斷碑秦代字、轉レ
沙比目越王魚、潮來巖穴龍蛇走、珠散風濤蜃蛤虛、白日
青雲溟色盡、乘レ舟欲レ問二十洲墟一、○服元喬

神鼇抽二碧海一、玉女降二銀臺一、孤島濤聲響、層崖水氣開、
截レ流經レ境到、探レ腺蹈レ巖來、禹穴疏二青壁一、秦碑繡二紫
苔一、日升暘谷浴、潮湧尾閭堆、雲起迎二鯤化一、珠紛產二蚌
胎一、蒼茫環二渤瀣一、咫尺縮二蓬萊一、六國交二天末一、群檣礙二斗
魁一、龍湫窺レ底駐、仙窟鑿レ空回、何有二迷津者一、還堪レ借二渡
杯一、○高惟馨

孤島如レ烟接二海洲一、曾傳神女此天遊、龍宮春鎖濤聲靜、仙
窟書開蜃氣浮、須レ有二琵琶彈一古曲一、欲レ將二杯酒一寄二風流一、
紫霞紅日堪レ乘レ興、不レ信雨雲朝暮愁、○菅道伯

扁舟縹渺到二蓬瀛一、雪鎖上宮天路清、濡レ足怒濤觀二日出一、
停レ杯危石覺二雲生一、龍淵夜識金銀氣、神窟曉聞雞犬聲、大
藥人間求非レ易、幾時此地學レ仙成、○菅道伯

乘レ遊臨二碧岸一、探レ勝蹈二青巒一、碣石長天盡、扶桑旭日寒、三
峰雲裊々、六國海漫々、霧霽曬龍窟、風清玉女壇、遠帆分二
赤壁一、孤島浸二波瀾一、縱レ目神鼇背、蓬萊指掌看、○源定賢

滄海漫々仙島孤、浮レ槎疑是到二蓬壺一、拂レ雲危樹千尋秀一、
捲レ雪驚濤萬里趨、仰望二蜃樓一含二紫氣一、俯臨二龍窟一吐明
珠、騷人吟詠偏堪レ賞、向レ夕風光似二畫圖一、○金中球字士琳

誰道三山不レ可レ尋、仙遊偶唱步虛吟、雨龍將レ起雲籠レ洞、
羽客欲レ來風滿レ林、天女琵琶懷二月色一、梵王臺殿聽二潮音一、
無レ因海若襄レ陵力、一叩二神閽一蕩二碧岑一、○石作貞

天女祠前戊巳晨、詣徒洗レ目大觀親、群蠻被レ髮風二洲樹一、豪
客褰レ裳探二窟神一、江海高煙人市外、蛟龍瑞氣嶺珠津、鬟童
時欲レ通二靈夢一、不斷潮聲破レ睡頻、○江忠囿

金龜孤島鎮二關東一、琪樹玲瓏此地雄、青壁高懸天女洞、白波

直撼妙音宮、鰲身堪レ曝扶桑日、鵬翼將レ搏溟渤風、知是三
山應レ不レ遠、樓臺總在二彩雲中一、○千葉玄之字子玄號芸閣

妙音祠廟倚二丹丘一、相海登臨萬里秋、多少瑤臺連二蜃氣一、參
差琪樹挿二鼇頭一、日升雲霧披二三島一、天潤波濤繞二十州一、御二
得長風一從レ此去、神仙何處不二同遊一、○松延年

妙音天女殿、寄レ跡水雲深、湧出孤峯上、蒼茫大海心、
蜃樓疑二隱見一、鼇背懼二浮沈一、回レ舫蚌中月、獻レ珠升二島
陰一、○岳　融

忽極二登臨目一、南溟指二素秋一、日含二孤島一湧、雲傍二十洲一流、
隱見魚龍窟、參差蛟蜃樓、飜揚仙路近、直欲レ伴二浮丘一、
○源　鱗字文龍號東江

勿レ言洲似レ畫、誰寫鬼神工、雲鎖蟠龍窟、霞明天女宮、山
從二坤軸一湧、氣自二富峰一通、靈艸含二甘露一、奇花開二惠風一、珠
樓光掩映、玉樹影玲瓏、福聚巖迎レ客、蟾蜍石吐レ虹、檻前麟
潑々、皆下雨濛々、音妙靈妃瑟、眼高望月熊、舊題留二絕壁一、
新墨托二彫蟲一、白菊淵長古、金龜名不レ空、驚潮千里外、遙嶺
一杯中、變幻情何限、壯哉造化功、○伊藤一元

妙音孤島倚二崔鬼一、神女相逢步二石苔一、南望漫々滄海上、
驕濤捲レ雪接二蓬萊一、○川榮壽

天女降二孤島一、龍宮閟二古墟一、地隨レ波下上、淵與レ月盈虛、
危木千年外、斷崖百丈餘、蜃樓臨二島道一、鮫室雜二僧廬一、苔
蝕秦碑字、雲封禹穴書、鵬圖堪レ極レ目、鼇背欲レ褰レ裾、
求レ藥雨晴後、探レ珠潮落初、自疑吾骨化、稍覺世情踈、窈
窕窺二仙窟一、飛揚逼二帝居一、從來靈異境、無二客不二躊躇一、
○牧野履字履御號鉅野

扁舟破レ浪御二長風一、上レ岸先攀天女宮、鳥道斜連二龍穴路一、
漁家直與二蜃樓一通、觀レ濤枚叔猶應レ拙、賦レ海玄虛未レ許レ
工、興罷旗亭聊把レ酒、彩雲遙落客杯中、○熊阪邦

書島眺望　武　龍字孟玉

煙含二孤島一鎖二名嶼一、此日登臨風色驕、玉樹丹崖浮レ海出、
芙蓉白雪倚レ空遙、仙人駕レ鶴雲來去、龍女凌レ波月動搖、歸
棹忽疑從二博望一、星槎一片下二青霄一、

望二書島一二首　熊阪邦

自喜名山採レ藥回、寒汀翹レ首望二崔鬼一、波光高映金銀闕、霞
色偏含天女臺、忽訝羈人追二羽客一、還從二方丈一向二蓬萊一、彩
雲咫尺神仙氣、爲訪二沙村一酒復開、
巨鼇終古載二神山一、龍伯釣餘滄海灣、漢代少翁何得レ識、秦
時徐福未二曾攀一、瑤臺隱見烟波外、珠樹玲瓏縹緲間、此日好
乘二輕舸一去、中峰一謁列仙一還、

和下高子式遊二書島一觀濤之作上　秋　儀

海上巍々天女臺、登臨此日壯遊哉、潮驕二貝闕一千鯨吼、勢
捲二銀山一萬馬來、暫爾扶搖生二羽翰一、居然咫尺間二蓬萊一、篇

成七發飛揚劇、君自當年枚叔才、

乘レ舉渡レ海至二書島一潮水暴至　安　脩

不レ用泛二仙查一醉憑二籃輿一渡、忽驚海若來、風浪蹴レ天怒、

遊二書島一風雨波惡不レ能レ探レ窟　川榮壽

孤島人間外、綵雲千里連、窟臨滄海上、宮秀碧山巔、風雨來搖レ樹、波濤起蹴レ天、明珠探不レ得、何處驪龍眠、

題二江島石壁一　服元喬

風濤石岸鬪二鳴雷一、直撼二樓臺一萬犬廻、被髮釣レ鼇滄海客、三山到處蹴レ波開、

和下子遷先生題二江島石壁一作上　越智正珪字君瑞號雲夢

碧海祠壇捧二玉盤一、金龜山上夏雲寒、知君試賦觀濤色、不レ讓枚乘八月看、

夜宿二書島一　高惟馨

潮廻孤島繫二扁舟一、夜半偏憐海上秋、不レ爲二驚濤能破レ夢、那知明月照二龍湫一、

宿二繪島一　岡崎信好字師古號盧門

雲水渺茫相海中、金龜島霽興何窮、潮聲近湧龍蛇窟、月影高輝神女宮、七里漁濱沙似レ玉、千帆商舶葉隨レ風、擧レ杯勝景堪二相賞一、一夜閑吟旅思空、

宿二江島妙音閣一　餘承裕字子綽號熊耳

雲晴海嶠宿二岧嶢一、月朗龍宮照二寂寥一、只有二梵音驚二客夢一、通宵不レ寐坐聞レ潮、

舟泊二繪島一　平賀周臧字子英

淡靄輕煙路渺漫、海風不レ便上レ潮難、平沙維レ艇收二漁網一、斷岸燃レ燈下二釣竿一、虛郭三聲暮笛響、孤篷一夜踈鐘寒、榜人鳴レ櫂天將レ曙、唯有二還家片夢殘一、

遊二書島一宿二山寺一　山村良由字君裕號蘇門

令龜島秀彩雲間、求レ寺羊腸薄暮攀、窓外波濤千里水、巖頭樓閣萬尋山、目親二鷗鳥一心偏淨、耳伴二松風一夢亦閑、一夜自疑天上住、何堪明日向二人寰一、

中秋遊二書島一賞レ月　高惟馨

鼇嶼東南縮地開、海天秋色抱二蓬萊一、探レ珠月湧驪龍窟、懸レ鏡潮明玉女臺、有レ客欲下攀二仙桂一去上、何人更汎二斗槎一回、今宵獨坐曇磯上、萬里觀濤酒一杯、

月夜宿二江島一　鵜孟一

孤島崔嵬石逕通、躋攀神女妙音宮、樓頭人倚諸天月、洞口龍吟半夜風、鏡度清霜凄滿レ地、珠搖滄海皎連レ空、更闌不レ寐聽二波響一、疑和二琵琶一入二曲中一、

月夜宿二江島一　川義豹

孤島玲瓏天女樓、投來一夜入二清遊一、陰波偏映二陽波一起、巖月遙兼二海月一浮、雲表龍碑金蘚色、階前蟾石桂花秋、飄然坐覺人間遠、欲下向二重溟一問上十洲上、

月夜宿二江島僧院一　平賀周臧

洞口雲晴孤島頭、良宵投宿倚二香樓一、諸天月傍二龍宮一動、千仞珠當二鮫室一浮、幽梵爾時心地靜、妙音何處帝妃遊、更闌坐訝傳二清怨一、波響夜驕湘水秋、

書島遇レ雪　高惟馨

蓬壺海上雪漫々、玉女臺高玉樹寒、欲下向二潮流一迷申暗穴上、明珠別自照二龍蟠一、

書島晴雪　安　脩

神山高泛海溟孤、登眺乾坤似二畫圖一、萬里潮風吹二杖屨一、千巖氷雪映二肌膚一、瑤林瓊樹花晶瑩、金闕銀宮影有無、向レ夕忽聞仙樂起、乘レ槎直訝到二蓬壺一、

雪後遊二書島一　釋萬菴

鼇頭山現畫圖中、萬仞驚看天造工、雪滿懸崖垂二玉樹一、雲晴斜日射二瑤宮一、凌レ波神女羅裙冷、駕レ鶴仙人素影空、借問秦年汎レ槎客、寧知此地十州通、

遊二書島一値レ雨　岳　融

浮洲神女殿、蒼壁鏡中開、屋氣巖廊合、龍蟠石岸廻、星查凌二蚌月一、鼇首踐二梯苔一、嶽雪藏レ空盡、天風扇レ海來、雲張二鵬翼一起、水撒二浪花一摧、自改麻姑眼、誰銜欒子杯、傾レ盆過二急雨一、覆レ島濺二連臺一、已有二高唐色一、慚無二宋玉才一、

妙音宮　安　脩

珠樹映玲瓏、妙音天女宮、人傳明月夜、鼓瑟響二清風一、

古碑　相傳、僧良眞渡宋、得此以歸、篆額曰、大日本江島建寺之記、匝刻雲龍、碑文楷書、風雨剝落、僅存數字、趺首已亡、碑身亦橫斷、

斷碑風雨剝、千載字纔存、拂拭龍蛇動、忽看雲靄屯、

石牀　在龍潭上

湛水碧如レ藍、開レ樽石牀上、忽欲レ窺二眠龍一、半酣神氣王、

龍窟

懸崖萬丈餘、下有二驪龍窟一、欲レ奪二千金珠一、波瀾俄驚沸、

蟾蜍石　相傳、僧良眞說法于此、蟾蜍化爲石、

蟾蜍何歲化、巨石挂二清池一、寒影浮レ波動、尚思說レ法時、

江島小兒淵　釋萬菴

信夫毳土鍛金腸、翔雲鐵錫掛二瀟湘一、江中孤嶼撫二靈境一、天女祠前蘋草香、路逢二綽約少年子一、顏色耀然若二桃李一、搖二蕩禪心一似二亂雲一、慇懃攬レ手誓二生死一、少人睇眄意經營、慘愴青翰舫裡情、百撞千桃伸二款曲一、低頭不レ語淚如レ霰、誤託二風塵一爲二窈窕一、丹丘縹緲瑤臺杳、徒因二容質一累二他人一、繚繞宿心憂悄々、無レ路乘レ鸞蹈二綵烟一、翻然拘レ石墜二蛟涎一、道人求レ跡號レ天哭、偕沒二巖潭一赴二九泉一、浩渺慈河誰盡レ底、濫觴須レ識無二眞宰一、波間纖月曲如レ鉤、萬古秋風吹二渤海一、

新編相模國風土記稿卷之七 終

新編相模國風土記稿卷之八

藝文部卷之五

經二七里濱一入二鎌倉一云是古戰場、慨然作レ歌　服元喬

伊昔鎌倉古障堡、新田猛將自二此道一、相陽猶餘十萬兵、守レ隘無二地虛可一レ擣、稻崎回岸海水高、旌旗閃々遍二洲島一、三軍義烈泣二鬼神一、大將沈レ璧爲二懇禱一、須臾廣斥退潮乾、海變二桑田一破二天造一、前隊已聞拔二郊壘一、殺傷積祟如二稂莠一、攙搶暴出相山搖、海藻顚倒大鯨死、君不レ見、古來戰場血流レ鹵、今日主客皆黃土、黃土空埋蒼精龍、波洗二尺鐵一無二全鋒一、洲沙漠々行人望、唯有二當年老古松一

行經二七里濱一　高惟馨

東南大海接レ雲開、流沫侵レ沙日夜廻、濤勢蹴レ天飛似レ馬、潮聲動地殷如レ雷、驪龍窟抱二明珠一出、仙女壇懸二紫氣一來、七里灘頭饒二釣叟一、千秋誰問子陵臺、

七里濱望二書島一　湯元禎

仙嶠浮空百尺臺、綵雲深處廻崔嵬、狂來觀日滄溟客、欲下蹈二金龜一作二渡鰲一上

七里濱觀レ濤　安修

相山盡處海天開、南望驚濤捲レ雪頽、直訝千鯨爭噴レ沫、隨レ風頻洒二客衣一來、

七里浦得二浮石三四一而懷レ之有レ作　熊阪邦

珠璣萬斛不レ知レ收、片石翻憐水上浮、爲道明朝裁二禹貢一、那須臾向二泗濱一求、

由井濱　藤原肅字猷夫號惕窩

萬竈煙籠鹽舍檐、洒潮斥鹵日相添、汲時抹レ月煮時雪、渠亦才高不レ道レ鹽、

由井濱燒鹽二首

有レ山如レ赭無二薪取一、物產怪看曾不レ常、晨竈炊煙非二桂玉一、旋燒二黑石一煮二黃粱一、

狂風平日轉二羊角一、滿陌浮埃沒二馬頭一、燒レ鹽人擔二暮潮月一、賣レ酒客來二街市樓一、

由井濱偶成　并序

簸之揚レ之、粃糠在レ前、沙レ之汰レ之、瓦礫在レ後、此是孫習相戲之言也、今日見二由井之掘レ金者一、沙汰簸揚唯謹、曰蓋似者多、而眞者少、故擇レ之精一也、不二精一一、則終日營々、不レ得二秒忽一、予因思レ之、令下二人主一見上之、則必知レ擇レ士乎、今之主、宰二于人物一者、概而不レ知レ擇レ之、知レ擇レ之者、亦不レ知レ精二一之一、或認二在レ後之礫一、而爲二精米一、或誤二在レ前之糠一、而爲二金玉一、難哉得二物之眞一、精一執レ中然後必得、雖レ然、是豈金工得レ金而已哉、人主得レ士而已哉、令下二一身之主一見上之、必得二道之眞一乎、身之主與二人之主一孰親、道之眞與二金之眞一孰多、身之主者、尊二於人之主一、道之眞者、重二於金之眞一、以自警云、

寂寞貧窮由井濱、平生嘗盡幾酸辛、民擇二黃金一君擇レ士、吾于二心地一要レ求レ珍、

民貧由井濱、辛苦奈二呻吟一、臣竇主須レ擇、自珍我不レ淫、眼遭二沙塵眯一、肌被二土風侵一、愚莽可レ憐者、爲形又役レ心、

由井濱　山崎嘉

拔レ山扛レ鼎亦那特、不レ忘レ失レ元方是士、白浪古今由井濱、曷時雪得島郎耻、

餘綾礒眺望　高道昻

古驛綿連大海灣、褰レ裳濡レ足向レ東還、鰲身未レ見重溟外、戴去蓬萊第幾山、

宿二姑餘綾驛一　滕褒

秦牧鎭二東府一、漢封開國勳、壕池綾海大、天險玉函分、樂土魚鹽足、比隣雞犬聞、郵亭殊綺錯、驛馬且繽紛、上路邀二驅傳一、東方駐二使君一、樓鐘報二行漏一、城樹斂二斜曛一、別有二幽人宿一、將レ隨二野鹿群一、賞心期二絕境一、夢思傍二閑雲一、問レ夜剪二紅燭一、望レ關窺二紫氣一、誰知豐劍氣、向レ曉犯二星文一、

小磯里茶店口號　熊阪邦

大磯小磯浦口、從レ某至レ某海濱、秋色遙看媚レ客、晴暉忽欲レ留レ人、

飲二小磯里一望二餘綾浦一

古驛旗亭且試憑、遙看海氣接レ天澄、洲邊雲散留二紅樹一、浦口霞消餘二紫綾一、把レ酒神交三島客、吟レ詩目斷九霄鵬、更憐漁艇隨レ波去、萬里長風庶可レ乘、

多胡江即事　安脩

江上秋寒霜落餘、草枯風色轉蕭踈、呼レ翁聊勸一盃酒、微笑開レ篷贈釣魚一、

六代公子墓在多胡江畔

野橋行渡漸黃昏、傳道江濱古冢存、秋老淒風蘆荻亂、不レ如何處弔二孤魂一、

相模川　高道昻

昔絕二長橋一今有レ舟、舊名不レ改是相州、立看二渡子刺レ篙處一、河水雖レ深非二急流一、○林　忠

鞍馬肩輿來往舟、相模河在二相模州一、憑夷不レ廩二重成志一、橋絕人亡水自流、○林　恕

客路迢々莫二與儔一、渡頭競處此躊躇、水深流急亦橋絕、馬入相模河上舟、○山崎嘉

馬入渡

風雨乍晴中島村、素天日炅遠人奔、鞏レ纏叱々起レ鞭去、
馬入船中競レ渡喧、

泛二馬入一川（即相模川也）　菊地東勻

相模川急漲二風濤一、雨後勢雄難レ受レ篙、水性多年諳得久、
舟師弄レ楫操二輕舫一、

馬乳渡　高道昻

信レ馬就二泥沙一、水淺試二馳歩一、日暮臨レ渡人、一時皆廻顧、

馬乳舟中望レ嶽　滕　褒

津口登レ舟處、嶽蓮含レ雨時、流雲抱二高掌一、更覺削成奇、

馬入河　熊阪邦

爲レ聞二建久事一、不二敢乘一レ驄過一、只恐雙龍劍、腰間躍入レ波、

酒匂川（一名菊河世所云遠江國菊河者、非是）

地有二酒泉一天酒星、永令下二世俗一惹中虛名上、酒匂菊水一河
上、未レ有二一盃浮一落英一、　○林　忠

驛樣行盡幾郡縣、酒匂河流水濺々、柳營信宿建久年、緬
懷此邊廻二組練一、　○林　恕

今古山川無レ不レ常、人間只是見二存亡一、存亡所レ繫君須レ識、
爲寄二河名一語越王一、　○山崎嘉

泛二酒匂一　菊地東勻

酒匂水漲浪開レ花、膽落行人立二兩涯一、竿影高飛船有レ翼、
一條界破滿川霞、

攀峯望二酒匂河一　菊地禎

攀峯竦處極二躋攀一、臨眺蒼茫落日閑、解道川原迷二舊國一、
練光浮動白雲間、

過二酒匂河一懷二祐成兄弟一　熊阪邦

二曾西渡酒匂河、並レ馬翻成易水歌、壯士不レ還寒自若、
秋風吹起舊時波、

滑　川　山崎嘉

數百年來青砥事、居民行客口碑傳、大癡小黠笑二迂濶一、出二
五十錢一覓二十錢一、

滑　水　秋　儀

白日清流滑水涯、昔人心事有レ誰知、唯餘石上莓苔色、猶
似二青錢墜却時一、

花水橋看二流水一　大高季明

高山千古峙、花水萬年流、逝者誠如レ此、來之更可レ求、鑿レ
岩形自健、順レ物用還柔、料得有二深意一、橋欄好レ繫レ舟、

花水橋　高道昻

人跡花源少、霜前過二板橋一、武陵人不レ見、獨自滌二煩囂一、

三花橋上望芙蓉峯一不レ見有レ作　熊阪邦

芙蓉西望望難レ分、不レ恨今朝隔二海雲一、聞道出レ關一千里、
青天無二日好無一レ君、

鷄起皐　釋敬雄

鷄起皐空斷碣殘、蕭條古寺鎖二春寒一、門前更有二望夫石一、
多少行人墮レ淚看、

鷄起谿　熊阪邦

風色蕭條入二苦吟一、溪邊訪レ古一相尋、野禽不レ管星霜換、
依レ舊翻飛碧水潯、

星月泉

星月寒泉小院東、晝看星月落二波中一、忽疑天上銀河水、還
與二人間古井一通、

腰越、是源廷尉以二平將一來、爲二武衛一所レ拒、數日
逗留、上二申狀一之地也、今滿福寺者、其宿處、而申
狀草創猶在焉、且誌【東鑑】所載、首尾有左衞門少尉
五字、愁作紅抱作胞、想夫淨寫添之改
之、其他異處不遑致詳矣、曾謂以二梶原之讒一、傷二兄弟之恩一矣、
然廷尉誇二勇功一、無二畏敬一、讒之來自速レ之耳、至二
其遂不レ得レ入二鎌倉一、歸レ洛要二院宣一、則天討之所二
必不レ容也、昔周公誅二管叔一囚二蔡叔一降二霍叔一、廷
尉之才、固不レ可下以二霍叔一待上之、則武衛之擧、
未レ爲レ過矣、但以レ殺二參河守一、合案レ之、則晉獻之
事、而與二周公之誅一同行異情者也、　山崎嘉

徒歸二咎讒人一、更不レ識レ求レ身、申狀今空在、視池浮二絲
蘋一、（寺中有池、相傳是辨慶書申狀之水、故以硯名、）

腰越懷古二首　熊阪邦

廷尉功名西海濱、歸來貝錦織成新、雞號二函谷一仍留レ客、
狗入二桑宮一反噬レ人、空抱二忠誠一懸二白日一、還思二父母一怨二
蒼旻一、生平徒誦腰亭帖、一歷二遺蹤一淚滿レ巾、

覇主曾過相海濤、曉看玆路有二遺金一、農夫旣勵甄彬操、漁
父還高羊子心、共說淸廉成レ俗日、能令下二德義一入レ人深上、
世情已逐二滄桑一變、孤客回レ頭感二古今一、

稻叢懷古　太宰純

沙汀南望浩二煙波一、聞道三軍自レ此過、潮水歸來人事改、空
山迢遞夕陽多、

稻村懷古　川榮壽

當年戎馬滿二山東一、大將先祈戰伐功、相海潮乾龍鉾德、鎌
城兵畏虎臣雄、一朝氛浸鎖二關外一、九代榮華歸二夢中一、弔客
不レ知營壘處、更披二圖書一問二村翁一、

稻叢崎　樺島公禮

將軍從レ天下、大海須臾乾、一自二鯨鯢驚一、于今白日寒、

扇　谷

一水繞二幽溪一、麥壠兩三頃、往時公侯家、唯有二舊扇井一、

花谷（古有慈恩寺、多種花樹、芳菲之節、游人成群、）　熊坂邦

祇苑曾栽千樹花、春游士女鬪二繁華一、風塵一起絃歌罷、虛
谷迢遙暮鳥譁、

朝夷鑒　松延年

朝郎鑿路接二鎌臺一、十里丹屏滑二石苔一、仰望二青天一天若レ髮、應レ同蜀道五丁開、

十塚晩宿、孝翁出而語レ子云、昔蒙民爲レ黨、殺二越人于貨一焉、有二夫妻一過二于此一、爲レ賊所レ殺、其妻爲レ鬼、屢惱二過客一、一武人遇レ之、問二其情狀一、鬼對陳以レ冤、於レ是乎事覺、巨魁同黨共十人、悉梟二于此一、因名云レ爾、（俗謂戸塚非也、）是與二漢蘭亭之事一、異域同日之談也、

山崎嘉

周易慇懃垂二戒箴一、旅人可レ恐喪二童心一、滴時不レ有二蘭亭事一、那倩漢朝王少林、

晩投二戸塚一侯賜二雙鬼一　菊地東勻

戸塚晩投郵舘中、雙鬼惠賜也恩洪、明朝試著王喬舄、不レ蹈二紅塵一騰二碧空一、

早發二斗柄驛一向二鎌倉一途中作　湯元禎

蒼茫山靄驛樓西、澗水縱橫路欲レ迷、忽看雪裏芙蓉月、邀レ我飛來傍二馬蹄一、

戸塚曉發　山梨憲治

驛馬嘶二殘月一、驅人蹈二曉烟一、泥深多雨路、鐘渡五更天、程谷雲生樹、金河海作レ田、鎌倉興廢事、回レ首一茫然、

藤澤（去鎌倉二里許、此處有遊行上人隱居）　林忠

此去二鎌倉一二里中、雨天眺望馬忽々、猶過藤澤山前路、馬首東風又向レ東、

藤澤道中沙上鼓子花盛開　菊地東勻

雨露潤レ枯沙做レ堆、結花鼓子晝方開、托レ根雖レ不レ得二其所一、幸免二人爭折取來一、

夙出二藤澤一　大高季明

旅懷終夜不レ成レ眠、推レ枕披レ衣坐二月前一、數聽二鷄鳴一臨二坂徑一、兩三星點曉雲邊、

晩抵二藤澤驛一　安脩

行迷藤澤口、黯澹暮煙深、蕭寺知何處、風傳鐘聲音、

是夜雨

殘燈明復滅、風雨夢魂驚、敧レ枕幽窻下、適聞鈴鐸聲、

藤澤驛　菊地禎

朝過藤澤驛、海色渺二風烟一、姥島空波外、雞山積翠前、林陰宜レ避レ暑、溪上或聽レ泉、旅況行應レ熟、班レ荊列樹邊、

金川渡海到二三浦一　服元喬

三浦懸帆破二白波一、江山改レ觀入レ看多、相迎海若爲二驕色一、乘二去長風一一笑過、

浦賀三首

相中大港繞二江山一、萬戸人家兩岸間、一夜西風吹不レ盡、千帆飛入海門關、

海上關門積水寒、江湖猶恐避レ人難、不レ圖自有二隱君子一、枉作二青牛紫氣看一、

三浦三崎十洲邊、海南海西萬國船、應レ爲二鼇頭流不レ住、相逢多是播遷仙、

宿二浦河海樓一　滕骏

日夕纜投宿、樓臨大港邊、江心濤色靜、關路海門偏、夾レ岸千家邑、連レ檣萬國船、夜來擁二衾枕一、漁火照二愁眠一、

浦賀　大崖行（字天民號詩佛）

總房無二咫尺一、波浪隔二西東一、海氣天多レ雨、山雲晩易レ風、港平官府壯、地便土人豐、況是魚蝦美、孰與二此鄉一同、

行經二崆峒一（自鎌倉歷那越坂、抵二浦道中有大小二崆峒一、）安脩

雲煙吐納暗二崆峒一、簪纓行迷老樹中、似二是軒轅曾問レ道、不レ知何處住二仙翁一、

九里濱　服元喬

九里長濤萬里廻、海門中斷大潮來、琅邪山上先王觀、猶自吾徒遊不レ回、

杜門曉望　安脩

清曉臨二洲渚一、凄凉蘆荻風、宿雲橫レ嶺白、旭日射波紅、沙岸吟レ詩客、石磯垂レ釣翁、布帆何處去、共レ鳥沒二蒼空一、

杜門晩興　長澤純（字紀卿）

三浦煙晴水渺茫、妙音孤島帶二斜陽一、傾レ壺聊坐平沙上、一曲漁歌引レ興長、

宿二三崎客舍一（前有城島、每夜燒燭使海舶知方、）安脩

海波通二武州一、爭進估人舟、孤島燒二明燭一、三崎辨二暗流一、勞歌互相應、羈旅自添レ愁、輾轉眠難レ熟、風霜客舍秋、

城島照海燈　服元喬

城島孤燈夜似レ星、海南祠上照レ波青、千帆商船風濤裏、直望二天光一拂二杳冥一、

城島眺望　長澤純

海天孤島秀、登望渺二烟波一、商客乘二新霽一、千帆如レ鳥過、

城島望海三首　安脩

孤島岩巉渤澥天、登臨積水渺無レ前、雲開西嶽千秋雪、潮送南州萬里船、鼓レ浪鯨鯢頻噴レ沫、唳レ風鸞鶴競凌レ煙、忽疑身到二蓬瀛上一、恍見清涯餐二玉仙一、

天朗南溟不レ見レ端、空波激灩夕陽寒、曾聞龍伯連レ鼇釣、適憶河神向レ若嘆、欲レ學二長生一含二沆瀣一、好乘二高興一折二琅玕一、臨レ風忽有二飄颻思一、誰道浮丘可レ接難、

臨レ海高吟思二謝公一、恨無二佳句奪一天工一、三崎比屋寒煙外、二總連山蒼靄中、撒レ網漁人逢二霽日一、揚レ帆商客信二輕風一、誰愁夜暗迷二行路一、島上燒レ樵照二遠空一、

平塚二首　山崎嘉

驛馬進レ蹄行二一路一、野牛浮レ鼻入二前橋一、邀遊眼豁海山景、

罷晝人過花水橋、
澄景清風平塚間、溶々漾々一身寛、逝川不レ舍盈レ科進、
花水橋邊駐レ馬看、

同　大高李明

郊村物古客心閑、倥傯世情足レ俾レ頭、洛美野居平塚地、
眼看花水日潺湲、

大磯　林忠

十郎慷慨愛二於菟一、血氣武人犀甲軀、妾婦當時誓レ星否、
隕成二此石一似二望夫一、

同　山崎嘉

精工可レ憐造化權、五色石在二大磯邊一、地遼時遠女媧氏、
世上又誰鍊補レ天、

大磯海邊望二大島一　林恕

島在二氷雲茫渺中一、古來貶滴意忡々、何須小角神仙咒、休レ
挽八郎猿臂弓、

大磯捕レ魚　藤忠統

向夕往捕レ魚、捕得四五百、君若問二此游一、誰能似二僖伯一、

大磯驛眺望

蒼茫驛路客愁生、天盡征帆海水平、日落關山當レ眼近、明
朝馬首入レ雲行、

同　服元喬

驛路西連玉笥關、關雲半引二海雲一還、只餘沙磧堆レ如レ雪、
更見波濤崩似レ山、

再宿二大磯一　太宰純

五載重過舊客亭、沙中日暮少二人行一、終宵蕭索驚二魂夢一、
半是濤聲半雨聲、

大磯懷古　大高季明

晝息大磯邊、追懷於菟妍、和田當レ路日、曾我復レ讐年、酒色
能生レ惑、嬉遊易レ獲レ愆、吾人良可レ畏、一跌陷二深淵一、

早發二大磯一　竺顯常

雞鳴旅舘促二行裝一、處々村園官道傍、霜滿二橋頭一人未レ跡、
霞生二林表一日將レ光、山關指箕根西隔鄉音遠、野渡指馬入河南連
海氣長、即到二江城一時奉レ教、羞將二緇褐一對二明良一、

宿二大磯驛一　山梨治憲

三山蒼翠鬱駢羅、高麗寺邊曳レ杖過、嶺上高霞夕猶在、餘
綾海月落二春波一、

大磯宿　守屋元泰

大磯驛有二帥庵一、安二僧西行客旅倚一レ巖眺望像一、藏二一竹
杖一、節間五尺有二寸一、云是西行物、地頗高爽、帥樹點綴、
海色縹緲、相傳秋暮澤畔吟、成二於此地一、未レ知二然否一、
驛路幽棲晩氣生、斜陽半是照二柴荊一、縱令此地非二遺趾一、
遊歷誰無二懷古情一、

大磯虎石　藤原肅

有レ石相傳虎御前、大磯遺跡舊因緣、若逢二李廣一掣レ身去、
沒二羽箭頭聲響邊一、

同　林忠

於菟容色稱二無雙一、久使二輕情傳二一邦一、應二是十郎牛女誓一、
支機石落自レ天降、

大磯路邊有虎石　林恕

虎娘元是倡家人、同契貧郎捨二此身一、今日堪レ憐遊宴地、唯
題二片石一問二遺塵一、

大磯虎遺石、是曾我十郎與二其妾虎一、遊宴之地也、
十郎復讐之事、義貞軍記所レ議、實得二聖禮之旨一、
十郎自解云、有二五郎共擊之約一、是約也何義也、夫
不レ知而約レ之、則兄弟不レ可二須臾離一矣、不レ得レ
已而離焉、則當レ變二其約一也、假令不レ逮レ變之、
豈守二小信一而違二大經一哉、余今過二於此一聊書レ之
且題レ詩、以告二世之人一、　山崎嘉

孝子居レ仇合レ寢レ苫、胡爲愛レ虎酒頻添、依然遺石大磯上、
無レ限客嘲不二小嫌一、

大磯虎娘石

虎女精靈誰又回、化爲二片石一道之隈、縱令李廣飲二其羽一、
一箇貞心更不レ開、　○木下貞幹

守身百煉女貞堅、須是十郎情愛偏、相思他年死爲レ石、三
生猶托好因緣、　○菊地東勻

虎妾遺蹤東海濱、堅心固執淚沾レ巾、扶桑又見望夫石、長
劫天衣摩不レ泯、　○釋智好

千秋尚見二曾情一、意氣風流弟與レ兄、過客不レ論復讎事、
相看唯說虎姬名、　○熊阪邦

相州雜詩　川口光遠字仲實

當日繁華說二與誰一、荒村煙雨正堪レ悲、虎娘墓畔垂楊柳、
不レ似二十郎繫レ馬時一、

新編相模國風土記稿卷之八　終

新編相模國風土記稿卷之九

藝文部卷之六

二十六日自二沼津一至二小田原一　林　忠

路到二箕根一步々艱、行厨一擔慰二寒顏一、千章老樹嵐光冷、百仞涓流谷響閑、清曉星殘馬驚レ夢、暮雲天遠鳥知レ還、徵書頻爲レ辱二君命一、只見二公程一不レ見レ山、官召命至再三、故末句及此、

自二箱根一到二小田原一道中右方有レ山、其形細長、昔豐臣秀吉公擊二小田原一時、築二城于此一、其石壁猶存、近世松樹往々繁茂、感而賦レ之、

山是相模海岸邊、豐臣古壘暮雲天、八州藩衛稱二斯地一、一帶岩流號二早川一、蟻附環攻東道主、蛙黽失墜北條權、英雄忽去今何在、松樹陰々起二翠煙一、

曉發二小田原一時酒匂民家失火燒亡　林　恕

月落星稀火氣浮、可レ憐編戶遇二斯憂一、始疑海日生二殘夜一、終悟酒匂罹二鬱攸一、

小田原途中有レ感　安藤守經

五十一年衰老身、三千里外遠遊人、故鄉已作二他鄉一去、半是慕レ君半慕レ親、予今年五十一歲家有老母

小田原也

宿二湘南驛一　松延年

憑レ欄夜靜驛樓邊、烏鵲翻飛對二客愁一、江左隨來千里月、湘南望盡八州秋、風徐滄海濤聲穩、天朗關門眞氣浮、匹馬明朝踰レ岑去、何堪曉露濕二征裘一、

雨雪宿二小田原一　伊藤繕

暗邊雨外別潛鳴、手受乃知雪有レ聲、不下向二階除一看中片影上、故提レ燭去被二風驚一、

晨發二小田原一雨雪卒晴

檐葉濕痕白半清、矓朧初日一紅生　宿烟先自二巖稜一破、淡淡蒼蒼次第晴、

還到二小田原驛一酒川水溢不レ得レ度、淹留三日　菊池禎

寒陵河水絕二舟船一、過客愀然對二九淵一、屈レ指歸心爭二日月一、回レ頭旅館惜二風烟一、芰荷葉爛秋空老、蟋蟀聲哀夜未レ眠、唯有二鄉園勞一夢寐一、淹留尙在二酒川邊一、

小田原驛舍、山子謙見レ訪、同賦得二清字一

驛舍蕭蕭絕二送迎一、應門忽報故人名、黍雞非レ約二范卿信一、詩賦還驚謝朓清、勸レ酌函山催二雨色一、開レ軒相海動二潮聲一、窮交不レ比二村醪薄一、一醉唯須レ遣二客情一、

小田原城　河世寧　字子靜　號寬齋

伊勢新郎善用レ兵、火牛計策氣縱橫、上杉三浦大森走、佐竹武田長尾爭、威振二八州一期二勝敗一、運傳二五世一奈二枯榮一、儲胥甲士雖二堅險一、博陸雄軍孰抗衡、戰似二子顏屠一白帝一、功如二王濬虜一烏程一、唯今四海太平日、關左藩屏在二此城一、

○林　恕

城樓輝映架二巖岡一、曾是百年古戰場、海內干戈今息久、女牆閑姿滿山光、　○菊地東勻

昔城二要害一擬二荊門一、險路猶存主不レ存、石壁屏連烟散後、箭樓角峙霧晴痕、東崦酒水落二偏浦一、西岸早川出二箱根一、聞道人和邦國本、當君基業在二仁恩一、　○大高季明

望二小田原城一　菊池禎

古驛瀟瀟暮雨晴、翠微雲散出二層城一、夕陽立レ馬遙吟眺、雉堞偏含二積靄一明、

小田原二首　山崎嘉

有二城郭一有二干戈一、要害關鎭國家一、孟辨君其可レ記、天時地利人和、

北條曾據小田原、五葉堂堂八國軍、博陸環圍鏖戰日、世情雲雨手紛紛、

同　木下貞幹

往昔北條氏、來乘衰叔時、八州專二節制一、數世闢二基址一、石壁依二溪澗一、譙樓據二岸崖一、橫前瀛海渺、萬波等二湯池一、擁レ後山巒簇、千岩布二鐵藜一、人和直可レ恃、天險不レ扶レ危、能拒二信玄陣一、難レ當關白師、榮華一場夢、興廢幾抨棋、舊郭猶非レ是、遺民轉耐レ悲、經過無レ限思、落日照二城陣一、

小田原懷古二首　熊阪邦

豐王威武似二秦皇一、南越東吳敵者亡、北氏不レ知天命在、遂令二車駕出一咸陽一、

豐王大駕出二秦關一、百萬旌旗壓二楚山一、不二但一朝殪二封豕一、餘威更定二朔方一還、

同　河世寧　字子靜　號寬齋

平家覇業恃二金湯一、五世功名一旦亡、剗二却箱根一作二平地一、未レ應二容易屬一猿郎一、

浴二塔澤一二首　釋交易

距二小田原府一、其間二里餘、逢二人尋一塔澤一、下レ馬借二民居一、沐處身云淨、浴時病日除、我聽二溫湯利一、不レ憚二路崎嶇一、觸目無二相識一、唯瞻塔嶺高、豈山間寂歷、易二世上煩囂一、水洗二溪邊石一、湯充二屋裏槽一、奇哉泉自暖、非レ借二釜薪熬一、

塔澤吟　并引　木下貞幹

壬戌秋杪、發レ自二雄峯一、遊二于塔澤一、浴二于溫湯一、浴湯之暇、坦服而臥、于レ旦于レ夕、吟而消レ閒、

今歲天和壬戌秋、相逢輪次住二雄丘一、有レ人勸下入二溫泉一浴上、使下我能尋二塔澤一遊上、暮聽水瀑二々屋後一、朝看雲片二々山

頭、全身浸郤湯槽裏、臥起縱横得自由、
塔澤佳名我久聆、此回初得到山庭、崇峯峻嶺圍民舍、怪石奇巖繞客亭、地險步時知足困、湯溫投處覺身寧、一同濕性誰能別、爲暖爲寒妙且靈、
相州塔澤始經過、隨見隨聞景象多、戀智者蹤吟水曲、慕仁人跡步山阿、借亭入戶求容膝、釋帶投湯欲洗痾、休沐豈先期日數、只期心飽不期他、
育王八萬四千塔、其一茲山現在前、此澤美名良有以、彼岸佳號豈無緣、出雲月色臨窻外、激石溪聲到枕邊、添得別般奇特事、古今巖下涌溫泉、
古今巖下涌溫泉、維藥維醫莫大焉、貴賤東西來日病、自他南北去時痊、求湯客既僦湯店、營店主元利店錢、以利店錢、雖僻谷、連家比屋一如鄽、
連家比屋一如鄽、雖一如鄽郤寂然、箇々不同居市哲、人々還異住山賢、遁他曷得市山併、隱此當能大小全、來浴溫湯多少客、有誰知是理玄々、

東澤八絕　服元雄

東澤不知處、緣溪仄徑分、前峯忽一轉、時有鷄狗聞、
日夕起人烟、三戶白雲邊、神仙此可接、處々有丹泉、
山中徂暑時、高枕天籟起、深林遮白日、空翠冷於水、
樓上青山起、樓下溫泉迸、浴罷對青山、悠然心不競、
夜雨何處來、蕭々滿四壁、起看山月高、始識溪聲激、
隣舍僧寓居、棊局好相戲、來往歡十日、未敢通姓字、
東峯千仞秀、上有梵王閣、我欲振衣去、秋風生萬壑、
朝辭玉笥山、昨遊已回首、歸興心彷彿、唯疑出洞口、

塔澤（塔澤函根山中地名、有溫湯數處、）　寺田革

塔澤塔安在、函關函已空、披蒙穿邃密、攀險上穹窿、一壑晴雷轉、千巖夕霧濃、林寒疑掛雨、嶺廻欲生風、鬼谷無人到、鵑巢有路通、昔時聞戰伐、此日憶英雄、物俗雖卑陋、土宜亦太豐、溫泉來浴者、澣滌見餘功、

宿塔澤　藤元昌（字文二）

筥嶺鍾靈接碧天、山腰地闢出溫泉、翠巒嵐瘴蒸如雨、痼疾烟霞浴作仙、大澤石高構疊塔、深林樹密有啼鵑、溪邊不寢閑窻曉、苦憶許由洗耳年、

塔澤秋水　菊池禎

沴潦秋爲敗、滔々塔澤隈、山靈驅雨去、河伯蹴波來、轉石飛孤電、盈科起殷雷、旋渦橋忽斷、急瀨岸看頹、窟拆魚龍走、巢傾鳥雀哀、呂梁堪讓險、艷澦怪移堆、向晚陰風散、收雲落日催、誰憐貪利涉、行客獨徘徊、

浴塔澤溫泉數日小詩紀事　河世寧

一道靈泉分七處、成郵各々倚巉巖、能愈世習輕浮病、使我新詩超不凡、

僧房密被濕雲封、石磴苔深蔭恠松、秪有遊人破岑寂、連聲來叩不時鐘、（寺名淨福院、無僧侶住、但有古鐘、任遊人縱撞、）
迅湍危石響如雷、徹夜孤燈夢未催、可怪東牕紅已抹、不聽鴉子報晨來、（山中鴉皆啞）
綠樹重々隔世氛、溪聲朝暮耳邊聞、飄然身在仙寰裏、不省人間指作雲、
向來未盡愛山情、霽後溪橋倚杖行、樵逕雲遮人不到、傍巖閑摘石長生、（石長生俗喚做箱根草、）
多閑苦雨奈難消、碁散香灰轉寂寥、偶訪青帘度溪去、陰晴界破三枚橋、

鶴岡二首　山崎嘉

權輿自求平、武衛仰神皇、宮樣模鳩嶺、祭儀奉鶴岡、壇邊杉矗々、橋下水汪々、世變人亡去、遊禽鳴夕陽、
大義伐平源將軍、功勳三代握洪鈞、曾苗駿野爲長樂、時詣鶴岡禱永鎭、還更不知兄弟愛、豈其可得子孫振、詠歌空遺鎌倉里、宮柱闃然草木春、

鶴岡祠　太宰純

舊國荊榛亂、靈宮此巋然、朱門光照地、翠柏氣參天、仙鶴歸華表、孤鴻下塔邊、誰家宗社守、爲問治承年、

詣鶴岡八幡宮　釋鐵牛

松濤十里漲晴空、華表雙飛碧海東、進謁丹墀祈鎭護、徐環青琄嘆神功、彤弓盛韔垂鉤月、寶劍倚天貫日虹、（彤弓寶劍皆神物）函蓄前朝賢主狀、壁存往昔畫師工、幾圍鴨腳階梯下、（傳說、前朝大樹、實朝公時有此樹、今計十圍、）一抹贏鬟煙雨中、帳引香煙如有應、心欽威德諒無窮、

鶴岡應神宮　熊阪邦

將軍千古此經營、奕世逾看堂構成、地號鶴岡留霸蹟、山連龜谷似皇城、廟門高出祥雲外、金碧遙含海氣清、欲識威靈長不歇、兒童猶說禱東征、

寄題荏柄天神廟　林愨（字孟著號梅洞）

菅相遺祠何處尋、森々荏柄一深林、仰觀兩樹種靈德、梅有清香松有陰、

荏柄天神　林戇（字直民號整宇）

靈廟陰森自作林、神風吹度仰遺音、梅持清操松全節、揭示菅公一箇心、

謹題荏柄菅神廟　野壹（字道生號卜幽）

都府樓頭湘水濱、西東百億現分身、生松一夜梅千里、飛逐菅三同配神、

謹題荏柄菅神靈廟　菊地東勻

松挺深青梅吐芬、湘江遺廟愜前聞、威靈護國無今古、四海蒼生望旱雲、

又

生做二儒宗一沒做レ神、遺祠千載卜二湘濱一梅花長馥松長綠、
吟翫新如二初植辰一、

賀二神前種レ梅人一、於荏柄天神
一字分韻

聖朝翼贊獨能レ文、靈廟年深北野君、東閣官梅春不老、移來鋤破一夜雲、○前壽福建宗長會

菅廟依レ山山日輝、栽レ梅人欲二詠レ梅歸一、如下傳二神語一丁寧謝上、黃鳥穿レ花自在飛、○曲江繼趙

菅君降レ迹顯二神威一、官客移レ梅對二禮闈一、無レ限東風吹レ雪盡、清香和レ月入二春衣一、○前建長東岳文昱

調鼎有レ功王佐才、神前得レ意手栽レ梅、一生只被二此花惱一、人道菅丞相再來、○前建長象初聞光

吏君材質世楩楠、清廟栽レ梅春半酣、應レ使二德香天下遍一、一技開レ北一枝南、○前淨智慶堂資善

知君材力在レ扶レ顛、分二種官梅一菅廟前、壁畫詩人三十六、對レ花無レ語又年々、○大建巨幢

忠孝兼全誰匹儔、不レ知何以答二神休一、官梅移入菅宮裡、花夢相輝月一樓、○前壽福大茂淨林

丞相祠堂地自清、種レ梅爲レ壽國昇平、山雲吹散慈容現、月在二寒梢一夜々明、○海東聞爾

栽二梅階下一享二天神一、他日必成二調鼎人一、信種星兒心地闊、清香遍界萬年春、○前建長久庵僧可

封二植梅花一結二好因一、威權在レ手宰臣身、和光遍照三千界、天下稱レ之北野神、○前淨智堅仲妙彌

國家柱石法英檀、菅廟栽レ梅月下看、應二是神君多二喜色一、暗香夜入二御簾一寒、○相陽存香

菅氏名高宇宙中、千詩百賦意無レ窮、宮墻添得官梅樹、也識靈神有二感通一、○信陽心榮

白蓋移レ梅雨後山、神靈應二是破二天顏一、至誠以代二溪毛薦一、無レ限馨香滿二世間一、○赤城芳尊

官暇愛レ梅栽二披垣一、黃昏移レ影傍二宮門一、山庭碧淺長鑓雨、斷破青苔春一痕、○黑駒閒興

種レ梅菅廟玉庭傍、添得天神靈蹟光、調鼎功名今尚在、德香長共二此花一香、○前建長心源希徹

威靈如レ在與レ天齊、庭宇栽レ梅探二品題一、花譜眞人朝二午夜一、暗香送レ月玉堦西、○金華永泉

社稷奉レ神傾二至誠一、廟廊英器國干城、花中御史衛門外、日月高懸七字名、○範堂圓模

移得江南第一株、芳姿千歲鎭二靈區一、調羹慣レ入二湯王夢一、松樹任他秦大夫、○菊隱中亮

天神靈廟亂山深、堦下幽庭座不レ侵、應下獻二清香一成中鬱烝上、黃金難レ鑄種レ梅心、○養愚宗育

豈同二薄俗薦二溪毛一、獨種二梅花一不レ種レ桃、仰二止上天一封二

七字一、美名照レ世古今高、○龍湖中簡

丞相祠堂歲月遙、栽レ梅庭下得レ春饒、開レ花未二必爭一先後一、雪自二南枝次第消一、○前壽福東曙等海

靈宮維德配レ天居、宇宙神威日赫如、瑤砌種レ梅人共聖、春風花影雪踈々、○東郊中田

我法英檀誠有レ功、況移二梅樹一近二神宮一、聲名不レ滅菅家主、漏界春香花信風、○西湖門獻

菅宮翼々出二雲層一、雄二鎭東津一氣象增、栽得官梅一和レ月立、照レ人神鑑冷レ於レ冰、○宗傳良敎

一樹種レ梅丞相祠、春風得レ意雨晴時、德香長屬二調羹手一、絕勝甘棠曾入レ詩、○心聞性聰

遺廟種レ梅春正濃、良哉此地示二靈蹤一、昭々神德堪二瞻仰一、一夜新生千樹松　○祖　牧

何嘗輔レ君能正レ邪、敬神故是種二梅花一、信根不レ淺起レ於レ地、百世留レ春保二國家一、○相城東秀

菅家遺廟幾春秋、官客栽レ梅傍二玉樓一、紅白香飄花世界、更無二閒夢到一羅浮一、○前淨智無言昌謹

把二百花魁一深種時、宮前重有二德香吹一、神風永與二春風一扇、留得江南第一枝、○長川祥久

天神垂レ蹟境增佳、環二種梅花一漸二玉堦一、應二是百靈來擁護一、儼然廟貌在二巖崖一、○柏堂純榮

雲靈省近二上台星一、肅々行宮夜不レ扃、酒掃何人千載後、孤芳約レ月植二中庭一、○前壽福東曙等海

瞻二仰神光一慕二德香一、栽レ梅更好近二彫梁一、社前丕覩祝二君壽一、便與二虛空一較二短長一、○縱壑光巨

丞相祠堂崖谷阿、憑レ高禁禦列逶迤、料知明鑑無二偏照一、添二種梅花一月色多、○大中正幢

右荏柄聖廟神前、賀二栽レ梅人一之詩數篇、東關五岳耆老之傑作也、宮寺一乘院先師、鏤レ板擣レ梁、以爲二席上之奇觀一、然歲月久、而板面爛朽、惜乎成二蠹棲一、文字漸欲レ泯、因レ玆一乘院當住柳長師、因レ余需レ書楮上、其憚雖レ不レ少、師之命難二固辭一、掃二瞽眼一、揮二龜手一、染二禿毫一、淋二亂墨一、嗚呼、顧余多年踈嬾、筆硯以塵埃、頹齡勞衰、胸襟無二覺知一、恐字々烏焉爲レ馬、傍眼濶色、所レ希而已矣、楮末有二餘白一、卒綴二野詞一、以奉レ仰二神威一云爾、爲レ傳二正續萬年芳一、各植二梅花一聖廟傍、神德與二陰陽一共遍、靈威兼二日月一齊光、

石上宣就

次二韓原一謁二王辰爾祠一　韓原在相州　高道昂

突兀高麗祠、三春花水口、秣レ馬拜二神像一、開レ幔蒼鼠走、高麗昔上表、烏羽光レ於レ玖、蒸レ之識二其字一、亹々忽如レ取、我方西征急、不レ得レ奠二杯酒一、顧步下レ山遲、殘日在二

林藪ニ、

謁ニ景政祠一　熊阪邦

勇冠ニ三軍一權五郎、成童萬里向ニ沙場一、射穿ニ七札一輕ニ顏息一、力擧ニ千鈞一笑ニ下莊一、中レ矢還看單騎逐、彎レ弓忽覩片時償、東征何限熊羆士、誰似英風動ニ海方一、

杜門神祠有古松樹　安　脩

古廟丹青落、風霜歷ニ幾秋一、蒼松臨レ渚偃、荒草沒レ階幽、鼠竄頹垣下、鴉啼華表頭、回看斜日夕、煙水漫添レ愁、

海南廟在三碕

祠廟臨ニ滄海一、南天水渺漫、汎レ舟諸賈客、來往禱ニ平安一、

新編相模國風土記稿卷之九　終

新編相模國風土記稿卷之十

藝文部卷之七

建長興國禪寺碑文

按不記撰人名、文中曰、余偶主茲、自開山數至二十八葉、由之考之、二十八世聞悟之作也、

吾佛之以導レ人者、變化無方、出沒無狀、無レ過ニ明心見性一、一以同レ歸者也、然有ニ生上智者一鮮希、於ニ自强一易レ爲ニ修習一、習レ之猥屑鄙俚、流而忘レ返、輒淪ニ於不意之鄉一、孰知ニ聖性清明一、在ニ余之躬一者耶、於レ是達磨以來百丈、建ニ爲叢林廣居一、使ニ其混ニ處其間一、一以ニ清規一、而繩ニ率之一、共弘ニ厥旨一、猶ニ蓬生ニ麻中一、未ニ曾不ニ自直一、由レ是王臣知ニ其事一、事者、不レ負ニ靈山之囑一、克任ニ厥責一、殆徧ニ於天下一也、所以今茲日本建長寺者實由レ之矣、蓋乃先レ是掌ニ國政一者、平公朝臣時賴、天縱明識、欲レ興ニ其宗一、而土曠人稀、未レ由レ就緒、有ニ西蜀蘭溪道隆禪師者一、得ニ法於ニ開先慧性禪師一、性嗣ニ靈隱崇岳禪師一、岳傳ニ於達磨一、爲ニ二十五世孫一、隆既妙悟、茲欲レ宣レ化、期ニ遠遊與レ道偕行一、當ニ趙宋淳祐六年、本朝寛元丙午之歲一、萬里波浪、一息來朝、公乃

窺ニ其顏角一、而語ニ諸左右一曰、非ニ人間世之所レ有也、而西方聖人之教、不レ治而不レ亂、國政有レ是、余何憂哉、然其教各有レ所レ宗、禪爲ニ統要一、國亦備矣、而至人未レ至、覺悟者鮮、故不レ易レ治、抑乃堂々大道、猶若ニ青天蓋有レ不レ能レ出者、猶可レ惜哉、人其至矣、吾將レ有レ爲、未レ幾請レ師、姑主ニ常樂小刹一、乃遍擇ニ靈地一、至ニ建長辛亥一、得ニ之於此山內一、曰ニ巨福禮鄉一、十一月初八日、開基創草、爲始作ニ大伽藍一、擬ニ中國之天下徑山一、爲ニ五徑之首一、山以レ鄉名、寺以レ年號、請レ師爲ニ開山第一祖一、乃悉ニ常樂之產一、於レ茲復增ニ置若干所一、爲ニ常住管葉一、常樂既虛、乃於ニ茲寺一、月輪ニ上殿僧衆十員一、以ニ一員一守レ之、爲レ之定レ式、閱ニ二載一、癸丑規模稍備、先レ是欲ニ大殿立ニ三尊一、公曰、此地昔幽谷也、嘗爲ニ刑場一、誤ニ犯國憲一者、殞ニ首於此一多矣、庸知ニ又非レ爲ニ陰獄一耶、先有ニ地藏菩薩祠於此一、亦有レ意也、今毋ニ他設一、宜即以レ是爲ニ本尊一、於レ是爲ニ其像一、而作ニ丹崖鑿鑿之狀一、以擬ニ佉羅陀山一、安ニ處其中一、復作ニ小像千數一、擁ニ衛兩傍一、既畢、請ニ師觀レ之、乃歎曰、勝哉人間之事、乃有ニ希奇一者、若レ是耶、何故此余未ニ來朝一時、所ニ夢見一似レ之、先兆如レ此、豈偶然哉、余之於レ此、有レ緣也久矣、而一日蝦夷國人來朝、公以ニ其乃無佛世界、欲ニ地藏專化一レ之、使ニ其遊レ寺、以植ニ善根一、而其蝦夷指レ之曰、是若人者、常俱群小像遊ニ吾國一、不レ識從ニ何所一來、乃有ニ其像在ニ於茲一耶、公曰、蓋其本願、欲レ度ニ若等一耳、今吾携ニ若于此一、蓋亦是之意焉、當ニ以嚴奉ニ事之一、然果有レ之、能偕其來否、夷人諾レ之、明年又來朝曰、所レ約若人者、招レ之不レ可、趣レ之不レ及、但得ニ其所レ遺手執錫杖上一金鐶一耳、謹以奉獻、視レ之像所レ執者、果失ニ其一一、又師之將ニ來朝一也、遇ニ一方面大目、長鬚美秀者、諸途一而前曰、師道宜レ東、化緣在レ彼、時其至矣、毋ニ自趑趄一、師訝而驚、且敬レ之、心不レ覺口語曰、斯何人耶、又而作ニ之識ニ余之心事一耶、欲レ詰ニ其故一、彼則前趨、失ニ其所在一、俄一望間、有ニ古神祠一、隨レ分入欲レ炷レ香、乃祠山大帝行廟、儀表當レ軒、即所レ遇者、猶若ニ與語一、於レ是默禱之一曰、此眞君壯予行耶、余何莫レ謹ニ切於此一哉、去計決矣、而果若適ニ所レ聞命一、願爲ニ護法一、因而既主ニ茲寺一、即奉レ其爲ニ護法者一、於レ是大啓ニ玄關一、妙闡ニ洪機一、鐘鏗鼓鼘、雷轟霆震、象繞龍園、山臨海赴、肅々焉、棣々焉、洋々焉、何曾昔之有哉、然則何爲乎、是乃莫レ不ニ各揣ニ厥已大焉之事一、而此未レ受ニ血氣一成レ形之以前、果爲ニ誰耶一、嗚呼怪哉、今ニレ之歷々言唉、或喜或悲一、何從而來、於寤於寐一耶、異乎、而又五之宗祖、垂ニ範設レ教、無ニ所レ不レ入、乃至萬有各異、百家自張、乖離和合、錯綜定レ位焉、夫即今華堂廣構、大

座寬横、彼主人者、指揮酬答、又曷所以爲哉、廓爾之者、如觀杲日麗天、在吾方寸間耳、其有未徹、則亦不假食息矣何哉、蓋乃若夫佛祖宏綱、置而不論、人壽百年、希乎滿者、倘乃刹那變改、將何以乎、智者行之、識者傚之、如志以求吾所失本物、終必得之、而後已、此固蓋非唯是沙門釋子之事而已矣、凡厥有生、孰莫大於斯哉、眞化既弘、顯悟者有之、密契者有之、寺之未建以前、不無禪刹、然而叢林規範、法則儀式、往々人亦皆未閑也、乃至與夫考擊犍稚、魚板法器等類、師皆躬自爲人耳、引手諄々、敎誨亹々、而不爲倦、尙多差忒、是後明師宿德、繼以作興、至于今日、何其盛哉、先是有南詢禪者覺音者、遇師於天童、師問國之法道、音曰八宗並行、禪固有之、未之廣也、由之師有東焉之興、八宗者蓋謂三論、法相、俱舍、成實、華嚴律、天台、眞言、此外又有淨土宗、然原夫最初佛法玆來、自欽明十三年壬申之歲、百濟以獻經像、至建長辛亥、則已七百年矣、諸宗陸續、來於中國、亦已殊不復枚論、禪則自達磨熊耳西歸之後、逾八十有六年、當本朝推古二十有一、歲在癸酉、去欽明壬申、六十二年、云來於玆、與聖德太子、歌詞酬答、然所示相狀、不以貴人嚴、謂猶信解品說、長者方便、脫瓔珞服也、知是時未以化行、復示空棺、隨乃隱去、次則有釋道昭、白雉年間、本傳法相、玄奘謂曰、經論文博、勞多功寡、我有禪宗、其旨微妙、傳爾以歸、既返、從學之者非爲鮮也、又後聖武天平七年、唐玄宗時、釋道璿者、來玆弘化、復嵯峨代間、釋名慧蕚、奉皇太后命、渡海求法、鹽官齊安國師、使釋義空、俱以歸朝、后建檀林蘭若處之、後蕚再返於彼、僦土刻石、以爲豐碑、詳記其事、歸置本朝、題曰日本國首傳禪宗記、然綿歷歲月、寢而不傳、乃至建久二年、有千光法師名榮西、兩入炎宋、以傳宗旨幷及衣盂、而歸建立禪刹、安處徒侶、抑亦夥矣、而西則曰、吾之滅後、逾五十歲、禪當大興、玆草々耳、玆落成、果如其數、蓋有時也、嘗常論之、至人大數、出隱歇興、皆有其時、非適然耳、非特今時、前古皆然、唯以世代遼、莫盡知焉、今以迦文之道、東播之迹、明珠尙爾、而況又復遠於其前者耶、周穆王時、文殊目連、已至化導、且示高四臺、是迦葉佛第三會說法之處、人聞周之穆王之代、亦已怪矣、況迦葉佛哉、此乃道宣律師、得之於天人語也、豈其誑乎、時王因造三會道場、築中天之臺、其高千仞、卽列禦寇所謂化人者也、信不誣矣、是故又有商太宰、問孔子之聖、遂指西方之人、蓋是佛法、久已偏播天下者矣、史氏失書、至於隆替、人亦莫知、今人唯云、自漢明至於今者、或沈、亦不知其幾、然皆可攷、而所謂業林之盛、以弘厥旨者、孰有如於今哉、彼之若是、此亦然也、莫逃乎時、或曰、夫是宗也、理絕人區、事出天外、何以時爲謂乎、曰然、固若是、曰理曰事、猶訓蒙之說、姑從之言、蓋以絕人區之理、出天外之事、欲行天下以、導乎人倫者、必以天之時人之宜也、譬夫天之時者、有宵與晝、人之宜者、有作與息、若夫不由宵晝、自强作息、當宵而征、晦昧蹇澀、或至顚仆、曷若待晝以往、昭明大達、直前絕阻、無所不通者、不在言矣、此非時宜而何、是故斯道行、玆寺建有力檀那、于以効誠、名德宗師、於以弘化、此時之宜也、由之人物萃聚、規矩馳張、使人々廓自己靈、猶夫晝往之所、徹見纖悉、何所掩而蔽乎、所謂理絕人區、事出天外、皆在乎我耳、其自昧者如之何、寺之建、自圓成、越五十六載、平公之孫名貞時、繼掌國事、後爲沙門、名宗演、奏賜勅額、定爲今額、余偶主玆、自開山數至二十八葉、計寺歷歲、爲九十六載、示所有記文、請爲碑、固余素不能爲是者謝之再四、聊不獲已、偏審其事、乃爲之書、復爲頌曰、身毒聖人弘化初、事出天外理絕區、人有上智及下愚、性近習遠將何如、淸規大智爲典謨、高堂大殿羅衆徒、龍蛇混雜爲之俱、一々自寶滄海珠、扶桑葉覆東南隅、下有長者德不孤、否哉廣構何渠々、金襴大士高厥居、大鼓砰轟雷震虛、玉麈不動電繞樞、指揮佛祖當軒趨、二十八葉非後余、萬事必與時相於、世出世間同一途、象龍索記仍命書、刻垂不朽同居諸、

圓鑑讚 幷序　寧一山

圓覺寺比丘宗英、得此鏡於宋國持歸、經三年後、大覺退壽福往甲州、以鏡送獻之、經一旬餘、忽然鏡面垢生、其後漸々現大士慈容、法光寺殿平時宗聞之、收藏禮事之、二年後造本寺觀音像、乃藏腹中、今繪此像求題、一寧爲述偈云、衆生法界性、湛如圓鏡明、一念忽然起、乃有生佛名、此鏡自宋國、萬里逾滄溟、鎔鍊出模冶、作此博山形、虛圓淨無垢、日月當靑冥、師資互獻授、不敢私緘縢、一朝半蒙翳、如呵晨霧輕、靜觀翳霧中、大士如幻成、良哉白衣仙、救苦唯尋聲、度人生死海、應現隨群情、現無量手眼、圖通唯徹證、是必有大緣、故示水月影、偉哉法光寺、珍藏此淨聖、不敢悶以私、造像藏此鏡、要令緇與白、投誠共膽敬、今復繪此像、用以示永々、我說偈贊揚、無言無自性、嘉元三年、乙巳、淸明節、一山一寧比丘拜書、

同　贊　　佛光禪師

示現宰官、示現菩薩、示現比丘、三原作レ夢、一處失レ照、有ニ來由一絕ニ朕兆一、古佛鏡中明、千山孤月皎、菩薩應現諸三昧、變化無レ在無ニ不在一、夢裏眞形鏡裏觀、空華實相無ニ留礙一、無學叟祖元拜贊、

同　贊　　月江印和尚

日面佛、月面佛、露レ影藏レ形、弄レ巧成レ拙、悟ニ得牛過ニ窻櫺一、掃ニ蕩無明窠窟一、幻化空身即法身、西方入定東方出、謂是巨福開山、又是觀音化迹、等閑打ニ破鏡一來看、方信本來無一物、日本國建長禪寺開山大覺禪師鏡中現ニ觀音相一、青王月江正印拜贊、

日本國建長禪寺靈鏡見像贊有序　元僧本無

宋成都蘭溪禪師道隆、得ニ法於無明性和尚一、遂佩ニ大父松源單傳直指之道一、往化ニ日本一、爰感ニ國君輔一、臣衆相契合、大振ニ厥宗一、晩示ニ滅于建長之寢室一、弟子收ニ舍利西來菴一、賜ニ大覺禪師圓鑑之塔一、已而相州大守平公時宗、追慕罔レ怠、忽一夕夢、師語曰、世間生死人之大常、公何哀戀不レ已、吾之徒德溫、收ニ吾生前所レ著銅鑑一、公若欲レ見ニ老僧一、看レ鑑是矣、覺而召レ溫叙ニ夢事一、索レ鑑覽レ之、果若ニ雲霧中微有ニ人面焉者一、畀命レ工刮ニ磨之一、乃得ニ觀世音菩薩妙相、歷然具備一、合府僚佐、爭先快覩、莫レ不ニ嗟異一、太守感ニ玆靈瑞一、乃捨ニ圓覺禪寺一、造ニ傑閣一、以奉ニ大士一、且併藏ニ其靈鏡一焉、師之法孫元壽、求ニ良工一、繪ニ鏡像于素帛一、將下寘ニ于西來菴一、以永禮供養上、過ニ予天竺一、炷香求レ贊、敬說レ偈曰、稽首靈智妙法身、徧現ニ十方無量刹一、慈應之用不思議、如ニ月在レ水春在レ花、上天竺峯寶陀岩、鷹巢鏡容十二面、光明顯靈靡ニ差忒一、施作佛事無レ有レ窮、從レ是東行日本土、有ニ大比丘一衆所レ歸、宰官夢與ニ鏡現像一、等絕ニ悲願力一如レ是、我聞、菩薩本因地、由ニ聞思修一入ニ三摩一、心精遺聞證ニ圓通一、此方乃以ニ音聞一得、良由ニ無礙慈忍力一、十方言言起即觀、以是比丘大機用、似ニ鏡照レ鏡空藏レ空、佛子若以ニ同異一求、離レ水求レ水無ニ是處一、彼以ニ無媒一應ニ一切一、我今亦以ニ無言一贊、滴露投置浮幢玉、同一器量無ニ邊表一、諸來善人圓鑑門、作ニ是觀一者名ニ正觀一、至正癸未、春三月二日、杭州路上、天竺廣大靈感觀音教寺傳天台教沙門釋本無、題ニ于白雲堂一、

同　　元僧梵琦

生ニ蜀之蘭溪一、卽以爲レ號、出ニ宋之瀾水一、謂稱ニ飽參一、姑蘇雙塔、見ニ無明老人一、擧ニ牛過ニ窻櫺一而透徹、廬山歸宗、夢ニ張公水部一、願身隨ニ瓶鉢一、以護持、得ニ柱杖於異僧一、感ニ天童之護法一、及レ開ニ日本巨福一、王臣敬崇、屢坐ニ名藍道場一、衲子圍遶、使下ニ松源慧燈一不ニ乏夜一、播ニ大覺遺教無窮一、茶毗

示ニ末後涅槃一、舍利入ニ西來窣堵一、囑ニ平太守一、相ニ見於鏡中一、果睹ニ聖觀音一、每彰ニ於身後一、堂々大道、聲々清規、付ニ之的子親孫一、仰若ニ泰山北斗一者也、日本國巨福山建長禪寺、開山第一代祖、大覺禪師、蘭溪隆和尚遺像、遠孫比丘元志侍者求贊、至正丙午春、嘉興路在城報恩光孝禪寺、前住山楚石道人梵琦敬書、

圓鑑紀實　　德雋

曩焉有ニ比丘宗英者一、之レ宋得レ鏡、形肖ニ博山一、持レ之而歸、後三載、大覺祖師、遭ニ乎流言一、至有ニ甲州之行一、英將ニ其鏡一、獻ニ之於師一、以備ニ顧鑑一、師旋ニ于相之巨山一、未レ幾而逝矣、神足德溫、收ニ鄉之鏡一本部太守平公時宗、追ニ慕師一、而不レ可レ見、晨夜憂想罔レ怠、一夕、師夢告ニ平公一曰、死也者人之大常也、何故哀レ之劇、吾之徒德溫有レ鏡、吾平生愛レ之也、欲レ見ニ老僧一、看ニ此鏡一足矣、覺而召レ溫、索ニ其鏡一覽レ之、如ニ雲霧中有レ人而昏、命レ工磨レ之、乃觀音大士之妙相悉備、闔府僚屬、乃至遐邇州縣來禮者、幢々不レ絕、毋不ニ歎異一、平公感ニ斯奇瑞一、以ニ其鏡一祕レ之、躬以奉ニ圓覺寺山門之閣一、或曰、平公悔ニ鄉聽ニ流言之過一、而爲レ之也、爾來今垂ニ三百年一矣、應安甲寅十一月二十三日、將レ夜、圓覺寺倏遭ニ畢方之祟一、巨山以ニ其比隣一、衆咸駭而愴惶、老而疲者、攀陟而望レ之、壯而健者、匍匐而救レ之、夜迨ニ過半一、炎上稍息、有ニ守嚴者一、篤行之僧也、嗟ニ彼廣居罹ニ于斯災一矣、咸々乎念レ之、坐久而假寐、空中有レ聲曰、汝知レ之否、祖師現形之鏡、藏ニ于寶雲閣千手大悲之腹中一矣、嚴也恍惚應レ之曰、非也、我聞ニ之於師一、其置ニ正觀音腹一也、若曰レ在ニ千手一、則謬也、遽焉夢覺、乃呼ニ同舍者一語レ之、翌日嚴將ニ守高一者、訪ニ鹿阜於灰燼之中一、而歸、將レ過ニ利濟菴之門傍一、有ニ木像仆レ地、手足摧折、不レ見ニ其首一、往來者圍レ之、爭視曰、火發ニ庫堂一、其焰先及ニ大殿之北阿一、而後燬ニ于山門一、人得ニ延燎之有レ隙、上レ閣救ニ聖像一、范々焉從ニ其高檐一放ニ落之一、故梵相用致ニ傷損一、守嚴以レ手搜ニ像腹一、鏗然有レ聲、取而視レ之鏡也、使レ若ニ有レ人誘レ之然、高也擢ニ人喧逐溷隨一、故潛袖レ之速行、將レ到ニ巨山一、尙以爲レ遲、輒就ニ路側一出レ之、以拜ニ觀其鏡一、瑩如也、聖像見ニ于鏡心一、略有ニ睟曖之色一、擁ニ其像一、如ニ一翳生ニ于晴虛一焉、我祖本形、淨智圓明、體自空寂、蕩々焉、如々焉、無レ相無レ蹟、豈以ニ鏡中攸レ見、徒誇ニ乎人一哉、嗚呼、時丁ニ末運一、善巧淺薄、於是彰ニ著其靈異一、以視ニ不信心者一耳、佛光、一山、本無、月江、虎關諸師、有レ贊焉、有レ銘焉、有レ序焉、有ニ傳紀一焉、今併掇ニ其言一、以爲ニ事實一、元綸首座、俾レ余書レ之、永留ニ西來菴一、永和元年、季冬朔也、法孫比丘德雋九拜書、

建長寺

風吹二寶閣一拂二浮塵一、班竹矮松沙界新、禪老燈前開導巧、
爲レ君誰復說二天眞一、【元亨釋書】燈前開導事見　○大高季明

松寺深沈鎖二薜蘿一、杖藜相訪試經過、高樓鐘響紺園晚、滿目悲風落葉多、　○太宰純

鎌臺標二寶刹一、誰記建長年、長者開二金地一、高僧崑二玉蓮一、瑠璃逈二上界一、兜率到二諸天一、松偃經霜外、龍潛逆水前、佛龕曾難レ法、石窟昔安レ禪、山色觀レ空現、潮音自レ海傳、曇花趺坐墮、栢樹梵聲連、雁塔慈雲合、仙燈惠日懸、名藍留二古物一、紺苑鎖二荒煙一、只聽疎鐘響、與亡信可レ憐、　○高惟馨

行遊二梵境一、謁二金仙一、頓覺人情空二萬緣一、底松鋪レ茵生二碧蘚一、巖間鳴レ玉迸二清泉一、秋風寂歷安禪窟、晩日蕭條講法筵、九代繁華如二夢幻一、唯看浩劫一燈傳、　○田　寧

自レ古鎌倉稱二佛國一、五山之中推二巨福一、開創茲當建長名、至レ今四海顯二法則一、聞說平帥施二莊田一、聘二使宋域一求二知識一、南宋知識蘭谿師、應レ招萬里赴二東域一、夙緣深厚喜相迎、平帥親承雲山囑、偏稱楊岐十世孫、湖海龍象顯二道德一、那伽定裏五百年、再懷起二斯白拈賊一、香大長存影堂中、鳳孫龍子坐玄默、此日登臨探二高蹤一、彩雲深處望二山色一、　○岸鳳質

古寺鐘聲送二夕陽一、悲風蕭颯起二幽篁一、高僧已向二西天一去、誰賞溪邊明月光、【昔宋道隆師來往焉、自製鐘銘有云、東迎素月、西送夕陽】　○安　脩

建長寺玉雲精舍留二別諸上人一　高惟馨

老去人間跡未レ休、禪關握手暫相留、題レ詩欲レ別篁山曙、負レ笈重期給苑秋、長向二風塵一何處住、可レ知天地此生浮、卜居儻寄二招提境一、問法時銷萬劫愁、

過二建長寺一似二一清上座一　釋鐵牛

偶來觀竈動二吟腸一、松檜森々護二古堂一、尚憶遺風高二萬世一、夜深鐘鼓警二禪房一、

圓通閣　釋楚俊

聞思修證得、圓應十方通、耳聽衆色別、眼觀諸響同、朱門設二嚴像一、白屋奉二眞容一、此閣何神驗、靈光魯殿雄、

醮碧池

誰鑿レ地爲レ沼、寒泉涵泳深、青林浮二水面一、羣巘浸二波心一、堅看山形側、橫觀樹影沈、晩遊成二勝賞一、聊作二五言吟一、

嵩　山

五嶽標二中岳一、屹居二天地心一、衡常如二侍衛一、岱華似二恭欽一、慧日輝二幽谷一、慈風動二少林一、孰知西祖意、昭顯海東岑、

華嚴塔

佛現二舍那身一、頓機人罕レ聞、深窮華藏海、廣演竺乾文、密護如二欄楯一、祕函標二相輪一、都盧高七級、千古鎭二乾坤一、

觀瀾閣　釋義堂

軒臨二滄海一渺二風煙一、坐見數州來往船、世事紛々白鷗外、

百專眞樂一床眠、

仙人澤【在巨福山有不老泉】　安　脩

雲深空澤裏、古木晝蕭然、羽客今安在、唯餘不老泉、

兜率巓【在巨福山】

疑看多寶塔、湧出傍レ空懸、我輩何功德、忽登二兜率天一、

勝上軒【在福山、道隆禪師嘗建觀瀾閣、今廢、】

絕巘臨二滄海一、隆公昔倚レ欄、何知千歲後、我輩亦觀レ瀾、

醮碧池【在巨福山】

池上獨行吟、風寒松樹陰、漣漪清醮レ碧、恰好洗二塵心一、

古　松【在巨福山醮碧池、相傳隆公在時、松樹忽偃、衆怪之、公曰鶴岡之仙來駐耳、】

松樹臨二池水一、不レ知經二幾年一、人傳偃蓋上、曾駐二鶴岡仙一、

圓覺寺　太宰純

門外瀑溪水流、鹿山風景不レ勝レ秋、上方終日無二人語一、落木蕭々送二客愁一、

同　安　脩

白鷺池邊蕉梵臺、祇林蓊鬱隔二塵埃一、躋攀欲レ問二安禪窟一、咫尺間雲向レ晩回、【有白鷺池及雲居禪師坐禪窟】

白鷺池【在瑞鹿山】

梵境本無レ塵、道遙池水濱、可レ知機自息、白鷺伴二游鱗一、

虎　岩【在瑞鹿山】

看疑虎豹蹲、巨岩被二薜荔一、自二高僧去一、無二人相共睡一、

鹿　洞【在瑞鹿山】

白鹿知何處、但餘白鹿洞、世事總如レ斯、不レ怪二鄭人夢一、

宿龍池【在瑞鹿山】

如レ藍池水色、人影鑒來清、應レ有二神龍宿一、時々雲霧生、

獨木橋【在瑞鹿山】

獨木跨二寒流一、行吟引二杖屨一、尚想西來僧、清宵乘レ月渡、

正續院佛牙舍利詩四十三韻　釋萬菴

鹿峯祥勝區、【瑞鹿山中有正續院、昔名祥勝院、蓋取六祥八勝緣】佛牙創二圭壁一、曄然水晶塔、小龕爛二金碧一、維昔源都督、宵夢感二精魄一、使船凌二滄溟一、金珠如二丘積一、宋國能仁刹、修藻宣公跡、曩遺致二殷勤一、珠函獲二遠借一、歸路及二皇畿一、下詔留二宮掖一、天門九籥深、使者空絡繹、彌レ年杳不レ來、終令二元帥嚇一、將興二百萬軍一、長驅西土逖一、慨然藤九郎、皓首杖二馬策一、從騎二千人一、駸々入二帝宅一、訴二陳幕府情一、號怒驚二百辟一、天子不レ奪レ志、封鎬授二賓席一、單車速反命、將軍大感懌、鹵簿嚴郊迎、萬姓合レ指覿、龍天扶レ輿衛、道路委二幣帛一、闕東不レ動レ兵、蒼生免二蠲積一、雖レ殊二玩レ物倫一、紛騷亦何劇、爾來鎭二鎌都一、神光耀二歲曆一、如何此靈威、不レ救二鶴陵厄一、正知宿覺深、冥力難二移易一、物理何蒼茫、報應似二

寂寞、傍韵　宜哉韓昌黎、甘受二湖陽謫一、表辭極二謗訓一、未レ蒙二神鬼責一、文章映二百代一、鴻名重二衡霍一、傍後儒把二其芬一、辟佛侔二毒螫一、空門强辨論、牛刀何嚮騞、邈乎天人理、徒爲二近視一隔、達者鑑二幽微一、禍福探二其頤一、超二然影響間一、凝レ神長不レ敎、魯郊出二祥麟一、漢季多二靈翮一、雖レ同二堯舜符一、政令何澆僻、麟鳳寧非レ靈、有レ時戾二善逆一、泥洹合二廓寥一、骨身遺二的皪一、方應雖レ有レ間、精眞無二窽郤一、膜拜求二福慶一、傾信或緯讖、藐視無二不祥一、冥理固幽邈、我閱二迦文辭一、眞軀存二經籍一、服習得二解懸一、黃金變二積礫一、何況梅檀餘、可レ比二鬱枯朽一、潔誠荀弼レ中、威神必煥赫、稽類詠二斯篇一、庶以擬二啓廸一、

到二圓覺寺一禮二佛光國師像一兼禮二育王山所レ傳佛牙舍利一、著宿白堂清公、請就二壽德菴一、設レ供、且贈二舍利一顆一、偈以謝レ之、　釋鐵牛

久仰鹿山古道場、到來一覽喜洋々、荷君炊レ玉陳二佳席一、更贈二如來設利光一、

秋夜陪二蘭亭先生一過二歸源精舍一得レ鐘字一　谷友信字文卿號藍水

夜叩二禪扃一此得レ從、丹崖窈窕搴微重、花臺月朗金貌座、錦樹霜高瑞鹿峯、暗穴宿雲觀二扃相一、空潭秋水滌二塵容一、談レ詩更說三生夢、座聽山風送二晚鐘一、

弔二高子式墓一在瑞鹿山中　安脩

荒墳高傍白雲峯、片碣經年苔蘚封。日暮悲吟君不レ見、但聞天籟振二寒松一、

訪二歸源菴主一語及二子式往日之盟一

客少煙霞一徑幽、苔橋斜架虎溪流、東林猶有二遠公在一、爲說淵明同社遊、子式詩云、諸天每步東林月、人道淵明醉酒回、

弔二高子式帥堂遺蹤一園名二蕉鹿一在瑞鹿山中

鹿園思レ舊獨盤桓、秋老幽棲暮色寒、情知人事都如レ夢、誰見淒風蕉葉殘、子式詩云、閑園足午睡、清風夢乍醒、不見焦中鹿、但見蕉葉青、

古院蕭森秋欲レ殘、楓林落日帶レ霜寒、千峯萬壑猶依レ舊、不レ見風流一鶡冠、子式詩云、天際雲生萬壑寒、滿林楓樹雨中丹、群峯秋色無人賞、長屬乾坤一鶡冠、

東里先生壽藏記　松崎惟時字君脩號觀海

東里先生升二於圓覺寺後山一曰、樂哉斯丘也、死則我欲レ葬レ焉、既寢レ疾、終歲起曰、异哉、夫造物者、又將勞レ我以レ生乎、雖レ然吾生多病、今年五十一、髮如レ此種々、其與幾何、乃營二壽藏于其地一、謂二惟時一、後生知レ我者、莫二子如一也、子何不二爲レ我概二次家世鄉里於石一與、其待其就木、强爲二諛墓之辭一、使二人疑一、夫不二以レ情爲一レ文者也、按二譜一、先生本姓高石、其先下毛人、六世祖信忠、足利氏之世、封二喜連川一、後失二其城邑一、徙二于南總一遂籍焉、至二玉欠勝昌一、遷二東都一、乃改二姓高野一、廢居治レ產、考勝春以レ善二俳諧聯歌一有レ名、號二百里居士一、先生生聰敏、四歲能レ書、六歲從二佐玄龍兄弟一學レ書、既就二外傅一、好爲二歌詩一、有二奇句一、成童見二物夫子一、夫子奇レ之、目以二才抵一連城一、十七喪レ明、夫子謂レ之曰、學者亦多レ術矣、博聞强識、目力與爲レ多焉、非二子所一レ宜也、先王四敎、詩居二其一一、今之詩、緐二古之詩一也、行二衢道一者、不レ至二用レ志不一レ分、乃疑二於神一、大雅久不レ作、其將在レ子乎、先生一意奉二其敎一、盡絕二人事一、專爲レ詩、業益進、產益落、盡鬻二其田宅一、僦レ屋以居、物夫子之門、以レ詩名者數十人、推二南郭先生一主レ盟、而先生最爲二晚出一、常兄二事之一、亡レ何聲稱藉々、一日名與レ之齊、當世言レ詩者、莫レ不レ倚二二家門牆一、而先生尤好誘二進後輩一、從遊如レ雲、王侯好レ詩者、出二其門一、什七八、四方學士、未二嘗通一レ刺、而聞レ風私淑者、徧二于海內一、先生篇什甚富、而尤長二於五七言近體一、歷代諸家、莫レ不二淹貫一、而大旨刻二意滄溟一、當二其得意一、識者不レ能レ辨也、門人多下請レ梓二其集一者上、先生笑曰、人亦孰不レ欲二榮名一、顧我見二其難一レ爲也、未二嘗躊躇滿一レ志、與二其遺二臭千載一也、寧待二他日一、終弗レ許、先生家素富厚、幼時雍容、與二所レ交賢豪間長者一遊、進醵飲食被服甚美、後雖二屬去一乎、好蓄二古彝鼎一、疊洗、書畫、諸雅翫一、治二齋室園庭一、頗修、猶尙以二少時所一レ習也、然不レ近二聲伎一、善飲レ酒不レ及レ亂、居處肅然、持論尙正、絕無二浮華之風一、慷慨趨二人之急一、朋友有二緩急疾病死喪一、必竭レ力營辨、不二以レ匱爲一レ解、至爲下倡二諸友一出レ金以賻上レ之、退不レ言レ功、狷介疾レ惡、不レ藏レ怒、不レ宿レ怨、褒貶不レ諱、輕薄少年、時有下生平慕レ之後棄レ之、因忌二其名高一、而引繩排根之者上、先生性好二山水一、又體便二登陟一、常厭二東都之囂一、數遊二鎌倉之墟一、窮二討幽僻一、與二建長圓覺諸寺上人一、締二方外之交一、諸上人、遂謀爲築二草堂於圓覺寺側一、名曰二松濤舘一、有二五勝之奇一、作レ詩記レ之歲時携二其徒一遊息焉、遂自卜二宅兆一云、惟時總角時、從二先生一問レ詩、至レ今二十年、視如二骨肉一、常稱爲二知己者一、惟時曰、大東之詩、自二開闢一以來、未レ有レ若二今日之盛一也、若二先生所一レ爲、宏麗雄贍、可下以與二開天嘉隆一、宗工鉅匠上、參立而不上レ怍矣、豈不レ盛哉、文人無レ行、自二古患一之、至二先生一、忠信自將、名蓋二天下一、而無二驕氣一、今縉紳大夫、猶或難レ之、詩之爲レ道、發二乎情一、止二乎禮義一、矧假レ他之爲、物夫子之敎大哉、先生名惟馨、字子式、東里其號、又稱二蘭亭一、寶歷甲戌冬十二月、門人龜山松崎惟時撰、

東里先生墓誌銘　山惟熊

寶曆七年七月六日、東里先生高野君卒、其配市橋氏、謂二惟熊一曰、爲二先人一誌レ石焉、熊也辭以二不敏一、曰、先人嘗

屬二後事于未亡人一云々、謂誌レ墓、當レ令二惟熊一爲二碑之辭一、子今若不レ爲、則他日見二先人乎地下一、妾其謂二之何一、請勿レ辭、於レ是乎誌焉、先生姓高野、諱惟馨、字子式號二東里一、一號二蘭亭一、本姓高石、其先封二喜連川一、世爲二貴族一、及二足利氏之衰一也、失二其封爵一、下爲レ農、居二總之姉崎一、數世徙二居東都一、乃改二姓高野一、治産積居與レ時逐、遂爲二大賈一、家累巨萬一、考諱勝春、號二百里一、天資豪邁、不レ事二家人産一、晩年財漸殫焉、年幾五十、無レ子、妾某氏生二先生一、百里翁悅甚、先生生聰敏、年僅四歲、善レ書、翁奇レ之、愛已甚、不二敎以一市井鄉里之事一、六歲學レ書于佐玄龍兄弟、十歲讀レ書、成童受二業徂來物先生一、先生初見奇レ之、目以二趙璧抵一連城一、十七褰レ帷、終廢二百事一、唯詩是耽、蓋物夫子敎レ之使レ然也、比及二弱冠一、名漸著、二十有五、喪レ考服闋、後復不レ治レ産、愈益耽二歌詩一、是以産大盡、家僮漸々引去、盡鬻二鄰廬一、以僑居、家無二儋石之儲一、晏如、自二物夫子倡一古文辭、斌々作者、不レ可二枚擧一、而擅二詩名於海內一者、特先生與二南郭服先生二人焉耳、初物夫子歿後、先生以二年少一、兄二事南郭先生一、及二業成一也、海內王侯大人、及閭巷窮鄉之士、言レ詩者、鮮下不レ受二業於二先生之門一者上、而王侯學レ詩者、什之六七出二於先生之門一、先生於レ詩顓門、其精可レ知、而其諸作無レ不レ得レ體、最長二近體一、初沿二唐人體一、後刻二意于鱗一、而能得二其體一、先生爲レ詩、開レ口爲レ句、下レ筆成レ篇、金聲玉振、發彩流潤、每レ出二一篇一、人無レ不二稱美一、其敎レ人也、諄々善誘、使二其嚮二風翰墨一、遊二息藝苑一、而後渙然氷釋、怡然理順、是以人々樂レ遵二其敎一、弟子益進、幾遍二海內一、聞レ風私淑者、不レ可二勝數一也、先生素好遊二山川一、多病不レ能レ遂二其志一、嘗遊二相之鎌倉一、曰、是一培塿、未レ足二美觀一、然覇王之墟、足二以感慨一矣、且距二東都一、百里而遠、是我輞川也、數往還、於レ是建長圓覺諸寺緇徒、相邀請レ詩者多、先生亦不レ拒レ之、遂相往來、締二方外之交一甚厚、諸上人相謀、營二草堂於瑞鹿山側一、甚有二幽致一、名以二五勝一、曰、松濤館、曰薜荔門、曰蕉鹿園、曰漱玉橋、曰灌花井、賦レ詩以紀焉、歲一再往還以樂、故已已以後諸作、鎌倉詩居二其半一、先生羸弱善病、幾死復蘇者數矣、寶曆甲戌之夏、先生寢レ疾病、召二門弟子一曰、我命在二旦夕一、死當レ葬二鎌倉圓覺寺之後山一、我嘗登二彼丘一而樂焉、二三子無レ違、則死日猶二生日一、數句病愈、復召二二三子一曰、日者我將レ卽二冥冥一、豈圖下復得レ與二二三子一相見上乎、既而有二今日一、抑天之寵靈與、亦將天欲レ勞二使吾一與、雖レ然五十之年、今已過、人生幾何、我將下築二壽藏乎彼丘一、以待中餘年上、遂遣レ人築レ墳、其崇八尺、樹以二一株松一、封如二馬鬣一、使下二門人松崎惟時一記中其事于石上、巍然在焉、今歲六月、先生復寢レ疾、越七月六日、病革、市橋氏遣レ人召二松崎惟時一、橫谷友信、竹川政辰、及惟熊一、各犇趨而至、則卒、各爲レ位哭、先生無子、故四子相謀、竣二喪事一、友信政辰、奉レ櫬赴二鎌倉一、葬二圓覺寺壽藏地一、先生容貌端正、擧動不レ苟、爲レ人剛毅、不レ恥二聲色貨利一、趨二人之急一甚於已私一、才辨敏捷、議論竟日、終無レ所レ屈、好レ飮、然未二曾失一其儀一、是以一時王侯貴人尊二重之一、執二弟子禮一以待レ之、久而愈敬レ之、先生自レ幼所レ著詩、萬有餘篇、亡慮若干卷、及二疾病一悉傳二之火一、使レ無二孑遺一、於レ是二三子相謀、輯下各嘗所二私錄一者上、僅不レ滿二千首一、將レ傳二于世一、先生生二於寶永元年甲申一、得レ年五十有四、先後娶妻六人、一無二所生一、絕レ嗣、銘曰、

先生之言之文、人無二以惡一無二以數一、天未レ喪二斯文一、永世以終レ譽、

壽福寺訪二桂蔭菴以天老宿一、引到二法雨塔一、禮二千光國師像一、

東海禪門第一祖、千光放出照二山河一、若非二法雨彌一今古一、爭得桂枝蔭轉多、

歸雲洞在龜谷　安脩

洞口垂蘿薜、徘徊露濕レ衣、暮天殊寂寞、但見白雲歸、

淨智寺作　釋萬菴

喪亂建武後、源公樹二覇功一、陪臣濶跋扈、諸藩趨二下風一、武衛謀二誅戮一、發泄密機中、兵戈起二蕭牆一、貔虎圍二公宮一、狼狽幾塗レ地、授權計正窮、松城雖レ雪レ恥、棣蔓永相攻、及レ推二其禍原一、隱然禰祖躬、奪レ嫡欲レ傳レ庶、將無二大叔同一、如何玄域士、維口却興レ戎、乃臨二大難日一、翩然逐二冥鴻一、不レ殊二凶命客一、何稱二出塵雄一、金山存二塔院一、簇雲開法翁、志籍錄二其事一、疑是藻二虛空一、若果學二汲冢一、白日在二蒼穹一、吉詰孰是非、吾徒問二鴻濛一、

淨智寺禮二佛源禪師像一、丈岩上座請過二正絹菴一、設レ供有レ詩次レ韻、　釋鐵牛

五岳中瞻二古法王一、方知遺澤及二無疆一、兒孫有レ範道情厚、接二我禪房一沐二德光一、

東慶寺　高惟馨

女僧精舍玉爲レ蓮、香火常供繡佛前、深鎖二空門一秋色靜、滿林紅樹有レ誰憐、

到二常樂寺一禮二大覺禪師像一、月海上座請入二方丈一設レ供、有レ詩次レ韻謝レ之、　釋鐵牛

沈々古殿傍二山隈一、老樹千年覆二法臺一、多謝生人饒二雅誼一、殷勤迎送唉顏開、

勝長寺院古地、是葬二義朝及鎌田首一處也　山崎嘉

仁之存于豺虎、義之存于蜂蠆、天性物感、更不待修、人之無愛也、孝子何與遊焉、人之無敬也、忠臣何與謀焉、忍而斷父命、忍而斬君頭、草露零々、谷風颸々、其人不可見矣、其名不可休矣、

同處葬實朝、吁實朝讀孝經、全然無事、而耽於歌學、怠於政務、爲天下戮矣、

箱根路詠那須歌、桐火桶中最賞嘉、借問孝忠渾殄滅、差肩柿本慊心麼、

寶戒寺　太宰純

九月霜飛樹色空、江山何處訪英雄、西風吹盡歌鐘響、黯澹秋雲繞梵宮、

暮登光明寺後山眺望

夕陽海上暮天晴、滿目微茫漁火明、畫裏青山看不見、但聞旅鴈作秋聲、

宿相之大佛寺　釋義堂

早歲曾遊頻甲子、羞將髮白對山蒼、寺瀕海岸吹松激、潮退灘沙送月長、去鴈亡書家萬里、寒砧牽夢楚三霜、客懷蕭颯秋風晚、憐爾園蓀小吐芳、

慈恩寺詩序　釋聖瑞

天地之間、維元氣之結之融、突而爲山、呀而爲谷、然觀遊之與乎人者、或奧而拗窪而邃、增之有樹之茂石之蘂、蓊鬱薈蔚、宜乎幽人之所盤旋、樂而不返者爲得之、或曠而軼、雲雨出林莽、增之有臺而崇、閣而延、天爲之高、地爲之闢、宜乎英邁之士、出乎萬類、遊乎物之始、卒歲優游者爲得之、盖天作之、地成之、皆高明幽貞之具、於是乎在、相之治、直東北之交、岡連谷盤、突而起、拗而窪、其曰華谷、兼奧與曠而有之、寺額慈恩、初桂堂聞公、開而基之、大年椿公、繼而輪之奐之、公不入州府三十年、終于山、山之峭壁、斗絕克肖、其攢巒迤邐、有堂宇列焉、廊廡簷牙、廻且啄、浮圖層出、清泰摩尼之殿、白花禪悅之構、龕室千軀像設、森列厥徒、栖心禪誦、石之詭環、水之渟滀、而怪木奇卉、紅紛綠駭、不徒席几而爲耳目之玩也、所謂天墜地出、以授乎人歟、京師名德、以不遂登臨之美爲歎、詩以詠之、極詞於幽遐瑰詭、以往來其懷、山水之秀、益以彰、慕而題之者、安可已乎、嗟蘭亭之遭右軍、盛跡粹然、後續者、洗林澗之媿歟、詩凡若干首、寺之主永貞叟、刻而揭之、請紀其首、庶列名而有榮耀焉、應永戊戌、暮之春、九華山人釋聖瑞序

因循輦寺未抽身、間令老來趨世塵、聽說東南山水好、一宵千里夢相親、　○前南禪大岳周崇

寓舍海東經十霜、未遊花谷但聞名、今觀諸老詩中景、似遂昔年幽討情、　○前南禪玉畹梵芳

客至曾誇絕境殊、慈恩山水冠東都、蓬萊方丈世間有、樓閣煙花天下無、漲海觀瀾過遠浦、富巒望雪趁脩途、如何次第遊關左、更宿招提探奧區、　○前南禪大周周奮

聞說慈恩野趣濃、散人何日託飄蓬、山圍蜀道雲籠棧、水醮湘江雨打篷、月黑玄猿吟曉洞、烟清白鷺度秋空、前年幸見士峯雪、不到駿城東又東、　○前南禪大愚性智

委意東行不可遮、相城南畔梵王家、先看富士峯頭雪、遂宿慈恩塔下花、屐齒澁時攀嵽嵲、橋聲喧處蹈谽谺、此遊眞箇何時果、白髮吟詩又及辰、　○前天龍謙岩原沖

見說玆思寺、溪山清且深、花開春似雪、泉響夜如琴、過客尋幽到、居人踐勝吟、昔遊湘水上、遺恨闕登臨、　○前相國嚴中周噩

金碧招提湘水隈、慈恩一塔倚崔嵬、尋芳人逐春風至、護法龍隨雲氣回、紫陌紅塵間日月、琪花瑤草小蓬萊、如今猶記曾湘地、自愧繁華撲面來、　○前東福岐陽方秀

海東蘭若扁慈恩、方外奧區堪品論、靈隱山西天竺寺、祇陀林下給孤園、虛堂秋老月侵壁、幽谷春長花擁門、欲遂壯遊情未歇、扶桑掛眼向朝暾、　○前東福明叔玄晴

平生未得到瀟湘、緬想慈恩古道場、海氣爲雲圍佛塔、山嵐帶雨酒禪房、窓收柿葉秋書溼、鉢拾松花午爨香、老矣勝遊應是夢、東樓目盡暮天長、　○前東福大川通衍

客舍相城春盡頭、人言花谷可銷憂、紛々雙蝶似相引、寂々孤鶯伴獨遊、古寺山隈塵不到、清泉屋後雨添流、而今廿載教如昨、最憶梨花院落幽、　○前萬壽惟肖得岩

花谷名藍湘水濱、突然高塔逼星辰、千年像教非無力、七寶莊嚴足動人、岩底清泉常滴雨、堦前古木獨留春、投詩却恐涴佳境、句々渾含洛下塵、　○漚華道人周蝦

花谷招提佳致多、春來和夢問如何、天青富士嵌空雪、鷗白瀟湘浩蕩波、佛塔連雲穿碧落、僧鐘動月出岩阿、難爲十日看花客、啼鳥一聲山雨過、　○錦城桂林明讖

花谷傳聞風物新、怪松奇石自無塵、月明兜率天宮曉、花白補陀岩上春、鳥下生臺啣飯去、猿窺禪室學跏馴、年來未遂東遊志、一錫何時往卜隣、　○南紀大鏡一訓

花谷慈恩趣不孤、合尖復見舊浮屠、七層突兀龍蛇窟、四面展開煙雨圖、雲霽山攢金翡翠、月明水蘸碧珊瑚、杜陵野老曾登處、有此一欄風物無、　○京兆心交

聞說湘東山水奇、使人相望又相思、塵中日月未歸去、海上蓬瀛空有期、峭壁雲開圍翡翠、清漣風動碎琉璃、曠懷莫若慈恩塔、携手何時題一詩、　○江東英文

一望東華路阻脩、慈恩聞熟似曾遊、曲欄朝對士山雪、高閣晚臨湘水流、樹杪層々孤塔出、花間纍々小亭幽、他時壯觀心先約、更可題名留上頭、　○伊山大秀

澹陰樓閣養花天、華谷風光記昔年、驅馬晝深紅杏雨、聽鶯曉淺綠楊烟、曾同携手嗟誰在、每一逢春情更牽、聞說祇今得賢主、清泉茂樹益增妍、　○洛東龍派

孤錫東遊客相城、慈恩佳境勝聞名、仙山海上幾塵隔、佛國人間何劫成、翡翠護巢溪雨暗、虹霓射牖嶽雲晴、猶思塔下留題處、滿塢梨花照眼明、　○海南明篤

新編相模國風土記稿卷之十 終

新編相模國風土記稿卷之十一

藝文部卷之八

英勝寺記

林　忠

相州鎌倉扇谷、東光山英勝寺者、太田禪尼所ニ創建一也、三面倚レ山、岩高林茂、佛殿東向、谷深水清、由比之濱、富士之峯、泉之谷、亘福之山、其餘登臨之秀麗、氣象多景、接二于滿目一、心境相通、則己身安養、自性淨土也、吾聞二浮屠說一、昔者妙喜國月上轉輪王妃、殊勝妙顏、生二憍尸迦一、即二王位一、後詣二世自在王佛處一、發意出家、號二法藏比丘一、歷レ劫正覺、立二淨域于西方一、即是阿彌陀佛也、釋尊出世、爲二韋提希夫人一、說二此佛功德一、示二其觀相一、夫人聞而觀喜、與二五百侍女一、即見二極樂世界一、一念至信、皆往二生彼土一、今禪尼開二念佛三昧之道場一、非下獨乘二其他力本願一而已上、欲レ使下諸善男女有二信念一者、悉皆往生上、其功德不レ易レ測也、禪尼自レ少、事二東照大權現一、恭勤不レ怠、寵遇甚渥、嘗應レ命奉二養黃門賴房卿一、黃門以レ之爲二慈母一、其恩義親愛之深、人皆稱レ之、禪尼復奉二黃門之令愛一、以養レ之、使下追二阿潘之迹一、而住中持此寺上、嗚呼、殊勝妙顏者、如來之慈

也、韋提希者、淨土之願主也、然則禪尼、與二殊勝妙顏、韋提希一、異世同志、誠可レ喜也、其芳聲傳二于後代一、與二道場一、永無レ絕矣、至若安養不レ遠、如來現迎、而心境相通、身土不二、則亦可二以見二殊勝妙顏韋提希于今日一歟、住持、戒諱清因、道號玉峯、禪尼、源姓、太田氏、法諱清春、雅號長譽、其院曰二英勝一、故號レ寺、寬永十三年、仲冬二十三日、寺既成矣、事達二台聽一、翌年、臘月下浣、吉辰、賜二相州三浦郡池子村若干戶一、施二入于寺一、且免二寺地稅一、幷簒畝一、禪尼拜二命之忝一、感戴有レ餘、黃門亦共動二喜色一、欲レ令下二此盛擧一垂中于無窮上、於レ是請レ余載二其事一、因書以應焉、

銅雀研記

釋義堂

昔者、魏曹操字孟德、初事二後漢一爲二丞相一、及レ受二漢禪一、建二都於鄴一、建安十五年、創作二銅雀臺一、盖鑄レ銅爲レ雀、置二臺上一、因以爲レ名焉、或曰、銅雀乃銅鳳凰也、而臺上有二屋百二十間一、勢凌二蒼穹一、其上置二宮妓一、遺令曰、吾妓皆著二銅雀臺一、月朔十五日、望二吾西陵墓一、及二魏亡一、臺廢爲レ墟、有下里人耕二其趾一者上、往々得二其古瓦一、盛レ水爲レ研、爲レ世所二貴重一、由レ是文人題詠、登二于史籍一者多、今是研實其一也、初天龍長老、春屋菴禪師、得レ之於海舶一、獻二于關東幕府一、惟大人府君源公、天資文雅、每乘二軍務之隙一、從二事翰墨一、以二文武兼資一也、既得二是研一、而甚喜、於レ是命レ工彫レ匣、以藏レ之、鏤管以揮レ之、麝煤以研レ之、金猿以滴レ之、呼爲二文房至寶一焉、適出以示二小比丘周信一、命俾レ作レ記、余觀二其瓦背一、有レ銘云、建安十五年、其面上下亦有レ銘、上銘後云、紹聖元年七月十六日、東破居士書、下銘後、則云、黃庭堅書、左右又有レ銘、各二行、古篆不レ可レ讀者數字、余退皈二山舍一、考二之倭漢歷書一、其曰二建安十五年一、即後漢末主獻帝、其年庚寅、當二本朝女主、神功皇后十一年一也、其曰二紹聖元年一、即趙宋第七主哲宗、其年甲戌、當二本朝堀河院、嘉保元年一也、今遡而推レ之、自二建安十五年庚寅一、至二紹聖元年甲戌一、八百八十四年、自二甲戌一、至二今本朝貞治三年甲辰一、凡二百七十一年、通計一千一百五十五年矣、其曰二東坡居士一、即蘇子瞻也、其曰二黃庭堅一、即山谷也、考二之二公年譜一、盖東坡紹聖元年、竹レ旨有二南遷之責一、赴二于惠州一、舟中與二山谷一、邂二逅於彭蠡之間一、而爲二山谷一作二是銘一也、惟夫漢之建安、盡二二十五年一、而天下分爲二三國一、曰レ魏、曰レ吳、曰蜀、而其統爲レ魏、魏亡而爲二西晉一、爲二東晉一、晉亡、天下分爲二南北兩朝一、曰二北朝一則元魏也、北齊也、後周也、南朝則爲二劉宋一、爲二南齊一、爲二蕭梁一、爲二陳氏一、爲二隋氏一、隋氏也亡、而后唐興、有二天下一者、二百八十八年、而降爲二五代一、曰後梁、曰後唐、曰後晉、曰後漢、曰後周、五代共五十六年、而天下

皈二於趙宋一、宋治歷三百一十七年、而天下屬二于蒙元一矣、於戲自レ漢以降、興亡治亂、山爲レ谷、谷爲レ陵、人物之更換、都邑之變遷、不二啻千萬一、而是研也、孑然獨存、不二亦壽一乎、或者曰、吾國遠二彼鄴都一、幾乎數萬里、而山夐海阻、是研也、無レ翼而飛、無レ足而至、何也、曰人君修德、則遠人皈、方物至、理必然也、惟我府君、果能修二其德一、以待レ物、則四夷八蠻之國、珠犀象犀之貢、威弗レ加而自服、譯弗レ重而自獻、豈止是研而已矣、但玩レ物喪レ志、則君子不レ取、

余既爲二先府君玉岩昕公一、作二銅雀研記一、後四年、以二丁未四月廿六日一、君薨二于府第一、年廿八、人咸惜二其賢而不レ壽、既而遺命薙髮、著二僧伽梨一、與歸二於瑞泉蘭若一、依二佛氏葬法一、而荼二毗之一、仍用下唐魚軍容陪二祀南陽忠國師一故事上、祔二于開山正覺國師之右一、則研遂藏二于此一矣、而不肖皆預二其事一、及二永和首歲夏一、方今古天誓禪師、來レ自二雒都一、主二是席一、時適以二唐人李氏作、銅雀臺圖一幅一、獻二于今令嗣府君左典厩公一、公喜而寶二藏之一、余一日入レ府求レ觀二其圖一、乃見下鳳鳥翼然跨二屋脊一、如二前記云一者上矣、而上有二江南當代儒釋名勝、題レ詩者五人一、其釋仲銘新公詩、最可レ觀也、曰、銅雀煌々鄴水湄、生靈塗炭國分離、土堦三尺茆茨下、鑿レ井耕レ田總不レ知、蓋以戒レ侈也、余既退靜而思レ之、凡物之隱顯離合、皆有レ數而存焉、今是研之與二書並銅雀一、而相次爲二吾府君賢父子之所有一、若二冥符一焉、豈非二有レ數者一乎、余遂併志、以附二于銅雀研記之末一云、是歲乙卯冬十月、釋義堂某、書二於在城西門保壽精舍一、

一覽亭記

釋清拙

名區勝概、充二塞寰宇一、天慳地祕、常悕二於人一、唯深機上智、旁搜遐討、樓レ玄剔レ頤、得レ司二其要一者焉、相陽之東、有二紅葉谷一、紆レ嶺而上、一牛鳴地、入二錦屏山下一、流泉脈々、前淨智夢窻石禪師、鑿レ岩敞レ地、創二瑞泉練若一、以居、前峯後洞、巧奪二造化一、洞之西略約橫レ空、風磴委蛇、盤回十八曲至二絕頂一、翼然新亭、名レ之曰二徧界一覽一、暇日招レ予、臨二眺其上一、大矣哉、屏張障列、若是其周回也、前有二巨溟一浸レ天、萬頃一碧、海外島々而傑出者、筥根走湯、神山鬱然、左有二長谷一、圓通大士闡化之境、右當二富士一、雄盤亘二數百里一、立レ空數千仞、積二太古雪一、突二兀雲際一、鶴岡靈山、則又分二其次一焉、昆夫山川融結、高低遠近、各不二相知一、能司二其要一者、俾下二衆美一奔趍上、如レ挹如レ獻、千奇萬恠、雜然前陳、使二レ天不レ能レ慳、而地不レ能レ秘也、幽花異卉、爛熳群發、雲敷錦覆、香風遠吹、方二春之時一、登二斯亭一也、則使二人覩レ色明レ心、聞レ香入レ理、珍林寶樹、翹幢偃蓋、紫翠浮レ空、岩耀秀潤、方二夏之時一、登二斯亭一也、則使二人增レ神育レ志、長二養聖胎一、霜露既降、楓林盡赤、南鴈凄冷、來鴈叫レ雲、方二秋之時一、登二斯樓亭一也、則使二人精爽飛越、覺天明朗一、大雪新霽、凍日出レ海、諸峯璀璨、萬象寒色、方二冬之時一、登二斯亭一也、則使二人還源返レ本、歸二復實際一、然則斯亭者、非下徒爲レ縱二遊觀之樂一而作上也、夫嘗試論レ之、十虛無間之謂レ遍、心所至極之謂レ界、殊レ途同レ歸之謂一、境與レ神會之謂レ覽、然此予之所レ謂人々者也、若夫包二二儀一、超二三界一、育二萬物一、空二群像一、則山中主人、獨而有レ之、又非二人々之所一能知一也、主人謝請以爲レ記、嘉曆四年己巳修禊十日、巨福山人清拙正徵撰、

徧界一覽亭

夢窻國師

天封二尺地一許二歸休一、致二遠釣一深得二自由一、到レ此人々眼皮綻、河沙風景我焉廋、

題二瑞泉一覽亭一

旭元明

欄干縹緲錦峯頭、塊視二三山與一十洲一、翠玉一峰知二華岳一、青煙九點見二齊州一、無窮雲接二蒼梧晚一、不盡波涵二碧海秋一、便欲二題レ詩招一李白一、御レ風騎レ氣共仙遊、

春日遊二一覽亭一

曲江繼趙

路踏層々登二翠微一、上頭亭子勢如レ飛、春風吹散宿雲霧、花柳千山錦一機、

和下夢窻和尚遊二一覽亭一韻上

四明梵仙

歷到青雲最上頭、叫開二閶闔一作二同遊一、下方剎土無央數、消得凭レ欄一轉眸、

題二徧界一覽亭一

同

剎海三千在二面前一、天風扶掖倚二欄干一、眼高自覺乾坤小、不レ欲二迢々著レ意看一、

和下夢窻和尚遊二一覽亭一韻上

建長楚俊號明極

捫レ蘿陟近碧峰頭、賓主歡呼樂二勝遊一、物象爲供詩料用、呈レ奇獻レ巧奪二人眸一、

題二徧界一覽亭一

同

絕頂凭レ欄境物新、重々雲海浩無レ限、眼觀爭似二心觀好一、一念超過幾刹塵、

同

清拙正徵

徧若二虛空一極周普、界亡二限劑一超二方所一、一瞥纔存花亂舞、覽不レ在レ眼爲二眞視一、四重樞要闢二天府一、衆彙掇々任二旁午一、拆二出精明一開二肺腑一、直須二披剝從頭數一、東弗于逮擣二萬鼓一、西瞿耶尼走二龍虎一、南閻浮提廓二庭宇一、北鬱單越眇二寸土一、部洲雙々如二粟黍一、鄙彼東山徒小レ魯、新亭爽塏名盖レ古、巧奪二眞宰一泣難レ禦、手攀二星辰一與二天語一、天慳鑿破勿二愁苦一、大叫二女媧一吾語レ女、雲根五色急鍊補、達人化境循二此舉一、元氣溟濛日吞吐、禪居說レ偈似二亭主一、主翁點頭一

笑許、亘二千萬世一付二仰瞻一、

又

迎レ闔山川入二澱藍一、宛如二帝網一互交參、頂門亞竪摩醯眼、
眨二上眉毛一落二二三一、○清拙正徵

脚力不レ辭窮到レ頂、憑レ欄方覺眼頭寬、平蕪盡處青山外、
白鳥明邊正若レ看、○東明慧日塔曰白雲菴

萬層巒上尺闌干、收二盡百城煙水一寒、若使下二善財一最初到上、
何須南走歷二艱難一、○南山士雲塔曰傳宗菴

望眼入レ雲天地寬、大千曾不レ隔二毫端一、空餘午夜一輪月、
誤作二洞庭畫裏看一、○雲屋慧輪塔曰長壽院

一峯正露半空間、孤峻清高絕頂寒、眼力窮邊休レ着レ意、古
今一世似二天寬一、○嶮崖巧安塔曰悟本菴

天開二靈秀一神開レ秘、盡レ遠窮レ高向上關、未レ解二諸塵三昧
起一莫レ辭來レ此倚二欄干一、○天岸慧廣佛乘禪師

晴拂二海天一山澄レ翠、八挺九野絕二遮欄一衲僧好今通天眼、
不レ作二師顏咫尺看一、○孤雲慧約常照師

登臨一十八盤巒、路盡逢レ顛倚二曲欄一、無數劫微塵佛刹、
沙門雙眼裏親看、○此山妙在塔曰定正院

路紆百褶入二層雲一、絕頂春和景物新、南望雪山瀛海北、諸
峯點々一微塵、○東陵永瑢塔曰東雲菴

南岳祝融穿二碧落一、昔年騰踏望二扶桑一、錦屏一覽三千界、
雲漢擎レ眸眇二大唐一、○石室善玖塔曰金龍菴

日本諸山秀可レ觀、錦屏尤是好峯巒、乾坤一覽無餘界、雲霧
長連十八盤、瀑瀉岩前明似レ練、巢飛谷口湿如レ丹、幾時絕
頂究二幽勝一、試向二危亭一共倚レ欄、○河南雪樵陸仁造

孤峯頂上座當レ軒、異境靈跡總現前、眼裏瞳人善通變、神
光照徹盡乾坤、○鑑翁士昭東福寺

欄干高聳入二雲端一、座二斷乾坤一表裏寬、窮到二上頭一親着レ
眼、大千不レ隔一眸間、○慈　洞

層簷翼々翥二林端一、前接二雲天一後倚レ山、下二視諸方一皆峭
嶮、教二誰直透二上頭關一、○雲山智越淨沙禪昌庵

無數恒河沙刹境、自它元不レ隔二毫釐一、頂門眼照二四天下一、
正是當軒大座時、○關東允古

高々峯頂立二門風一、獨倚二危闌一望不レ窮、萬里江山絕二邊表一、
都來收在二寸眸中一、○大渡曇儀

曲徑縈回十八盤、登臨幾度倚二欄干一、微塵刹土無邊境、六
合雲收望眼寬、○越山曇派

錦屏山頂勢高寒、攀レ嶮登レ危天地寬、終日凭レ欄回レ首處、
塵毛刹海列二眉端一、○曇　昌

地靈人傑異二人間一、妙處分明到者難、觀二盡海山千万疊一、
無邊刹境在二毫端一、○妙　紹

座斷高々最上峯、闌干下視十方空、盡微塵刹不二曾隔一、都

在二沙門雙眼中一、○墨田光一

簷翼凌層接二漢天一、上頭關在二碧峯巔一、倚レ欄送レ目窮二邊表一、
收盡三千及大千、○武城曇春

着レ屋最高峯頂居、眼光逼塞四維裏、好生觀也好生觀、大
地山河歸二自已一、○伊北嘉運

憑レ高軒檻壓二蒼崖一、到レ此登臨眼豁開、要レ看大方無外處、
莫レ嫌盤道太榮回、○無惑良欽

軒窻開豁碧峯頭、路繞二岩隈一境致幽、到二得個中休歇地一、
茫々宇宙寸眸收、○汝　知

層簷接漢勢如レ飛、天末雲收夕照微、眼底頓空塵刹海、當
頭薦取目前機、○筑波普傳

透得孤危那一關、天開二圖畫一絕二遮欄一、眼頭高掛青霄外、
下視洪荒八極間、○鳳城曇林

宗匠機關在二上頭一、令レ人高歩樂二清遊一、貪觀不レ忍二下レ山
去一、盡十方空一目收、○建長本心

極レ目推原毫髮間、碧崖鬼外更無レ山、乾坤盖覆多少景、
向二此軒中一正好レ看、○嚴島士瓊

大千捏聚一塵微、回レ首方知宇宙低、空二盡眼頭一無二所有一、
金烏玉兎自東西、○西都祥岩

豁二開雙眼一望中寬、閱二盡風光一獨倚レ欄、本自十方無二壁
落一、微塵刹土現二眉端一、○仁　均

石徑縈迂上二碧巔一、高人着レ屋縱二還觀一、眼頭到處無二遮障一、
日月星辰在二曲欄一、○良　昇

山重々又海漫々、塵刹都來眨眼間、見得分明非見見、共レ
誰高倚二曲欄干一、○豊城可什

塵々刹々盡乾坤、都在我儂心目間、莫下倚二欄干一上中機境上、
超過物外好生觀、○聰　壽

向上機關親掛透、乾坤無レ處レ覓二封疆一、寸眸未レ眺危欄外、
塵刹明々不二覆藏一、○元　洞

捏二到懸崖萬仞巔一、當頭著レ屋數椽寬、十虛不レ隔二絲毫許一、
只在二欄干咫尺一看、○懷　義

天何高也地何寬、多是紛々錯倚レ欄、雙眼豁空超二物外一、
盡微塵刹一毫端、○西都宗竺

危欄側立望何窮、鳥道玄機無二路通一、一對眼晴烏律律、層
巒疊嶂挿二青空一、○相陽圓詢

石磴重々到二上方一、憑レ空架レ屋勢如レ翔、當頭極レ望乾坤外、
萬象森羅廻不レ藏、○山陽曇晟

面々峯巒翠作レ堆、目前無レ地著二塵埃一、十洲三島欄干外、
何事赤松招不レ來、○東關聰文

高蹈二崔鬼一到二上頭一、青霄雲外遠窮レ眸、海山盡是欄干物、
不レ用馳レ神極二隱幽一、○仁　興

亂山重疊俯二危巒一、路陟二層雲一幾屈蟠、徙二倚曲欄一雙眼活、

大千初不レ隔二毫端一、○宗　山
茫々六合絕二封疆一、誰倚二欄干一對二夕陽一、四大部洲塵刹境、
一毫頭許不二曾藏一、○良　雄
分寸跻攀上二碧巘一、曲欄干外接二雲天一、擡レ頭萬里風烟濶、
眼底寥々眇二大千一、○宏　韋
崎嶇石磴入二青雲一、只擬身同二天上人一、獨倚二危欄一舒二望眼一、
須彌百億等二微塵一、○瑞　香
天路縈盤十八回、無邊境致畫圖開、主翁眼裏乾坤濶、明
月清風入レ座來、○信峯眞獻
眼力勞レ於二脚力勞一、坤維面々勢周遭、不レ關二天下秋毫小一、
自是岩房立處高、○鎌倉元矩
絕巘著レ屋聳二雲衢一、萬里山川是有無、開得通方作者眼、
渺然天地一蘆廬、○宗　胤
危欄曲々倚二雲霄一、立處高時眼亦高、望外更無二錙隙地一、
等二觀天下一若二秋毫一、○聰　眞
盡十方空塵刹境、明々只在二屋簷頭一、更無二毫髮可二遮掩一、
剔二起眉毛一落二二鬻一、○鳳城道州
路遶二山腰一取次攀、門欄占斷工頭關、盡扶桑國周遭境、
不レ出二當人指顧間一、○正　詢
拶到凌空萬仞峯、路從二峭壁險崖一通、神機密運無二方所一、
塵刹收歸一目中、○文　祖

崎嶇峭峻路盤回、行到二層巘一霽色開、下二視千峯一倚レ欄立、
盡乾坤內景皆來、○不破宗璨
海闊山高連二四圍一、曲欄干上景無レ遺、眼前歷々空二宇宙一、
天外回レ頭更是誰、○西都宗器南禪德雲庵庭用和尚
巍々峯頂絕二遮欄一、靜座當レ軒四望間、意在二目前一誰了郤、
普天匝地一欄干、○東都元譽
四顧寥々無二際涯一、麗天日月遠二簷牙一、眼中不レ著絲毫翳、
大地山河空裏花、○武林慈懷
路繞二羊腸一進レ步難、飛欄高聳白雲間、不レ藏二天下於天下一、
萬象都盧一目看、○紹　彌
絕峯高寒路嶮難、十方空洞等閑看、除非到レ此倚レ欄者、
餘外豈知天地寬、○全　珠
頂峰新護曲欄干、峭峻門風登者難、空盡眼前無レ限境、都
盧收在二一毛端一、○妙　珂
攀レ險躋レ危到二絕巘一、悠然獨倚曲欄邊、豁開一隻通方眼、
四顧分明極二大千一、○希　醒
萬仞孤峯厭二數峯一、靈蹤幽奇在二其中一、我來終日凭レ欄立、
刹海重々眼底空、○志　純
萬頃烟波千朶峯、收來盡在二兩眸中一、河沙刹土浮幢表、只
向二門頭戶底一通、○宗　昭
已眼豁開心路通、大千曾不レ隔二針鋒一、恒河沙數微塵境、

收在二自家方寸中一、○俊　透
羊觴山路踏レ雲登、窮到二孤峯最上層一、已眼豁開天地闊、
倚レ欄渾欲レ使二飛騰一、○刑部正意
歷二盡孤危一曲徑通、欄干倚望細推窮、無邊廣大塵毛刹、
究レ意那離當念中、○西都智信
等閑踏著通霄路、獨倚天邊十二欄、欲レ識二毘盧眞淨體一、
當頭還向二此中一觀、○鶴峯晋在
金烏玉兎遠二欄干一、到レ此方知宇宙寬、不レ用遐觀重矯レ首、
騰レ身踊躍入二雲端一、○得　定
峭峻門庭著レ脚難、放二開線路一與レ人看、塵々刹々無邊境、
盡在二眉毛眼睫間一、○東海竺元
乘間絕頂倚二層欄一、縱レ目山川隱約間、倏爾欲レ空乾像外、
須彌百億念中觀、○天台希融
乘レ興躋攀不レ覺レ疲、路頭布嶮與二分危一、無邊刹境供二雙眼一、
只許通玄長者知、○智　明
琪樹瑤花遶レ路開、縈回石磴上二崔嵬一、山川萬里歸二眉睫一、
放下何妨歇去來、天府志玄天龍二世無極和尚塔曰慈濟
座斷屏峯最上層、擬然萬境競レ頭爭、欄干十二晴雲外、大
地山河鐵眼晴、○甲州宏友
海闊山遙廻接レ空、推青流碧幾重々、脚頭不レ動危欄上、
遠近洪纖印二雨瞳一、○相陽文韶

絕巘擎出曲欄干、向上門庭進レ步難、脚力窮邊雙眼闊、東
西南北在二毫端一、○三笠興運
天門亘關最高巘、四顧寥々廓二大千一、遮莫諸峯爭二嶮峻一、
座中齊在二脚頭邊一、○關山祖棨
錦屏畫出綺窻幽、山水如レ麻亂入レ眸、一十八盤難レ進レ步、
時人莫下向二半途一休上、○武原諒学
雲中透出錦屏山、數曲朱欄縹渺間、漠々大方本無レ外、招二
來天下一與レ人看、○龜山與悅
橫レ嶺飛甍接二亂峯一、望州烏石巧符同、森羅萬象齊相見、
見後依前兩眼空、○丹山士令
六肉洞達飽二天風一、雲外猶疑有二路通一、滄海無邊山萬疊、
一雙眸子瞭然空、○不破圓遇
羊觴屈曲到二通玄一、隱々朱甍露二絕巘一、是我平生雙眼活、
未二曾見一此遠風烟一、○信夫梁禀
絕頂連レ雲絲勝レ藍、當レ軒富士若二終南一、怡然縱レ目乾坤外、
華藏遊窮一十三、○豐田德彩
欄干十二萬峯頭、圖畫天開四望周、人境俱忘休敬去、塵
々刹々溢二雙眸一、○月下清源
錦屏高出四無レ埒、多少凭レ欄悵望人、未レ至二衲僧眞見處一、
山河大地眼中塵、○荏柄正因
勝地多應レ當二偉觀一、遠臨二天外一近東關、頂門豁瞎摩醯眼、

海色平吞萬疊山、　○博多士聞

倚レ空華構冠二東州一、彈壓人間百尺樓、但見眼中天下小、不知身在二最高頭一、　○長岡通川

奥域靈區豁二閫慳一、四簷之外絕二遮欄一、東軒大座忘二身世一、下視塵毛刹海間、　○秋父士聞

雲連二危構一座中寒、泥視三千刹海寬、看至二無邊無際處一、不レ知月上三玉欄干一、　○望月懷珠

曲欄干下宿雲屯、海疊山重在二脚跟一、見々之時見無見、眼皮不レ勤盖二乾坤一、　○武原宏先

面々軒囱入レ望舒、八絃平遶是庭除、眼光燦破四天下、人在二虛空背上一居、　○三谷友丘

雲錦屏風向上關、欄干十二礙二青天一、海山第一扶桑景、萬里如レ圖在二目前一、　○鳳城德芙

十八盤頭獨倚レ欄、山重々也海漫々、揚修幼婦如知レ妙、登陟莫レ辭行路難、　○古渡德圓

脚力窮邊到二歇場一、大千捏聚置二禪床一、悠然眼蓋乾坤外、萬里江山未二是長一、　○相山正參

雲背登々路詰盤、座中乃有二此江山一、危欄掛在二蒼穹上一、八極風光透レ眼寒、　○直江禮智

不知何處是窮邊、盡十方空有二目前一、休去更須二重歇去一、莫下將二白眼一望中青天上　○新田旨的

到レ此何如暫歇休、　○羽山宏雅

十方虛空入二眼睛一、睛々普入十方空、大地山河是甚麼、簷前鐵馬吼二天風一、　○武陵妙謙塔日如意

疊嶂連レ天蒼碧寒、白雲擎出玉欄干、孤笻到レ此暫休歇、便覺胸中宇宙寬、　○齊宮寬會

老樹飛崖屋似レ懸、不レ知身在二最高巔一、天無二四壁一地無レ戶、眼裡瞳人入二大千一、　○相陽契珣

層霄之外掛二危欄一、日月星辰遶二座間一、傾二盡滄溟一來洗レ眼、開レ窓我欲レ看二青山一、　○相陽妙慧

雲軒高聳碧峯頭、相見誰言在二望州一、四面開レ窻窮二八極一、大千全是海中漚、　○赤城妙策

眼空二四海一獨凭レ欄、萬象堂々天地間、意在二目前一無二外法一、山連二碧水一水連レ山、　○越山祥津

通霄向上路頭長、華扁粘レ雲墨暈香、雙眼明邊清興遠、笑拈二藤蔓一絆二斜陽一、　○吉水良聰建仁聞溪和尚

飛磴連レ雲十八盤、青雲在レ近手堪レ攀、窻前踢倒煎茶水、富士峯頭白浪翻、　○西都士顏東福五庵和尚

高低遠近起二峰巒一、八表無邊取レ性看、雲外眼睛烏律潦、虛空拽下掛二欄干一、　○日光妙安

遊息間登万仞峰、十方座斷眼頭通、也知心外元無法、看到青山綠水中、　○名越守簡

心隨レ境轉境非レ眞、境逐レ心忘心是塵、盡十方空俱殞滅、可中方稱倚レ欄人、　○相陽下生

萬疊遙岑分二蟻垤一、無邊巨海眇二蹄涔一、也知地位昇二高廣一、歷々三千屬二下臨一、　○武原奇英

獨二步丹霄一目力高、大千元不レ隔二秋毫一、幾人途路未二休歇一、地北天南益自勞、　○大原奇宣

獨倚二欄干一眇二大千一、眼中歷々幾山川、外觀無物內無我、屋角松濤吼二半天一、　○關東志薰

懸崖峭壁要二人行一、欲レ到毋レ辭努力登、華藏重々歸二眼底一、誰知身在二碧雲層一、　○五臺普紹

等視乾坤沒二兩般一、飛烏走兎逸二欄干一、不二從絕頂施二床座一、只貴人々向上看、　○長峰禪鑑

雲外凭レ欄著々高、古今十世鏡難レ逃、有時手捉二天邊月一、打落虛空背上毛、　○會津上聞

九層雲上足二遐觀一、誰信蟭螟眼裏寬、搏二取浮幢玉刹海一、重々掛在二玉欄干一、　○西都義沖

蜀錦屏風白玉欄、回レ頭已在二碧雲端一、眼妙十日無二遺照一、萬象收二歸粒粟一寬、　○那須妙松

四簷雲片作二簾櫳一、北斗藏レ身萬象空、合レ眼黃昏開レ眼晝、恒沙刹土在二胸中一、　○秋山妙竺

朶々青山開二步障一、重々滄海入二庭除一、倚レ欄供レ望人無數、

墻壁休ニ將來ニ大空一　○大原妙瓊
寶坊結構着ニ奇功一、幻出風軒入ニ半空一、峭壁巉崖通ニ得路一、
好山萬朶寸眸中、　○象先文岑
立處孤高見處寬、定ニ乾坤一眼不ニ相瞞一、挨ニ開碧落通霄路一、
把レ手同レ誰倚ニ曲欄一、　○越山圓旨
四簷高出白雲頭、萬象掀然自獻酬、芥視三千大千外、莫下
將ニ雙眼一限中閻浮上、　○關西紹榮
翼々飛簷聳ニ碧岑一、危欄曲々礙ニ星辰一、有時送レ目青霄外、
華藏重々總是塵、　○富士眞燈
大地撮來針眼大、等閒拋向几前安、虛空稽首須彌舞、打レ
皷何妨普請眼、　○高橋印元

正覺國師年譜云、嘉曆三年戊辰、師在ニ瑞泉一、於ニ絶頂一
構レ亭、名ニ徧界一覽一、額後自記云、嘉曆四年、乃元德初
孟春下澣、木訥叟疎石書、謹按、嘉曆四年、乃元德初
元也、爾來百十二年、遭ニ兵難一而斯亭無絕、實永享十
一年春也、後四歲、嘉吉二年壬戌、秋七月廿日、命ニ工
匠一而創レ事、八月四日植レ柱、同月廿六日落成矣、資助
悉出ニ於江湖諸名德一者也、化緣之簿藏ニ于文庫一、以永
爲ニ山中盛事一、住持小比丘古敎玅訓謹識、

徧界一覽亭二首　木下貞幹

塊看東岱兼西華一、杯視三江又五湖、放眼只言彌ニ六合一、
還疑藏密欠ニ工夫一、
任佗河伯望洋秋、三島十洲心上浮、九萬鵬程終有限、誰
能更上一層樓、

登ニ一覽亭一　亭在鎌倉是夢窓國師遺跡　高惟馨

憶昔孤亭擁ニ石欄一、諸天覽勝白雲寒、山如ニ螺髻一三千丈、路
轉ニ羊腸一十八盤、溟海濤聲傳ニ萬壑一、芙蓉雪色壓ニ層巒一、只
今安在禪餘座、絕頂空留幻跡看、

瑞泉寺一覽亭　釋萬菴

瑞泉古剎傍、孤巘聳ニ雲端一、低橋跨ニ碧峽一、鳥道十八盤、陘
阻捫ニ垂葛一、登出海漫々、潮風掠レ面惡、空翠灑レ衣寒、人烟
分ニ郡邑一、樹色識ニ峰巒一、欲レ辨ニ四維廓一、眇焉踞ニ危盤一、磎石
如ニ峨側一、青丘可ニ指看一、度索蟠桃小、崑崙夕氣丹、白日飄何
徂、明霞鬱可レ餐、源侯存ニ復構一、苔色滿ニ勾欄一、四壁榜ニ篇
詠一、字墨漸隳殘、懷古獨浩歎、欲レ下更盤桓、何時餌ニ瑤草一、
青冥控ニ紫鸞一、從レ此朝ニ絳闕一、廻ニ翔玉皇壇一、歸來若木東、坐
覩滄海乾、

重題ニ一覽亭一

突兀孤亭俯梵輪、鎌山遺跡望來新、覇圖尙擁千峰色、兵氣
長消六幕塵、雨斷龍池涵落日、花飛鳥道散餘春、松巒深鎖
題詩壁、嘯ニ咤風雲一憶ニ古人一、

雨中登ニ一覽亭一　釋鐵牛

有約登臨雨氣濛、雲低彷ニ彿座ニ天宮一、眼觀何似ニ心觀好一、
編界都盧一望中、

登ニ一覽亭一　川榮壽

梵王宮閣倚ニ層巒一、荒艸蕭々秋色殘、此日高僧何處在、江
山不レ改レ舊時看、

集ニ瑞泉寺一　高惟馨

錦屏山上一登臨、携手同遊七寶林、但見棲雲窺ニ色相一、何
須觀世聽ニ潮音一、人間未レ問三生夢、物外徧銷五濁心、都
爲禪餘耽ニ翰墨一、不レ知西嶺夕陽沈、

夜宿ニ瑞泉寺一

空山秋寂寂、薄暮宿ニ香城一、月出藤蘿影、雲深麋鹿聲、佛燈
傳ニ半偈一、禪室夢ニ三生一、別有ニ摩尼色一、逢レ君覺ニ夜明一、

登ニ瑞泉寺後山頂一、卽夢窓國師所レ創、徧界一覽亭
之墟、基址猶存云、　太宰純

夢公禪刹占ニ名山一、風磴嶙峋不レ易レ攀、萬古雪華瞻ニ富嶽一、
四時霞彩望ニ函關一、丹丘芝長神仙境、滄海潮來天地間、臨眺
休レ論人代異、長敎下ニ過客一破ニ愁顏一、

到ニ瑞泉寺一、禮ニ夢窓國師像一、寺主大忠公、就ニ方
大一設レ供、有レ詩、次レ韻以謝、　釋鐵牛

慕レ跡瑞泉禮ニ帝師一、相逢方喜是心知、地靈又得レ主ニ人傑一、
堪下傷ニ舊觀一報ニ祖慈一、

陪ニ蘭亭先生一遊ニ瑞泉精舍一、寺在ニ楓谷一、山號ニ錦
屏一、上有ニ一覽亭一、云是夢窓國師遺跡、

谷友信

瑞泉精舍碧雲端、秋杪禪林對ニ鷲冠一、白馬臺披ニ霜練一敞、丹
楓谷疊ニ錦屏一寒、山門日靜清凉界、石磴天廻十八盤、覽勝
古亭餘ニ舊跡一、色空應下向ニ幻鄉一觀上

登錦屏山最高頂　上路盤曲十八、多楓樹、因名錦屏、釋夢窓嘗設一亭、名徧界一覽、今廢

唯存基趾、宋人陸仁造有寄題詩、其辭曰、乾坤一覽無餘界、雲霧長連十八盤

安脩

秋杪霜飛楓樹丹、錦屏高倚白雲端、恒沙遍覽三千界、磴道
長連十八盤、東北群山含ニ精翠一、西南大海湧ニ層瀾一、吾身宛
在ニ諸天上一、那羨神仙生ニ羽翰一、

瑞泉寺古井　山梨治憲

古井湛然綠蘚封、寒泉幾歲閟ニ靈鐘一、無レ敎ニ容易窺ニ方鑒一、
恐有ニ風霆起ニ蟄龍一、

藤澤寺　伊藤禧

門前修竹匝ニ長堤一、新島一回近レ手啼、行脚上人猶未レ返、
青松隨意指ニ東西一、

過清淨光寺　滕褒

驛舍疲ニ途遠一、停レ輿慰ニ道場一、雙林松竹暗、十界石苔蒼、呼レ

豎尋禪窟、言師赴幻鄉、遊行無往著、歲月度津梁、四海安居濶、彌天覺路長、法輪歸幾日、此處駐空王、

清靜光寺訪小栗墓（戲據小說）　熊阪邦

一遊冥府憶人間、遂謁閻王解職還、豈比穆公聽廣樂、應同玄石飲中山、

同二首（遊行本寺在于此）　山崎嘉

滅却人倫願往生、遊行遊食是橫行、小儒忽聞攢眉去、一地雷同念佛聲、

藤澤道場今甚處、畠山巡竄感慷多、思權奚必爲身累、忠信泰驕看奈何、

同（村口有遊行道場又有小栗橫山等墓）　菊地東勻

專念一宗古道場、塵緣不深翠崖岡、橫山小栗事茫昧、墳墓苔深各自荒、

藤澤道場　木下貞幹

征鞍暫憩驛亭傍、枉道來尋一遍房、苔蘚蝕門標古跡、竹篁抱閣護靈場、松枝西指僧留室、淵溜東來客憶鄉、法派流傳藤澤水、分吾少許洗塵腸、

適餘綾大運寺　高道昂

暫避行塵汚紺園入海臯、杪秋空界靜、亭午法雲高、孤石看馴虎、長筵躡巨鰲、歸依良可賦、凡思愧吾曹、

相模國早川莊、湯本早雲寺者、北條早雲所建也、早雲者、伊勢國人也、遊駿河、仕今川氏、後來於伊豆、稍盛大也、人多從之者、一旦率兵入相州、拔小田原城、而滅上杉氏、遂領關東八州、於是而乃自稱、曰北條早雲、早雲有子、曰氏綱、其嗣曰氏康、其嗣曰氏政、其嗣曰氏直、共五世居小田原、關白秀吉公、攻滅氏直、而后北條氏滅矣、此寺今隷大德寺云、林　忠

近時直指市鄽奔、自買檀那賣世尊、野麥芄々法堂草、這中應有稗沙門、（寺門內有麥畝）

早雲寺　林　恕

早雲勃起帶甲冑、夢中杉鼠託占繇、寺門掃苔一老僧、猶話昔日五代富、

同　菊地東勻

北條結構棄千金、佛殿空餘松竹陰、五代香烟春夢斷、江風依舊送潮音、

早雲寺覽古　服元喬

臺殿松杉入空翠、巋然獨存知何寺、云是黃金長者園、唯有青苔布滿地、古木森々歲月長、野人爲說全盛事、綺羅春殿舊時花、墓草碑苔冢累々、空伴名號列五公、剝石一看皆涕淚、憶昔永正元龜中、天下車書久不同、萬邦瓜剖相吞滅、龍戰虎爭誰不雄、就中勃興北條氏、一朝割有海沂東、累世子孫功業繼、八州草木共偃風、大城列峙精兵饒、晝擐金甲夜鳴弓、氣籠山嶽風雲起、勢捲波濤江海通、何意中原出霸王、一旦長驅入封疆、石垣山上臨闔境、震擊天雷不可障、計窮面縛悲瓦解、城池社稷共喪亡、卽今四海日月新、此地爲餘供香人、關門行路通大嶽、弔古且過溪水濱、野店山橋無情甚、往來屢送馬蹄塵、

早雲寺懷古

金湯增築石垣城、社稷關門難守成、隆運星移五世業、連營瓦解八州兵、霸圖踪跡餘蕭寺、雨色莓苔沒古塋、小朶峰頭松萬樹、晚風猶作鼓鼙聲、　○松延年

古寺蕭寥穹谷中、儼然遺像託仙宮、一從誅暴開基業、遂見握奇羅衆雄、五世繁華餘慶盡、八州草木舊封空、蘋蘩猶有山僧薦、鏡梵過花韻夕風、　○山梨治憲

荒凉古院夕陽閑、幽徑斜通翠柏間、猶隨英雄碑下淚、陰雲晚起石垣山、　○菊池禎

空林弔古此徘徊、五代繁華安在哉、陳跡年々生茂草、秋深麋鹿上歌臺、　○菊池禎

同（寺在金湯山）　熊阪邦

足利季世天下亂、就中關左最多難、鎌府公室有若亡、二相爭權無忌憚、挾主結黨日相攻、八州黎元墜塗炭、北氏高祖知何人、元是南州羇旅臣、北遊數年依駿主、壯志欲一拯斯民、乃爲駿主守東境、乘機蠶食豆海濱、藉兵一旦入關中、關中草木忽偃風、子孫承業共英武、克繼父祖成厥功、一擧席卷八州地、何異孫氏據江東、爾來累世霸東隅、設官列爵擬上都、城闕雲興臨翠陌、樓臺霞蔚比黃圖、百寮只少司天監、但恨未得一師儒、此時中原誰主盟、豐王霸業功已成、乃發使者屢諭意、北氏負固不朝京、豐王赫怒投袂起、百萬雄兵乃東征、忽見山河失百二、函嶺險路如平地、嶺西二城死領軍、嶺東連柵走主帥、遂進大兵適大城、已見山谷滿僵齒、石垣山上列貔貅、攻擊十旬不暫休、更有飛將從天下、徇毛略武扼咽喉、可憐五世八州主、一朝力屈作俘囚、宗廟社稷忽爲墟、布地黃金一日虛、金湯山色長不改、五公碑古綠字餘、國家不待謝詢表、特置守冢供掃除、墓畔回頭望海沂、城郭如故人代非、東海驛路連函嶺、西土諸侯逮職歸、我亦爲客向上國、獨訪遺蹤淚霑衣、

早雲寺觀北條氏古墓有感而作　仲廷沖

豐公之征北條氏、先數其不庭、告諸天子、天子賜節刀、而後出師是中葉將帥所絕無、實正兵也、爾後

佳兵濫略、疲ニ敝民兵一而終焉、可レ惜耳、宜乎不レ獲レ
永ニ其胤一、

君不レ聞、昔日北條全盛日、五世威權震ニ八州一、原城長據
金湯固、箱根險絕占ニ咽喉一、氏政驕暴蔑ニ王制一、終莫ニ俟職
速ニ帝丘一、豐公斯時當ニ盟主一、爲責包第不レ入レ府、憤然奏請
征討事、節鉞新賜禮由レ古、大軍雲下相豆間、要路守兵難レ
閉レ關、州縣靡然自瓦解、一朝降殺更何顏、青史長傳不臣
迹、苔碑累々蔭ニ松柏一、路傍蘭若封ニ榛莽一、彼此俱逝都往昔
嗚呼、以レ暴易レ暴世所レ傷、漬武專征及ニ異方一、軍民疲敝天
下怨、二世忽見禾黍長、人世覆轍事可レ尋、獨向ニ荒茫一感ニ
古今一、

登紹太山寺十二韻　　滕　婺

奇蹤假ニ靈勞一、福地闕ニ天慳一、長者布レ金後、高僧飛レ錫還、白
蓮終結レ社、黃壁遠移レ山、祇樹眞空外、香臺一氣間、松陰風
磴冷、苔色石橋斑、窮レ頂智初盡、臨レ溪步更艱、懸泉鳴ニ巇
嵎一、莽瀨瀉ニ潺湲一、勅築踰ニ巖曲一、彷徨憩ニ水灣一、三千開ニ眼
界一、百二對ニ禪關一、慧海房陵小、慈雲函嶺間、護持城郭近、隨
喜象龍攀、我亦馳ニ遐想一、聊玆出ニ世寰一、

紹太寺清淨觀八景　　釋木庵

西嶺春花

三月和風通ニ海寰一、十分春色滿ニ人間一、天晴夕照照ニ林岳一、
無數山花錦繡班、在藤澤之南如
江島螺髻青螺出于江心
天仙會東絲雲鬢、化作ニ青螺一秀ニ海灣一、朝態暮容知幾變、
風流日々對ニ山顏一、

川崖雨聲在觀下左邊數十步
瀑聲浙瀝如霧如雨
山房聚首話ニ幽情一、清晝屢聞驟雨聲、座久興闌人各散、出レ
門笑見瀑流鳴、

數筆遠山在大磯高麗寺
後如筆卓然
天白東方雲霧開、尖々數朶削ニ崔嵬一、是誰細ニ著丹青彩一、一
幅畫圖展ニ海隈一、

前街夕照

驛路晚炊處々烟、家々邀レ客各爭レ先、一城瑞氣半天日、
交彩氤氳上ニ几筵一、

三浦歸帆

水先激灩映ニ斜暉一、下載片舟何處歸、滿幅風帆過レ眼急、
郤疑鷗鷺掠レ崖飛、

東山秋月

白雲飛盡一天閑、桂魄徘徊牛斗間、得意深明寒老句、句
清胸朗絕ニ躋攀一、

湘江雪浪

風雷夜吼動ニ窻扉一、曉看潮聲擊ニ海磯一、十里長濱崩ニ六出一、
簇レ空白々卷還飛、

龍峯寺八景詩并序　　釋鐵牛

八景者蓋濫ニ觴於支那瀟湘一、而本邦近江亦有レ之、壬申
春、子到ニ于相州高座郡、國分莊龍峯禪寺一、遲留有レ之
也、朝暉夕陰、照映ニ几席之間一、比ニ湘江勝絕一、不レ可ニ多
讓一焉、使ニ垂髫佛來一レ此、則麗藻豈不ニ再擒一哉、於レ是
標ニ其名一者八、系レ之各以ニ一絕一、俾下來者一偶且和上
之、請自レ隗始、

大山夕照

遠野煙生晚色濃、遙看大麓夕陽春、半如ニ錦繡一半如レ黛、
滿目滄瓏千里重、

士峯晴雪

西嶺千秋積雪繁、雲間湧出到ニ銀盆一、無涯景況一清絕、倚ニ
遍欄干一占ニ曉昏一、

鳴澤暝煙

鳴澤渺茫沙路脩、夕陽暝色一堆愁、曾從ニ圓位遺ニ歌詠一、
千古令ニ人傷ニ素秋一、

清水鐘聲

清水樓臺遠近晴、隔山聽得□華鯨、何人能解發ニ深省一、送
盡百年是此聲、

島間春耕

漠々平田接ニ綠蕪一、春鴻落處秩初敷、憑レ誰乞ニ與二三頃一、
兩笠煙簑了ニ晚途一、

湘浦度船

溶漾滄□水拍レ天、行人幾度涉ニ湘川一、早知世路風波險、
來往可レ愛灩澦船、

菅社秋月

海嶽雲收轉ニ桂輪一、上方秋色最清新、欲レ求ニ佳句一寫ニ幽
賞一、蘋潦先羞菅姓神、

祇林綠樹

鬱密幽叢祇樹林、薰風殿閣滴ニ清陰一、區々紫陌紅塵外、來レ
此應須洗ニ客心一、

新井源公碑銘　碑在新井氏采地鎌倉郡植木村龍寶寺　室直清號鳩巢

朝散大夫新井源公、諱君美、字在中、幼名璵、白石其號也、
其先上野人、爲ニ新田族一、新田大炊助義重曾孫、新田二郎
某、削レ髮爲レ僧、因ニ其所居一、稱ニ荒居禪師覺義一、其子孫遂
以ニ荒居一、號ニ其家一、後又易ニ新井一、蓋我邦方言、與ニ荒居一同レ
訓也、覺義之後、世仕ニ南朝一、有ニ戰功一、南朝既亡、荒居族、
流ニ寓上下兩野之間一、元龜之初有ニ圖書允某一、據有上野勢
多郡女淵城一、公其後也、祖勘解由某、方遭ニ世屯一、亡ニ土地一、
卒往ニ常陸一、從ニ多賀谷修理大夫平宣家一、敗去隱ニ河內郡一、其
宅門外有ニ古橋一、里人號爲ニ古橋殿一、父與次右衛門正濟、母

藤原氏坂井某女、正濟幼喪ニ怙恃一、年十三、來ニ江府一、爲ニ武州人一、及レ壯爲ニ士屋家臣一、甚爲ニ民部君一所ニ任用一、民部君卒後、有レ故而去、公生而岐嶷、穎悟夙成、三歲時、能書ニ大字一、民部君愛ニ其幼慧一、召置ニ膝下一、比レ及ニ十歲一、常在ニ延寶三年從ニ家君一辭去、天和二年、公仕ニ於堀田筑前侯一、會韓人序ニ其陶情集一、是歲丁ニ家君憂一、居無レ何辭レ仕、去隱ニ居府下一、元祿六年冬十二月、起就ニ甲府之辟一、始至、以ニ儒職一召ニ侍講筵一、優待日渥、後數年、特旨進ニ公資格一、列爲ニ寄合衆一、寶永六年夏四月、文廟始繼ニ大統一、秋七月賜ニ公采地歲租五百石一、七年冬十一月、以事使ニ京師一、八年春二月、還報稱レ旨、冬十月、朝鮮來聘、先レ期命レ公掌ニ其事一、多有レ所ニ建白一、皆施行、是月叙ニ從五位下一、任ニ筑後守一、十一月、倍ニ賜采地一、與ニ前所レ食、幷爲ニ千石一、公以ニ職在ニ顧問一、每出入風議、必論レ事剴切、動中ニ肯綮一、將順匡救、所ニ裨益一不レ少、正德中、國家不幸、仍遇ニ大喪一、而公漸老、無レ意ニ當世一、廼杜レ門謝レ客、日夜以ニ典籍一爲レ樂、卒以レ此終、公以ニ明曆三丁酉二月十一日生一、享保十年乙巳五月十九日一、疾卒、享年六十九、娶ニ日下氏朝倉長治女一、生ニ二男二女一、長明卿、今克レ家、次宣卿先卒、二女長適ニ市岡正軏一、次適ニ石谷清寅一、公少時自負ニ膽氣不羈一、既而折節讀レ書、通ニ經史百家之編一、中歲始遊ニ於順庵木先生之門一、以ニ該博一見レ稱、最善ニ唐詩一、其詩豐腴馴雅、直與ニ開元諸名家一、相頡頏、由レ是四方爭傳、以逮ニ海外之國一、而公之詩名擅ニ天下一、其所レ著書藏ニ於家一、後世必有ニ傳レ之者一、銘曰、

公昔鴻漸、羽ニ儀巖廊一、晚節豹隱、蔚乎其章、國有ニ一老一、天不ニ慭遺一、朝野共慨、若レ亡ニ著龜一、佳城新卜、山河環周、既安且固、

長谷大悲閣二首　九月十九日自雪下里至藤澤驛　熊阪邦

高閣嵯峨倚ニ翠微一、先看海上白雲飛、千年鶴向ニ三山一去、八月槎從ニ萬里一歸、覇主園陵含ニ古色一、應神宮殿映ニ朝暉一、憑欄偏愛登臨好、與罷還悲人代非、

千尺丹梯倚ニ白雲一、相中風物入レ看分、魏家宮闕惟秋樹、晉代衣冠總古墳、海色忽從ニ初地一至、潮音還向ニ半天一、聞感來卸笑牛山泣、直就ニ旗亭一酒一醺、

巖殿大悲閣　岸鳳質

稽首巖殿大悲尊、慈容赫奕照ニ乾坤一、常視ニ衆生一如ニ吾子一、攝取徧入圓通門、今覩南海補陀落、移在ニ正法給孤園一、示現至レ今半千歲、彩雲深處翠簪昏、山巔更覺殊秀美、巖下清流演ニ金言一、藜杖斯日探ニ眞境一、遊覽暫玆脫ニ世煩一、

新編相模國風土記稿卷之十一　終

新編相模國風土記稿卷之十二

村里部　足柄上郡卷之一

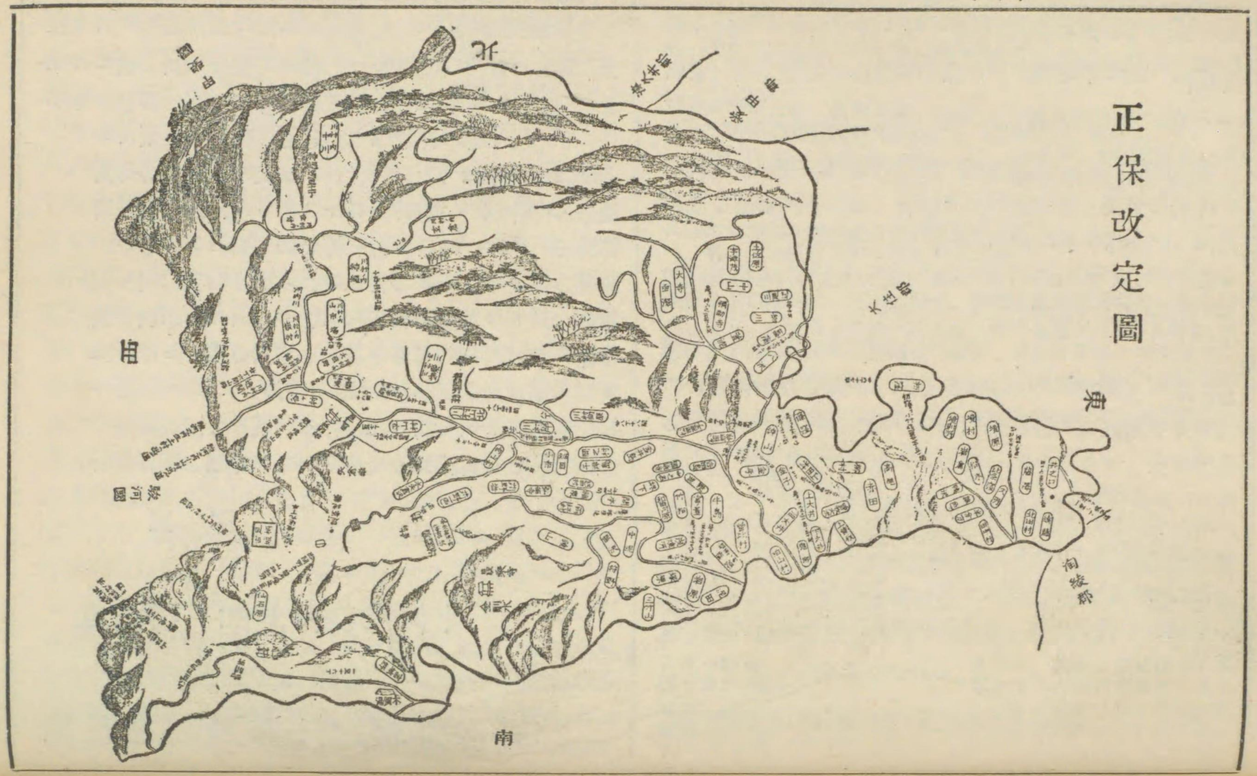
圖說

本郡は國の西邊に在を以て、北條氏割據の頃、國中を東西中三分に闔稱せし時、足柄上下の二郡は西郡と唱へしこと、【北條役帳】及當時の古文書等に往々見えたり、郡の東邊中村鄉の地、【倭名鈔】には淘綾郡の鄉名となす、されど是は郡界選替ありて、後足柄上下二部に分隷せしなるべけれど、今古圖の傳ふるものなければ、古の沿革知るによしなし、中古駿河の國界の改まりしことは、左に載する正保・元祿兩度改定の繪圖を照覽してしるべし、且今考定圖を作りて闔郡の大意を摘擧し、略其說を附す、

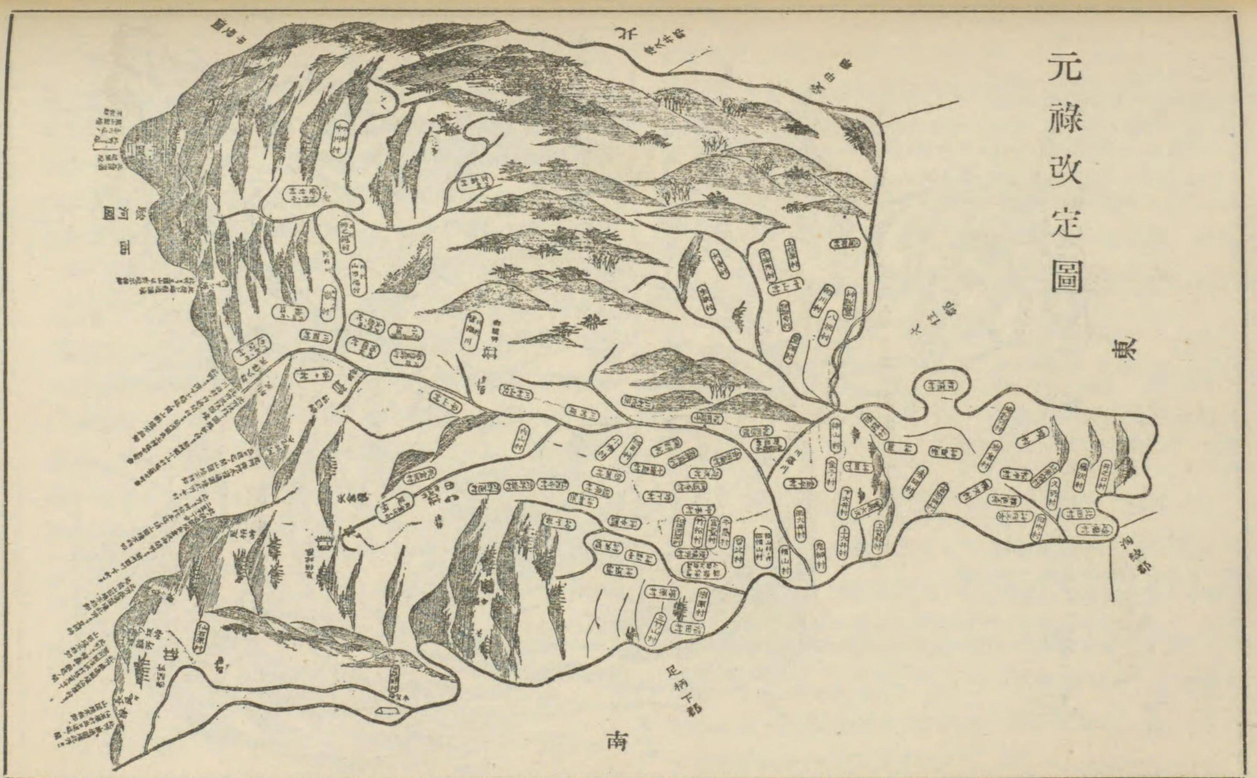
足柄上郡は、國の西邊、駿甲二州の界にあり、江戸日本橋より郡の東界遠藤村まで、十九里の行程なり、【續日本紀】には足柄上郡と記さる（其證下に引用す）、又【倭名鈔】國郡の部にもしか記し、足辛乃加美と註す、【萬葉集】には足柄安之我良と記し、又假字にて阿之賀利阿之賀利乃和乎雞山云々云々など、集中に多く見ゆ、按ずるに、是は全音便の唱のみにて、定まりたる稱呼にはあらじ、殘本古風土記には足輕に作る、其記中郡の上下を分記せず、四境を云ものも、上下二郡を括擧し、東限ニ寒川之西岸一、北限ニ越山一（已上二方の地名全詳ならず）と記す、是則本郡の地を云へり、西限ニ湯之瀨山一、南限ニ足輕浦一（已上二方の地、今も下郡に其遺趾あり、彼郡の圖說に委く辨ぜり）、と記せるは、即下郡の地なり、抑足柄の地名、古く見えたるものは、【古事記】景行天皇の條に、日本武尊東征の歸路、足柄山を過し事を載す、曰倭武命平和山河荒神等、而還上幸時、到足柄之坂本、於食御粮處、其坂神化白鹿而來立、爾卽以其咋遺之蒜片端、待打者中其目、乃打殺也、故登立其坂三歎詔云、阿豆麻波夜、故號其國謂阿豆麻也、卽自其國、越出甲斐、坐酒折宮云々、按ずるに、【日本紀】には信濃國とし、此坂を信濃坂に作る甚異なり、事是を始と云べし、又元明帝の靈龜元年三月、本郡の人尺麻呂が、至孝を賞せられし事、【續日本紀】に載せらる、【元明紀】曰、靈龜元年三月丙午、相模國足柄上郡人、丈部造智積君子尺麻呂、幷閭里終身勿事、旌孝行也、是郡名の國史に見えし始なり

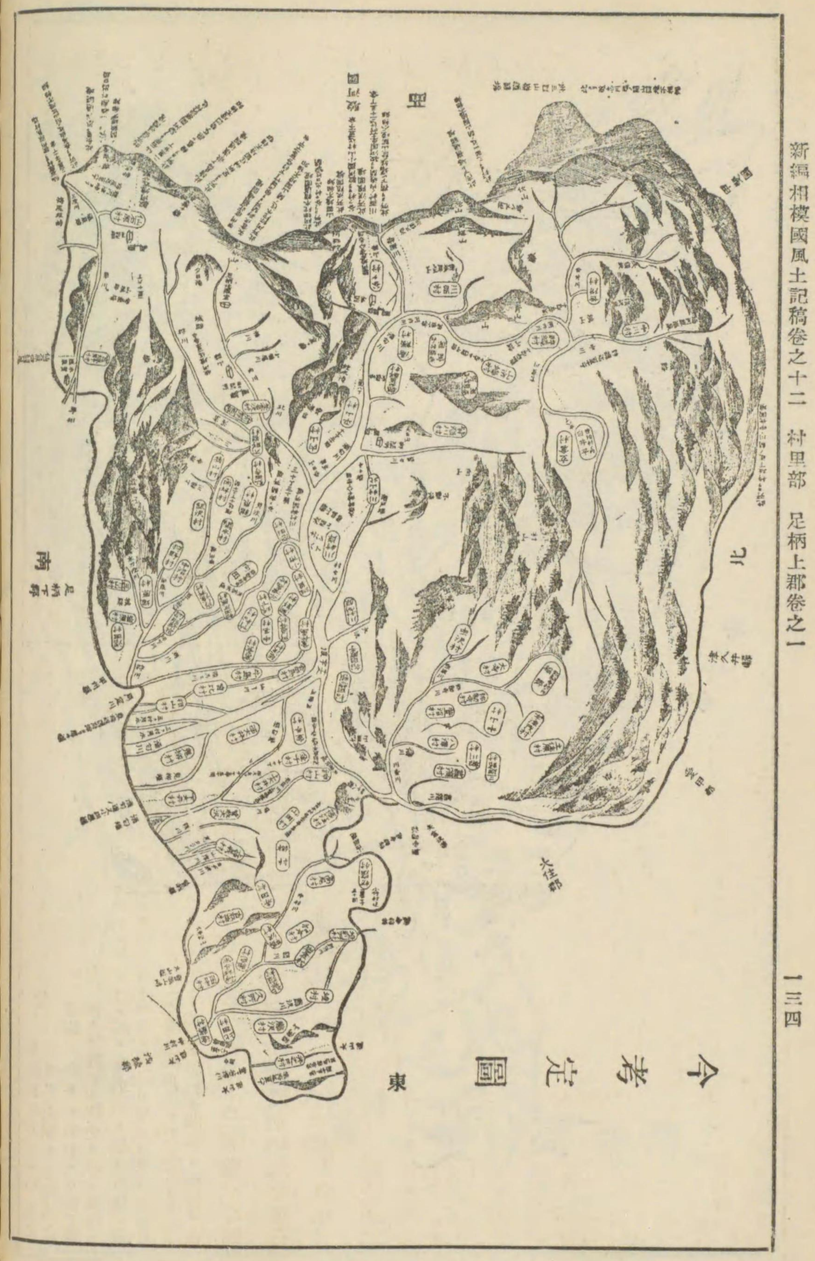
延曆二十一年五月足柄路を廢せられ筥荷路を開く、【日本紀略】曰、延曆二十一年五月甲戌、廢相模國足柄路、開筥荷途、以富士燒碎石塞路也、明年五月、此道を廢

正保改定圖



元祿改定圖





し、再び足柄の舊路に復せらる、舊路、本郡は、都て山嶽多き地なれば、酒匂川の兩邊平夷の地に多く村落をなせり、圖郡の形狀宛も瓢の如く、東を首とし西を尾とす、其四至、東は大住郡に接し、南は足柄下郡に隣り、西は駿甲二州を境とし、北は愛甲郡及津久井縣に邊せり、地形東より西へ漸々高く、最西は猪ノ鼻・矢倉の二高嶽に至れり、されば陸田多く一段七畝三歩一厘、水田少し、田段別、千七百六十文、六町五畝十二歩、用水には、專ら酒匂川の水を引沃ぎ、川音川・狩川等の諸流を灌漑し、或は山間の清水を引て耕植す、土性は多く赤黑の兩種にして又砂礫錯れる地も少しくあり、農業の外專ら薪を採炭を燒て、生産の資とす、固より富饒の戸口乏し、圖郡の村數、正保の改めに九十八、元祿の改めに九十五、按ずるに透間・諸淵・大藏・野嶽四村を合して一村とし、川西村と圖稱し、又境原村を境村に併入し、總て爰に四村を減ず、又都夫良野村内小畑を枝郷と唱へ、別村とし、更に數に入、故に減ずるもの凡て三村なり、今は一村を減じて九十四元祿圖に載する都夫良野村枝郷小畑を本村に併入せり、石高、正保の改に、二萬三千七百七十三石七斗一升三合、元祿に至て、三萬二百四十九石六斗二升三合となる、前に增加する事、六千四百七十五石九斗一升、今又三千五百五十石一斗二合を增加し、惣高三萬三千七百九十九石七斗二升五合に至る、この餘

寺社除地三百三十八石五升八合餘、但段別のみにて、高に入ざる蓑爾たる除地は此數に入、郡中東邊の諸村五十五、遠藤・北田・田中・久所・藤澤・半分形・雜色・比奈久保・松本・鴨澤・赤田・高尾・古怒田・井ノ口・境・境別所・栃窪・柳・篠窪・山田・神山・金子・上大井・西大井・金手・栢山・曾比・吉田島・小市・班目・岡野・千津島・瀧下・金井島・延澤・圓通寺・中之名・牛島・宮ノ臺・竹松・和田河原・弘西寺・怒田・福泉・雨坪・關本・狩野・飯澤・中沼・炭燒所・塚原・三竹山・沼田・上曾我・大澤、合高一萬千二百四十三石餘、小田原宿足柄下郡の屬、定助鄕を勤む、西邊の諸村は加助鄕を充らる、隔年又は五ヶ年を限りて勤る村もあり、此餘其事に預らざる村十五あり、岩原・仙石原・皆瀨川・都夫良野・松田庶子・湯觸・山市場・神縄・玄倉・岩倉・中川・世附・川西・下大井・鬼柳　脇往還二條を通ず、一は小田原宿より、甲駿信三國への往來にて按ずるに、足柄下郡早川村、海藏寺藏、永祿十一年七月、北條氏より傳馬の事を下知せし文書に、宛所小田原より甲府迄、關本透宿中とあるは、此道の事なり、透の字は卽通の字の義なるべし、足柄下郡北ノ久保村より郡中沼田村に入、矢倉澤村より駿州駿東郡竹下村に達す、道程四里許、幅二間、又千津島村の傳に、往昔は足柄下郡國府津村より西大友村に至り、夫より郡中下大井・金子・金手等の村を經て、十文字を渡り、吉田島・延澤・千津島・怒田・苅野等の村々に掛り、矢倉澤御關所前にて、今の道に合す、是を甲州古道と云、一は矢倉澤道なり、大住郡千村より四十八瀨を越え、郡中松田惣領に達し、四十八瀨水溢の時は、大住郡澁澤村より本郡篠窪村に入、神山村に入、十文字渡を越え、にて本道に合す、此道を富士往來とも云、

和田河原村に至て、甲州道に合す、行程一里三十町許、幅九尺より一丈に至る、小往還十條、一は谷ヶ村御關所道にて、甲州道弘西寺村小名向田より別れ、怒田村に至り、宇金堀塚にて岐路となり、西行して御關所に至る、行程三里餘にして、末は駿州駿東郡小山村に達す、幅八九尺、一は前路怒田村字金堀塚より分れ、北行して川村御關所に達し、是も末は駿州駿東郡生土村に達す、行程四里許、幅四五尺、一は仙石原御關所道と唱へ、足柄下郡底倉村より、郡中宮城野村に移り、御關所に至る、行程二里餘、末は駿州駿東郡深澤村に達す、幅四五尺、一は曾我道と云、上大井村小田原道より別れ、上曾我村より足柄下郡曾我岸村に達す、行程二十六町、幅二間、一は酒匂道なり、下大井村小田原道字前畑より別れて、直に足柄下郡西大友村に達す、一は富士道と唱へ、足柄下郡小稜村より郡中岩原・塚原二村の界に達し、岩原村小名坂下にて、直に甲州道に合す、大山道三條あり、一は足柄下郡曾我別所村より、郡中田中村に入、井ノ口村より大住郡大竹村に達す、行程一里三十町餘、幅二間、是を六本松通大山道と云、文明年間聖護院准后道興、遊歷ありし路次と見ゆ、一は足柄下郡小竹村より郡中遠藤村に入、久所村にて前路に合す、行程二十一町餘、幅九尺より二間に至る、是を羽根尾通大山道と云、羽根尾は下郡の屬、一は鴻綾郡一色村より郡中井ノ口村に入、直に前路に合す、

一は小田原道と唱へ、大住郡澁澤村より郡中篠窪村に入、末は下大井村より西大友村に達す、當郡往古領主の沿革を考ふるに、大井庄郡中三分之二、此庄に屬す、今大井を冠る村三あり、を、文治四年六月、京都延勝寺領に進納あり、又建保元年五月、和田義盛追伐の賞として、山城判官行村に宛行はる、松田郷今猶存せり、即松田惣領松田庶子、其郷名を唱ふ、は波多野右馬允義常領せしが、治承四年十月自殺の後、大庭平太景義に宛行はる、事は松田惣領の條に詳載、河村郷今郷名を唱へず、河村某村と稱する者、十六、は、河村三郎義秀が所領なりしが、一旦沒收せられ、又建久元年九月本領を安堵せり、事は川村尚原の曾我庄今庄名を條に詳なり、て里名を唱ふ、曾我某と唱ふる者、は建久の頃、曾我太郎祐本郷に二村、下郡に四村あり、信領せり、以上【東鑑】

大森氏の城跡及墓所等あり、

下郡の屬、主たりし後は、當郡も又其領内たるべし、今尙岩原村に

信濃守藤頼の時、明應四年二月伊勢新九郎長氏是を逐て小田原城を乘取、豆相二國を平治するに及では、闔郡永く彼所領となり、永祿の頃は專ら其家人等に附與して領せしむ、就中苅野庄は一圓松田左馬助秀治領せるなり、此餘の領主地頭、各村然しに賛せず、して左京大夫氏直が時、天正十八年七月滅亡に及び、悉く御當家の御分國となりし後は、郡中多くは大久保七郎右衛門忠世に賜ひ其餘地を麾下の士米倉丹後守信繼・曲淵勝左衛門吉景・同筑後吉清等が采地に宛行はる、慶長十九年正月、忠世が男相模守忠隣、改易せられし後、其領邑の地悉く御料となり縣令を置る、元和五年閏十二月、其地の内を阿部備中守正次に賜ふ、殘れる所尙御料なり、九年五月正次が領邑を武州岩槻へ得替せられしかば、又御料に復す、寛永九年十一月稻葉丹後守正勝、小田原城主となるに及て、當郡も大抵彼領となる、丹後守正通の時、貞享二年十二月越後國高田城に移されしかば、三年正月大久保加賀守忠朝に賜ふ、其子加賀守忠增の時、寶永四年富士山焚燒し、郡中多く砂礫に埋まれしを以て、彼領邑も此災に罹れる地は、他所に替られ、又縣令を置る、因准して猶彼領邑たる所纔なり其後延享四年先の替地は官に收められ、再舊地を賜ひ、又天明三年に至り、舊に復せしもあり、此餘地頭の沿革等、各村差同あるもの、其所に詳載して爰に贅せず、今郡中多くは大久保加賀守忠貞の所領なり、其他郡の東邊に分家出雲守教孝の領邑一合四才、三百九十四石三斗六升、山田村内、あり、中村鄕及其邊には御料　千四百七十三石二斗七合四才、井ノ口・境別所・岩倉・栃窪・柳・山田・田中・久所・松本九村、并旗下の士小笠原若狹守信名、三百四十七石三斗二升六合、遠藤・北田二村、

高井但馬守式房、五百五十五石九斗四升九合、藤澤・半分形・比奈久保三村、伏屋新助百七十二石一斗七升九合、境村内、石野八太夫三百石、井勺、等の采地あり、當郡風俗他に異なる事なしといへども、南邊宮城野・仙石原二村は歲旦松に代て、門戸に樅を立るを例とす、北邊山間の數村を東山家古は菖蒲・八澤・柳川・三廻部・萱沼・彌勒寺・中山・土佐原・宇津茂・大寺・虫澤・十一村なりしが、今は萱沼以下をのみ入、七ケ村と呼べり、西山家皆瀨川・都夫良野・湯觸・川西・山市場・神縄・玄倉・世附・中川九村、近き頃より支倉と唱へり、按ずるに、川以下三村を、新山三ケ村と稱す、村山を隔てたれば、東西山家の名を唱ふるなるべし、土地僻遠なる故、土人其性おのづから淳朴なり、西山家に至ては人物殊に素朴にして、言語擧動、自然古昔の風俗を存せり、かゝる深山僻遠の地なれば、當時新田義興・脇屋義治小手差原の役に敗北し、鎌倉にありしを、松田河村の者ども、諫めしかば、一たび此山間に引籠り危急を逃しも宜なるかな、事は川村山北古城蹟の條に詳載すれば、是に贅せず、

○【倭名鈔】所載合鄕四井餘戸驛家　○高屋　唱を註せず下是に同じ、今諸國同名の唱呼を參考するに、多く多加也と註す、信州安曇郡鄕名、或は多加倍、佐州羽茂郡鄕名、或は多介倍、同州雜太郡鄕名、或は加木倍、飛州荒城郡鄕名、等註するもあり、殘本風土記にも、此鄕名を載す、日、高家、公穀四百七十二東三字田、假粟二百

三十二丸六字半田、郡中さすべき地なし、按ずるに、今の高尾村、即此轉呼にして、其地ならんも識べからず、○櫻井　佐久良爲と唱べき事論なし、郡中境村に櫻位權現の社あり、又櫻入と唱ふる字あり、是等地名の殘れるもの歟、さては村名も舊は佐久良爲なるべきを、後世訛りて佐加比と唱へしより、文字をさへ今の如く改めしも識べからず、是も殘本風土記に載せ、曰、櫻井、公穀六百七十二東三字田、假粟四百二十七丸二毛田、貢松栢樟杉諸鮮魚等、又此部內に、櫻田神社の名見ゆ、曰、櫻田神社、大化三年丁未三月所祭木花咲耶比咩也、神貢百束、今郡中に考る所なしと云ども、若は前に云ふ、櫻位權現の舊名ならん歟、然る時は此地今の境村なりと云んに、聊考據なきには非ず、○岡本　乎加毛止と唱ふべし、是も殘本風土記に載す、曰、岡本、公穀六百八十二東三毛三字田、假粟三百七十二丸七字田、貢楊梅・梨・棗・松・楓桂檀・熊膽・狐狸皮・鴻・雁・鴨・鶩・鶏・諸河鮮等、又岡本神社の名見ゆ、岡本神社　成務三年癸酉、所祭豐岡比咩也、神貢百束、有神戸巫家等、今郡中さすべき地なし、○伴郡　殘本風土記には伴部と記す、是に從ふべし、郡は部を訛れる事必せり、【倭名鈔】是等の訛往々見ゆ、唱は止毛倍と唱ふべし、或は止毛肥前國小城郡郷名、とのみ註せしも見ゆ、錦部を爾之古利と唱ふるに同じ、往古、伴部の造等を置れし所ならん、此他、服部・建部・使部・物部・海部等の郷名、諸國にあり、皆此類なり、今郡中にさす所なし、○餘戸　○驛家　其地詳ならず、延喜兵部式諸國驛傳馬の條に、本郡傳馬五匹とあり、曰、傳馬、足上・曾綾・高座各五、今の關本村、往古足柄官道の驛路といひ、又中古迄宿驛たりし事、古記に往々見えたれば、即驛家の舊趾ならん歟、

○今所唱合郷十一　○中村奈加牟良　管する村十三、赤田・遠藤・北田・田中・久所・藤澤・半分形・雜色・比奈久保・松本・鴨澤・高尾・古怒田・按ずるに、本光寺文書、永祿十年の物には岩倉村もこの郷に屬せし由、所見あり、足柄下郡に跨りて、八村を管す、文明十三年の物、遠藤村五所宮棟札、三浦陸奥守道寸が書簡、大住郡寺山村民所藏、永祿十年の文書、本光寺文書、元和二年の物　五所宮棟札、等に上中村郷の名見え、【北條役帳】に、下中村の名を載たれば、古は其所屬を分ち、本郡は上中村郷、下郡は下中村郷の別稱ありしと見ゆ、今は上下の別を云はず、概して中村郷と唱るのみ、抑中村郷の地、【倭名鈔】は淘綾郡に屬し、後郡界遷替せし事、及庄名に唱へ、且古記に著見せし事等は、下郡圖說及中村原の條に詳載す、○松田滿津　松田惣領・松田庶子二村を管す、【東鑑】治承四年十月、同十一月の條、永正三年十月の文書、松田惣領延命寺藏、及天正十八年の制札　同村民所藏、等にこの郷名見ゆ、○岩原伊波波羅　岩原・塚原二村を管す、○千津島勢牟頭慈滿　千津島、盡下二村を管す、○曾比所眉【小田原役帳】にこの郷名見ゆ、曾比一村の唱なり、下各村皆同じ、○山田也末駄　○篠窪志廼久保　元和二年の物の棟札、○菖蒲志也宇部　○彌勒寺美呂久茲　○怒田奴太　享德二年の文書　鎌倉淨光明寺藏　にこの郷名見ゆ、

○今所唱合庄二　○大井於保爲　上大井村以下、五十六村是に屬す、酒匂川を境ひとし、北方は當庄に屬し、南方は苅野庄に隷す、たゞ栢山・曾比・吉田島の三村は、河南に在ど、猶此庄に屬するは、酒匂川の瀨、變遷せしが故なりと云、【東鑑】文治四年六月建保元年五月の條に、當庄の名見ゆ、○苅野加廼　狩野村以下、三十六村是に屬す、舊は狩野なるべき事疑ひなし、いつの頃より今の文字に改けん、詳ならず、　享德二年の文書、鎌倉淨光明寺藏、【北條役帳】永祿十一年の物、谷ヶ村白旗社棟札、天正十九年の文書　塚原村長泉院藏、等に當庄の名見ゆ、又小田原陣の制札　狩野村民及關本最乘寺藏、にも當庄の名を載す、

○今所唱里名　○曾我楚賀　上曾我村曾我大澤二村是に屬す、又足柄下郡に四村跨れり、古庄名にも唱へ、又里名の古記に顯はれしことは、足柄下郡圖說里名の條に詳なり、

○足柄山阿之賀良也末　郡の西にあり、古は郡中連山の總名なり、今は駿州の界なる、足柄峠邊の諸嶽を括稱して足柄山と呼り、巍然として層嶺聳立す、西は駿州駿東郡に跨り、南は本郡仙石原・宮城野二村の諸峰につゞき、北は谷ヶ平山・內山三村の村落に接し、東の山趾は矢倉澤村なり、廣袤各三里許、往古は山中東海道の官路なりしを、桓武帝の延曆二十一年五月初て箱根路を開かれ、官道を移されしに、明年五月舊路に復せられし事、【日本紀略】に見えたり、事は矢倉澤村足柄峠の條に詳なり、常陸介孝標が女の記に、此山を過ぎり山麓に投宿せし事を記す、其全文を見て、當時山中の幽寂なる樣想像すべし、

【更級日記】曰、足柄山と云は、四五日かれて怖しげに暗かり渡れり、漸々入たつ麓の程に、空の氣色、果々しくも見えずえも云ず茂りわたりて、いと恐しげなり、麓に宿りたる所に月もなく暗き夜の闇に惑樣なるに、遊び三人、何くよりともなく出來たり、五十許なる一人、二十許なる、十四五なると有、庵の前に傘をさゝせて据えたり、男ども火をともして見れば、昔こはたと云ひけんが孫と云、髮いと長く、額いと能懸りて、色白くきたなげなくて、さても有ぬべき、下仕へな

どにても在ぬべしなど、人々哀がるに、聲總て似るものなく、空に澄昇りて、愛たく歌を謳ふ、人々いみじう憐れがりて、け近くて人々もて興ずるに、西くにの遊びは、えかゝられしなど云を聞て、難波わたりに競ふればと、愛たく謳ひたり、見る目のいときたなげなきに、聲さへ似る物なく謳ひて、さ許恐しげなる山中に立て行を、人々飽ず思ひて、皆泣くを、稚きこゝちには、まして此宿りを起ん事さへ、飽ず思ゆ、又曉より足柄を越ゆ、まいて山の中の恐しげなる事は、云ん方なし、雲は足の下に蹈る、山のなから許の、木の下の纔なるに、葵の只三筋許ある、世離れてかゝる山中にしも、生けんよと、人々憐れがる、水は其山に三所に流れたる、奥州後三年の役に、甲斐守義光、山中にて伶人豊原時秋に、管絃の奥義を傳授す、【時秋物語】曰、甲斐守義光左兵衛尉に侍しる時、兄陸奥守義家朝臣、武衡・家衡等を攻けるを京に候て傳聞けり、御暇を申て下らんとしけるを、御許なければ、兵衛尉を辭し申て、陣に絃袋を懸て馳下りける、近江國鏡の驛の此方にて、花田の單狩衣、青色の袴著て、引入烏帽子したる男、後れじと駒に鞭打て來るあり、怪う思て見れば、豊原時秋也、あれは如何に、何しに來りたるぞと問ければ、とかくの事は云はで、唯供仕へんと許り云ける、此度の下向、物騒ぎ事侍てなれば、伴ひ給ん事、尤本意なれども、やうなしと、頻に止るをきかず、強て隨來にけり、力及ばで諸共に行く、相模國足柄山に來にけり、笑にて義光馬を扣て日、留め申せども用ゐ給はで、是まで伴ひ給へること、其志深しさりながら此山の關、輙通す事もあらじ、義光は所職を三拜申て、都を出しより、命をなき物になして罷向へば、如何なる關をも憚るまじ、蒐破て通るべし、それには其用なし、是より歸給へと云ふを、時秋猶承引すず、又言事もなし、其時義光時秋が思ふ所を斟て、道より少し入て、木陰に打寄、芝切拂はせ、馬より下り、楯に板を敷て、一枚には我身座し、一枚には時秋を据え、人を遠く屏けて、空穗より文書取出て、時秋に見せけり、父時元自書たる、大食調入調曲譜也、義光は時元が弟子にて管絃の奥義を究めたる者也、時秋いまだ十歳にも足らぬ程に、時秋には授ざりけり、さて笙は有やと問ければ、候とて懷より取出したりける、用意の程、先いみじうぞ侍ける、かく墓來給ふは、定て此料にてもや侍んとて、二曲を授く、義光はかゝる大事に據て罷れば、身の安否知難し、百に一も安穗ならば、都の見參を期すべし、そこには豊原數代の樂工、朝家要領の仁也、我に眞志あらば、速に歸洛して、道を全うせらるべしと云ければ、理にまけて登にけり、按ずるに、足柄下郡底倉村の屬なる山中に、笛塚と呼る處あり、この時の古蹟など傳ふれど、憖なる證を得ず、保元の亂に、左大臣頼長、合戰を議せられし、折しも爲義の詞に、足柄宮根を塞ぎ云々の語あり、【保元物語】曰、左大臣殿爲義を召合戰の次第、御談合あり、爲義此勢を以て、などか防がで候べき、若御所を出させ給はゞ、東國へ御幸を成し奉り、足柄宮根を伐塞ぎ、東八箇國、相傳の家人な催して、都へ返し入進らせん事、案の内に候と申ける、平治元年十二月少納言入道信西の子息等、流罪せらるる中に、播磨中將成憲は、此山に徑して下野に赴けり、【平治物語】曰、少納言入道の子供、僧俗十二人、流罪せられけり、中にも播磨中將成憲は、老たる母と、少き子とを振捨て、遼遠の境に赴ける、かくて富士の高峰を打詠、足柄山をも越ぬれば、何くを限共知らず、武藏野や堀兼の井をも尋見て、下野國府に著、治承四年十月賴朝軍勢を引率して、山中を横行し、駿州に發向す、【東鑑】曰、十月十八日、大庭三郎景親、爲加平家之陣、伴一千騎欲發向處、前武衛率二十萬騎精兵、越足柄給間、景親失前途、逃亡于河村山、時に大庭三郎景親、平家の陣に馳加らんとして、亦此山にかゝりしに、賴朝の軍勢に恐怖して、河村山に逃亡す、【源平盛衰記】曰、大場三郎景親、今は叶はじと思て、三千餘騎にて、平家の御迎として上洛しけるが、足柄山を越てあひ澤宿に著、前には甲斐源氏二萬餘騎にて、駿河國に越て、東國の勢を待、後には兵衛佐殿、責上と聞えければ、中間に被取籠、景親心弱く成て、鎧の一の草摺切落して、二所權現に奉り、足柄より北、星山と云所に逃籠て息つき居たり、元暦元年正月木曾義仲追討の時、鎌倉の軍勢、足柄箱根の兩路にかゝりて馳上れり、曾我里に歸る、【平家物語】曰、壽永三年春、源武衛木蘇將軍義仲を討時、各鎌倉を立て、足柄を經て往もあり、筥根へかゝる勢もあり、思々に上る、此時佐々木四郎高綱も、十七騎にて山中を蹈たり、【源平盛衰記】曰、佐々木四郎高綱は、十七騎にて、大磯小磯遂和宿、湯本足柄越過て、引懸々々打程に、其日は二日路を一日路に著、三月梶原平三景時、本三位中將重衡を具して、山中を過れり、【平家物語】曰、本三位中將重衡卿は、三月十日、梶原平三景時に具せられて、關東へこそ下られけれ、足柄の山打越て、急がぬ旅とは思へ共、日數漸々かさなれば、鎌倉へこそ入給ふ、僧西行此山を經歷せし時、歌を詠ず、【西行物語】曰、足柄山にかゝりて、昔實方中將の名も、足柄の山なればと詠じ、又白雲山深鳥一聲、といひし人のことゝも思ひ出さる折節、木枯しの風、身にしむばかりなりければ、山里は秋の末こそ思ひしる哀しかりけり木枯しの風、建久三年十一月、鎌倉永福寺供養の導師公顯、下向により、沿塗各國に奉行を置時、山越の兵士四人を沙汰す、【東鑑】曰、十一月二日御堂供養、導師下向之間、海道驛家事、國々被差定、奉行、足柄山越兵士、沼田太郎・波多野五郎・河村三郎・豊田太郎・工藤介等、可沙汰之由被仰含、曾我十郎祐成、其弟五郎時宗、弗藏の讐を報んと、此山の邊にて、工藤左衛門尉祐經を狙へり、【曾我物語】曰、鎌倉殿被聞聞此由後、被仰下、其何助經自伊豆通鎌倉事、差賀一月有四五度何今不貂、五郎承之、佐候此五六箇年間、立住足柄筥根佐河古宇津云々邊、日夜朝暮貂候、四年五月復讐の時、兄弟の家人、丹三郎鬼王丸、遺託の文書等を携、此山にかゝりて、曾我里に歸る、【平家物語】曰、壽永三年春、源武衛木蘇將軍義仲を討時、各鎌倉を立て、足柄を經て往もあり、筥根へかゝる勢もあり、思々に上る、此時佐々木四郎高綱も、十七騎にて山中を蹈たり、【源平盛衰記】曰、佐々木四郎高綱は、十七騎にて、大磯小磯遂和宿、湯本足柄越過て、引懸々々打程に、其日は二日路を一日路に著、三月梶原平三景時、本三位中將重衡を具して、山中を過れり、【平家物語】曰、本三位中將重衡卿は、三月十日、梶原平三景時に具せられて、關東へこそ下られけれ、足柄の山打越て、急がぬ旅とは思へ共、日數漸々かさなれば、鎌倉へこそ入給ふ、僧西行此山を經歷せし時、歌を詠ず、【西行物語】曰、足柄山にかゝりて、昔實方中將の名も、足柄の山なればと詠じ、又白雲山深鳥一聲、といひし人のことゝ

宿の君女、此山を越ける時、山神翁に化して、歌を教へたりけり、足柄と云は是なりと記す、又阿佛が【十六夜日記】に足柄山は道遠しとて、菅根路にかゝる時、此山を想像せし詠吟あり、ゆかしさよそなたの雲をそばたてゝ餘所になしぬる足柄の山

正應二年九月惟康親王將軍の職を罷られ、歸洛の時、此山を過れり、よりて久明親王の下向には、其迎への諸士此路を避て、箱根路より上京せしとぞ、【鎌倉大日記】曰、正應二年九月、貞時使飯沼判官等奉迎久明親王、避蹇將軍惟康親王所過之路足柄山、改其途而入路、【增鏡】には、兵の勝れたる七人、御迎に上る中に、飯沼の判官と云者、さきの將軍上り給ひし道も、まがく〳〵しければ、跡をも越じとて、足柄山をこよきて、上るなどぞ、あまりなることにや云々【鎌倉執權記】曰、惟康親王、正應二年九月十三日御上洛、年二十六、

建武二年十二月尊氏追討として、新田義貞下向の時、箱根路へは義貞押寄、當所へは中務卿尊良親王を奉じて、脇屋義助等馳向ふ、鎌倉方には、左馬頭直義箱根路を固め、尊氏は足柄越を支へしが、竹ノ下にて合戰ありて、京勢敗北す、【太平記】及【梅松論】に見えたれど、竹ノ下は今駿州の屬なれば、引用に及ばず、

四年八月相模次郎時行伊豆國より起て、五千餘騎足柄箱根に陣を取、【太平記】曰、奥州國司北畠顯家卿、八月十九日白川關を立て、下野國へ打越給ふ、此時先亡の餘類、相模次郎時行も、伊豆國より起て五千餘騎、足柄箱根に陣を取て、相共に鎌倉を攻べき由を、國司の方へ諜せらる、國卿應二年、尊氏惠源禪門を誅罰の爲、鎌倉へ下向すと、薩埵山駿州の屬、に著陣せし時、十二月後攻の諸勢、當所に據りし、禪門方の軍勢を追捕す、將軍は直義入道誅罰の爲、鎌倉へ下給、十二月二十七日後攻の勢三萬餘騎、足柄山の敵を追散して、竹ノ下に陣を取、時に高麗彦四郎經澄、其手に屬して軍功を顯せし由經澄が欵狀に見えたり、武州高麗郡新堀村民所藏文書曰、高麗彦四郎經澄軍忠事、

去年親應二八月、下給鎌倉殿御敎書、馳越下野國宇都宮、致忠節畢云々、十二月廿九日、於足柄山、追落御敵等畢、今年正月一日、馳參伊豆國府、至于鎌倉、御供仕畢、

右軍忠之次第如斯、正平七年正月日　承之畢押、

應永廿二年十二月上杉禪秀山中を踰て駿州に赴き、持氏を攻んとす、【鎌倉大草紙】曰、十二月廿五日禪秀は千葉・小山・佐竹、長沼・三浦・蘆名の兵、三百餘騎を引率して、足柄山をこえ入江の庄の北に陣を取、

永享十年九月京鎌倉矛楯の時、京勢二手となり、當所と箱根の二路より押寄す、【東亂記】曰、九月十日　京都より

文明十八年、聖護院准后道興山中を經歷して歌を詠ず、【回國雜記】曰、足柄山を越るとてよめる、足柄の八重山越て眺れば心とめ僧萬里も駿州桃園を出て、山中を過よと關や守るらむ、

【梅花無盡藏】曰、出桃園赴足柄、自注に二十九日自桃園赴相州、有兩道、一曰箱根、一曰足柄、足柄爲近曉陰及旦快晴、詩曰、箱根雖近小挑源、尚隔神巫三嶋村、一步不臨山似恨、直尋足柄幷朝暾、

文龜二年七月、自然齊宗祇、湯本の屬、足柄下郡　にて終焉の後、遺骸を舁て山中を過ぎり、駿州に赴きし由、終焉記に見えたり、

日、足柄山をこえて富士の根を北に見て云々足柄山は、さらでだに越うき山なり、こしにかき入て、たゞ有人のやうにこしらへ、跡先に附て、駿河國の界桃園と云處に落著ぬ、

天正十八年四月、東照宮山中を踰させ給ひ、小田原城の寄手に加はり給ふ、【菅窺武鑑】曰、家康公は足柄越を被成、小田原へ押向給ふ、

七月、細川幽齋歸陣の路次、山中を過れり、時に詠歌あり、

一五日、【東國陣道記】曰、七月十相煩ふに付て御暇なり、歸陣には、甲州通りと思ひ侍りて、足柄山を越て、竹ノ下と云里にとまり侍りぬ、足柄の關吹越る秋風の宿り知らるゝ竹ノ下道、

以上古記遊記等に散見するもの、今其大略を採錄する處なり、

又足柄山は、古より名花に入、【萬葉集】以下、世々の歌集に往々見え、足柄の關、神の御坂或は足柄の御坂、竹ノ下道、八重山など、此地の名所として詠出す、【宗祇名所方角抄】云、足柄山・御坂關・竹ノ下道・八重山など云、箱根山の北なり云々、但關坂の二つは、其舊蹟矢倉澤村の屬なれば、故事及び古歌の類、皆彼村に採錄す、竹ノ下は、今駿州の屬地なれど、勅撰以下の歌集、皆本州に係るを以て、姑く爰に併錄す、

八重山と唱るは、總て連山簇々たるを云しにて、必一所さす處あるにあらざれど【吐懽編】曰、八重山と云るは、足柄山の多く層れるを云て名所にあらず、萬葉第十には、朝霞八重山越て喚子鳥なけや汝が來る宿もあらなくに、又、朝霧の八重山越て郭公卯の花へから鳴て越來る、などよめり又百重山五百重山などもよめり、

足柄に據れる詠歌は爰に採錄す、亦【萬葉集】に、秋名の山とせしも、此邊連山中の舊名なるべきなれど、今は考る所なし、其證歌は下に擧ぐ、

山

鳥總立、足柄山爾船木伐、樹爾伐歸都、安多良船材乎、【萬葉集】下同　○沙彌滿誓

和我世古乎、夜麻登敞夜利氏、麻都之太須、安思我良夜麻乃須疑乃木能未可一なり、作者を注せず

和我由伎乃、伊伎都久之可波安之我良乃、美禰波保久毛乎、美等登志怒波禰、

○都筑郡上丁服部於田

足柄の山路はみねと別なは心のみこそ往て還らめ【續古今集】下同、家集還らめを通はめに作る、　○躬恒

秋迄は富士の高嶺に見し雪を分てそ越る足柄の山　○家隆

只暮ね關ノ戸さゝぬ頃なれは月にそ越ん足柄の山○同

越やらてけふは暮しつ足柄の山陰遠き岩の崖路【續拾遺集】　○從三位光成

旅衣時雨て止る夕暮になほ雲こゆる足柄の山【新後撰集】　○從三位賴基

岩か根を傳ふ崖路の高けれは雲の跡ふむ足柄の山【玉

葉集】○爲　家
行末も跡もさなから埋れて雲をそ分る足柄の山【續千載集】○大江廣房
足柄の山立隱す霧の上に獨晴たる富士の白雪【新續古今集】○法印慶運
しるしなき物ならなくに足柄の山の山菅やます戀しき【古今六帖】○讀人未詳
立交る花のむら雲絶々に杉の葉埋む足柄の山【夫木集】下同　○爲　相
足柄の山路の嵐夜を寒み鹿の音脆き竹の下露　○同
東路の足柄山の霍公鳥越ゆく雲の上に啼なり　○賴氏
足柄やひかぬ宮木のみえぬ迄八重立雲の夕暮の空○同
關の戸も松の下行跡絶て雪にゆるさぬ足柄の山○爲家
關の戸を木綿付鳥はつれなくて鹿の音明る足柄の山
○爲實
東路の足柄越て武藏野の山も隔ぬ月を見る哉【歌枕名寄】下同　○明　朝
如何にせん直には往かて足柄のよこ走りする人の心を
○源仲正
足柄の山の尾上に登りてそ空なる月も近つきにける【新和歌集】○藤原時朝
吹迷ふ嵐は花の匂ひにて空も色ある足柄の山【續門葉和歌集】○地藏院幸松丸
足柄の山のもみち葉散なへに清見か關に秋風そ吹く【堀川百首】○師　時
葉を茂み洩際もなし秋の夜の月朧なる足柄の山【正治百首】○後鳥羽院御製
足柄の山路の月に峰越て明れは袖に霜そ殘れる【名所和歌集】○祝部成茂
大空の月の光に足柄の山の此方は秋にそ有ける【家集】
○藏原興風
足柄の山のかひこそ無りけれ別るゝ涙せきを止めす【明日香井集】○雅　經
霞分寢に行鳥もとふさたつ足柄山を越て暮ぬる【壬二集】○家　隆
足柄の山の手向に祈れとも幣と散かふ山櫻哉【長秋詠藻】○俊　成
雪解るしみゝにしたくから崎の道行にくき足柄の山【山家集】○西　行
足柄の夕越來れは入日さす富士の高嶺に雲そかゝれる【離女集】○雅　有
竹ノ下道

足柄の山の麓に行くれて一夜宿かる竹の下道【續拾遺集】○平長時
足柄の山の嵐の跡とめて花の雪ふむ竹の下道【風雅集】下同　○爲相女
深き夜に關の戸出て足柄の山本暗き竹の下道　○藤原賴成
山深き杉の茂みを吹落て麓によわる竹の下風【夫木集】
海道宿次百首　○爲　相
竹の下しはし立倚程たにも憂節繁き世を如何にせん【歌枕名寄】○宗尊親王

八重山
安之我良乃（アシカラノ）・夜敝也麻故要氏（ヤヘヤマコエテ）、伊麻之奈婆（イマシナハ）、多禮乎加（タレヲカ）伎美等（キミト）、彌都々志努波牟（ミツヽシヌハン）【萬葉集】按ずるに、上總國朝集使大椽今城が向京の時、郡司の妻女等が餞の歌の一なり、
降積る雪の八重山道閉て行末うとき足柄の關【續拾遺集】○平長時
更に今都も戀し足柄の關の八重山なほ隔つゝ【新千載集】○津守國量

秋名山
阿之我里乃（アシカリノ）、安伎奈乃夜麻爾（アキナノヤマニ）、比古布禰乃（ヒコフネノ）、斯利比可（シリヒカ）志母與（シモヨ）、許已波故賀多爾（コヽハコカタニ）、【萬葉集】作者を注せず、

箱根を見れば明殘る空
移り行秋名の山の月もよし　宗祇名所千句
○狩野山（加廼也滿）　或は明神ヶ嶽とも稱せり、登二里餘一、山上に明神の社あるにより名とす、此山苅野庄内數村に跨れり、殊に艮方狩野、東方塚原二村の地は、全く山裾にあり、故に塚原村にては、塚原山と唱へり、又山中へ萱薪秣苅取りとして三十二村　本郡、狩野・飯澤・中沿・炭燒所・和田河原・塚原・竹松・岩原・三竹山・關本・猿山・栢山・牛島・鬼柳・西大井・宮ノ臺・吉田島・曾比・沼田・矢倉澤・下郡・蓮正寺・北ノ久保・飯田岡・中曾根・府川・桑原・小臺・新屋・柳新田・堀ノ内・清水新田・成田、入會へり、○河村山　古河村鄉中の連山を云へり、此邊郡の西にして、殊に深山幽寂の地なり、山の表裏に村落をなすを、東山家西山家と唱へり、今山裾の村々にては、河村山の唱呼を云はず、各私の字を唱ふ、治承四年十月十八日、大庭三郎景親此山中に逃亡し、【東鑑】建武二年七月廿二日、細川四郎入道義阿山中にして自害あり、【梅松論】文安元年、新田義興脇屋義治を、松田河村の輩諫めて、相模川の河上に、究竟の深山候とて、此山中に誘なひしこと【太平記】等あり、

○瀑布五　蛇水瀧　或は瀧水の瀧と云、平山村の屬、　夕日瀧　矢倉澤村の屬、　不動瀧二　一は川村向原、一は川西村の屬、一　神山瀧　神山村の屬、
以上五瀧の内、蛇水瀧は、當國第一の名瀑布と云べし、按ずるに、古風土

記殘本に、足輕郡瀧九ケ所と載せし、隨一なるべし、○酒匂川佐可和加波○御厨川附　上流は御厨川と稱す、幅三十間、駿河國御厨領生土・小山二村の堺より、郡中谷ケ・川西二村の界に入り、巽堺に至り河内川合してより酒匂川の名起れり、是より東流して、柏山・鬼柳兩村の界に至り、足柄下郡中曾根・桑原二村の中間に流入る、幅六十間より二百間餘に及ぶ、水路總て五里許、南岸五里餘、北岸五里十九町餘、郡中大抵此水を灌漑して、許多の水田を耕植す、古記に、丸子川と記せしは、此川の古名と見ゆ、此川數郡に係るを以て、都て古事の如きは、山川の部に詳載す、兩岸に水除の堤を築けり、高凡二間餘、就中文命堤と唱ふる大堤あり、事は班目村の條に詳なり、○狩川加利可波○元祿國圖に、狩野川と載す、當時かく唱へしにや、源は猪ノ鼻ケ嶽矢倉澤・仙石原二村の屬、より出、四里許を南流し、沼田村にて足柄下郡飯田岡村に沃ぐ、幅源六間、末二十五間餘、此水を引て田間に灌漑する村許多あり、矢倉澤・苅野一色・苅野岩・弘西寺・關本・福泉・猿山・雨坪・中沼・炭燒所・塚原・岩原・沼田、總て十三村、兩岸に堤防を設く、○河内川加布知可波○玄倉川附　上流を玄倉川久呂久良可波と稱す、源は玄倉村塔ノ嶽邊より出、水路四里餘を流れて幅七八間、河原を合すれば、七十間餘に至る、神繩村に至り、世附川合してより河内川と稱す、是より水路一里半餘を流れ、幅平均七十間許、川西・谷ケ二村の界にて酒匂川に會同す、水防堤あり、○世附川餘頭久可波　世附村より流出し、水路四里許を流れ、神繩村に至り玄倉川に合す、幅六間、○中川奈加可波　中川村にて、山谿の清水合して一條となり、水路一里餘を流れ、是も神繩村にて玄倉川に合す、幅二十五間、○矢倉澤川也具良左波加波○内川附　源は矢倉澤村にて、諸流合して一條となる、故に川名とす、或は内川とも呼べり、水路二里許を流れ、内山村内にても又内川とも唱ぶ、小市二村の境にて、酒匂川に合す、幅五間より十間に至る、水除堤あり、高六尺許、○皆瀨川美奈勢可波　源は皆瀨川村より出、水路一里餘を流れ、川村山北にて酒匂川に合す、幅源十間、末三十間許、○早川葉也可波○三度川附　箱根蘆湖足柄下郡の屬、の餘流仙石原村に流入て、或は三度川或は逆川と唱へ、直に足柄下郡底倉村に沃ぐ、幅五間、○川音川可波於止可波○彌勒寺川附　源は彌勒寺村飛地稻鄕より出、故に彌勒寺川と稱す、隣村萱沼村に至り、川音の名起れり、松田惣領十文字渡頭の邊に至り、酒匂川に合す、水路四里餘、此川路菖蒲村邊より松田惣領程中程までを、四十八瀨と唱へ、富士往來とす、幅水上十間、下流は七十間に及ぶ、正保・元祿の二圖には川落川と記す、大寺・松田惣領の二村、此水を田間に灌漑す、堤防あり、○菖蒲川志也字婦可波○齋藤川附　源は三廻部村及大住郡堀山下村邊の山中より出る、谿水合して一條となり、堀齋藤村の界を南流して、齋藤川と呼、郡中菖蒲村の界に至て、菖蒲の名を得、萱沼村と大住郡千村との界にて、川音川に合す、水路總て二里十町餘、幅十間餘、○濁川爾互利可波　源は柳川村より出、村内にては濁澤と稱す、菖蒲・萱沼二村の間にて、川音川に合す、幅八尺、○菊川紀久可波○芭蕉川附　源は山田村より出、芭蕉川と呼べり、曾我大澤に至り、菊川の名起り、水路三十町餘、上下大井兩村の境にて、酒匂堰に合す、幅四尺より二間に及ぶ、○山岸川也滿儀志可波　源は上曾我村より出、村中五町餘を流れ、直に足柄下郡東大友村に流入り、一美川と稱す、幅五尺、○中村川那加牟良可波○棚田川附　源は大住郡澁澤村市見川と稱ふ、より出、郡中篠窪村に入、無名なり、柳村に至て棚田川と稱し高尾村に至りて、中村川の名起れり、中村鄕中を流るゝ故なり、遠藤村にて足柄下郡小竹村に入り、押切川と唱ふ、幅四間より八間に至る、堤あり、○關川勢喜可波○別所川附　源は境別所村より出、岩倉村に入て別所川と唱へ、比奈久保村に至り、關川の名を得、雜色村境にて中村川に合す、幅三尺餘、○藤澤川婦知佐波可波　源は大住郡平澤村より出、郡中境別所村に入、藤澤村に至て初て川名を得、水路一里餘を經て、遠藤・久所二村の境にて、中村川に合す、幅水上九尺末は五間に及ぶ、○堂ヶ谷津川太宇賀也都可波　源は井ノ口村より出十六町許を南流して、大住郡五分一村に沃ぐ、幅七尺、○洞川保羅可波　源は怒田村より出、水路一里二十町餘を流れ、岩原村にて狩川に合す、幅三四間、○壗下川滿々志多可波　和田河原村洞川の分流なり、駒形新宿に至て河名を得塚原村字壗下を流る故に此名を得、塚原・岩原二村の堺にて、是も狩川に合す、幅四間餘、○仙了川勢牟禮宇加波　源は吉田島村邊より出、水路十八町餘を南流し、栢山村より足柄下郡柳新田及堀ノ内村の境に流入る、幅三四間、○貝澤川加比佐波可波　源は苅野岩村字貝澤より出、狩野・中沼二村の界にて、狩川に合す、幅九尺より二間に及ぶ、○權兵衛川互牟敝惠可波　武永田堰の下流、牛島村に至て河名を得、是領主大久保氏の家人、權兵衛と云人掘割しより起れりと云、栢山村より足柄下郡小臺村に入、用定川と稱す、幅三間より六間餘に至る、○分澤川部牟佐波可波　源は三竹山村より出、又足柄下郡府川村より出る一流、合して一條となり、上下二郡の界を流る、故に分澤の名を得、末は沼田村に入、直に狩川に合す、水路二十町餘、幅七尺、○和泉川伊頭美可波　狩野村

宇和泉久保より出、故に名とす、中沼村に入、塚原村界にて狩川に合す、幅六尺より九尺に至る、

○渡津　酒匂川にあり、十文字渡と稱す、富士往來に便す、河南吉田島村より河北松田惣領に達す、事は松田惣領に詳なり

○酒匂堰　佐可和世儀○土俗用水を堰と書し、勢儀と稱せり、　金手村にて酒匂川を堰分け、上下西大井三村の用水となし、下大井村より足柄下郡東大友村に沃ぎ、彼郡中十四村　東大友・西大友・永塚・千代・高田・別堀・下堀・中里・矢作・酒匂・小八幡・國府津・前川・田島等なり、の用水となる、水路一里八町餘、幅四間、慶長年中疏鑿せられしと云、○鬼柳堰　於爾也奈儀世儀　西大井村にて酒匂川を分水し、鬼柳・下大井二村の用水となり、下大井村より足柄下郡西大友村に流入り、幅二間半、彼郡中六村　西大友・桑原・延清・成田・飯泉・鴨宮等なり、の用水となる、○瀬戸堰　勢止世儀　都夫良野村字下瀬戸にて、酒匂川を堰入、山腹を鑿空して水を通し、川村山北に至て皆瀬川に掛樋を設け、長二十八間　五丈四尺、同村卑沼の地にても、又掛樋を置長二十四間　高一丈三尺　てこれを通し、同村及川村岸・川村向原等の用水とす、故に或は川村用水とも云り、幅九尺、末は川村向原にて皆瀬川に沃ぐ、○岩流瀬堰　我留勢世儀　川村岸岩流瀬堤にて、酒匂川を堰入、同村及川村向原松田惣領、同庶子四村の用水となり、松田惣領にて十文字堰に合す、松田兩村にては、松田堰と云、幅六尺より二間に至る、○十文字堰　志不毛牟世儀　松田庶子にて酒匂川を堰上松田惣領・金手・金子三村の用水となり、金子村にて川音堰に合す、幅二間、水末は四尺に至る、○武永田堰　夫衣伊太世儀　班目村にて酒匂川を堰入、金井島・吉田島・延澤・牛島・宮ノ臺五村の用水となり、下流を權兵衛川と稱せり、幅二三間に至る、○穴水門堰　安奈須爲毛牟世儀　是も班目村にて酒匂川を堰入、同村及び千津島・怒田・小市・堪下・和田河原・中沼・炭燒所・竹松總て九村の用水となり、竹松村にて殿川と唱へ西境にて洞川に入る、○五ヶ村用水　栢山村にて酒匂川を堰入、村内及足柄下郡堀ノ内・中曾根・飯田岡・蓮正寺五ヶ村の用水となす、幅二三間、○三ヶ村用水二一は栢山村にて酒匂川を堰入、同村及足柄下郡、中曾根蓮正寺三村の用水とす、一は岩原村にて狩川を引入、沼田村及足柄下郡、飯田岡・府川三村の水田に沃ぐ、共幅二間、

○溫泉　木賀宮城野村の屬、是に足柄下郡、湯本・塔ノ澤・底倉・宮ノ下・堂ヶ島の六湯を合て、箱根七湯と稱せり、

○御關所四　河村川村山北　谷ヶ村　谷ヶ村の屬、仙石原　仙石原村の屬、矢倉澤　矢倉澤村の屬、以上大久保加賀守忠眞預れり、

○土産　○蛤石　矢倉澤村内矢倉澤より出る、○白焔焔　中川村より出す、○柴胡　虫澤・矢倉澤・三竹山三村に産す、古風土記殘本にも、本郡の産とす、○紫根　矢倉澤村の産、○烟　卿松田惣領・松田庶子・八澤・菖蒲・柳川・虫澤・境・境別所・杤窪等九村の産とす、尤松田惣領にては松田烟草と稱し、菖蒲村にては波多野烟草と稱して、殊に佳とす、○薇蕨　宮城野・三竹・宮城野村の産、○獨活　坂産、○小梅　上曾我村の産、○桃　狩野・猿山兩村の産、○柿　金手・金子・松田惣領・神山・神縄・世附・八澤七村より出す、中に就て金手村なるをば、金手丸と稱して殊に佳品なり、○串柿　皆瀬川・都夫良野神縄・世附兩村にて製す、○梨子　二村の産、○蜜柑　三竹山・川村三竹山村より産するをば、年々寒中、領主より官へ獻納す、○椎茸　中川村の産、

新編相模國風土記稿卷之十二終

新編相模國風土記稿卷之十三

村里部　足柄上郡卷之二

大井庄

○上大井村　加美於保爲牟良　江戸より行程二十里餘、天正十九年の水帳には只大井村と載す、其後上下西三村に分れしなり、年代詳ならず、正保・元祿兩度の改には、既に三村に分載す、本村は則大井庄の本郷なり、往昔當庄は京都延勝寺中古廢寺　の領たり、然るに貢稅不納の由申すに依文治四年六月更に院宣ありて、彼寺に進納すべき旨、職事定長が奉書を、關東に下さる、【東鑑】曰、六月四日、所々地頭沙汰之間事、注條々、令付帥中納言經房給之處、御返報今日到着、於勅答之趣者、爲讓子細、所副獻權右中辨定長朝臣奉書也、奉書中曰、相模國大井庄事、延勝寺領也、於年貢者、早可進寺家、以前條々、以此趣、可被計遣之由、御氣色候、恐々謹言、五月十二日、權右中辨、建保元年五月、和田左衞門尉義盛を追伐ありて、有功の士に勸賞行はる時、當庄を山城判官行村に充行はる、曰、五月七日、勳功事今日先被定之、相模國大井庄、山城判官、按ずるに、行村は二階堂氏の祖、山城守行政が次男にて、承元

四年七月、圖書允に任じ、十二月左衛門尉に轉じ、建保元年三月、使の宣旨を蒙る、故に山城判官と稱せり、六年十一月、隱岐守に任じ、承久元年正月、入道して、行西と號す、評定衆の列たり、暦仁元年二月卒す、今庄内篠窪村に二階堂出羽守政貞が墓あり、彼村内地福寺の開基にて、應永元年に卒せり、是行村が後にして、數代彼地を傳領し、居住せしと覺ゆ、然る時は當時行村が所領、彼村に觀應二年八月、足利基氏村内を割て、三島明神村内にの社領とし、應永三十年十一月、足利持氏又村内にて彼社領を增加せし事ありしと云、以上の二事疑ふべき事あり、事は社の條に委く辨ず、弘治の頃は、伊波大學助、同修理亮知行せり、大住郡石田村民所藏文書曰、伊波知行之書立云々、七十一貫文、大井宮分云々、弘治二年丙辰三月八日、伊波大學助殿、同修理亮殿、永祿の頃は、大道寺彌三郎買得す、【役帳】曰、大道寺彌三郎買得、六十九貫六百六十六文、大井宮分、元伊波知行、又太田兵庫助、百貫文、大井内にて被下、太田兵庫助、玉繩御城御用、知行役御免、中村又四郎、三十五貫文、西郡大井新田從前々諸篇走廻付、中村又四郎、小幡源次郎、三百四十五貫四郎、小幡源次郎、三百四十五貫文、西部大井、山田、等知行す、此餘伊豆權現の神領あり、伊豆山領、三十三貫文、西部中村分の字あり、凡一町歩の地なり、又天正十に伏、大井三田分、今も村内三田九年水帳寫にも、伊豆山領と云事見ゆ、其後山角紀伊守角氏藏文書曰、西郡私領大井鄕之内、二貫文之畠、竹林致立由尤候、自今以後横合有間敷者也、仍如件、庚寅正月廿六日、虎朱印、山角紀伊守殿、山上强右衛門奉之、按ずるに、庚寅は天正十八年なり、知行す、天正小田原陣の時、豐臣太閤七村一紙の制札を出せり、足柄下郡曾我原村民所藏、村名は曾我・大井・大友・千世・高田・田島・片岡と載す、民戸八十六、廣袤各六町餘、東、曾我大澤、西、西大井村、南、下大井村、北、山田・金子二村、今大久保加賀守忠眞領す、御入國已來御料となり、寛永九年稻葉丹後守正勝に賜はりて、今に至る、檢地は天正十九年、田中九郎右衛門、萬治三年、稻葉美濃守正則改む、小田原道、村北より南に達す、又東方より此道に合する一徑あり、曾我道なり、幅各九尺、

○小名　△下宮　△よみ　△小幡屋敷　永祿中の地頭、小幡源次郎が居住の地にして、此稱有なるべし、宅蹟の條併見るべし、　△後畑　字之呂波太

○坂　村北にあり、赤坂と唱ふ、大山道なり、登八町許

○菊川　東境を流る、幅二間、

○酒匂堰　乾方より入て、南流す、幅四間、

○三島社　左牟太宇也之呂　古は大井宮と唱ふ、別當圓泉坊所藏古文書、及び大住郡石田村民藏弘治二年の文書【北條役帳】等に見ゆ、社地古木蓊鬱たり、祭神大山祇命、木像四軀を置、一は長二尺一寸、一は二尺、一は一尺三寸、一は九寸、各運慶作、當村及び下大井・西大井・金子、都て四村の鎭守なり、例祭九月廿九日、境内に二月廿八日雛の市、十二月廿二日年の市立り、觀應二年八月足利基氏村内にて社領を寄附し、所藏文書云、相模國西郡大井宮分社領寄進事、合六十三貫文、右永社領令寄進、若横合非分有之者可申上、尙可致綸誡者也、仍如件、觀應二辛卯年八月十日、大井宮別當坊基氏華押、按ずるに、此文書華押に疑あり、恐くは贋物ならん、應永三十年十一月足利持氏又神領を寄加せしと云、曰、相州西郡大井宮社領寄進事、合八十五貫文、右駿州就御發向、天長地久朝敵退散可抽勤行者也、仍如件、應永三十年癸卯霜月十一日、大井宮神主、別當坊、持氏華押、按ずるに、今年十一月、駿州に發行の事、甚怪むべし、【鎌倉大草紙】に據ば、持氏是年八月より、翌年十一月迄、武州府中に在陣なり、然る時は、此文書も信據とし難し、且華押も正しからざれば、恐くは是も贋物ならん、大永二年、北條左京大夫氏綱、社領法度の條目を定む、曰、西郡大井之宮社領、幷神主屋敷、不可有一切役事、神領之事、私領外也、地頭已下不可相待、若私領内と心得、貪神田令押領事有之付而者、以目安可申上之事、社人等事、祭禮修造掃除等、神主以下知社用可走廻、若下知を社人不用者、神田内役免拘事有之者、其役免取放可修理付事、以上、右定置條、若旨此旨輩有之付而者、可捧目安者也、仍如件、大永二年午九月十一日、大井宮神主、圓泉坊、遠山奉、某年、北條氏當社を放鷹の休息所とせし時、遠山治部某敷物等の事を下知す、曰、五□□御屋形樣より被遣、一□□源五郎殿より被遣、一□□菊王殿より被遣、一□□御隱居樣より被遣、以上、右大井之宮御鷹野之御休息所に候間被遣、此外伊勢殿、小笠原殿を始申、於大井宮御臺食などの□□前より早々今年内に致勤進□取正月の御鷹野には、わら莚にても、きれいに可敷候、猶大井之宮にて、御相伴衆に□無之□□前より取事は無用に候、十二月廿八日、大井宮別當坊主、遠山治部華押、

永祿十一年正月、境内制禁の法令を出す、曰、被仰出條條、西郡大井宮、木並下草等迄、假初にも不可爲剪、若剪者有之者、相搦可申上、不成手柄者に付而者、名を聞屆、以目安可申上事、牛馬不可入候、若放者有之者、彼牛馬社人に被下事、神主屋敷、井神田如近年、不可有相違事、以上、右若横合非分有之に付而は、何時も可捧目安狀如件、戊辰正月廿八日、大井宮神主、圓泉坊、長純奉、

文祿元年二月、領主大久保七郎右衛門忠世、社領五貫八百文の地を寄附す、曰、相州足上之郡大井之宮神領之事　五貫八百文之所爲修理免付置者也、仍如件、天正二十年壬辰二月十一日、神主、圓泉坊參、後藤彌次兵衛眞成華押、

某年、松田惣領延命寺修理の材に、社地の松樹を乞に依、領主大久保氏の臣、其事を傳ふ、延命寺藏文書曰、延命寺御雜作に付、大宮之まかり松、御所望有度之由候はゝ、可被進之候、以上、返々右松之代、可被遣之候、十一月七日、筑後との、平次左衞門との、後彌次兵衛印、

慶安二年、稻葉美濃守正則、舊に因て、六石九斗三升八合當内一石八斗九升八合當村、五石四升下大井村、の神領を附す、今猶然り、

天和二年七月、更に社領寄附の證狀を授與あり、

△辨天社　境内池中にあり、

△稻荷社　足柄稻荷と云、

△鐘樓　享保十六年鑄造　神體は運慶作の勢至なりと云ふ、

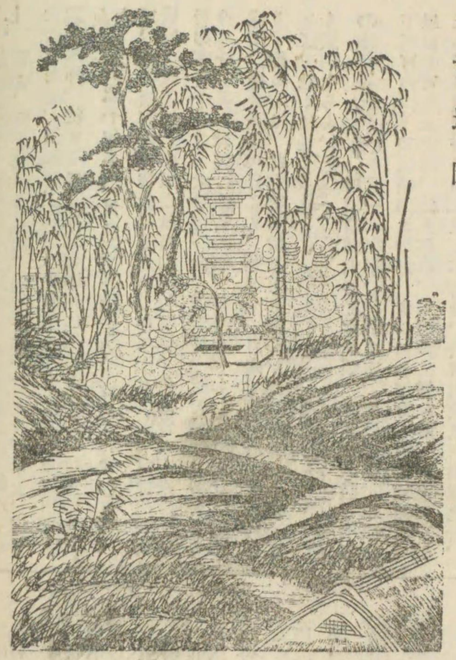
△神樂殿

△本地堂　藥師を安ず、長三尺、運慶作、

△別當圓泉坊　古義眞言宗、京仁和寺法末にて、金子開山開基共村最明寺より傳法す、

に傳へず、古より肉食妻帶なり、古文書九通を藏す、
内七通は前に注記せり、二は北條氏より、小田原宮前
町賀藤某に與へし下知狀なり、其一は壬午卯月廿七日、
宮前町賀藤と記し、虎朱
印あり、一は寅五月廿二日、宮前町奉行賀藤と記し、幸田主
三奉之と見ゆ、全文は當坊に與からざれば、小田原宮前町の
條に詳載す、此に通當坊に傳來の旨趣詳ならず、○三島社　小田原竹之花町商
家作兵衛持、社地元は大井宮境内に在しと云、作兵衛祖先
は北條家の浪人にて、遠藤道花と稱し、元和

古塔圖



元年、今の地に移住せしと云、○山王社　圓泉坊持、社地に古松あり、圍一丈五尺餘、○吾妻社　村民持、○神明社　等覺院持、○等覺院　稻荷山明王寺と號す、古義眞言宗、金子村最明寺末、中興開山賢譽、天文廿年三月十六日寂、不動法作、長一尺二寸、下同、弘を本尊とす、二童子長各六寸及び弘法の像長一尺二寸四分、を置く、△辨天稻荷疱瘡神合社　○大通寺　寶持山と號す、曹洞宗、足柄下郡西大友村盛泰寺末、開闢は天文三年、開山州翁、永祿二年四月廿九日寂、彌陀を本尊とす、△藥師堂　本尊は京大佛師堀田式部作、長一尺九寸、△白山社　○十王堂　前寺持、下同、○阿彌陀堂　○小幡氏宅蹟　村北彌勒寺道の左右より酒匂堰の邊に及ぶ、小名小幡屋舖と唱ふる所なり、按ずるに、是永祿中の地頭、小幡源次郎役帳に載する所、が居住の地なるべし、○古塔　小名よみ民家の後藪中にあり、塔高七尺許、供養塔の類と見ゆ、石面文字剝落して、纔に大勸進僧覺一大仲臣金光一結衆五十人大工□□清光大念佛□安□嘉元二年大□甲辰十二月廿日の三十餘字のみ髣髴たり、土人御塔と稱して崇敬し、每年重九には赤飯を供

せり、疫癘を病る者に苔を取て煎じ飲ましむれば、必驗ありと云、其餘小墳十三基高各三尺許、左右に圍繞す、○舊家太郎兵衛　祖先太郎兵衛は、當村の大庄屋たり、天正十九年此職を停止せられしより、今に至りて十四代連綿して里正の職にあり、永祿五年四月、遠山左衛門尉奉はりの文書一通全文は山田村條に引用せり、を藏す、○下大井村之毛於保爲牟良　江戸より行程二十里餘、民戸五十六、東西九町半餘、南北八町半餘、東、曾我大澤、上曾我二村、西、西大井、鬼柳二村、南、足柄下郡東西大友二村、北、上大井村、北條氏の頃は、閼伽井坊及び本郡鬼柳村、【役帳】に、閼伽井坊二十三貫九百文、西郡大井、保安寺、其後岡部彦四郎知行知行す、法名一譽覺心と云、其妻剃髮し、玄妙と稱し、亡夫の爲、佛堂建立の志願を發し、在々所々を勸化し、程なくも麥すくもを乞て、遂に志を果し、藥師堂一宇を建立す、故にすくも堂と云へり、應安の初に至り、僧鎭榮再興して一寺となす、因て是を開山とす、應安四年五月廿九日寂す、中興辨明、享元年十二月五日寂す、正保四年の鰐口を揭ぐ、○保安寺　寶生山延命院と號す、本寺前に同じ、開闢は保安年中にて、文明中に至り、堂宇悉く破壞す、其後永正十六年八月、當所の住人、椙田衛門五郎入道德玄と云者、僧鎭譽と力を合せ、遂に再興す、故に鎭譽を中興開山とすと云、天文十年、回祿に罹り、十一年、僧賴譽再建せり、【北條役帳】に據れば永祿の頃は、村内に寺領の地ありしと識す、○鬼柳堰　村西を流れ、幅二間、南方足柄下郡西大友村に入、○石橋　小田原道用水渠に架せり、長四尺許の小橋なり、すのこ橋と云、榜に石を立て、其名を標し、延享元年子八月吉日と刻す、名義傳はらず、○天神社　泉藏院持、下同、○山王社　○泉藏院　照昌山大願寺と號す、古義眞言宗、金子村最明寺末、本尊藥師、長二尺七寸、行基作、往古當所の隱士、豊田左近之丞と云者の寡婦、志願の旨ありて、天曆中起立すと云、其頃は辻堂にして、土俗是をすくも堂と稱せしとぞ、緣起に據に、天慶の頃豊田左近之丞と云浪客あり、天曆三年二月十二日死す、法名一譽覺心と云、其妻剃髮し、玄妙と稱し、亡夫の爲、佛堂建立の志願を發し、在々所々を勸化し、程なくも麥すくもを乞て、遂に志を果し、藥師堂一宇を建立す、故にすくも堂と云へり、應安の初に至り、僧鎭榮再興して一寺となす、因て是を開山とす、應安四年五月廿九日寂す、中興辨明、享元年十二月五日寂す、正保四年の鰐口を揭ぐ、○保安寺　寶生山延命院と號す、本寺前に同じ、開闢は保安年中にて、文明中に至り、堂宇悉く破壞す、其後永正十六年八月、當所の住人、椙田衛門五郎入道德玄と云者、僧鎭譽と力を合せ、遂に再興す、故に鎭譽を中興開山とすと云、天文十年、回祿に罹り、十一年、僧賴譽再建せり、【北條役帳】に據れば永祿の頃は、村内に寺領の地ありしと識す、○鬼柳堰　村西を流れ、幅二間、南方足柄下郡西大友村に入、○石橋　小田原道用水渠に架せり、長四尺許の小橋なり、すのこ橋と云、榜に石を立て、其名を標し、延享元年子八月吉日と刻す、名義傳はらず、○天神社　泉藏院持、下同、○山王社　○泉藏院　照昌山大願寺と號す、古義眞言宗、金子村最明寺末、本尊藥師、長二尺七寸、行基作、往古當所の隱士、豊田左近之丞と云者の寡婦、志願の旨ありて、天曆中起立すと云、其頃は辻堂にして、土俗是をすくも堂と稱せしとぞ、緣起に據に、天慶の頃豊田左近之丞と云浪客あり、天曆三年二月十二日死す、法名一譽覺心と云、其妻剃髮し、玄妙と稱し、亡夫の爲、佛堂建立の志願を發し、在々所々を勸化し、程なくも麥すくもを乞て、遂に志を果し、藥師堂一宇を建立す、故にすくも堂と云へり、應安の初に至り、僧鎭榮再興して一寺となす、因て是を開山とす、應安四年五月廿九日寂す、中興辨明、享元年十二月五日寂す、正保四年の鰐口を揭ぐ、○保安寺　寶生山延命院と號す、本寺前に同じ、開闢は保安年中にて、文明中に至り、堂宇悉く破壞す、其後永正十六年八月、當所の住人、椙田衛門五郎入道德玄と云者、僧鎭譽と力を合せ、遂に再興す、故に鎭譽を中興開山とすと云、天文十年、回祿に罹り、十一年、僧賴譽再建せり、【北條役帳】に據れば永祿の頃は、村内に寺領の地ありしと識

○菊川　東北村境にあり、字藤六屋敷にて、酒匂堰に合す、幅一間、

○酒匂堰　村東を流れ、幅四間、南方足柄下郡東大友村に達

○小名　△中ノ庭　△入リ村

らる、其證村の條に注す、　本尊地藏、長一尺六寸、傍に十一面觀音、長三尺五寸、宅間作、　及び不動を置、

○舊家又兵衞　和田を氏とす祖先は工匠なり、天正四年北條氏より出せし裁許狀一通を藏す、曰、大井番匠勘解由、捧目安付而、石卷左馬允同心、齋藤召出、遂糺明畢、仍先領主、岡部彦四郎如證文、百姓屋敷年貢有間敷候、相定分際可致辨濟、當領主、齋藤馬取候事、非分候、明日可召返、此上猶非分相重付而は、可捧訴狀旨、被仰出者也、仍如件、　天正四年丙子卯月廿八日、大井鄕番匠勘解由、上野守康定奉押、

○寶德松　當村と足柄下郡西大友村の境にあり、上大井村大庄屋左京助と云者、天正十九年罪蒙り、此所に於て刑に處せらる、土人其追福のため、塚上に植る所なりと云傳ふ、寶德は左京助が實名たる故此唱ありと云、

○西大井村仁志於保爲年良　江戸より行程二十里餘、民戸五十九、東西七町餘、南北十五町餘、古稻葉美濃守正則領し後大久保加賀守忠眞領す、今大久保加賀守忠眞領す、金子・金手二村、西酒匂川を隔曾比村、南、鬼柳村、北、金子二村、今大久保加賀守忠眞領す、古稻葉美濃守正則領し後大久保加賀守忠增に替賜ひ、寶永四年、御料となり、天明三年、再大久保氏に賜ふ、檢地は萬治二年、稻葉美濃守正則改む、小田原道、南北に亘りて、村の中程を貫く、幅九尺、

○小名　△上ノ庭　△横町　△中澤　△下ノ庭

○酒匂川　西境を流る、幅百二十八間、水除の堤あり、長九百十二間、西方の堤下に水門を設け、分水して村南に沃ぐ、是鬼柳堰の水元なり、流末八村の用水にて、彼村々の持分なり但し本村は、其員にあらず、組合各村の名は、總說に詳載す、

○稻荷社　眞福寺持、

○眞福寺　淨瑠璃山醫王院と號す、古義眞言宗、足柄下郡國府津村寶金剛寺末、永保元年延享三年の書上は、八幡太郎義家、曾比村中に草創す、舊地は彼村內酒匂川の邊、字一丸名と云へる所に在しと云、開山を覺超と云、康安の年、畠山道誓叛逆の時、兵火の爲に堂塔燒失して廢寺と成しを、至德三年、僧定心、嘉慶元年十一月朔日寂す、今の地に再興す、故に是を中興開山とす、始は新福寺と書せしが、後今の文字に改む、年代詳ならず、但し所藏大般若經、至德中の奥書には、新に作り、天正十五年、北條氏の文書には、今の如く書記す、天正十五年四月、法談聽聞の輩、狼藉あるべからざる旨、北條氏直の下知を承て、江雲制狀を授與せり、所藏文書曰、禁制、右於當寺、夏中法談之間、聽聞之貴賤、狼藉橫合等、堅令停止畢、若於違犯之輩者、可遂披露、可處嚴科旨、被仰出者也、仍狀如件、天正十五年丁亥卯月廿六日　虎朱印、江雲奉　本尊藥師、長二尺二寸五分、行基作、左右に日光月光を安ず、各長一尺五分、運慶作、

【寺寶】

△大般若經六百卷　永保元年、源義家が寄附せし物と云傳ふ、是甚しき妄說なり、全至德中の物なる事論なし、每卷奥書に、相州大井庄曾比鄕淨瑠璃山新福寺公用經、大願主金剛律師定心、執筆珠昆山とあり、是を證とすべし、至德中興の祖なり、定心は、至德中興の祖なり、

△古文書四通　一は永保元年二月、源義家庄園七町、及び大般若經一部を寄納せし寄附狀の寫、曰、敬白祈禱一紙、醫王善逝寶前獻納、大般若經六百卷、六筐、奉寄附庄園七町、三所、蒙勅宣賜節刀、微臣將追罰東藩之朝敵、慧眼遠照官軍之旌旗、永爲靈跡之擅度、可專眞俗之繁昌、仍寄附牒如件、永保元辛酉二月日、曾比新福寺、別當御房、源朝臣義家、按ずるに、是年義家節刀を賜はり、朝敵追捕の勅を蒙し事、全所見なし、且此時寄附せしと云般若經も前に辨ぜし如く、當時の物に非ず、然る時は、此文書全後人の僞書なり、一は應永廿四年、上杉右衞門佐氏憲入道禪透追罰の時、足利持氏祈願の爲、法燈料を寄附せし願書の寫、曰、敬白祈寄進醫王像前燈光料、永七十五貫、右聖君之施政化也、所以安民理國、賢者之著德行也、所以討邪擧正、爰在上杉氏憲入道禪秀、恣憑狼狽不次之行、剩振君臣向背之威、猥追從貴族於異鄕、爭平呑國郡于東海、苟持氏指麾同志之輩、欲誅無道之臣、伏乞善逝哀納懇祈、不忘曩祖草創之結緣、早施逆徒滅亡之戰功、惠光鎭照關東純淑、敬白、應永二十四年二月日、持氏、按ずるに、此文書も後人の僞作なるべし、且禪秀は是年正月十日自殺せり、爰に二月と記せるは既に滅亡の後なり、是をもて信じ難き事識べし、一は享德元年四月、足利成氏より、先規の如く法燈料寄附ある旨、井上淨金が奉書の寫、曰、藥師寶前燈明料、右先年慈父持氏公、如被寄附、永七十五貫所無相違之條、再被定置之、事可抽關東靜謐之精誠者也、享德元年四月八日、眞福寺、別當御房、井上淨金奉之、按ずるに、此文書も前條を合考するに、僞作なる事論なし、其餘一通は前に出せり、

△觀音堂　十一面觀音を安ず、

○鬼柳村於仁屋奈伎年良　江戸より行程二十里餘、民戸四十七、東西十一町半餘、南北二十町半餘、東、西大井、足柄下郡西大友二村、西、酒匂川を隔本郡柏山村、南、足柄下郡桑原村、北、本郡西大井村、永正十六年四月、北條早雲當村を箱根金剛王院所藏文書曰、宗瑞讓の在所二百八十貫文、おにやなき、新田代官、惣都合四千四百六十五貫六百十四文、永正十六年己卯四月廿八日、菊壽丸殿へ、宗瑞華押、菊壽丸は、幼庵幼息菊壽丸が知行に充つ、【役帳】曰、幼庵御知行三百廿六貫廿文、幼庵の幼名なり、永祿の頃も北條幻庵知行せり、古領主の遷替前村に同じ、檢地は萬治西郡鬼柳、今大久保加賀守忠眞領す、村の中程南北に貫きて、小田原道係れり、幅九尺、足柄下郡桑原村に達す、三年、稻葉美濃守正則改む、村の中程南北に貫きて、

○小名　△永田　△本田

○酒匂川　西境を流れ、幅百廿八間、南方足柄下郡桑原村に達す、河渡に堤あり、高一丈、馬踏二間、

○鬼柳堰　北隣西大井村にて、酒匂川を分水し、延て東南足柄下郡西大友村に沃ぐ、幅二間、當村及び近隣總て八村說に詳載す、各村の名は、惣の用水とす、

○白山社　村の鎭守、神明辨天を合祀す、例祭九月十六日、清源寺持、

○清源寺　曹洞宗、栢山村善榮寺末、慶長十三年草創、開山南峰、元和六年二月廿七日寂、本尊地藏を置、△撞鐘　本堂の廡下に掛、享和二年の鑄造なり、○阿彌陀堂　前寺持、

○栢山村加也満　古は賀山と書す、【役帳】及び天正十八年の制札に見ゆ、正保元祿の國圖には、今の如く記せり、元祿の改には、二區に分ち、一を栢山村內西栢山村と題す、今もおのづから區別して、私には東栢山・西栢山と稱す、江戸より行程二十二里、民戸百二十一、東西十五町餘南北十町餘、東、酒匂川を隔鬼柳・西大井二村、西、塚原村、南、足柄下郡中曾根・堀內・柳新田・小臺四村、北、本郡曾比村、永祿の頃は、伊東九郎三郎知行す、【役帳】曰、伊東九郎三郎、五十二貫二百文、西郡賀山、某年、地頭某此地を隱栖の料に充て、印章を示し、公私の所用、嚴密に務むべき旨、當村民に下知せし事あり、村民所藏文書曰、爲隱居分當村請取候、諸公事、幷所用之儀、此印判一通を相守、無々沙汰嚴密に可勤之候、此印判之外不可有之候、若徒者有之而、假初之儀成共申付候者、卽時に來而可及其斷候、猶此印判之外不可有之候者也、丗五月十六日、壺朱印、力山小澤、二郎左衛門尉、且年代も詳ならず、推考するに、當時の地頭たるべし、然る時は前に引用せし、永祿中の地頭、伊東九郎三郎なるも識べからず、今詳にし難し、又村民の傳に、氏康の文書と云は、最非なり、天正十五年七月、かねて軍役に堪べき者二人を撰み、其交名を書立、武器等をも設置べき旨、北條氏直鄕中に下知す、於當鄕不撰侍凡下、自然御國御用之砌、可被召仕者撰出、其名を可記事、但二人、此道具、弓、鑓、鐵炮三樣之內、何成共存分次第、但鑓は竹柄にても木柄にても、二間より短は無用に候、然者號權門之被官不致陣役者、或商人、或細工人類、十五七十を切て可記之事、腰さし類のひら〳〵武者めくやうに可致支度事、よき者を撰殘し、夫同前の者申付候ば、當鄕の小代官、何時も聞出次第可切類事、此走廻を心懸相嗜者は、侍にても、凡下にても、隨望可有御恩賞事、右自然の時の御用也、八月晦日を限而、右諸道具可致支度、鄕中之請負其人交名をば、來月廿日に觸口可指上、仍如件、丁亥七月晦日、栢山小代官、百姓中、虎朱印あり、按ずるに、丁亥は、天正十五年なり、十八年、小田原陣の時、豐臣太閤より當村に制札を出せり、村民所藏、今大久保加賀守忠眞領す、御打入の後、大久保七郎右衛門忠世に賜ひ、慶長十九年御料となり、元和五年阿部備中守正次に賜り、寬永元年御料に復し、同九年稻葉丹後守正勝に賜ひ、貞享三年大久保加賀守忠增に替賜ひ、寶永五年又御料となり、延享四年大久保氏に復して、今に至る、檢地は萬治元年稻葉美濃守正則改む、

○小名　△上ノ庭　△中ノ庭　△下ノ庭　△西ノ庭　△横町　△下ノ町　△寺ノ下

○酒匂川　東境を流れ、幅百三十間、或百五十間、足柄下郡中曾根村に沃ぐ、西岸に堤あり、高九尺より二間に至る、馬踏三間許、○仙了川　北方より南流し、幅四間、足柄下郡柳新田・堀內二村に沃ぐ、

○用定川　西南を流れ、幅四間、足柄下郡小臺村に達す、

○五ヶ村堰　長方曾比村境にて酒匂川を分水し、餘、一間南方足柄下郡堀內村に達す、當村及び足柄下郡堀內・中曾根・飯田岡・蓮正寺總て五村の組合なり、○三ヶ村堰　東方酒匂川堤より同川を堰入、幅二間半、南方足柄下郡中曾根村に達す、當村及び足柄下郡中曾根・蓮正寺總て三村の組合なり、

○荒堰　村北より南境に達し、幅二間、仙了川に合す、

○小臺堰　北方にて荒堰を分水し、幅二間、村南足柄下郡小臺村に沃ぐ、○新堰　村北より南に達し、幅二間、是も隣村小臺に沃ぐ、○清水　三所あり、其中富士見井戸と稱するもの、尤清冽にして、飲水とす、

○八乙女權現社　村民持、下同、○白髭社　○稻荷社　已上三社を村の鎭守とす、○山王社　村持、下同、

○水神社

○善榮寺　如意山と號す、曹洞宗、大住郡日向村石雲寺末、開基は木曾義仲の妾巴女なり、牌一基あり、法號善榮寺如意貞信と記す、源平盛衰記を按ずるに、巴女は義仲沒落の後、信濃國に落下りしを、鎌倉に召上せられしが、和田義盛申請に因て、彼が妻となり、朝比奈三郎義秀を產む、和田合戰に、義秀討れて後、越中國に往き、石黑某を頼み出家し、九十一にして死すと云、三浦郡岩戶村にも巴女が墓と稱するものあれど、全く妄誕に屬す、初は律宗たり、後臨濟宗に改し、元龜二年十月三日卒、牌を置、法號瑞溪院光室宗照と記す、僧宗忻を請て再興あり、此時今の宗派に改む、故に忻を開山第一祖とす、寺傳に據に宗忻は當郡沼田の城主沼田左衛門尉が男なり、九歲の時塚原村長泉院に入て、落髮受戒す、大永五年氏康及び其室が請に因て、足柄下郡板橋村興德寺の開山となる、天文二十年八月、後奈良院より紫衣の勅許を蒙り、同廿一年、透源大通禪師の號を賜れり、兩度の綸旨當寺所藏にあり、天正三年六月十七日寂す、天和二年七月、稻葉美濃守正則境內二十石一斗一升九合、先規の如く寄附する旨證狀を與へ、今に然り、本尊釋迦、本堂の軒に、寶曆十三年再鑄の鐘を掛く、

【寺寶】　△天目茶碗一口　巴女寄附の物と云、圖左に載す、　△三具足　同上

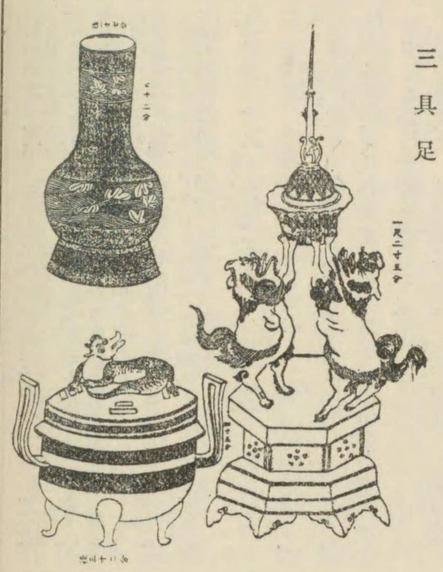
△綸旨二通　一は紫衣綸旨なり、曰、大雲山興德禪寺宗忻上人、靑紫衣紹列佛法、可被致天下安泰御祈禱者、天氣如此、仍執達如件、天文廿年八月十五日、右大辨華押、永平寺住持悅叟和尙、一は禪師號の綸旨、曰、勅大雲漠々簇慈雲、興德洪々超先德、宗忻和尙者、假永平末流、洒甘露於八州、紹大雄後胤、振道風於一國、禪徒爲之輻輳、壇信尊之歸崇、憑遙仰重禁闕、遣拜望紫泥、特賜透源大通禪師、天文廿一壬子曆十一月十五日、

△豐臣太閤ノ制札一通　地名相模國かやまの村善榮寺と記せり、

△開山堂　△稻荷社　肉身稻荷と稱す、○藥師堂二　一は弘法作の石佛を本尊とす、秘佛として猥りに帳を開かず、緣起に據に、弘仁中、空海關東行脚の頃、當村を經歷し病者の爲に刻して與へしなり　醫王山正見寺と號す、中古數度の兵亂に、一

天目茶碗

三具足



たび荒廢しけるを、後年信仰の徒、小堂を建て再興すと云、二宇共に村持、

○舊家俊助　小澤を氏とす、代々里正たり、古昔の地頭某、地頭並に年代の辨は、村の條に詳載す、時、公私所用の事を祖先二郎左衛門に沙汰せし文書、又天正十五年七月、鄉中軍役に堪べき者を撰み、且武器の設あるべき旨、北條氏直が當村に令せし文書、已上二通全文は、村の條に引用す、及び小田原陣の時、豐臣太閤が出せし、制札を藏せり、○同義左衛門　東照宮御放鷹の時、先祖源太左衛門仰を承て、路次を饗導し奉りしにより褒金を賜ひし由、天和四年二月領主稻葉美濃守正則が家臣に出せし、呈書の案を藏す、曰、覺、權現樣御鷹野、相州西郡栢山村御通被爲遊候節、私祖父源太左衛門と申者、屋鋪の前に罷在候處、御覽被爲遊、路次の御案內仕候へと、御直に被爲仰付堀內村迄罷越候へば源太左衛門儀器量ものにて候、小田原にて、奉公をも仕候やと御尋被爲成候、先祖より土民にて御座候由申上候、路次御案內申上候爲御褒美、御金二分被下置候、以上、天和四年子二月十五日、相州西郡栢山村組頭藤右衛門、山下次郎兵衛樣今峯半右衛門樣、

○同五兵衛　東照宮御放鷹の時、先祖五左衛門、籠人に候せし事兩度、其時金を賜はりて賞せられし由、天和四年二月領主の家臣等に出せし、呈書の案を藏せり、曰、覺、權現樣御鷹野に御出被爲遊候節、私祖父五左衛門と申者、御寄馬口付に罷出、塚原村の田地、中丸と申所にて、鶴御あはせ被遊候節、五左衛門かけつき鶴を留申に付、爲御褒美御金三分被下置候、其以後栢山村鳥けんきやうに而、鶴御あはせ被遊候節、御寄馬口付仕候に付、爲御褒美御金一分被下置候、右之兩度迄、御寄馬口付に罷出、御金頂戴仕候、以上天和四年子二月十九日、相州西郡栢山村組頭十右衛門、山下次郎兵衛樣、今峰半右衛門樣、按ずるに、文書中鳥けんきやうとあるは、村内の字なり、今も此唱あり、

○曾比村　蘇傳牟良　曾比鄉と唱ふ、中古水溢の後荒蕪せしを永祿中鄒持宗般舊家の條併見るべし、と云もの開墾せり、江戸より行程二十二里餘、民戸九十四、東西九町半南北十六町半餘東、酒匂川に限西大井村、西、塚原・竹松二村、北、栢山村、北、吉田島・牛島・宮ノ臺三村、往昔武田陸奥守信春入道華峰甲州より鎌倉へ出仕の時、此邊を休憩の便所とす、後其孫右馬助信長、華峰入道が男安藝守信滿入道明庵が次男、嘉吉元年、結城合戰の勸賞として、鎌倉管領より當村及び千津島村の地を充行れ、祖父華峰入道が蹤を躡で暫く此邊に居住せしとぞ、【鎌倉大草紙】曰、武田信長は代々鎌倉の近習なりけるが、此時分京都に有合、結城合戰の時、京勢と相伴ひ下向して、京勢と一同に高名して、其時の忠賞として、曾比千津嶋を拜領す、此所は故華峰入道鎌倉へ出仕の時の中宿の所なり、先祖の蹟芳しくして、此所に居住して、暫く安堵しけるが、成氏關東御歸參の最前に馳參り、代々關東奉公の儀を申ける、御感有て近習にて有ける、按ずるに、此文に據れば、華峰が休息所及び信長が居住の地、全く當村内なりとも定難し、猶千津嶋村の條併せ見るべし、永祿の頃は、遠山丹波守直景知行す、【役帳】曰、江戸遠山丹波守、百五十四貫三十文、西郡曾比鄉、今大久保加賀守忠眞領す、古領主の遷替、檢地は萬治元年、稻葉美濃守正則改む、

○小名　△西ノ庭　△河原ノ庭　△寺ノ下　△高河原

○酒匂川　東の村境を流る、幅百四十間より百六十間に至る、西岸に水除の堤あり、高九尺、踏三間、馬　○仙了川　村の中央を流る、幅三間餘、

○用定堰　村西を流る、幅三間餘、

○稻荷社　村の鎭守、村持、下同、　○神明宮二　○山神社　○山王社　○水神社　○淺間社

○宗般寺　大通山と號す、曹洞宗、塚原村長泉院末、當寺往古は一向宗にて大泉寺と云しが、中古荒廢に及しを、永祿の頃鄒持宗般再興を企しが、其事成ずして歿しければ永祿二年三月十三日死す、其子某、志を繼遂に同四年落成に至る、此時今の宗派に改め父が名をもて寺號とす、開山梅榮、示寂の年代傳はらず、本尊釋迦を安ず、本堂の軒に寬文十一年鑄造の鐘を掛く、△白山社　△稻荷社　長一尺六寸、

天神秋葉天王合社　○地藏堂　本尊は運慶作、

往古は眞言宗にて萬福寺と號せしが、小田原の役に兵火に罹り烏有となりしを、文祿中宗般が男某、再建せしと云傳ふ、

○眞福寺蹟　緣起に據に、酒匂川の邊字一丸名にありしと云、今其蹤蹟詳ならず、永保元年此地に草創ありしが、後廢寺となりしを、至德三年西大井村に移して再建あり、

○舊家庄左衛門　祖先を鄒持宗般と云、甲州浪人にて丹澤山に遁れ來り、永祿中當村を再墾して、舊に復さしむ、又村内宗般寺を開基す、今家に彼が所持せし鑓を藏せり、

○吉田島村　與志駄志　滿牟良　江戸より行程二十三里、村内を二區に分ち、北方を上島、南方を下島と唱ふ、慶長中松田惣領延命寺萱屋葺替の時、領主大久保忠隣が下知により當村よりも竹を奉納す、同寺藏文書、民戸百六十七、東西十町半餘、南北三十二町許、東、酒匂川を隔金手・西大井二村、西、金井島・延澤二村、南、曾比・牛鳴二村、北、酒匂川を境松田惣領・松田庶子二村、永祿の頃は、庄式部少輔、【役帳】曰、庄式部少輔、二十貫文、西郡吉田嶋、桑原右京進、百四貫文、西郡吉田嶋、桑原右京進、丁巳檢地辻、此内五十貫文知行役可致由、等知行す、今大久保加賀守忠眞領す、古領主の御印判被下、前村檢地は弘治三年、【北條役帳】寛永十七年遷替、前村に同じ、小俣長右衛門、木田伊左衛門、改の後、萬治元年稻葉美濃守正則糺せり、矢倉澤道東方より西南に係れり、幅九尺許、

○小名　△榎戸　△中屋村　△新屋志平也、

○酒匂川　東北村境を流る、幅百四十間許、川傍に水除の堤あり、高一丈許、馬踏六間、字十文字邊の際、九十間堤と唱ふ、川除會所上島にあり、每歲春秋兩度、川除堤修理の時、領主役人この所に會合す、

○武永田堰　四條に分派し、各艮方より入て、東南に沃ぐ、幅二間半許、或は一間半、

○渡船場　十文字渡と唱ふ、富士道係れり、平常は土橋三六間半、一は長三十間、一は六間、を架して、人馬を通ず、洪水の時は、橋悉く落る故、船にて往來す、其地方形勢名義濫觴は、對岸松田惣領の條に辨じたれば、併せ見るべし、

○三島社　村の鎭守、牛頭天王を相殿とす、例祭十一月中酉日、慶長十二年の棟札あり、村民持、下同、△神樂殿　○社宮神社　○山王社　村持、○水神社　酒匂川堤上にあり、石を疊で建つ、文化中新造する所なり、水災鎭護のため、每年二月十五日、川施餓鬼を修行し、大般若經を轉讀す、

○大長寺　金剛山と號す、曹洞宗、下總國國府臺總寧寺末、開闢は天文十年なり、中興開山勝國、本寺十八世、寬永十七年五月五日寂す、寬永元年再興す、本尊釋迦、△開山堂　△鐘樓　元祿十二年鑄造の鐘を掛く、△白山社　○藥師堂　安阿彌作の同像長四寸、を胎籠とす、傍に庵を設け、堂守を置く、村持、下同、○地藏堂　傍に堂守の庵あり、又酒匂川堤上に覆屋を搆へ、同像を安ず、是享保中、田中丘隅右衛門が堤修築の後、建立する所、六地藏の一なり、

○簑笠之助陣屋蹟　上島にあり、濶三百坪餘、蹟主はもと此地の縣令たり、享保十七年より在職十五年、延享四年大久保加賀守忠朝領主となるに及て廢す、今村民宅地となる、

○金手村　加奈手　牟良　江戸より二十里二十町餘、慶長中、松田惣領延命寺萱屋葺替の時、領主大久保忠隣の命により、當村よりも竹を奉納す、同寺所藏文書、民戸六十一、當村柿實を産す、金手丸と唱へて佳品とす、東西六町餘、南北十七町餘、東、金子村、西、酒匂川を隔吉田島村、南、西大井村、北、松田惣領、金子二村、北條氏の頃は、篠窪民部丞知行す、【役帳】曰、篠窪民部丞、五十貫五百九十二文、西郡金手、今大久保加賀守忠眞領す、御入國已後御料此間沿革詳ならず、後稻葉美濃守正則領し、其後大久保加賀守忠增に幷賜ひ、寬永五年再御料となり、天明三年舊に復して、大久保氏に賜ふ、檢地は天正十九年田中九郎右衛門、萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、

○小名　△東組　△中組　△西組

○酒匂川　西境を流る、幅百六十五間餘、河涯に隄を設く、高二間餘、馬踏十間餘、堤下に水門あり、是より河水を堰分け、坤方に達す、是酒匂堰の水元なり、流末十七箇村の用水にて、彼村々の持分なり、當村は此員に非ず、組合の村名は總說に詳載す、

○亥宮明神社　村民持、下同、○若宮社　○山王社　○稻荷社　○水神社　村持　○三島社　神明天神を合祀す村の鎭守なり、三島院持、

○三島院　金降山寶積寺と號す古義眞言宗　足柄下郡小田原宿蓮上院末、文安中の草創、開山學榮　文安五年八月十五日寂す、中興元龍　慶長十四年七月十五日寂す、舊くは村東酒匂川の邊に在しが、屢水災あるに因元文の始避て村西今の地に移せし由鐘銘に見えたり、本尊大日を置、△鐘樓　寬延三年鑄造の鐘を掛、△藥師堂　○地藏堂二　一は三島院持一は村持にて、酒匂川堤上にあり、享保中田中丘隅右衛門公命を承て堤新築の後、隄上に六地藏を建立す、是其一なりと云、

○金子村　加稱古　牟良　江戸より行程二十里十五町餘、永祿の頃は安藤源左衛門　【役帳】曰、西郡金子內、安藤源左衛門、五十七貫八百十七文、及び狩野介知行す、　曰、狩野介三十一貫文、西郡西明寺分、按ずるに、西明寺分とあるは、此地を斥せる事論なし同寺は則村內にあり、天正十八年正月小田原籠城のため、參陣の諸士、此邊に係れる者、亂妨を禁止する旨、板部岡江雪齋氏直の下知を傳ふ、內山村民所藏文書曰、禁制、右此度參陣の衆甲乙人等、濫妨狼藉令停止畢、若違犯之

輩有之者、記交名可申上旨、被仰出者也、仍如件、庚寅正月十四日、金子安藤分、代官、百姓中、江雪奉之、月日の上に虎朱印を押す、按するに、文中安藤分と云は、前に見えたる安藤源左衛門が知行中を斥せるなり、

四月豐臣太閤出陣ありて、又制札を出せり、村民若三郎藏す、二通あり、一は西郡金子鄉、一は相模國かねこの村と記せり、民戸百九十、外に社人二戸、陰陽師三戸、東西十六町餘、南北二十八町餘、東、山田村、西、金手村、南、上西、大井二村、北、神山、松田惣領二村、今大久保加賀守忠眞領す、古領主の遷替前村に同じ、檢地は寛永十八年市宮左近右衛門、諸星木工左衛門、松崎源右衛門、改の後、萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、小田原道西南を通ず、

○高札場　○小名　△小川邑　△瀧下　△一本松　△根岸　△坊村　△馬場　△宮地　△市場　△河原　△島田　△御替地　△院内　△新宿

○山王社　村の鎭守、例祭七月廿一日、村持、下同、○石神社　○吾妻社　祭神日本武尊・橘姫なり、十一面觀音を本地佛とす、今最明寺に安ず、最明寺持、往昔三貫文の神田ありしが、其地の民社殿の破壞をも修理せず、等閑の擧動あるにより、永祿九年四月北條左衛門大夫綱成更に其神田を最明寺に預け、修理等の事をも任す、最明寺所藏文書曰、其地於金子爲神田三貫文之分、年來百姓等雖相拘候、不致神社之修理をも、大破之躰及聞候間、從當年改而貴寺へ預置申候、每年神社之修理をも如形可被成之候、爲其證文判形進者也、仍如件、丙寅卯月廿日、西明寺、御同宿中、綱成華押、○住吉社　元祿九年創建す、東福院持、下同、○八幡宮　小名宮地の鎭守、○熊野社　圓藏院持、下同、○雨宮權現社　○神明社　稻荷天神山神を相殿とす、○第六天社　地藏院持、○稻荷社二　一は小名馬場の鎭守にて、東福院持、一は白藏稻荷と號す、小名御替地・川原・市場等の鎭神とす、神職小川攝津持、

○疱瘡神社　小川攝津持、

○最明寺　如意山蓮華王院と號す、古義眞言宗、京都東寺寶菩提院末、本尊三尊彌陀　長一尺五寸、脇士各長一尺、共に銅佛、越前法橋海繩作、を安じ、出山釋迦、長一尺餘、宋人陳和卿作、往十一面觀音　鎭守吾妻權現の本地佛、を安じ、客殿に佛舍利三粒、　右府實朝が鎌倉圓覺寺に納し佛牙舍利の分身なるを、北條時賴請得て　藥師　請雨藥師と稱す、長一尺餘、當寺に納しなりと云、　聖德太子作、北條時賴の持念佛と號す、近來江戸下谷黑門町の商家が寄納せし物なり、其先佐野源左衛門常世が排行第六の弟にて、北條時賴に仕へし源六郎常重入道知光坊より彼家に傳來せしと云、實否詳ならず、　不動、長二尺七寸餘、運慶作、毘沙門、長一尺餘、地藏、長一尺、辨財天、二臂琵琶を抱、長一尺餘、湛慶作　淨蓮房と號す、【東鑑】建暦二年三月廿三日の記に、淨蓮房等柳營に參上し、法華・淨土兩宗の旨趣を談話せし由見えたり、寛喜三年十一月廿二日寂す、幼稚より顯密に教を學て、其法義に長ぜり、常に世塵を厭ひ、松田の山中に一宇を建て卜居す、今松田庶子の山中に其舊蹟あり、彼村の條併せ見るべし、特に彌陀を信敬する事淺からず、信州善光寺に詣する事數度なり、【高僧傳】曰、釋源延、字淨遙、豆州走湯人、蚤上城都、從澄憲于台山、顯密二教俱入堂奧、性慈愛物、在相之松田鄉、開西明寺、專課念佛、日三萬遍、數詣信州善光寺、祈生安養、　承久三年一月靈夢を感得し、善光寺三尊の彌陀像を模して本尊とす、承久三年春、夢彌陀如來出自寶殿、告延曰、汝欲決定往生、以大悲心勸化衆人、繡我形像廣益衆生、又告寺衆言、走湯山源延、有緣之者、欲使渠親模我眞容也、延時在于駿州智滿寺、爲修曼陀羅供大阿闍梨、得寺衆書不勝感激、直往善光寺、入堂念佛、第四日夜、延乃屛衆、獨入寶殿、瞻仰如來紫磨金色、長尺五寸、右手結施無畏左手擬刀劍、印相嚴如、觀音勢至、脇侍左右、圖寫尊容、摸佛身背、暖如人膚、奇香薰手終身不歇、脇因募化緣、俾佛工越前法橋海繩鑄就尊像、其年七月開眼供養、僧俗拜瞻如群蟻來、按、善光寺事、國史不見、然傳說久、如來應化不可疑焉、　建長年中、北條相模守時賴其佛德を崇信し、更に堂宇を造立し、莊園を寄附あり、此時山を如意と號し、寺を蓮華王院西明寺と名づく、所藏の古文書皆西に作る、慶長二年の物に始て最の字を書す、　應永已後屢〻擾亂を歷て、殆頽廢せんとせしを、僧賢昌深く愁ひ、遂に再興の念を發すと雖、松田の地は、山路險隘にして、僻遠なるにより、常に靈

地を擇けるに、當所おのづから松田の舊場に似たれば文明元年、爰に移轉して、再興の志願を遂ぐ、故に賢昌を中興の祖とすと云、賢昌は、文明十五年十一月廿二日寂す、【北條役帳】に據れば永祿の始村內にて寺領の地を所務せしと識らる其證前に注記す、　九年二月、北條左衛門大夫綱成更に寺領寄附の證狀を寄す、曰、相州金子之鄉之內、西明寺領五貫六百五十文之所、任古來之筋目、猶永代令寄進候畢、自今以後於彼寺領、有相違間敷者也、仍如件、永祿九年丙寅二月廿一日、西明寺御同宿中、北條左衛門大夫綱成華押、　天正三年正月、寺邊の竹木猥りに伐取ものあり、依て禁制の證狀を寄す、所藏文書曰、申合候次郎左衛門分山、幷於御寺上林に、竹木剪取段、言語同斷曲事候、背此旨切取者、有之付而者、搦捕可申越候段、代官向原に申付候、猶以彼林之儀、嚴可被仰付者也、仍如件、乙亥正月廿八日、追而南北之境、東は山田道切而永代不可有異儀者也、西明寺參、上總華押、按ずるに、向原の子孫右衛門と稱す、　八年三月、寺地の經界を定て寄附あり、曰、南者自瀧澤、北は向原林之境迄、御寺山に永代進置候間、下苅をも可被仰付候、爲其證文判形進之者也、仍如件、辰三月廿八日、西明寺へ參、北條上總入道道感華押、按ずるに此今猶此稱あり、向原の林と云は、其地詳ならず、按ずるに、文中瀧澤と云へるは、寺地の境にある小澤を呼べり、文書年代を記せざれど、辰とあるを推考するに、天正八年なり、道感は綱成の法名なり、　其後道感寺領の判書を北條氏に請ひしことあり、　曰、於金子之鄉號西明寺寺、自前々、少寺領御座候、於拙者茂無異儀附置候、爲後年之御印判申請

度由、住持懇望、被御申調可給候頼入候、以上、
二月十四日、石巻左馬允殿、御宿所、道感華押、　十二年二
月、安藤豐前入道良整より、村内東福院へ寄附の田畠、
を更に當寺に寄附す、曰、寄進申田畠之事、三段大八十五
歩、田一段小、畠、以上五段八十五
歩、右前々東福院に付置申分寄進申候、永代可有御所務候、仍
證文如件、天正十二年甲申二月廿一日、西明寺參御同宿中、
安藤豊前入道　慶長二年六月、領主大久保相模守忠隣境
良整華押、　内山林の法制を定め、家臣等連署の掟書を授與す、
曰、禁制、金子鄉竹木草以下苅取事、牛馬放事、南北之境如
前々、并林中直路往還事、已上、右當寺山林之儀堅申定候、
若背此旨林へ入者有之者、鎌なたを押取、其者を小田原へ可
被仰上候、急度可申付者也、仍如件、丁酉六月廿一日、最明
寺、大久保權右衛門華押、天野金太夫華押、
白幡與四右衛門華押、後藤彌次兵衛華押、其後領主稻葉美
濃守正則に就て、寺領の御朱印を望申すと雖果さず、
故に慶安二年十月、正則より一町七段餘の田地所務の
事、并に山内竹木の法制、先規の如くたるべき旨、證
狀を寄す、　曰、今度御朱印雖御望候、御當家の證文無之故
只今改而添狀遣候儀難成候、且は引例にも成候
へば、私用之至候、併先規より之如由緒、田畑一町七段餘之
所可有寺納候、以後以時節御朱印頂戴候様に、御才覺尤に候、
勿論寺社奉行衆へも、連々可致物語置候、將又寺中山林竹木如
前々猥に無之様に被申付、應寺用可被剪採候、若從他無斷伐取
族於有之は、小田原奉行所迄可被申候、急度曲事に可申付候、
恐々謹言、慶安二年巳十月四日、金子村最明寺、稻葉美濃守
正則　華押、　天和二年七月、稻葉正則更に寺領及び境内地山
林竹木寄附の證狀を授與あり、曰、相模國西郡金子村當
寺境内、二石一斗七升、
金子村之内十五石五斗六合、都合高十七石六斗七升六合、并
山林竹木之事、如先規慶安二年巳來寄附之訖、全可令收納之
者、佛事勤行不可有怠慢者也、天和二年七
月廿五日、西明寺、小田原侍從正則華押、元祿十年九月、時
の領主大久保氏山内の制札を出せり、曰、最明寺山にて
竹木伐採申間敷候
若相背者有之に於ては、可爲曲
事者也、元祿十年巳九月朔日、

【寺寶】　△五鈷杵一箇　△鈴一口　已上二種は、慈覺が唐
土より携來しを、開山
源延傳來して、所持せし物と云、寺傳に此鈴を谷越の鈴と號
する由、其名義委しき傳說ありと雖、附會の妄說に近ければ
贅せず、　△水昌念珠二連　一は北條時賴が所持と云、是は近來
江戸下谷黒門町の商家某が寄納せし
所なり、一は淨蓮所持の物と云、　△柄香爐一柄　西土の製造、僧常
條時賴法躰畫像一幅　道信筆、　△星曼荼羅一幅　弘法筆、　△弘
法自畫像一幅　△不動像一幅　智證筆、　△菅神像一幅　雪村筆、
△眞言八祖像各幅　筆者を傳へず、　△金胎大曼荼羅各幅　唐畫、時代筆
者其傳を失す、　△華嚴經零本　紺紙金泥、筆者は足利直義
二員にて、尊氏寄附せしと云、　△普門品一卷　紺紙金泥、美
福門院筆、　△大般若經斷紙　北條高時、
が菩提の爲寄附せしと云、修補の裡書
に、天正十九年辛卯二月廿九日と在、　△伊勢物語一本　北條
時賴筆、表題筆者知光坊と云坊が事は前に詳載せり、奥書に
具平親傳本、寛元二年中秋上六日、主平時賴と書し、華押を
記すと雖、是は全く後人の僞書なり、是も
近來下谷黒門町の商家寄納せし物なり、　△往生要集三
卷　淨蓮、　△古文書七通　一は應永廿九年、管領持氏鎌倉永福
寺に出せし、別當領諸役免除の下し
文なり、傳來の旨趣詳ならず、一は吾妻社修理の事により、北
條左衛門大夫綱成が證書なり、社の條に引用せり、其餘五通
は既に前に注記す、　△八幡天神稻荷合社　寺後の山
趾洞中にあり、　△鐘樓　元祿十年再造の鐘を掛、　△經
藏　△四足門　○圓藏院　寶珠山常念寺と號す、前寺
文安三年の起立なり、中興賢眞、寛文十年九月
廿三日寂す、本尊地
藏長一尺四寸、　△地藏堂　石像を安ず、長一尺一寸
弘法作、　△地藏堂　弘法作の木像　長一尺三
寸五分、を安んず、圓藏院
持、　○十王堂　最明寺持

○舊家若三郎　世々里正たり、祖先は間宮豐前守の男にして、若狹守と云ひ、北條氏の家臣たり、天正十八年小田原の役に父豐前守山中の城にて討死せし後、遁れて此に土著し、子孫連綿して今に至ると云ふ、家系古記錄等は散失して傳はらざれども、鐺二柄、薙刀一振、鞍二具及び小田原陣の時、豐臣太閤の當村に出し、制札二通を藏せり、

○山田村　也萬駄　牟良　江戸より行程廿一里、山田鄉と唱ふ、
民戸百十八、東西八町餘、南北廿二町、東、赤田・柳二村、西、
曾上大井・曾我大澤・上曾我三村、北、篠窪村、南、神山・金子二村、南、
北條氏の頃は、小幡源次郎、【役帳】曰、小幡源次
郎、三百四十五貫三百文、西郡大井山田、篠窪修理亮、二十五貫五百
文、西郡了義寺分、按ずる

に、了義寺分と云へるは、村内の地を斥るなり、同寺は則村内にあり、等知行す、永祿五年四月遠山左衛門尉政景奉りて、當村の内知行役の分限高を定む、上大井村民所藏文書曰、百六十貫文、大井之内山田村定納、此内十六貫文、陣夫二匹夫錢之方に可引之、就御夫無之以年貢□□□□、殘而、百四十四貫文、所務、以上、右知行役著到已下、百四十四貫文□□□□、可致之旨、被仰出狀、如件、永祿五年壬戌四月十三日、虎朱印、小長谷殿、遠山左衛門尉奉、此文書に據ば、此頃小長谷某も當村を知行せしにや、慶長中松田惣領延命寺萱屋葺替の時、領主大久保相模守忠隣が下知により、當村よりも竹を調進す、同寺所藏文書、今御料及び大久保出雲守教孝が知る所なり、天正十八年、大久保七郎右衛門忠世に賜ひ、慶長十九年御料となり、寛永九年、稻葉丹後守正勝に賜はり、貞享三年、大久保加賀守忠朝に替賜ひしを、元祿十二年、長門守教寛に分地す、寶永五年又御料となり、安永七年に至り、教寛が子孫出雲守に復し、其餘は尙御料にして、今に至る、檢地は萬治三年、稻葉美濃守正則改む、小田原道北方より東南に達す、幅二間、

○高札場二　○小名　△大屋鋪　此地を屋敷跡と唱ふ、何人の居所たりしや詳ならず、下松葉に至りて三所も皆其地域と云、　△中屋鋪　△馬場　△松葉　是は全的場を訛れるなり、　△後通　宇之呂美知　△猪窪　之々久保　△西ノ窪　△東ノ窪　△臺ノ庭　△中ノ庭　△下ノ庭

○坂　西南の方小田原道にあり、赤坂と云、登二町半餘、　○松林二　共に村北にあり、一は御料に屬す、四町六段一畝二十四歩、一は領主の林なり、十町九段三畝十二歩、

○芭蕉川　村北より湧出し、西方を流れて、南に達す、幅四尺より二間に至る、　村内の小川三條此川に合す、一は字入の川と云、北方に湧出し、字はさまにて合す、幅四尺餘、一は字大屋鋪川と云、東方に湧出し、宇宮下に至りて合す、幅三尺餘、一は字土橋川と云、東南の方に湧出し、小名猪窪より出る小流と落合、字平川戸に至りて此川に沃ぐ、幅四尺、

○天神社　村の鎭守とす、例祭正月十一月共に廿五日、神躰の外圓石大さ一尺、を置、太田道灌夢見の石と云、緣故傳はらず、寶永三年再興の棟札を藏す、拜殿・幣殿あり、村持、△妙應碑長三尺、天明八年社再興の時、社地を穿て枯骨を得たり、土人鬼祟を懼れ、更に湮て墳を築き、祀て護法神とする由、碑陰の銘文に見ゆ、銘文中常起大神用妙應士民願の語あり、故に妙應をもて名とするなるべし、　○第六天社　村民持、下同、　△末社　山王

○山神社　○稻荷社　○日月宮　○若宮社　祭神詳ならず、

○了義寺　飛瀧山と號す、臨濟宗、鎌倉建長寺末、開山印元【高僧傳】曰、釋印元、號古先、薩州人也、及稍垂髫、輙刻木爲佛像、持以印空、八歲歸圓覺桃溪悟公、執童子役、十三剃髮、登具足戒、文保二年入元、泰定二年、眞淨住持清拙、受日本之請挫元東渡、嘉曆二年、拙住建長、元典教藏、曆應二年、董甲州慧林寺、明年源直義、革城都等持教寺、爲禪刹、延元主之遷眞如、住萬壽、後徒淨智、其秋解印遊化奧州、元之兄藤氏建普應寺、迎爲開山祖、延文三年、源連帥剏長壽寺於鎌倉、招元、翌歲領圓覺、應安七年正月廿四日化、齡八十云々、傳の全文鎌倉長壽寺の條に詳載すれば此には省錄す、と傳ふれど、恐らくは請待なるべし、【高僧傳】中にも、當寺を創せし事所見なし、奧州の普應寺、鎌倉長壽寺を剏せし事は、前に引用せし如し又曰、元專以舒布大法締構梵刹爲事若丹之願勝攝之保壽江之普門信之盛興武之正法房之天寧成大蘭若云々と記して、此條にも當寺の事を洩せり、準開山雪舟示寂の年を詳にせず、正月十八日を忌日とす、或は文龜二年寂すと云或は永正三年寂すと云て一定せず、【本朝畫史】云、僧雪舟、諱等楊、又稱備溪齋、或稱米元山主、氏小田備之中州赤濱人也、到今赤濱之田間有雪舟所產之地、天性工畫、師如拙及周文、得其法、更出新意、或曰、雪舟及十二三歲、其父携之投州井山寶福寺、而爲一僧弟子、及壯年、爲相國禪寺左街僧祿司洪德禪師弟子、又赴鎌倉、從建長寺玉隱永、璵爲雪舟作漁樵齋記即爲雪舟別號、寛正年中、乘海舶入大明、登四明天童爲第一座、成化年間促歸裝、歸朝後居周防山口雲谷寺、故稱雲谷、或號雲谷軒、　此僧畫をもて世に識らる、【北條役帳】に據れば、永祿の頃村内に寺領の地在しと見ゆ、役帳の文前に引用せり、中興芝山、寛政九年七月十九日寂す、　本尊地藏、△辨天社　神躰長七寸八分、は弘法護摩の灰をもて造る所と云、背に手形あり、五指に天長七年七月七日、於江島、辨財天法秘密護摩一萬座奉修行、以其灰此形像作者也、空海と記せり、　△熊野稻荷金毘羅合社　△鐘樓　文政元年鑄造の鐘を揭ぐ、△瀑布　辨天社の背にあり、幅四寸許長二丈八尺許、山號の依て起る所なり、小瀧といへども涸ることなし、寺邊多く此水を耕植の助とし、又飲水の用に充つ、○慈眼庵　本尊千手觀音を置、永正年中の起立と云、開祖華叟、了義寺六世、大永元年四月二十二日寂す、了義寺持、下同、△四神合社　天王・稻荷・金毘羅・九頭龍の四座を祀る、○白蓮庵　本尊藥師を置、永祿年中起立すと云、開祖月溪、了義寺八世、永祿十年五月五日寂す、　○不動堂　元祿中增盛巖了義寺十三世、寶永六年四月寂、建　○地藏堂　是も盛巖が建る所なり、○阿彌陀堂　村民持、

○塚十七　字杉山にあり、高三尺餘より一丈二尺許に至る、　由來傳はらず、

新編相模國風土記稿卷之十三終

新編相模國風土記稿卷之十四

村里部　足柄上郡卷之三

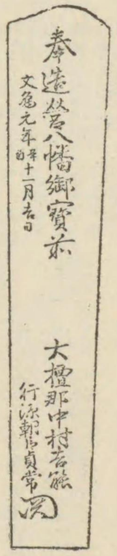
大井庄

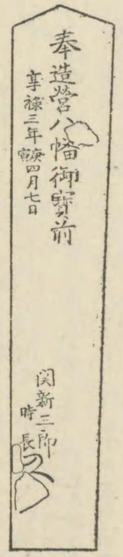
○赤田村　安加駄牟良　江戸より行程二十里、中村郷に屬す、當郷は往古淘綾郡の所屬たり、後分拆して本郡及び下郡に隷す、舊は上下を唱へて其屬を分ちしが、今は其唱を失せり、委は總説に辨す、天正小田原陣に、豊臣太閤當村及び近隣の村々に、一紙の制札を出せり、村民所藏、村名は赤田上澤・高尾・御所之宮以上四ヶ所と記せり、民戸四十八、東西十三町餘、南北二十二町餘、東、鴨澤村、西、山田村、南、古怒田・上曾我二村、北、高尾・柳二村、今大久保加賀守忠眞領す、天正十八年大久保七郎右衛門忠世に賜ひ、慶長三年米倉平大夫重種に賜はり、寛文四年御料となり、同九年稻葉美濃守正則に賜ひ、貞享三年大久保加賀守忠朝に替賜ひ、寶永五年又御料となり、享保元年大久保氏に賜はりて舊に復す、檢地は寛文十三年稻葉美濃守正則糺せり、

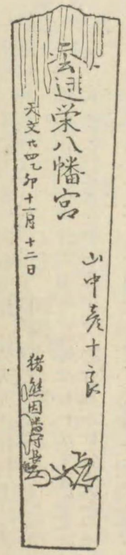
○小名　△稻窪　△南　△北

○林四　二は東方にあり、澗一は五段、一は五十町、一は南方にあり、澗三町、一は北方にあり、澗八町、共に領主の林にて雜木繁茂す、○澤二　一は後澤と云、北方に湧出し、柳村境にて棚田川に合す、一はから澤と云、南北二方より流出する清水、東方にて一條となり、直ちに東隣に沃ぐ、平常は水なし、

○八幡宮　村の鎭守、保元二年の鎭座と云、寶永三年修造の棟札に記せり、文龜・享祿・天文・天正年間修造の棟札を藏せり、左に縮寫す、


奉遷營八幡御寶前
文龜元年十一月吉日
大檀那中村右馬允
行次郎左衛門尉常泛


奉造營八幡御寶前
享祿三年庚寅四月七日
岡新三郎
時長


奉遷營八幡宮
天文廿四年乙卯十月十二日
山中壱十良
稙継

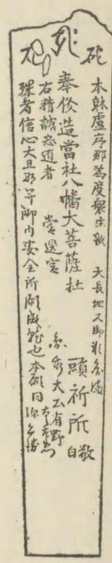
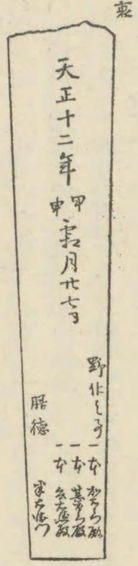


表
木駄慶戸郡為度寮牛飯
天長地久御願圓成
頭衍所敬白
奉修造當社八幡大菩薩社
右精誠勉通者
攀者信心大旦那等御内安全所願成就也　永劫日拾之場


裏
天正十二年　甲申　卯月吉日
野仕しす二女
一女
一女
勝徳

此他慶長六年、寶永三年修造の棟札あり、本地佛阿彌陀を置、古は大日を安ぜしと云、例祭十一月十五日、大綱院持、

△末社　五神合祀、諏訪・優婆・善神・第六天・稻荷・山神、　道了　△隨身門　○山王社四　村持、下同、　○水神社　○山神社

○神明社

○大綱院　龍源山と號す、曹洞宗、下總國府臺總寧寺末、　開山明宗、承享九年正月十四日寂す、明德三年一庵を營て隱栖の所とし、大綱庵と號す、大綱は明宗の號なり、後一寺に興立せし年歴は失へり、本尊釋迦を安ず、△開山堂　○阿彌陀堂　村持、

○古怒田村　巨奴多牟良　江戸より行程二十里、中村郷に屬す、古は怒田原と唱へし原野なりしを、元和八年與次右衛門と云者、足柄下郡小船村民なり、氏は星野と云り、開墾の後村内に移住す、今子孫郡次郎と稱せり、　槃闢して陸田とす、寛永中縣令守屋左大夫元治指揮し、年の豊凶に據て代永を貢せしむ、同四年の割付今に其子孫藏す、曰、怒田村卯年可納割付之事、永八百七十五文新畑見取、右之通急度無未進皆濟可被申候、麥作能々仕付尤候以上、寛永四年卯十月十日、右百姓へ、八木次郎右衛門華押、　其後稻葉美濃守正則領主たりし頃、與次右衛門が功を賞し、村内にて中畑三段の地を與ふ、今に子孫相傳す、村名始は怒田村と稱せしが、寛永の割付にもしか載たり元祿の改に古怒田村と載す、　是郡中苅野庄の屬に同名あるが故なるべし、されど新開の地にして古の字を加ふべき理なし、蓋初小の字を書せしを、後訛て古に書違へしと覺ゆ、高入となりし年代を傳へざれど、萬治三年稻葉美濃守正則檢地せしなれば、其頃の事なるべし、正保の改には、村名を洩し、元祿の改に初て所見あり、　民戸二十九、東西十三町許、南北十六町餘、東、雜色・半分形二村、西、上曾我山田、及足柄下郡曾我原四村、北、今大久保加賀守忠眞領す、南、本郡田中・遠藤・北田・足柄下郡曾我原四村、本郡鴨澤・赤田・半分形三村、初御料たりしが、後稻葉丹後守正勝に賜ひしより、小田原城附の村となりて、今に至ると云、

○小名　△上ノ庭　△中ノ庭　△下ノ庭

○山　西南にあり、皆雜木の林となす、中に就て山王山　當村及び本山、保牟良也末菖蒲山等の唱あり、又此邊に秣場あり、

足柄下郡東大友・永塚・千代・高田・別堀・下堀・中里總て八村の入會なり、

○稻荷社　村民持、下同、○山王社　○天神社　村持、

○高尾村　多加乎牟良　江戸より行程二十里餘、中村鄉に屬す、

【倭名鈔】鄉名の部に高屋の名あり、當村名恐らくは多加也の轉呼ならんか、委は總説に辨あり、

○高札場　○小名　△横道　△東　△向　△臺　△辻下

○中村川　南境を流る、幅三間餘、

天正小田原陣の時、豊臣太閤制札を出せり、赤田村民所藏、

柳村棚澤川の下流なり、當村に入て中村川の名起る、又栃窪村より流れ來る小渠此川に合す、

民戸二十四、東西二十町餘、南北十一町餘、東、赤田・鴨澤二村、西、篠窪及大住郡澁澤二村、南、本郡柳村、北、松本・栃窪二村、今大久保加賀守忠眞領す、古領主の沿革、大方赤田村に同じ、享保元年七月村内四分の一を裂て大久保氏に至り、其他猶御料なりしを、天明三年檢地は萬治三年、一圓に同氏に賜りて今に至る、寛文十三年の兩度、稻葉美濃守正則糺せり、

○金山社　村の鎭守、本地佛藥師を置、圓鏡にして徑三寸五分、長一寸八分の座像を鑄出す、

例祭十一月上寅、清雲寺持、下同、社地に椎の枯木あり、圍一丈二尺五寸、神木と稱す、

○子神社　村持、○石神社　村民私に勸請す、

○清雲寺　○金峯山と號す、曹洞宗、松田憲頼延命寺末、天文四年の起立と云、開山順碩、天正五年十月十日寂す、本尊正觀音木像長五寸運慶作、を置、○藥師堂　清雲寺持、此堂の前路を隔て舊き五輪塔五六基あり、何人の墳なるを知らず、

○鴨澤村　加茂佐波牟良　江戸より行程二十里、中村鄉に屬す、當村名舊くは明應・永正間の文書に見えたり、其文下疊跡の條に注記す、天正十八年豊臣太閤、四所一紙の制札を出せり、赤田村民所藏、當村名を上澤と書せり、是は偶記の訛なるべし、

○高札場　○小名　△横道　△東　△向　△臺　△辻下

○中村川　南境を流る、幅三間餘、

村に入て中村川の名起る、又栃窪村より流れ來る小渠此川に合す、

○金山社　村の鎭守、本地佛藥師を置、圓鏡にして徑三寸五分、長一寸八分の座像を鑄出す、

例祭十一月上寅、清雲寺持、下同、社地に椎の枯木あり、圍一丈二尺五寸、神木と稱す、

○子神社　村持、○石神社　村民私に勸請す、

○清雲寺　○金峯山と號す、曹洞宗、松田憲頼延命寺末、天文四年の起立と云、開山順碩、天正五年十月十日寂す、本尊正觀音木像長五寸運慶作、を置、○藥師堂　清雲寺持、此堂の前路を隔て舊き五輪塔五六基あり、何人の墳なるを知らず、

○鴨澤村　加茂佐波牟良　江戸より行程二十里、中村鄉に屬す、當村名舊くは明應・永正間の文書に見えたり、其文下疊跡の條に注記す、天正十八年豊臣太閤、四所一紙の制札を出せり、赤田村民所藏、當村名を上澤と書せり、是は偶記の訛なるべし、

民戸二十四、東西二十町餘、南北十一町餘、東、雜色村、西、高尾・赤田二村、南、本郡柳村、北、松木村・栃窪二村、今大久保加賀守忠眞領す、古領主の沿革、大方赤田村に同じ、享保元年七月村内四分の一を裂て大久保氏に至り、其他猶御料なりしを、天明三年檢地は萬治三年、一圓に同氏に賜りて今に至る、寛文十三年の兩度、稻葉美濃守正則改む、

○小名　△上ノ庭　△中ノ庭　△下ノ庭

○山　西南にあり、皆雜木林なり、○林二　共に村南にあり、領主の林なり、一は雜木　三十二町　九段、一は竹林　九段五畝

○中村川　中程を流る、幅四間許、○澤二　一は西方赤田村境より流出して、中村川に落入、字から澤と云、一は村南の山中より湧出して、直に用水渠に入、

○日光權現社　村の鎭守とす、例祭十一月十五日、村持下同、△神樂殿　○熊野社　○天王社　○神明社　村民持、下同、○山神社　○淺間社　○稻荷社　○山王社

○大泉寺　藤珠山と號す、曹洞宗、井ノ口村末、開山鐵叟倉寺末、寛永四年十二月本尊釋迦　△觀音堂　正觀音を置、腹籠十五日寂す、

に根體觀音と稱する銅像を安ず、拵ずるに其形觀音にあらず、凡四寸に類せり、

△稻荷社　○地藏堂　本尊の外石像長九寸弘法作と云、を置、村持、下同、　○阿彌陀堂

○壘跡　今其蹟詳ならず、某年十二月上杉治部少輔朝良入道建芳此要害を攻し時、三浦陸奥守義同入道道寸與力し、道寸が家人武和泉守某討死せしかば、建芳より和泉守が子源五郎某に感狀を與ふ、其狀に鴨澤要害と見ゆ、

大住郡寺山村里正所藏文書曰、昨日九於鴨澤要害□、父和泉守討死□□□候心底及推察候、定自奥州可有御感候、此方事一入不可有疎儀候恐々謹言、十二月十日、武源五郎殿、建芳華押、

又道寸よりも感狀を與ふ、其狀には於上中村討死云々と載す、於上中村父和泉守討死誠不敏候謹言、十二月十日、武源五郎殿、道寸の華押あり、是上中村鄉中たるが故なり、此事によりて、古河政氏より三浦彈正少弼義意に道寸に與へし書にも、中村要害と記せり、

上杉治部少輔入道、去九日向中村要害相働候處、凶徒出合候間、於城涯遂一戰得勝利、宗者數輩討捕候、彼目出度候、殊父陸奥入道同心候□感心候、家人號武和泉守輩討死誠不敏思召候、□細政助可申遣候謹言、十二月廿三日、三浦彈正少弼殿

政氏華　此合戰の旨趣他の所見なく年代等も詳ならざれど、建芳等が時世を以て攷れば、明應・文龜・永正年間の事蹟なる事知べし、

○雜色村　佐宇志幾牟良　江戸より行程十九里半中村鄉に屬す、民戸二十四、東西十三町半許、南北十二町餘、東、松本・比奈久保二村、西南、半分形村、今大久保加賀守忠眞領す、天正十九年曲淵勝左衛門吉景に賜ひ、吉景が死後、四男七左衛門吉資知行し、元和九年御料となり、寛永九年稻葉丹後守正勝に賜ひ、貞享三年大久保加賀守忠朝が所領となり、元祿十二年同氏長門守教寛に分知し、寶永四年再御料となり、天明三年大久保加賀守忠顯が時雜に復す、

檢地は萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、

○高札場　○小名　△上ノ庭　△中川原　△鄉中　△下ノ庭

○坂　坤方にあり、登九町許、　○竹林　西方にあり、領主林なり、○中村川　北方を流る、幅六間餘、

○子神社　古は木神と唱へり、正德已後の棟札には遠藤村今は神號を記す、今も彼社の神事に村民其式に預るは其遺例なり、舊き五所八幡の元宮と云傳ふ、棟札あれど蠹食して讀べからず、村持、下同、△神木

老槐圍二丈尺餘、

○第六天社　慶長十一年の棟札なり、

○天狗社

○玄張寺　良屋山廣略院と號す、淨土宗、江戸芝增上寺末、寺地もと長音廢寺の跡なり、文祿中曲淵七左衛門吉資、【重修譜】に據に、勝左衛門吉景が四男にして、吉景が死後遺跡の内三百石を分ち賜りて別家となれり、後年嗣なく斷絶せし故、微細の事跡傳はらず、父勝左衛門吉景【寛永譜】【重修譜】を參考するに、吉景は初武田家の士、板垣駿河守信形が僮僕たり、後剃髮して玄長と號し、是年東照宮潛かに武田家の浪人を召るゝにより、出て御廢下に屬し舊知を賜はり屢戰功を顯しければ、十七年重恩の地を賜ひ、十八年關東に入せ給し後、當所を采地に賜はり、文祿二年十一月廿三日、七十六歲にして死す、按ずるに、【國朝大業廣記】【甲斐同志】には沒年を三年に係く、寺傳碑銘も又三年とす、今是非を決し難し、子孫連綿して今猶麾下に奉仕す、刀葬地となし、更に一字を建、僧來譽を延て開山とす、來譽は文祿中下總國行德より來りて當寺を粗し、後舊地に復住す、故に寂せはらず、寺號は吉景が法名廣略院良屋玄長と云をとれり、後寺號の長の文字を張に改し寺實傳はらず、本尊彌陀を安す、△曲淵勝左衛門吉景墓　本堂の後山林中にあり、面に、前に記せし法名死失の年月を記し、脾陰に孝子曲淵七左衛門再興の由を刻し、慶長七年此二月廿三日と銘る、且寛政中曲淵一家の交名を刻せり、他吉景が妻慶長十九年四月廿七日死、養子勘左衛門正重實は下津八右衛門正行男、寛永二十年十一月六日江戸に在て死す、明曆二年當寺に改葬すと云、按ずるに、【寛永譜】に、勘左衛門正行とある者是と同人なり、正重は初名なるにや、【寛永譜】【重修譜】共に載せざる所なれば詳にし難し、及び其妻、明曆三朔日、正重が長男十左衛門正吉、年八月死、正保三年八月廿九日江戸に在て死、明曆二年當寺に改葬す、【寛永譜】【重修譜】を參考するに、正吉は台廟に奉仕して小十人に列し、後大番に轉じ武州の内にて四百石知行すと云子孫連綿して今猶麾下に奉仕す、次男下津長九郎正勝、寛永十五年七月四日江戸に在て死す明曆二年當寺に改葬すと云、等の墓あり、又慶長十二年曲淵十助某が起立せし碑あり、是は供養塔の類なり、○城明院　雜色山見國寺と號す、本山修驗、小田原玉瀧坊配下、本尊不動を置古刀一振を藏せり、百足丸と稱す、正恒の銘あり、長二尺六寸曾我の郎等、道三郎が所持の物と云へど信じ難し、

○曲淵氏宅跡　小名上ノ庭にあり、今竹林となる、曲淵勝左衛門吉景及び七左衛門吉資續て居住せしを、元和九年此地御料となり、吉資江戸に移住するに及て廢す、

○松本村　末都毛止牟良　江戸より行程十九里半餘、中村鄉に屬す、民戸五十四、東西二十七町、南北十二町、東、比奈久保村、西、岩倉・曉別所・栃窪・大住郡平澤四村、今御料所なり、天正十九年曲淵勝左衛門吉景に賜ひ、吉景が死後四男七左衛門吉資に分ち賜ひ、元和九年御料となり、寛永九年稻葉丹後守正勝に賜はり、貞享三年大久保加賀守忠朝に替賜ひ、元祿十二年より稻葉下野守正倚知行し、享保十七年御料に復す、寶曆中地を裂て大岡出雲守忠光に賜ふ、殘る所猶御料なり、今此地を古料と唱ふ、同十一年先に大岡氏に賜ふ所舊に復して亦御料となる、今此地を新料と唱ふ、檢地は萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、享保五年稻葉下野守正倚十四石五斗五升、十七年筧播摩守正舖九石六升、一斗等が檢地せし新田あり、各高入となる、

○高札場　○小名　△湯下ノ庭由介乃爾波　△上ノ庭　△中ノ庭　△下ノ庭　△關ノ庭　△根岸ノ庭　△堂ノ庭　△寺前　△中ノ久保　△南ノ庭　△入ノ庭

○中村川　南境を流る、幅七尺、村東雜色村境にて中村川に合す、北の境を流れ、幅六間、川傍に堤あり、○關川　東

○澤二　一は西方にあり、一は北境を流る、

○諏訪社　村持、下同、○若宮　○日光權現社　○山神社　○天神社

○泰翁寺　松本山と號す、岩倉村に在し頃は曹洞宗、大住郡岩倉山と唱ふ、今彼村に寺蹟殘れり、開山瑞秀、永正十三年十月廿九日寂、開基は青木尾張守信時なり、法名泰翁乾康、天正十八年六月十三日死す、寺傳には乾康が俗名青木尾張とのみ傳へて死失の年月を失すと云、今【寛永譜】【重修譜】等に據に尾張守信時法名乾康とあれば、是同人たる事疑なし、故に是に從ひて實名及び物故の年月日を補なふ、信時は始武田家に仕へ、後召れて御當家に仕うまつる、子孫連綿して今猶摩下に奉仕す、

村藏林寺末、古は岩倉村にあり、

○高札場　○小名　△本村　△臺田

○中村川　西南村境を流る、幅五六間、水防堤あり、○關川　西境を流れ、幅三尺餘、雜色村境にて中村川に合す、

○稻荷社　村持、下同、○子神社　○第六天社

○比奈久保村　飛那玖穗牟良　江戸より行程十九里餘、中村鄉に屬す、民戸二十三、東西六町餘、南北十二町、東、榛澤・久所二村、西、松本・雜色二村、南、半分、今高井但馬守式房知行す、古領主の形村、北、境・岩倉二村、今彼村に寺蹟殘れり、開山瑞秀、永正十三年十月廿九日寂、開基は青木尾張守信時なり、法名泰翁乾康、天正十八年六月十三日死す、寺傳には乾康が俗名青木尾張とのみ傳へて死失の年月を失すと云、今【寛永譜】【重修譜】等に據に尾張守信時法名乾康とあれば、是同人たる事疑なし、故に是に從ひて實名及び物故の年月日を補なふ、信時は始武田家に仕へ、後召れて御當家に仕うまつる、子孫連綿して今猶摩下に奉仕す、

○高札場　○小名　△本村　△臺田

○中村川　西南村境を流る、幅五六間、水防堤あり、○關川　西境を流れ、幅三尺餘、雜色村境にて中村川に合す、

○稻荷社　村持、下同、○子神社　○第六天社

○比奈久保村　飛那玖穗牟良　江戸より行程十九里餘、中村鄉に屬す、民戸二十三、東西六町餘、南北十二町、東、榛澤・久所二村、西、松本・雜色二村、南、半分、今高井但馬守式房知行す、古領主の形村、北、境・岩倉二村、今彼村に寺蹟殘れり、開山瑞秀、永正十三年十月廿九日寂、開基は青木尾張守信時なり、法名泰翁乾康、天正十八年六月十三日死す、寺傳には乾康が俗名青木尾張とのみ傳へて死失の年月を失すと云、今【寛永譜】【重修譜】等に據に尾張守信時法名乾康とあれば、是同人たる事疑なし、故に是に從ひて實名及び物故の年月日を補なふ、信時は始武田家に仕へ、後召れて御當家に仕うまつる、子孫連綿して今猶摩下に奉仕す、

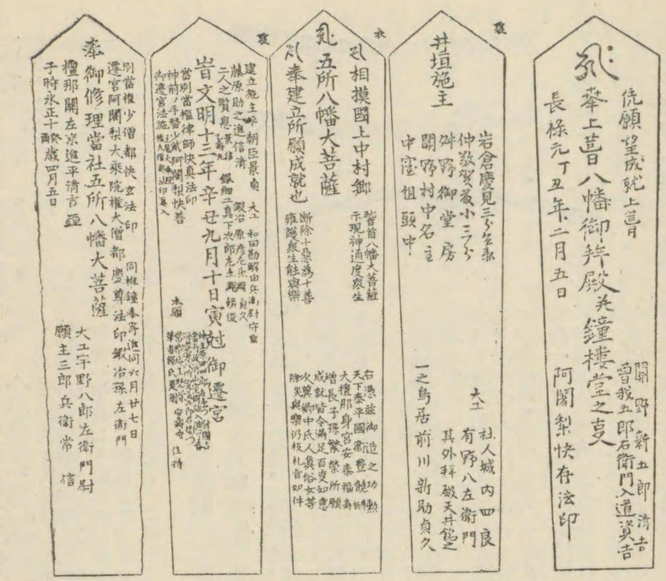
○秀翁寺　泉光山と號す、曹洞宗、松本村泰翁寺末、開山梵意、天正八年三月五日寂す、　起立は永祿三年と云、本尊地藏を置、△稻荷天神合社　境内の鎭守とす、　嘉應元年より代々別當五所宮別當安壽寺云々と記せし棟札あり、されば古は彼寺別當たりしならん、又村の記に當所を寺社免と記すに據ば、是地主神なるべし、

○遠藤村字牟良　江戸より行程十九里、中村鄕に屬す、土俗當村及北田・田中・久所・藤澤・半分形六村を合て六名呂久美と呼び、或は五所ノ宮とも唱へり、　是は當所鎭守五所八幡宮より唱ふる名にして、六村共に斯唱へり、　舊は一區たりしが、後各村に分裂せしなり、故に今も其地域互に入會て、境界混淆する事他に異なり、分村の時代詳ならず、然るに天正十八年豐臣太閤より出せし條目に、赤田村民所藏、六村を槩して御所之宮相模國西郡赤田・上澤・高尾・御所之宮以上四所　と記せり、是に云々、御所の文字の事は社の條に辨あり、　據ば此頃猶一區たりしにや、按ずるに御所ノ宮の稱は全本郡の東山家・西山家・津久井縣の奥三保等の稱に同じく、總名の如く唱へし物にて、其實は此頃既に各村に分裂せしも識るべからず、當時の事今を以て量識し難し、正保の改に至り正しく各村の目を顯せり、民戸三十、東西十八町餘、南北八町餘、東、洵綾郡一色村、西、本郡田中・小竹村、北、本郡古怒田・半分形三村、南、足柄下郡北田・久所二村、今小笠原若狹守信名が知る所なり、天正十八年大久保七郎右衛門忠世に賜ひ、慶長十九年御料となり、寛永九年稻葉丹後守正勝に賜ひ、天和三年同姓下野守正倚に分ち與ふ、享保十五年御料に復し、延享四年より大岡出雲守忠光知行し、寶曆六年御料となり、文化八年小笠原氏に賜ふ、　檢地は萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、享保五年稻葉下野守正倚が檢地せし新田、五石三斗一升六合、　同十七年筧播摩守正舖が檢地せし新田、十石七斗二升九合、　あり、各高入となる、田中村に當村分見取畑五段十二歩、あり、西北に小田原道東の方南北に亘りて大山道南方足柄下郡小竹村より入、係れり、幅各二間

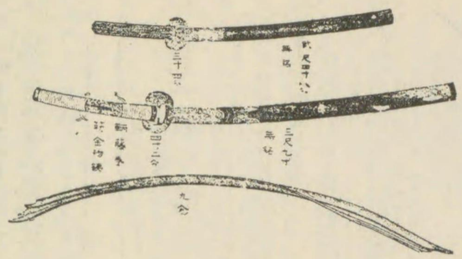
○高札場　○小名　△人ノ庭　△瀧ノ前　△向山　△久保ノ庭　△五所ノ宮

○中村川　村の中程を流れ、幅八間、足柄下郡小竹村に沃ぐ川傍に水防堤あり、○藤澤川　東北を流れ、幅四間、久所境にて中村川に合す、○清水　椿河原と唱ふ、西方より出て西南を流れ、隣村小竹に沃て中村川に合す、

○五所八幡宮　當村及び近鄕十五村北田・田中・久所・藤澤・半分形・雜色・比奈久保・松本・鴨澤・赤田・高尾・古怒田・境・境別所・岩倉　の鎭守なり、祭神、應神天皇仲哀天皇神功皇后なり、又高良明神像、各木像、を相殿とす、各神體は秘して見る事を許さず、五所ノ宮と云事は欽明帝の御宇、豐前國宇佐に初て八幡宮を勸請ありしより、次第を逐て第五に當るが故なりと云、一は宇佐、二は日光、三は男山、四は鎌倉、五は當社、按るに由來記に又の說を擧て、八幡の本地三尊に脇立二神を合せ、五社とも唱ると云ひ、又訛りて御立所と書るもあり、其本源を亂る、歎くべき由見えたり、當所は法相宗の寺蹟たりしを、保元二年僧義圓特に關て勸請せしと云、又雜色村土人の傳には彼村内子神社は當社の元宮なり、故に今も村民二人當社の神事に來て其式に與る是其遺例なりと云、是に據ば往古彼村内に在しを、後當所に移せしと覺ゆれど、文明元年正月朔日、社頭悉く燒亡せし時、幸うじて神躰を存するのみ、諸記錄神寶等皆燒失せし故詳なる事を傳へず、只嘉祿元年・嘉歷二年の棟札を存せしが、夫も今は亡失すと云、今長祿已降の棟札を藏せり、左に模するが如し、此餘元和二年の棟札あり、例祭六月晦日、往古は土屋三郎・曾我太郎の兩家より神事の供物を收めしとぞ、今別當所より供する處、卽土屋氏の供物の例にならふと云、本日別當、安壽寺、及び禰宜二人を百姓輪宜と云、各禰宜免を所持す、是產子十五村村名は前に註せり、



【神寶】　△弓一張　曾我五郎時宗の寄附と云、　△刀脇指一腰　是も同人の寄附にて、則彼が帶せし物と云へど信用し難し、　△太刀一振　稻葉丹後守寄附と云、時代詳ならず、又享保十一年稻葉丹後守正親が納し、甲冑一領有しと雖今は失ひて其添目錄のみを存せり、此他甲冑二領あり、破損して皆具はらず、何人の料なりしか其傳へなし、



△觀音堂　如意輪觀音を置

△別當安壽寺　中鄉山玉泉院と號す天台宗、大住郡土屋村大乘院末、古は同院の門徒なりしが、寛保元年現住講貫の時末院となる　開山義圓、永曆元年六と云、　月晦日寂す　本尊彌陀　木像長一尺七寸、行基作下皆同、是八幡の本地佛なりと云、按ずるに元和八年更に彌陀堂起立の事あり、然るにいつの頃廢せしにや、其蹤迹も詳ならず、今棟札を藏せり曰、奉新供養阿彌陀堂一宇所云々、元和八天壬戌沽洗廿二日と記せり、又本社元和二年の棟札に寶永四年の裏書あり、曰、元和八壬戌年は本地彌陀堂立と記せり、是に據ば當時別堂在けるを廢絕の後再興に及ばず、彌陀像を當寺に移し本尊とはせしなるべし、を置、　又不動長一尺八寸五分、藥師長一尺九寸五分、の像を安ず

○稻荷社　村民持、下同、　○子神社　○神明社

○地藏堂　村持、

○北田村　積多太　牟良、　江戸より行程十九里、中村鄉に屬す、民戸三十三、東西十六町餘、南北二町許、東、淘綾郡一色村大住郡五分一村、西、本郡田中村、南、古領主の遷替前に同じ、遠藤村、北、久所村、　今小笠原若狹守信名知行す、檢地は萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、享保五年稻葉下野守正倚、　二石八斗八升九合、十七年覓播摩守正舖、六石五斗八升八合、檢地せし新田あり、各高入となる、此他田中村に當村分見取畑五段十二歩、あり、南方より北に亘りて大山道係れり、幅二間、

○高札場　○小名　△樋口　登般久和　△臺ノ庭　△宮下

○御塔坂　於多布左加　大山道にあり、小坂なり　是は傍に古き五輪塔あり、凡三基許、皆類廢して全からず、何人の墳たるを識らず、　土人尊敬して御塔塚と稱す、故に此稱あり、○一里塚　大山道にあり、雙堠なり、一は高四尺、一は高一尺五寸、塚上に榎樹あり、○中村川　西南を流る、幅八間、川傍に水除の堤あり、高八尺、　○藤澤川　村の中程を流る、幅五間、

○駒形社　例祭九月十五日、村民持、社地に柴あり、一圍餘、丈六尺、神木とす、○稻荷社四　村民持、下同、　○山王

社　○山神社　○石神社

○弘法座像石　往古弘法自作の像を安ぜしが、後亡失して臺石長一尺五寸、のみを存す、故に此稱あり、寶曆六年更に石像を刻して再石上に安ず、卽像背に年號干支を刻せり、　村持、

○田中村　多奈加牟良　江戸より行程十九里、中村鄉に屬す、民戸三十九、東西十八町、南北十三町、東、中村川を隔て北田・遠藤二村、西、古怒田村及び足柄下郡曾我別所・曾我谷津三村、南、小竹村、北、本郡半分形村、古領主の遷替前村に同じ、但し寶曆六年御料となりしより今に至る、　檢地は萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、享保五年稻葉下野守正倚が檢地せし新田五斗九升七合、　同十七年覓播磨守正舖が檢地せし新田九石五斗三升七合、あり、各高入となる、西方に當村及び遠藤・北田・久所四村入會の見取畑あり、　惣段五町四畝、內當村分三町五段二畝廿四歩、其他は各村に載す、今此地を御林跡と唱ふれども舊時御林たりし事、墾闢して陸田となせし年代事曆等、其傳なければ詳にし難し、　東南の方坤方より東に亘りて大山道係れり、足柄下郡曾我別所村より入、幅二間、

○高札場　○小名　△石原　△池尻　△久保　△出口

△入　△漆畑

○山　一は南西にあり、六本松山と云、登十二三町許、往昔松樹六株ありし故此名ありと云、今一株を有す、山巓を郡界とす、隣村足柄下郡曾我別所村にて山彥山と云ひ、宇して六本松と云是なり、山頂を曾我山峠と唱ふ、登十八町、曾我別所村迄凡て一里餘、故に土俗是を打越一里と云、此山越大山道なり、曾我別所村にて往昔是を中村通と唱ふ、是當鄉に達するが故此名ありと云、今は唱へず、此名目古書に徒々見ゆ、委は彼村の條に注せり、一はノクヒ山と云、登七町許、

○中村川　東境を流る、幅八間、川傍に堤あり、高八尺、

○天王社　村持、　○稻荷社五　村民持、下同、　○御嶽社二　○山王社二　○山神社　○摩利支天社　○天神社

○廣翁院　金龍山と號す、曹洞宗、松田惣領延命寺末、　天文元年の草創にして、開山樹翁本寺三世、弘治三年七月朔日寂す、中興格翁、天和三年八月廿四日寂す、開基廣翁宗澤、天正十五年十一月廿九日死、俗名を傳へず、鬼簿を閱るに金子與右衛門親父と記す、是村民善兵衛と云者の祖なり、本尊彌陀を置、　△鐘樓　享保二年の鑄鐘を掛、　△白山・稻荷合社　○觀音堂　十一面觀音を置、是は昔此所に大光寺と云あり、其本尊と云、今も此邊を大光寺と字せり、村持、

○半分形　村　波不賀　多牟良　江戸より行程十九里餘、中村鄉に屬す、民戸三十二、東西二十町餘、南北十町餘、東、久所・藤澤・遠藤三村、西、古怒田・赤田二村、南、田中村、北、雜色・比奈久保・鴨澤三村、今高井但馬守武房知行す、領主の遷替比奈久保村に同じ、　檢地は萬治三年稻葉美濃守正則糺せり、享保十七年覓播摩守正舖が檢地せし新田、十石二斗四升、あり、高入